

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第 15 集

なごやじょうさん まる
名古屋城三の丸遺跡(Ⅰ)

1 9 9 0

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター



調査区上空より名古屋城



1 S K 479出土遺物

	82		20		2
26	21	73		21	19
	43		44		45



2 小杯 (241)



3 香炉 (245)



4 灰軸双耳瓶 (18)



5 綠釉陶器

313	314	316
315	319	320
323	322	325

序

名古屋市中区三の丸の一帯は、今日では、都心の官庁街として整備が進められていますが、かつては、名古屋城の「三の丸」として尾張藩の重臣達の武家屋敷が立ち並んでいました。

近年、この三の丸の西南隅、旧御園御門近くに、愛知県により、新文化会館(図書館)の建設が計画されるに至り、埋蔵文化財の事前調査の必要性が生じたため、(財)愛知県埋蔵文化財センターでは、県教育委員会を通じ、新文化会館建設事務局より委託を受け、昭和63年度事業として、この発掘調査を実施しました。

調査の結果、近世だけでなく、弥生時代～中世に至るまでの遺構、遺物が出土し、この場所で古くから人々の生活が営まれていたことが明らかとなりました。本書は、その成果をまとめたものであり、歴史研究の資料として活用されるとともに、埋蔵文化財への理解の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査の実施にあたっては、関係諸機関、並びに関係者の方々には、種々御指導と御協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

平成2年3月

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

理事長 松川 誠 次

例 言

1. 本書は、名古屋市中区三の丸に所在する「名古屋城三の丸遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、愛知県による新文化会館（仮称）名城地区施設（図書館）建設に伴うものであり、調査面積9000㎡のうち、1400㎡を県教育委員会が実施し、その他の部分及び報告書の作成については、県教育委員会を通じ委託を受けた財団法人愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は、昭和63年1月～3月（県教育委員会）、4月～12月（財団法人愛知県埋蔵文化財センター）であり、調査に引き続き、平成元年度には報告書作成のための整理作業を実施した。
4. 調査担当者は、伊藤稔・加藤安信・遠藤才文（以上県教育委員会）、梅本博志・小澤一弘・佐藤公保・城ヶ谷和広・伊藤隆彦・加藤とよ江・金子建一・松田調（以上財団法人愛知県埋蔵文化財センター）であり、調査補助員として、伊藤千春・木俣佐奈恵・坪井裕司・武内剛・山中鹿次の各氏の協力を得た。
5. 調査記録及び出土品の整理等については、調査員・補助員のほか、以下の方々の参加を得た。
天木日出夫・飯島朋子・岩崎繁子・牛田長子・内山伸也・小沢昭子・加賀良子・川北由美・喜田三和子・小島洋子・小林ちあ・杉山美智子・武市康子・田宮豊子・寺沢なつ江・戸川真理・平岩圭子・藤井裕子・洞地恭子・松下香代・萬谷さつき・山川和子・水野里美・山口ヤス子・山口やよい・吉田恒美・吉田久子
6. 調査にあたっては、県教育委員会文化財課の指導を得たほか、名古屋市教育委員会、愛知県総務部新文化会館建設事務局の協力を得た。
7. 本書の執筆分担は、大よそ以下の通りであるが、文責については、各文末に示した。
なお、編集は梅本が担当した。
梅本 I-1～4、II-1、IV-3・7、加藤(と)II-2、III-1、IV-1、城ヶ谷II-3、III-2、IV-2・4、佐藤II-4、III-3、IV-5、松田II-2・4、小澤IV-6
8. 本書の執筆にあたっては、以下の各氏の御指導、御協力を得た。
赤羽一郎・足立順司・井上喜久男・伊藤正人・伊藤稔・内堀信雄・宇野隆夫・江崎武・遠藤才文・加藤安信・木村有作・斎藤孝正・佐久間貴士・柴垣勇夫・篠原芳秀・杉浦芳市・鈴木裕子・土山公仁・仲野泰裕・横崎彰一・藤澤良祐・北條献示・堀内明博・宮本佐知子・渡辺誠
9. 調査記録の座標は、国土座標第VII系に準拠する。
10. 調査記録及び出土品は、財団法人愛知県埋蔵文化財センターで保管する。

目 次

I 遺跡調査の概要

1. 遺跡の立地と沿革	1
2. 調査に至る経過	4
3. 調査の工程	5
4. 成果の概要	6

II 遺 構

1. 基本層序と遺構の概要	9
2. I期の遺構	10
3. II期の遺構	19
4. III期の遺構	27
5. IV期の遺構	31

III 遺 物

1. I期の遺物	45
2. II期の遺物	64
3. III期の遺物	86
4. IV期の遺物	90

IV 考 察

1. I期の遺構とその変遷	169
2. 古代における集落の展開	173
3. 中・近世における三の丸	177
4. 三の丸遺跡出土の緑釉陶器素地について	187
5. 近世の陶磁器・土器	195
6. 三の丸遺跡出土の瓦の重鉱物分析	215
7. 結語	221

付表

1. 遺構表	226
2. 遺物表	232

図版目次

1 名古屋城全景	20 I期の遺物(4) SB117・103・SZ101・102
2 調査区周辺	21 II期の遺物(1) SB206・203・227・246・220
3 下層の遺構(1) 調査区全景	22 II期の遺物(2) SB210・223・220・他
4 下層の遺構(2) A区・D区北部・E区南部	23 III期の遺物 SD302・303・310・SK301
5 下層の遺構(3) D区南部・SB204・他	24 IV期の遺物(1) SK479・460・424
6 下層の遺構(4) SB114・115・227・250・他	25 IV期の遺物(2) SK479
7 下層の遺構(5) SB101他・遺物出土状態	26 IV期の遺物(3) SK460
8 下層の遺構(6) SB108他・遺物出土状態	27 IV期の遺物(4) SK424
9 下層の遺構(7) SB206他・遺物出土状態	28 IV期の遺物(5) SK415・455・410・453・446
10 下層の遺構(8) SB227他・遺物出土状態	29 IV期の遺物(6) 京焼・他
11 上層の遺構(1) 調査区全景	30 IV期の遺物(7) 墨書
12 上層の遺構(2) A区・D区北部・E区北部	31 IV期の遺物(8) 焼塩壺・人形
13 上層の遺構(3) B区・A区北部・E区北部	32 IV期の遺物(9) 軒丸瓦・軒棧瓦
14 上層の遺構(4) B区土塁・SK459	33 IV期の遺物(10) 軒棧瓦・他
15 上層の遺構(5) SK424・415・419	34 IV期の遺物(11) 石製品・ガラス製品
16 上層の遺構(6) SK455・488・446・493・他	35 IV期の遺物(12) 金属製品
17 I期の遺物(1) SB101・110・124	36 遺構全体図(下層)
18 I期の遺物(2) SB101・110・124・128	37 遺構全体図(上層)
19 I期の遺物(3) SB113・108・130・109・118	

挿図目次

第1図 遺跡の位置……………1	第14図 I期の遺構(5) SZ101・102……………18
第2図 遺跡周辺の地形……………1	第15図 主要遺構の配置(II期)……………19
第3図 周辺の遺跡……………2	第16図 II期の遺構(1) SB201・204他……………21
第4図 調査地点の位置……………4	第17図 II期の遺構(2) SB220~223……………23
第5図 現地説明会資料……………6	第18図 II期の遺構(3) SB220・227……………24
第6図 墳丘墓(SZ01)……………6	第19図 II期の遺構(4) SB250・243……………25
第7図 名古屋図(部分)……………8	第20図 II期の遺構(5) SK206・203……………26
第8図 三の丸遺跡断面模式図……………9	第21図 主要遺構の配置(III期)……………27
第9図 主要遺構の配置(I期)……………10	第22図 III期の遺構(1) SK301他……………28
第10図 I期の遺構(1) SB101・110……………14	第23図 III期の遺構(2) SK302……………29
第11図 I期の遺構(2) SB103・126……………15	第24図 III期の遺構(3) SE301他……………30
第12図 I期の遺構(3) SB114・125……………16	第25図 主要遺構の配置(IV期)……………31
第13図 I期の遺構(4) SB102・103・SK102……………17	第26図 IV期の遺構(1) 廃棄土坑A群……………32

第27図	IV期の遺構 (2) 廃棄土坑B・C群 ……33	第63図	II期の遺物 (12) 第III層・他 ……82
第28図	IV期の遺構 (3) 廃棄土坑D・E群 ……34	第64図	II期の遺物 (13) 緑釉陶器・素地 ……83
第29図	IV期の遺構 (4) SK424・425・他 ……36	第65図	II期の遺物 (14) 鉄器・他 ……84
第30図	IV期の遺構 (5) SK415 ……37	第66図	II期の遺物 (15) 瓦 ……85
第31図	IV期の遺構 (6) SK479 ……38	第67図	主要器種模式図 (III期) ……86
第32図	IV期の遺構 (7) SE406 ……39	第68図	III期の遺物 (1) ……88
第33図	IV期の遺構 (8) SB401 ……40	第69図	III期の遺物 (2) ……89
第34図	IV期の遺構 (9) SA403~408・他 ……41	第70図	主要器種模式図 (IV期) ……94
第35図	IV期の遺構 (10) 御園門周辺の遺構 ……42	第71図	主要器種模式図 (IV期) ……95
第36図	IV期の遺構 (11) 石垣・土塁 ……43	第72図	IV期の遺物 (1) SK479 (1) ……97
第37図	主要器種模式図 (I期) ……47	第73図	IV期の遺物 (2) SK479 (2) ……98
第38図	I期の遺物 (1) SB101 ……50	第74図	IV期の遺物 (3) SK479 (3) ……99
第39図	I期の遺物 (2) SB110・104 ……51	第75図	IV期の遺物 (4) SK479 (4) ……100
第40図	I期の遺物 (3) SB124・128 ……52	第76図	II期の遺物 (5) SK415 (1) ……101
第41図	I期の遺物 (4) SB113・108 ……53	第77図	IV期の遺物 (6) SK415 (2) ……102
第42図	I期の遺物 (5) SB108・130・他 ……56	第78図	IV期の遺物 (7) SK415 (3) ……103
第43図	I期の遺物 (6) SB126・116 ……57	第79図	IV期の遺物 (8) SK415 (4) ……104
第44図	I期の遺物 (7) SB118・114・他 ……58	第80図	IV期の遺物 (9) SE410 ……105
第45図	I期の遺物 (8) SB117・248・他 ……59	第81図	IV期の遺物 (10) SK468・407 ……106
第46図	I期の遺物 (9) SZ103・101 ……60	第82図	IV期の遺物 (11) SE404 ……110
第47図	I期の遺物 (10) SZ102 ……61	第83図	IV期の遺物 (12) SK455 (1) ……111
第48図	I期の遺物 (11) 遺構外出土の遺物 ……62	第84図	IV期の遺物 (13) SK455・443 ……112
第49図	I期の遺物 (12) 埴輪 ……63	第85図	IV期の遺物 (14) SK410 (1) ……113
第50図	主要器種模式図 (II期) ……66	第86図	IV期の遺物 (15) SK410 (2) ……114
第51図	主要器種模式図 (II期) ……67	第87図	IV期の遺物 (16) SK442 (1) ……115
第52図	II期の遺物 (1) SB221・206・他 ……71	第88図	IV期の遺物 (17) SK442 (2) ……116
第53図	II期の遺物 (2) SB209・207・他 ……72	第89図	IV期の遺物 (18) SK445 ……117
第54図	II期の遺物 (3) SB223・227・他 ……73	第90図	IV期の遺物 (19) SK460 (1) ……119
第55図	II期の遺物 (4) SB246・231・他 ……74	第91図	IV期の遺物 (20) SK460 (2) ……120
第56図	II期の遺物 (5) SB220・250・他 ……75	第92図	IV期の遺物 (21) SK467・444 ……121
第57図	II期の遺物 (6) SK206・他 ……76	第93図	IV期の遺物 (22) SK434 ……122
第58図	II期の遺物 (7) SK203・205 ……77	第94図	IV期の遺物 (23) SK428 ……124
第59図	II期の遺物 (8) 第III層・他 ……78	第95図	IV期の遺物 (24) SK418 ……125
第60図	II期の遺物 (9) 第III層・他 ……79	第96図	IV期の遺物 (25) SK425 ……126
第61図	II期の遺物 (10) 第III層・他 ……80	第97図	IV期の遺物 (26) SK402 ……128
第62図	II期の遺物 (11) 第III層・他 ……81	第98図	IV期の遺物 (27) SK429 (1) ……129

第 99図	IV期の遺物 (28) SK429 (2) ……130	第128図	I期遺構変遷図(1/1000) ……171
第100図	IV期の遺物 (29) SK453 (1) ……134	第129図	名古屋台地上の主要遺跡……………172
第101図	IV期の遺物 (30) SK453 (2) ……135	第130図	各時期の住居位置図……………173
第102図	IV期の遺物 (31) SK453 (3) ……136	第131図	II期の供膳具の変遷……………174
第103図	IV期の遺物 (32) SK446 (1) ……137	第132図	II期の土師器……………175
第104図	IV期の遺物 (33) SK446 (2) ……138	第133図	三の丸の変遷……………178
第105図	IV期の遺物 (34) SK424 (1) ……139	第134図	屋敷地の復元……………179
第106図	IV期の遺物 (35) SK424 (2) ……140	第135図	名古屋城下図 (部分) ……180
第107図	IV期の遺物 (36) SK424 (3) ……141	第136図	野崎一学邸……………181
第108図	IV期の遺物 (37) SK424 (4) ……142	第137図	近世三の丸の復元……………185
第109図	IV期の遺物 (38) SK424 (5) ……143	第138図	遺跡位置図……………187
第110図	IV期の遺物 (39) SK424 (6) ……144	第139図	緑釉陶器出土地点……………188
第111図	IV期の遺物 (40) SK424 (7) ……145	第140図	三の丸遺跡の緑釉陶器素地……………189
第112図	IV期の遺物 (41) 墨書・刻書 ……147	第141図	各地出土の緑釉陶器及び素地……………192
第113図	IV期の遺物 (42) 刻印・他 ……148	第142図	各地出土の緑釉陶器及び素地……………193
第114図	IV期の遺物 (43) 焼塩壺刻印……………150	第143図	鉢Bの分類……………195
第115図	IV期の遺物 (44) 焼塩壺 (1) ……151	第144図	鍋D・Eの分類 ……197
第116図	IV期の遺物 (45) 焼塩壺 (2) ……152	第145図	碗・皿の分類 ……201
第117図	IV期の遺物 (46) 土製玩具他 (1) ……154	第146図	各遺構の陶磁器・土器構成 ……205
第118図	IV期の遺物 (47) 土製玩具他 (2) ……155	第147図	各遺構の器種構成……………205
第119図	IV期の遺物 (48) 瓦 (1) ……156	第148図	各遺構の産地別構成……………206
第120図	IV期の遺物 (49) 瓦 (2) ……157	第149図	編年表 (1) ……208
第121図	IV期の遺物 (50) 瓦 (3) ……158	第150図	編年表 (2) ……209
第122図	IV期の遺物 (51) 瓦 (4) ……159	第151図	編年表 (3) ……210
第123図	IV期の遺物 (52) 石製品……………161	第152図	編年表 (4) ……211
第124図	IV期の遺物 (53) 石・ガラス製品 ……162	第153図	編年表 (5) ……212
第125図	IV期の遺物 (54) 金属製品 (1) ……164	第154図	編年表 (6) ……213
第126図	IV期の遺物 (55) 金属製品 (2) ……165	第155図	分析試料拓影……………216
第127図	IV期の遺物 (56) 銭貨……………166	第156図	胎土重鉱物組成……………219

表 目 次

第 1表	発掘調査に伴う法的手続き…………… 4	第 6表	遺構別鉢B・C、鍋D・E出土表 ……199
第 2表	調査の工程…………… 5	第 7表	胎土分析試料表 ……218
第 3表	銭貨出土遺構表 ……167	第 8表	胎土重鉱物組成 ……220
第 4表	居住者の変遷 ……179	第 9表	三の丸遺跡の変遷 ……222
第 5表	段階設定 ……198		

I 遺跡調査の概要

1. 遺跡の立地と沿革

名古屋のシンボルともいえる名古屋城は、別名「蓬左城」「金城」ともよばれ、近世を代表する城郭として、本丸部分のほか、二の丸・三の丸を巡る堀と土塁が国の特別史跡に指定されている⁽¹⁾。

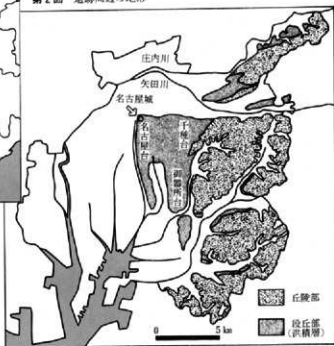
城と城下町が立地する「名古屋台地」は、西北端に位置する名古屋城と東北端の東区片山神社、南端の金山総合駅を結ぶ標高12～13m程の三角形の台地である。台地上には、縁辺部を中心に、片山神社遺跡、古沢町遺跡など、縄文時代以降多くの遺跡が立地している。

また、文献的には、平安時代末頃に、権中納言藤原顯頼の子、小野法印顯恵を開発領主として、「那古野荘」が成立したとされ、これは、後に、建春門院法華堂領となっている。室町時代中頃になると、駿河の今川氏の力が及び、文永2年(1522)頃には、今川氏親が「那古野城」を築き、清須の斯波氏に備えさせたとの伝承もある。この城は、天文元年(1532)頃には、織田信秀により奪取され、その長子信長もこの城で誕生したとされている。



第1図 遺跡の位置

第2図 遺跡周辺の地形



文献にみえる「那古野」の領域は、必ずしも明らかでないが、「天王坊」「万松寺」等の地名から、恐らく、現在の中区三の丸、丸の内を含む名古屋台地北部が該当するものと考えられている。

近世城郭としての名古屋城は、慶長15年(1610)、徳川家康により築城がはじめられ、慶長17年には本丸天守閣が、翌18年には、三の丸土塁・堀詰詰が完成し、19年頃には、城としての体裁が整ったとされている。

城の縄張りは、本丸の各虎口を内枳形で守り、攻撃の為に外側に馬出しを築くもので、天守閣は本丸西北端に建ち、南に小天守を連立させるものである。

二の丸は、藩主が居住する殿舎があり、一般的には、ここが「御城」と称された。またこの殿舎の南北には庭園が設けられたが、特に北庭は、最古の城郭庭園として知られている。



- | | | | |
|------------|------------|-------------|-------------|
| 1. 志賀公園遺跡 | 2. 西志賀遺跡 | 3. 田幡城跡 | 4. 片山神社遺跡 |
| 5. 長久寺遺跡 | 6. 東二葉町遺跡 | 7. 名古屋城跡 | 8. 名古屋城三の丸跡 |
| 9. 白川公園遺跡 | 10. 堅三藏通遺跡 | 11. 旧紫川遺跡 | 17. 富士見町遺跡 |
| 13. 古渡城跡 | 14. 正木町遺跡 | 15. 伊勢山中学遺跡 | 16. 古沢町遺跡 |
| 17. 尾張元興寺跡 | 18. 八幡山古墳 | | |

第3図 周辺の遺跡(1/50000)

三の丸は、本丸及び二の丸の南から東にかけて広がる広大な郭で、歴代藩主の朝や上級藩主の武家屋敷地として利用されていた。

三の丸の南から東にかけて、計画的な町割りにより造成された城下町は、台地の形に添って、北に広く南に狭い三角形となり、城南には、いわゆる「碁盤割」の商業地が広がり、その西側には、延長6kmあまりの「堀川」が開削され、熱田港へと通じていた。

明治以降の名古屋城は、明治4年(1871)一担陸軍省の管轄となり、26年には、本丸、西丸、41年には御深井丸が宮内省に移管され、「名古屋離宮」とされるが、やがて、昭和5年には、名古屋市に下賜されている。昭和20年の空襲により天守閣をはじめ、御殿等が焼失したが、昭和34年には、大小の天守閣が再建され、現在に至っている。

名古屋城に関する発掘調査としては、昭和51~52年に、名古屋市教育委員会により、二の丸庭園の調査が実施されており¹⁾、南北の池や建物跡等が発見されている。

三の丸地内については、同じく、名古屋市教育委員会により、昭和62~63年にかけて、3次にわたる調査が実施されている²⁾。このうち、三の丸東南隅部分を対象とした第1・3次調査では、武家屋敷2軒と、郭内の道路である南御土居筋、東御土居筋が発見されている。また、第2次調査は、今回の調査地点に北接する市立丸の内中学のプール等の新築工事に伴い実施されたもので、「地下室」や土塁と直交する方向に掘削された、屋敷地境を画すると思われる溝群等を検出している。

また、名城東小公園内では、今回の調査と併行して、建設省による名古屋第1地方合同庁舎建設に伴う調査が、御愛知県埋蔵文化財センターによって実施されており、その成果は、本書に引き続き「名古屋城三の丸遺跡(II)」として、平成元年度の刊行が予定されている。



第4図 調査地点の位置(1/5000)

一方、名古屋城下町については、名古屋市教育委員会により、城西の武家屋敷地にあたる、幅下小学校遺跡（西区）、武家屋敷と町屋を含む小島町遺跡（中村区）、城南の武家屋敷地にあたる堅三蔵通遺跡（中区）等、合わせて6遺跡で調査が実施されている⁶⁹。

2. 調査に至る経過

愛知県では、県文化会館の老朽化に伴い、中区三の丸一丁目地内に愛知県新文化会館（仮称）名城地区施設（図書館）の建設を計画した。

この建設予定地は、名古屋城の郭内にあたり、国指定の特別史跡「名古屋城跡」の一部である外堀及び三の丸土塁に隣接していたため、工事に先立ち、その取り扱いについて、県教育委員会と、新文化会館建設事務局との間で協議が持たれた。教育委員会では、建設予定地内が、埋蔵文化財包蔵地と考えられるため、その性格、範囲を特定する為にも、事前の試掘調査が不可欠であると考え、総務部新文化会館建設事務局に対し、その実施を申し入れた。

試掘調査は、県教育委員会により、昭和62年6月1日～11日、工事予定地内について、3カ所のトレンチ（のべ125㎡）を設定し、実施された。この結果、当該地が、弥生時代後期～江戸時代の埋蔵文化財包蔵地であることが明らかとなり、その保存状態も極めて良好であることが確認された。

このため、県教育委員会では、建設用地内のはほぼ全面について、発掘調査が必要であると判断し、その対応について、再び新文化会館建設事務局と協議を行なった。この結果、建設予定地10120㎡のうち、掘削等の工事の対象となる9000㎡について、発掘調査を実施することとし、調査は、新文化会館建設の全体計画に支障をきたさない為にも、昭和63年12月までに完了させることで合意に達した。

県教育委員会では、調査の早期実施のため、とりあえず、昭和63年1月～3月については、県教育委員会が主体となり、全体のうち1400㎡について実施し、その他の部分及び報告書の作成については、昭和63年度以降、財愛知県埋蔵文化財センターへの委託事業とする方針で調査に着手した。

区 分	愛知県知事 (新文化会館建設 事務局長)	財愛知県 埋蔵文化財センター	名古屋市 教育委員会	愛知県 教育委員会	文化庁
(所在の照会)	61.6.28	-	-	61.9.24 61教文第51-24号	-
文化財保護法 57条の3による通知	62.12.3 62新文第49号	-	62.12.10付 遅達	62.12.19 62教文第27-296号	-
同上 58条の2による通知	-	-	-	62.12.19 62教文第27-300号	63.7.8 63委保第2-1680号
同上 57条の1による届出	-	63.4.1	63.5.6付 遅達	63.5.18 63教文第27-133号	63.6.1 63委保第5-744号
遺失物法 第1条による届出	-	元.1.17	-	元.3.27 認定	-
埋蔵文化財保管証	-	元.1.17	-	-	-

第1表 発掘調査に伴う法的手続き

3. 調査の工程

今回の調査地点は、面積的にも広く、また調査着手時点では、発掘区内に、供用中の市道もあったため、全体を5分割（A～E区）して実施する工程が考えられたが、排土処理等が比較的順調に進んだため、実際の調査では、4分割（A・B・D・E）での実施が可能であった。

調査は、昭和63年1月E区の一部（1400㎡）について、県教育委員会が主体となり、着手されたが、4月以降は、御愛知県埋蔵文化財センターの昭和63年度事業として引き継がれた。

発掘調査 調査は、各区ともバックホウを用いた表土掘削から開始したが、A・B区にまたがり、旧国連地域開発センター建物による大規模な攪乱部分のみられた他は、概ね遺存状態は良好であった。特に、調査区西南隅部分の、土塁に接する高まりは、当初、明治期以降の盛土である可能性が高いと考えられていたが、調査の結果、上層には新しい盛土がみられるものの、基本的には三の丸土塁それ自体であることが確認された。

表土の直下には、近世の整地層が存在したが、安定したものではなく、従って、遺構の検出は、中世以前の遺物包含層の上面において、中世～近世遺構、包含層を削除した黄褐色シルト（熱田層）上面においてそれ以前の遺構について実施した。

また、遺跡の立地からみて、縄文時代以前の遺構、遺物が遺存する可能性も高いと考えられたが、実際には全く検出されなかった。

記録の作成 遺構の実測は、上層・下層共、国土座標による基準杭を設定し、ヘリコプターによる航空写真測量を実施した。図化にあたっては、調査区全面の1/50基本平面図を作成した他、調査区に隣接する土塁部分についても、遺構との係わりが高いと考え、その一部をも図化範囲に含めた。また上層・下層共、調査区内全域の集成写真を作成した。

この他、必要に応じて、土層断面図、及び遺物出土状態図等を作成し、記録写真を撮影した。

整理作業 出土物の整理については、現地での調査と併行し、洗浄・出土地点の注記等、基礎的な整理作業を実施し、昭和63年度の『年報』においては、調査の概要を報告した。また、平成元年度には、報告書作成のため、遺物実測図の作成等の整理作業を実施した。

工程	88												89												90			担当調査員					
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3						
調査	A区(1400㎡)															見学会															城ヶ谷・松田 加藤・金子		
	B区(1700㎡)																														松田・加藤		
	D区(4100㎡)																														佐藤・小澤 梅本		
	E区(1800㎡)																														松田・加藤		
整理	基礎整理																														小澤・佐藤 梅本・城ヶ谷 松田・加藤 金子		
	報告書作成															年報刊行															報告書刊行		

第2表 調査の工程

成果の公表 調査成果の公表については、隣接する丸の内中学の1年生の社会科授業の一環として、調査現場の見学会を実施したのをはじめ、12月15日には、市民を対象とした現地説明会を実施し、300人余の参加を得た。

また、出土品の一部については、平成元年度の「埋蔵文化財展」で展示、公開した。

4. 成果の概要

発掘調査の結果、旧米国総領事館をはじめとする明治以降の建物基礎等による攪乱部分が処々にみられたものの、それ以外の部分については、遺構の残存状況は極めて良好であった。

検出された遺構は、伴出する遺物等から、概ねⅠ期(弥生中期～古墳時代前期)、Ⅱ期(飛鳥～平安時代)、Ⅲ期(室町～安土桃山時代)、Ⅳ期(近世)の区分が可能であった。

Ⅰ期の遺構は、数十軒の堅穴住居及び、4基の墳丘墓であり、これらは、堅穴住居群のみで構成される弥生時代中期と堅穴住居に加え、墳丘墓が築造される弥生時代後期～古墳時代前期の二時期に小区分が可能であった。

主な遺物としては、弥生時代中期前葉の堅穴住居S B101出土の、石庖丁を含む一括資料、古墳時代前期の墳丘墓S Z102出土のミニチュア土器群等がある。

Ⅱ期の遺構は、50基を越える堅穴住居群と6棟の堀立柱建物等であるが、堀立柱建物のうちS B250



第6図 墳丘墓 (S Z 01)

第5図 現地説明会資料



は、一辺約70cmの方形の柱穴が柱間約220cmで、東西3間、南北5間に並ぶ大規模なものであった。

遺物は、一括資料として、S B 220出土のK-90号窯期の灰釉碗、皿、長頸瓶などがあり、またやや特殊な遺物として、灰釉双耳瓶、陰刻花文を有する緑釉段皿、同じく陰刻花文を有する小型の四足壺等がある。

Ⅲ期の遺構は、比較的密度が薄かったが、調査区内を縦横にのびる溝群（SD305・306・312等）の存在は注目される。出土遺物は、これらも含めて極端に少なく、日常的な居住空間であったとは考えにくい。

Ⅳ期の遺構には、溝、井戸、建物基礎、廃棄土坑、地下室等、様々なものがあり、その大半は、三の丸内の武家屋敷に係るものと思われる。これら、近世の遺構群は、調査区内に一様にみられるのではなく、北側及び西側に集中し、南東部分では非常に密度が低いという傾向がみられた。古絵図等によれば、前者は武家屋敷地、後者は御園御門内側の「内片端」の広場部分に相当するものと思われる。

遺物は、廃棄土坑出土品を中心に、膨大な量の陶磁器・土器等がみられた。陶磁器類の大半は、碗、皿、鉢、鍋等の雑器類であるが、織部沓茶碗、赤楽茶碗など、明らかに「茶の湯」に用いられたと思われるものも少なくなかった。

名古屋城三の丸遺跡は、その遺構が各期にわたり豊富であること、あるいは、今回の調査地点だけで、整理用コンテナ1000箱にも及ぶ遺物を出土したことなど、名古屋市内屈指の「埋蔵文化財包蔵地」とすることができる。

（樹本博志）

註

- (1) 昭和27年3月27日指定
- (2) 名古屋市教育委員会『二之丸庭園発掘調査概要報告書』1976
- (3) 名古屋市教育委員会『名古屋城三の丸遺跡』1989
- (4) 名古屋市見晴台考古資料館『城と町のデザイナー-戦国~江戸の考古学』1989

II 遺 構

1. 基本層序と遺構の概要

調査地点の基本層序は、地表より、三の丸断絶以降現在に至るまでの整地層(第I層)、近世の整地層(第II層)、中世以前の遺物包含層(第III層)、基盤としての黄褐色シルト・粘土層(第IV層)の順に推移する。

このうち第I層は、瓦礫などを多量に含むもので、道路等となっていた部分を除けば、比較的薄い堆積であり、平均20cm程度であった。

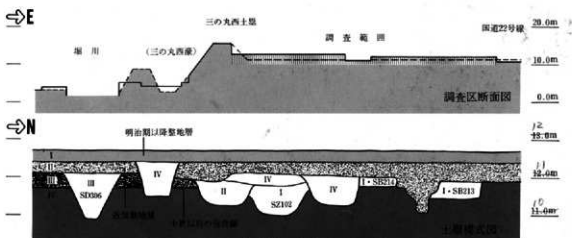
第II層は、武家屋敷地として使用されていた近世を通じ、継続的に形成されたものであり、調査区の北部・南部を中心にみられた。組成は、砂利等を含むもの、基盤の黄褐色シルト等の小ブロックを混じえるものなど様々であり、広がり、厚さも安定性に欠けるものであった。

第III層は、比較的安定した黒褐色の砂・シルト層であり、弥生~中世の土器片等を相当量含むものであった。やや粘質が強く、灰色を帯びる上層と、砂質が強く、黒色に近い下層に分層可能な部分もあったが、全体的には識別し得なかった。

第IV層は、いわゆる「熟田層」の上面にあたり、第III層の残存状態の良好な部分では、表面が有機化により、褐色を帯びた漸移層を形成していた。

遺構の検出は、整地層、あるいは包含層中での確認が難しく、III期・IV期に関しては第III層上面、I期・II期に関しては、第IV層上面で実施したが、III期については、III層上面で確認できず、第IV層に至ってはじめて検出し得た遺構も少なくなかった。

また、各期の整地層、包含層から復元される旧生活面は、I・II期において11.8~12m、III・IV期では、12.2~17.4m (T.P) 程度と考えられる。これは、いずれも調査区北寄りやや高い傾向を示すものの、東西方向については、西側土塁際に至るまで、ほとんど差異はなかった。(梅本博志)



第8図 三の丸遺跡断面模式図

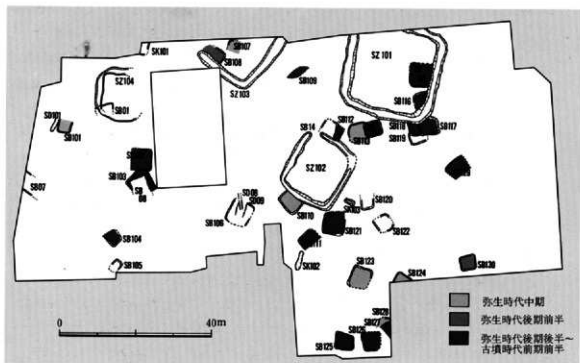
2. I期の遺構

概要

I期の遺構には、竪穴住居、墳丘墓、その他多数の溝、土坑があげられる。

竪穴住居は、弥生時代中期前半、弥生時代後期前半、弥生時代後期後半、古墳時代前期前半の4時期に大別できる。弥生時代中期前半に比定される竪穴住居7軒、弥生時代後期前半に比定される竪穴住居2軒、弥生時代後期後半に比定される竪穴住居6軒、古墳時代前半に比定される竪穴住居15軒を検出した。しかし、時期決定の決め手を欠く竪穴住居が多く、また、同じく集落と推定しているII期の住居とも混在しており、当該期のものは明確にし得なかった。弥生時代中期後半の竪穴住居はなく、集落としては弥生時代中期前半以降継続しての存在は認められなかった。名古屋台地上では弥生時代中期以降継続して存在する遺跡は、高蔵遺跡1カ所しか確認されていない事から考え、弥生時代から古墳時代にかけての名古屋台地上では集落はある程度時期を限定して点在する形状をとっていたものと考えられる。その中で本遺跡では前述した4時期に限って機能していたのである。

墳丘墓は4基検出された。これらは弥生時代後期後半、古墳時代前期前半、古墳時代前期後半、というように時期を異にしており、群としては存在していない。このうち1基は弥生時代後期前半に比定でき、唯一の弥生時代の方形周溝墓である。また、この時期の竪穴住居跡も認められ、居住域と同一地域に造営されている。他の2基（1基は時期決定の決め手を欠くため除外）は、古墳時代前期に比定されているが、集落が消失して以後造営されている。これまで名古屋台地上には古墳時代前期の古墳は片山神社遺跡でしか確認されておらず、この時期の古墳の様相は不明であったが、今回の調査により2基検出され、名古屋台地上での古墳様相の研究の一資料として提示されていくこととなろう。



第9図 主要遺構の配置 (I期)

(1) 竪穴住居

ここでは、主要な住居跡についてのみ詳細を触れることとし、それ以外の住居跡については遺構表を参照されたい。

- S B 101** 北辺部分が攪乱により覆されており、3辺を検出したにとどまる。東西3.2m、深さは検出面より0.2mを測る。長軸方向はN-12°-Wを示す。ピットは多数検出したが、住居跡に伴うものかどうかについては判定しえなかった。遺物は石彫丁をはじめとして、床面直上より甕・壺・鉢などがまとまった形で検出されており、良好な一括資料である。出土遺物より弥生時代中期前半に比定。(第10図)
- S B 102** 西辺は攪乱により未検出。南辺はS B 103と切り合う。南北5.6m、深さは検出面より0.1mを測る。長軸方向はN-0°を示す。周溝は検出部分すべてをめぐる。ピットは9カ所検出したが、主柱穴は確定し得なかった。遺物は高杯、その他細片が出土。古墳時代前期前半に比定。(第13図)
- S B 103** S B 102、S B 08と切り合う。3辺を検出。東西7.5m、深さは検出面より0.1mを測る。長軸方向はN-42°-Wを示す。ピットは15カ所検出したが、主柱穴は確定し得なかった。遺物は甕・高杯が出土した。古墳時代前期前半に比定。この遺跡の中では最も新しい住居跡である。(第13図)
- S B 106** 中世の遺構により一部切られるものはほぼ全容を検出。6.3m×6.1m、深さは検出面より0.1mを測る。長軸方向はN-27°-Wを示す。ピットは多数検出したが、主柱穴かどうかについては確定し得なかった。遺物は器台脚部の他は細片であった。古墳時代前期前半に比定。
- S B 108** 近世の遺構及びS Z 103の周溝により切られており、北東方程度を検出したのみである。規模は不明。深さは検出面より0.1mを測る。長軸方向はN-28°-Eを示す。周溝は東辺で一部未検出であったが全周するものと推定。ピットは5カ所検出し、うち2カ所は主柱穴と推定。床面には貼床を施す。また床面より炭化材を検出。遺物は甕・鉢・壺が出土。弥生時代後期前半に比定。
- S B 110** 北辺部分がS Z 102により、また南コーナーは中世の溝に切られており、3辺を検出。東西6.2m、深さは検出面より0.4mを測る。長軸方向はN-42°-Wを示す。周溝は全周するが、南西コーナー部分が屈曲したラス状を呈している。何か特殊な施設を有したのであろうか。ピットは7個検出したが、形状・深さから、うち2個を主柱穴と推定。遺物は甕・壺が出土。弥生時代中期前半に比定。(第10図)
- S B 113** S B 114に切られ全容は窺えなかった。規模・長軸方向は不明。深さは検出面より0.1mを測る。ピットは未検出。遺物は甕・壺・鉢が出土。弥生時代中期前半に比定。
- S B 114** S B 113を切っている。ほぼ全容を検出。4.8m×3.8m、深さは検出面より0.2mを測る。長軸方向はN-11°-Wを示す。周溝は北辺を除きめぐっている。ピットは8カ所検出したが、主柱穴を確定することはできなかった。遺物は中央東寄り壺(104)がかたまって出土したほか、甕・壺・高杯が出土。古墳時代前期前半に比定。(第12図)

- SB115 S Z101及び攪乱により切られる。南北6m、深さは検出面より0.3mを測る。長軸方向はN-8°-Wを示す。ビットは11カ所検出し、うち2カ所を主柱穴と推定。遺物は台付甕の台部のほかに細片であった。弥生時代後期後半に比定。
- SB116 S Z101及び攪乱によって切られており、北東部分を検出したにとどまる。規模・長軸方向は不明。深さは検出面より0.4mを測る。周溝は検出部分については全てめぐっている。ビットは4カ所検出したが、主柱穴は確定できなかった。遺物は甕・壺・高杯などをはじめ多く出土したがいずれも劣化が激しく遺存状況は悪い。古墳時代前期前半に比定。
- SB117 S Z101・SB118・SB119と切り合う。5.6m×5m、深さは検出面より0.15mを測る。長軸方向はN-12°-Wを示す。周溝は西辺と南辺をめぐる。ビットは5カ所検出したが、主柱穴は確定しえなかった。遺物は甕・壺が出土。弥生時代後期後半に比定。
- SB118 S Z101・SB117・SB119と切り合う。規模は不明。深さは検出面より0.2mを測る。長軸方向はN-10°-Wを示す。周溝はない。ビットは9カ所検出したが、主柱穴は確定し得なかった。遺物は甕・壺・高杯が出土。弥生時代後期後半に比定。
- SB121 ほぼ全容を検出。7.2m×5.2mを測り、かなり大型である。深さは検出面より0.2mを測る。長軸方向はN-9°-Eを示す。周溝は幅が広く全周する。ビットは多数検出したが、主柱穴は確定し得なかった。遺物は甕・高杯が出土。古墳時代前期前半に比定。
- SB124 調査区南隅で検出。規模・長軸方向は不明。深さは検出面より0.2mを測る。ビットは未検出。遺物は壺がまとまって出土。弥生時代中期前半に比定。
- SB125 S B250のビットに切られるものの、ほぼ全容を検出し得た。5.5m×5m、深さは検出面より0.2mを測る。長軸方向はN-2°-Wを示す。周溝はなく、ビットは7カ所検出したが主柱穴は確定し得なかった。遺物は台付甕の台部・壺・高杯が出土。弥生時代後期後半に比定。(第12図)
- SB126 全体の $\frac{1}{2}$ は攪乱により壊される。5.2m×5.2m、深さは検出面より0.3mを測る。長軸方向はN-16°-Wを示す。周溝はない。ビットは8カ所検出し、うち主柱穴は3カ所、攪乱で未検出の部分のことを考えると、主柱穴は4カ所であったと推定。遺物は甕・壺・鉢・高杯がまとまって出土。弥生時代後期後半に比定。(第11図)
- SB127 SB128を切っている。東側は調査区域外、西側は攪乱により壊される。南北に4.3m、深さは検出面より0.2mを測る。長軸方向はN-16°-Wを示す。遺物は甕・壺・高杯が出土。弥生時代後期後半に比定。
- SB128 SB127、攪乱により切れ全容はほとんど明らかにしえなかった。深さは検出面より0.08mを測る。しかし遺物は甕・壺・鉢がまとまって出土し、これにより弥生時代中期前半に比定。
- SB130 北東及び南東コーナーは未検出。5.3m×4.8m、深さは検出面より0.3mを測る。長軸方向はN-13°-Wを示す。周溝はない。ビットは未検出。北東隅に土坑1基を検出。床面は貼床を施し堅くしめる。遺物は壺が出土。弥生時代後期前半に比定。(第11図)

(2) 墳丘墓

4基検出したが、いずれも後世の削平が著しく、墳丘部分は残っていない。以下にその詳細について記す。

S Z 101 北溝の一部は調査区域外のため未検出。26m×26mを測る。主軸方向はN-13°-Eを示す。溝の断面は、ほぼ逆台形を呈し、幅は1.4m、深さは検出面より0.25～0.75mを測る。埋土は上層より褐色粘質土、黒褐色粘質土、黄褐色砂質土が自然堆積する。遺物は、甕・壺・高杯・器台が出土した。竪穴住居と切り合っているため、混入が著しく、時期決定はかなり難しかったが、溝の底面から出土した甕Eから、古墳時代前期中葉に比定。(第14図)

S Z 102 北溝東コーナー部分が攪乱のため未検出。18.8m×16.4mを測る。主軸方向はN-27°-Eを示す。溝の断面はほぼ逆台形を呈し、幅は0.7m、深さは検出面より0.25～0.75mを測る。北西コーナー部分に陸橋を持つ。また、南溝中央部分が浅くなっておりそこにも陸橋を有したのであろうか。遺物は、甕・壺・高杯など多く出土しているが、周辺住居跡からの混入が著しい。しかし、墳丘から転落した状態で出土したミニチュア土器から、古墳時代前期後半に比定。(第14図)

S Z 103 ほとんどが後世の攪乱を受け壊されており、南コーナー部分の溝底部をかるうじて検出したのみである。よって、規模、溝の断面形、深さは不明。主軸方向はN-35°-Eを示す。埋土の最下層は黒褐色シルトである。遺物は、甕・鉢・高杯が出土した。弥生時代後期前半に比定。

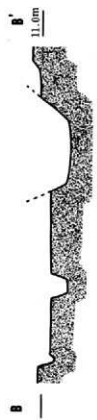
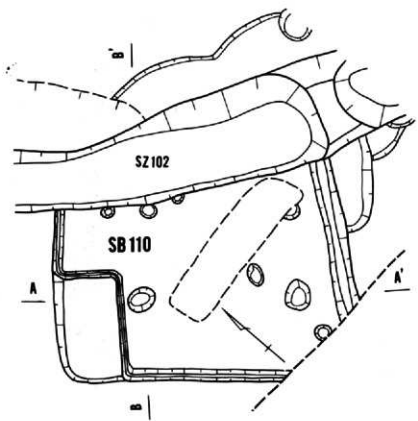
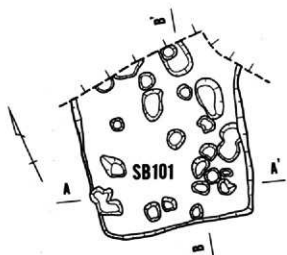
S Z 104 東溝はなかったのであろうか。大部分が後世の攪乱を受け、全容は不明。南北14mを測る。南溝は断面は逆台形を呈し、深さは検出面から最深部で0.3mを測る。西溝は断面はU字形を呈し、深さは検出面から0.3mを測る。主軸方向はN-4°-Eを示す。遺物は図示不可能な細片が少量出土したのみで時期は明確にし得なかった。

(3) その他の遺構

ここでは遺物がまとも出土した遺構のみを取り上げる。

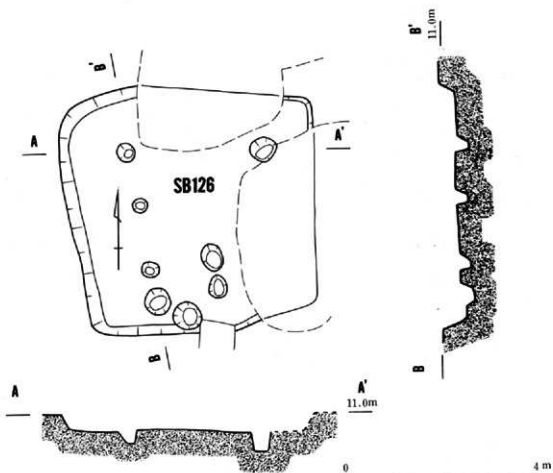
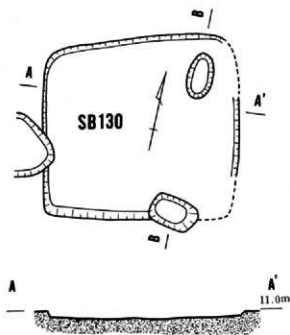
S K 101 調査区北西隅で南東コーナーを検出したのみである。規模は不明。深さは検出面より0.1mを測る。遺物は甕4点が出土。弥生時代中期前半に比定。

S K 102 S B 222により切られる。規模は5.1m×1.0m、深さは検出面より0.5mを測る。一見したところ溝状を呈す。壺が出土。弥生時代中期前半に比定。(第13図) (加藤とよ江)



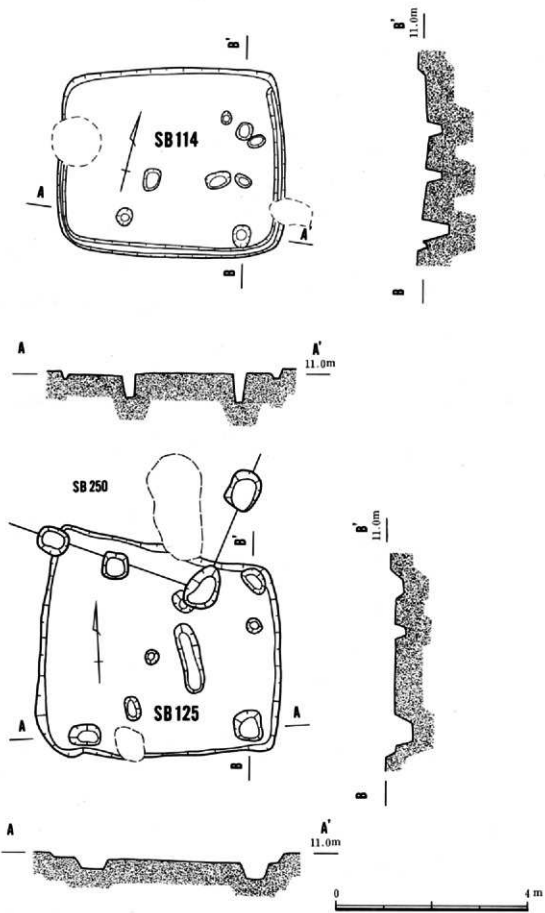
第10図 I期の遺構(1)

SB101・110



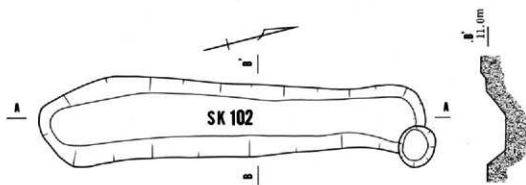
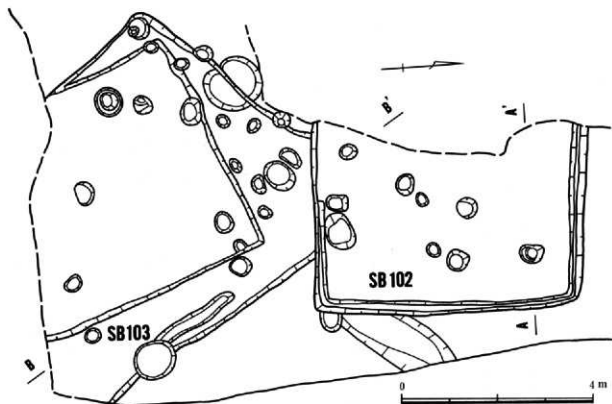
第11図 Ⅰ期の遺構(2)

SB130 - 126



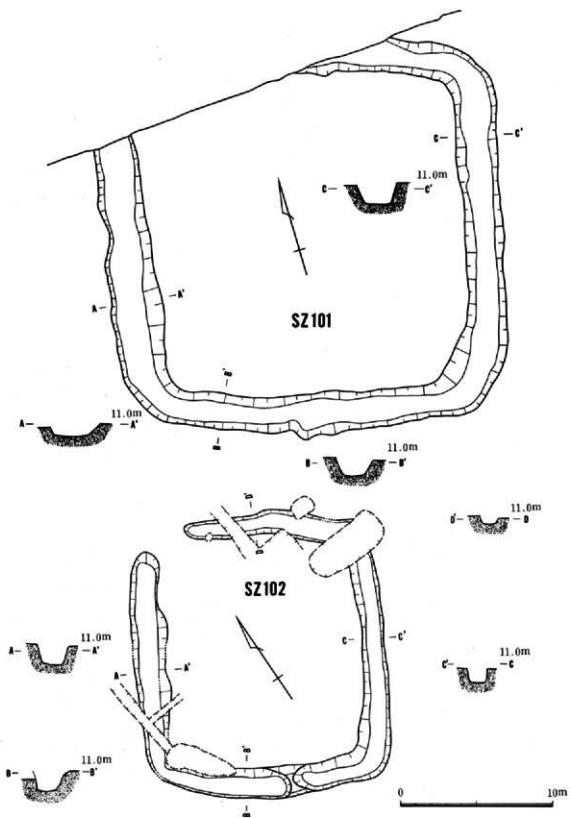
第12図 I期の遺構(3)

SB114・125



第13図 1期の遺構(4)

SB102・103・SK102



第14図 1期の遺構(5)

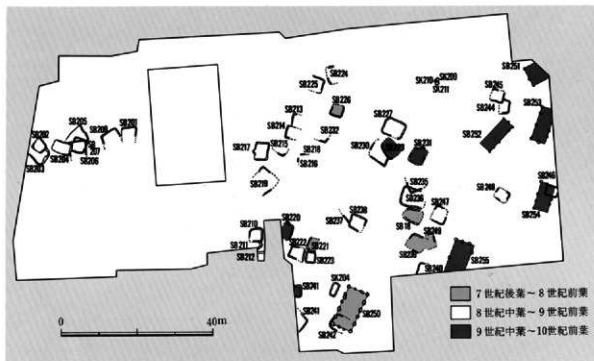
SZ101・102

3. II期の遺構

概要

II期の三の丸遺跡は名古屋台地上に展開した奈良・平安時代の集落跡である。名古屋台地の西側には当該期の集落が幾つも存在するが市街地と重なるため、部分的な調査しか行われていない。三の丸遺跡は近世に名古屋城三の丸の武家屋敷地となり、調査区南半分は広場の下となったため遺構の残りはよかった。遺構は掘立柱建物6棟、竪穴住居49軒他に土坑・溝・ピットが多数検出された。これらの遺構は基盤である熟田層を切り込んで構築されている。

遺構はそのあり方からみて大きく3時期に区分できる。II-1期は調査区南部の大型の掘立柱建物SB250を中心として竪穴住居が展開する。SB250は主軸の方向が東に約24°振っているが竪穴住居はそれと直交するような角度で構築されている。竪穴住居は数はあまり多くないが、大きさが一辺約4mの隅丸方形のもので、カマド等については不明である。II-2期は竪穴住居のみで調査区全体に広がり、数も多い。大きさは一辺4m前後の隅丸方形・長方形のものが多いが、なかには5m×6mの少し大型のものや、3.5m×3mの小型のものもある。方位ははっきりとはしないがN-0°-10°-EのものN-20°-E前後のものや、これと直交するもの、N-70°-E前後のものやこれと直交するものに大別される。II-3期は掘立柱建物と竪穴住居が調査区の中央部から東部にかけて展開する。掘立柱建物は4棟あり、主軸はN-20°-E前後のものやN-50°-E前後のものや2種類ある。竪穴住居は数が少ないが、一辺4mの隅丸方形で北側の辺の一部が円形に膨らんでカマド状になっている。以下、代表的な遺構について説明する。それ以外のものについては遺構表を参照されたい。



第15図 主要遺構の配置（II期）

(1) 竪穴住居

竪穴住居は名古屋台地の西側の縁に沿って展開しているが、並び方などに特に規則性は認められない。形態は主として隅丸方形のものが多く、長方形のものもかなり見られる。規模は4m前後のものが多いが、なかには3.5m程度のもや、一辺が5mを超えるものがある。主軸の方向にもばらつきがあるが、大きくみるとN-70°-W前後のものが最も多く、次にこれと直交するN-20°-Eのグループとほぼ真北を示すグループが多く、少しであるがN-70°-Eとこれと直交するN-20°-Wのものがある。カマドについてははっきりとした構造を持っているものは全くない。床面が火を受けているものもほとんどなく、ただ住居の覆土中に灰・焼土が混じる例がいくつかあるのみである。移動式のカマドも一片も出土していないことから当時の煮炊きの方法を復元するのはむずかしい。しかし、一部の住居では、竪穴住居の北の一辺の中央に円形のふくらみを持ち、そこに土師器甕の底部を逆位置で伏せたものや、角柱状の石を据えたものがみられる。これらの周りには焼土・灰が堆積しており、何らかの形で煮炊きを行ったものであろう。

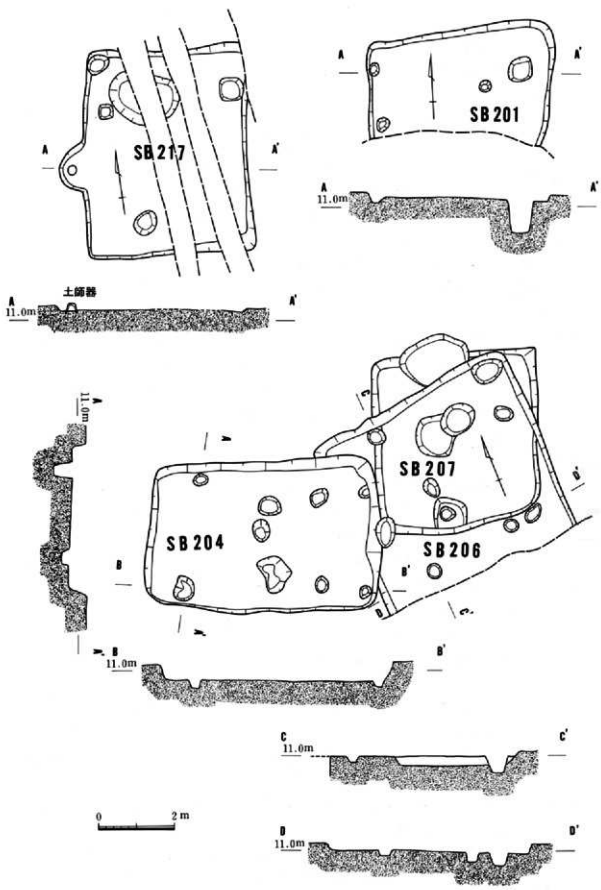
S B 201 北東コーナーが少し鋭角的になるが、一辺の長さが3.8mの方形の竪穴住居である。南半分は後世の攪乱で削平されており、遺構の全容はつかめない。壁高は0.1~0.15mと浅く、周溝は不明である。柱穴と思われるピットは2カ所ある。カマドははっきりせず、焼土も検出されていない。主軸の方向はほぼ真北でN-87°-Eをはかる。遺物は完形に近い須恵器杯Aなどが出土している。II-2期に属するものと思われる。(第16図)

S B 204 4.9×3.1mの長方形の竪穴住居である。主軸はN-72°-Wをはかる。壁高は約0.3mであるが、周溝は確認できなかった。主柱穴は4本~6本であると思われる。北東コーナーがS B 206をきっている。東辺の中央部をピットがきっているが、本住居との関係は不明である。このような例は他の住居にも見られ、何らかの機能をはたしていた可能性もある。II-2期に属するものと思われる。(第16図)

S B 206 南の辺が削平されているが、一辺が4.6mの竪穴住居である。主軸はN-83°-Eで北西コーナーはS B 204によって切られている。主柱穴は4本であると思われ、貼床と考えられる少し硬い面もあるが、周溝ははっきりしない。住居床面直上の黒色灰混土中より完形に近い須恵器杯蓋・盤・灰輪双耳瓶がほぼ同じレベルで出土している。II-2期に属すると思われる。(第16図)

S B 207 S B 207はそのほとんどがS B 206に切られている。規模はほぼ方形で3.7×3.4mともっとも小さな住居の1つである。主軸はN-20°-Eである。床面は直接熟田層を切り込んでおり、堅くしまり黄褐色を呈する。床面中央部には灰・焼土混じりの黒色土が堆積する。南辺には周溝らしきものも見られたが明確ではなかった。II-2期に属する。(第16図)

S B 217 表面を近世の攪乱で削平され壁の立ち上がりは低い。中央部も近代の攪乱により壊されている。規模は4.1×3.4mでN-6°-Eをはかるやや長方形の住居である。長辺の西側に半円形の膨らみがあり、甕の底部が逆位置で伏せられていた。このような例はほぼ同時期のS B 223でも見られる。甕の周辺では灰を含んだ黒色土が堆積しており、火を焚くときの台のようにして甕を利用していた可能性もある。南辺に周溝らしき溝がみられたが浅くて、



第16図 Ⅱ期の遺構(Ⅰ) SB217・201・204・207・206
 - 21 -

途中で途切れている。遺物は少ないがII-2期に位置づけられる。(第16図)

S B 221 中央部を攪乱で削られているが、1辺約4.6mの隅丸方形の住居である。方向はN-72°-Eで周溝は確認できなかった。中央部に浅い土坑がみられる。主柱穴は3カ所見られるが、2カ所は浅くはっきりしない。出土する遺物は、かえりのついた蓋など7世紀に遡るものもみられることから、II-1期に当たると思われる。(第17図)

S B 222 一辺が短い台形のプランを呈する住居である。短辺が西側で3.4m、長辺が東側で3.8m、南北辺は約3.8mである。周溝、カマドははっきりしない。主柱穴は4カ所あるが1組はコーナーではなく少し中央よっている。もう少し東に柱穴があり6カ所になる可能性もあるが、下面に弥生時代の土坑がありはっきり検出できなかった。主軸の方向はN-80°-Wである。II-2期に含まれるものと思われる。(第18図)

S B 223 1辺が約3.5mの隅丸方形の小型の住居である。東の辺は少しふくらんでいるが、南の辺には周溝が走っている。主柱穴は対角線上に2カ所確認できた。主軸の方位はN-5°-Eである。西側の辺の中央部より少し北よりのところが円形にふくらんでおり土師器臺の底部が逆位置で伏せられていた。その周りには灰・焼土混じりの褐色土が存在している。このような用例は先にみたS B 217のほかにも名古屋市内でいくつか見つかっており、カマド跡がはっきり認められなくなった奈良・平安時代の煮炊きの方法を考える1つの手がかりとなろう。II-2期に属すると思われる。(第17図)

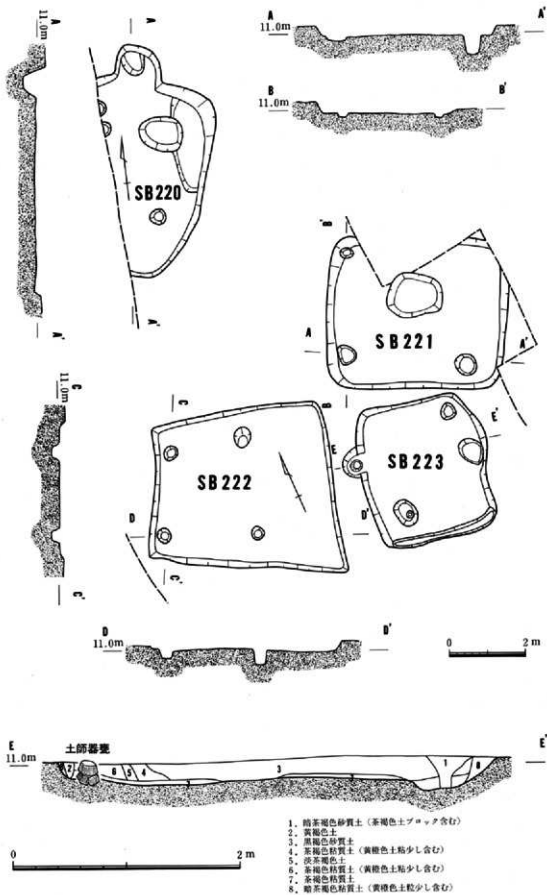
S B 220 後世の攪乱により約3分の1を失っているが、一辺約4mの住居である。方位はN-9°-Eで周溝は確認できなかった。主柱穴は2カ所あるが北東コーナーに深い土坑が2カ所見つかると、その中から灰釉陶器・緑釉陶器(素地)・須恵器・土師器など遺物が多数出土した。土坑から出土した灰釉陶器と床面直上のものと接合したことからこの土坑と住居の埋没はほぼ同時であった可能性が高い。住居の北の辺は円形にふくらんでおり、穴が掘られ角柱の石が縦に据えられていた。その周りには灰・焼土混じりの黒色土が広がっていた。同時期の住居であるS B 231も石はなかったが1つの辺がふくらんでおり、これも土師器の底部を伏せたのと同様に奈良～平安時代におけるカマドのあり方の1例であろう。この住居はII-3期に含まれると思われる。(第18図)

S B 227 所々攪乱で壊されているが、床面には完形に近い須恵器が幾つも見つかると、良好な資料を提供した住居である。規模は5.8m×4.6mの長方形で一部に周溝をもつ最も大きな住居である。床面は熱田層を切り込んでおり、堅くしまっている。方位はN-70°-Wで、主柱穴は3～4本で1つのものには石が入っていたが用途は不明である。(第18図)

(2) 掘立柱建物

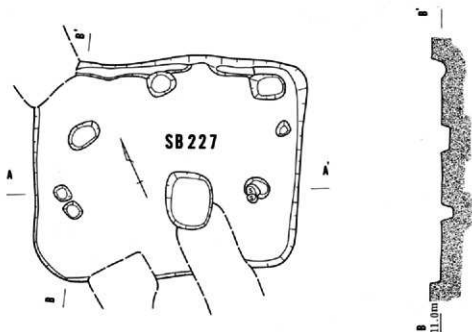
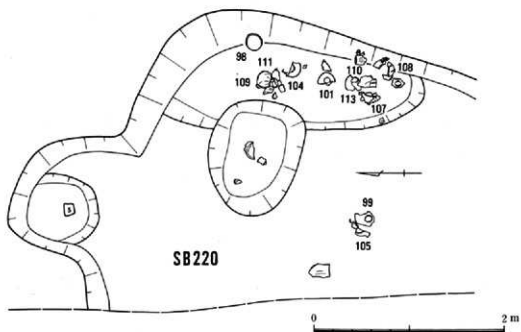
掘立柱建物はすべて南北棟で、調査区南部に2棟と東部に4棟の合計6棟が検出されている。南部にある2棟は柱穴の残存状況もよく、時期的にはII-1期にさかのぼるもので、柱間が広く柱穴の掘り形も大きい。東部にある4棟はいずれも攪乱を受けているが、II-3期に降るもので柱間1間で柱穴の掘り形が小さい。

S B 250 5間×3間の建物で主軸の方向はN-24°-Eである。柱間は約220cmで、一尺約29.6cmとす



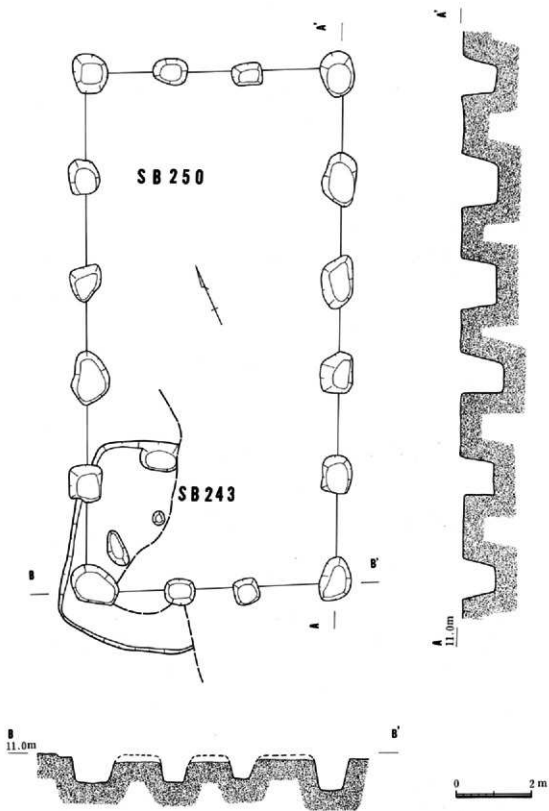
第17図 Ⅱ期の遺構(2)

SB220・221・222・223



第18図 II期の遺構(3)

SB220・227



第19図 II期の遺構(4)

SB250・243

とおおよそ7.5尺に当たる。柱穴の掘り形は約60cm～80cmで隅丸方形から長方形である。柱穴の深さは約70cm～80cmであるが、柱痕は確認できなかった。S B 243と切りあい関係を持つが、この付近は水路による攪乱のためはっきりしなかった。柱穴から出土した遺物からみて、II-1期にさかのぼる可能性がある。(第19図)

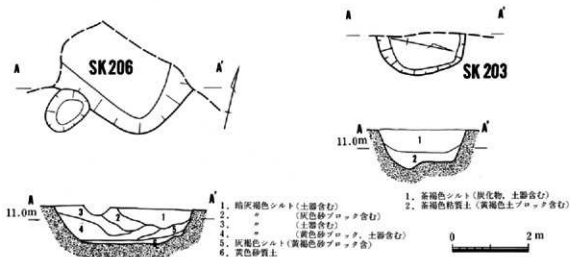
S B 251～255 これらの掘立柱建物はいずれも調査区の東部に存するが、この地区は攪乱が激しく全容が把握できるものはない。従ってここではまとめて説明する。主軸の方向はN-16°-52'-Eで20'前後のもの50'前後のものに分かれるがS B 251のみはN-52'-Eで東西棟になる可能性がある。規模はいずれも柱間1間でS B 251が南北3間、S B 252・253が5間×2間、S B 254が4間×2間、S B 255が東西3間となる。柱穴の掘り形はほぼ円形で径が40cm～50cm、深さが40cm前後である。S B 255のみは少し掘り形が大きくて約60cmの隅丸方形である。S B 251～254は、遺物のなかに灰軸陶器もみられることからII-3期に属すると考えられる。S B 255はII-1期に遡るものと思われる。

(3) その他の遺構

その他の遺構として溝・土坑・ピットが多数みられるがそのなかで一括性の高い遺物群が出土した2基の土坑のみについて説明する。

S K 206 調査区の中央部に位置する土坑であるが、後世の攪乱で一部削平されている。残存長は約2.5m、深さは約0.8mである。この土坑の上部(1～3層)より完形のものも含めてII-2期の須恵器・土師器が多数出土した。(第20図)

S K 203 S K 203は調査区南西部にある土坑で、約3分の1は調査区外であった。長径約1.6m、深さ約0.8mで埋土は上・下2層に分かれる。下層からはほとんど遺物は出土していないが、上層からは灰軸陶器・緑釉陶器(素地)・須恵器・土師器がまとめて出土している。近くに灰軸陶器が住居内の土坑からまとめて出土したS B 220がありなんらかの関係がある可能性もある。(第20図) (城ヶ谷和広)



第20図 II期の遺構(5)

SK206・203

4. III期の遺構

概要

III期の遺構には溝・土坑・井戸がある。

検出された溝は十数条で、それらは一定方向に走り、規則性が窺える。おおよそ溝の方向はN-12°-E (S D 313) と真北方向のもの (S D 307・310・312) 及び、前記の各溝にはほぼ直交するもの (S D 304・311・303・306) に分かれる。溝の断面形は前者がやや西方向に偏った船底状を呈するのに対し、後者は箱葉研状を呈する。真北方向の溝は全て北から西に傾く溝を切っており、異なる方向を示す溝の間には時期差が存在する。さらに出土遺物を見ると北から西に傾く溝とそれに直交する溝の中でS D 304・308とS D 311・313の間にも時期差が存在し、S D 304・308が先行する。

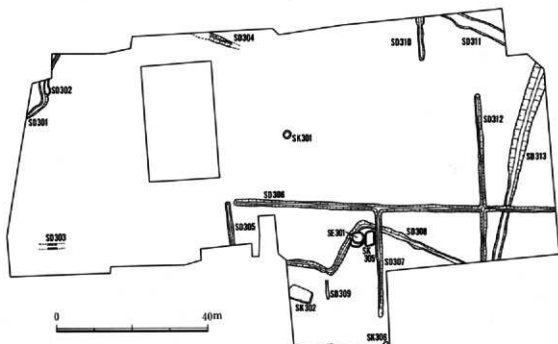
比較的顕著に見られた溝に対し、土坑・井戸は数量的に少ない。これらはS K 301を除けば調査区のはほぼ中央の南よりにやや集中して見られる。セクションからS E 301はS K 305と同時期に存在したと考えられ、S D 308を切る。またS K 305は浅い堅穴状の土坑でその長軸はS D 307とほぼ平行している。S K 305と同様な形状を呈するS K 302からはS D 307・310、S E 301と同時期の遺物が出土している。(第69図) またS K 301からは第68図にあるような無軸陶器が出土している。

各遺構から出土した遺物は大きく13世紀のものと16世紀のものに分けることができ、当該調査区の遺構の変遷は概ね下記ようになる。

III期 1 段階：S D 301・302・304・308、S K 301

III期 2 段階：S D 311・313

III期 3 段階：S D 303・305～307・310・312、S K 302・305、S E 301

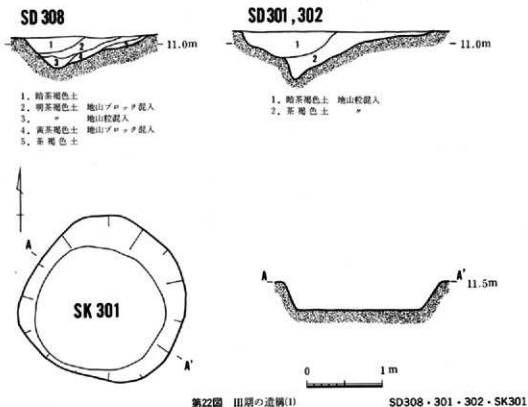


第21図 主要遺構の配置 (III期)

III-1～2段階では、人為的開削が行われた溝が一定方向に走るが、建物跡等は存在せず、現在のところ、居住空間は想定できない。しかし遺跡が台地縁に立地していることを考えると、周辺に同時期の集落が存在する可能性が高い。III-3段階になると溝による区画が明確になり、区画内には井戸が見られ、周囲に溝を巡らす居住域が設定される。溝のセクションからSD305・307・312の東側、SD306の南側には土塁が想定でき、溝が箱梁研状を呈することと併せて、この居住域は防衛的機能を重視した居館跡と言える。また当調査区から西へ約700mの建設省合同庁舎建設予定地の調査では那古野城に関連すると思われる遺構が検出されており、III-3段階の遺構出土遺物がそれらの出土遺物と同時期のものであること、溝・土塁を伴う防衛的色彩の濃い住空間であることから、那古野城に伴う一連の居館跡と考えられる¹¹⁾。

(1) III期1段階の遺構

- SD301・302** 幅1～2m、深さ0.7mを測り、調査区北西隅の台地縁道を等高線に沿って走る。断面形はSD301は舟底状、SD302は逆三角形を呈する。SD301はSD302を切る。(第22図)
- SD308** 幅1.6m、深さ0.4mを測り、調査区南を鉤の手状に走る。方向はN-66°-W、N-24°-Eである。断面形はやや西に寄った舟底状をなす。(第22図)
- SD304** 幅1.9m、深さ0.1mを測り、調査区北をN-66°30'-E方向に走る。ほぼSD308に平行する。セクションはSD301・302と類似する。
- SK301** 調査区ほぼ中央に位置する。深さ0.4mを測り、2×2mの隅丸方形を呈し断面は逆台形をなす。(第22図)



(2) III期2段階の遺構

S D 311 幅3.1m、深さ0.5mを測り、調査区北東隅をN-66°-Wに走る。断面は北に偏った緩やかな舟底状を呈する。帯水、または常時流水していた痕跡は見られない。(第24図)

S D 313 幅3.5m、深さ0.5mを測る。調査区東をN-24°-Eに走り調査区外でS D 311と直交すると思われる。断面は緩やかな舟底状をなす。土層はS D 311と同様な状態をなす。(第24図)

(3) III期の3段階の遺構

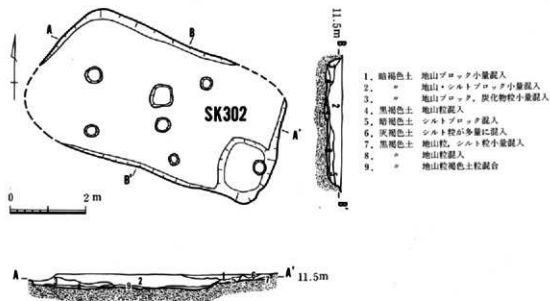
S D 303・305～307・312 これらの溝は調査区の南に集中してみられる。幅3.1～1.6m、深さ0.9～1.2mを測る。断面形は箱葉研究状をなし、セクションの上層は地山ブロックが流入している。地山ブロックが流入した方向は、全て溝が走る内側にあたり、前記したように溝の内側に土塁が存在していた可能性が高い。溝の方向はS D 306・303がほぼ東西に走りS D 305・307・312がそれに直交する。(第24図)

S D 310 幅1.5m、深さ0.5mを測る。調査区の北を南北方向にS D 305・307・312と平行に走る。断面は舟底状を呈する。(第24図)

S K 302 共にやや形の崩れた、3.5×6.5mの方形をなす深さ0.4mの浅い堅穴状の土坑である。S K 302では土坑内にビットが検出されているが、いずれも浅く不規則に並ぶ。この土坑の性格は不明である。(第23図)

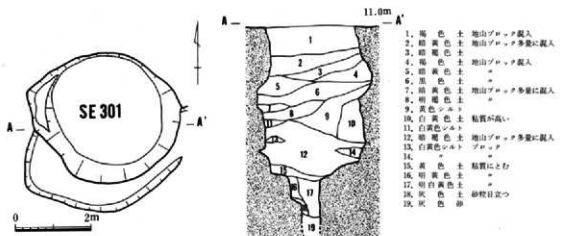
S E 301 径3.5mの円形をなす。地山が軟弱のため壁面の崩落が著しい。下層では掘屑が径1mほどになる。検出面から約5m(T. P5.8m)まで掘り下げたが内部構造物は確認出来なかった。下層の掘屑の規模から内部構造物は桶等の筒状のものが考えられる。(第24図)

(佐藤公保)



第23図 III期の遺構(2)

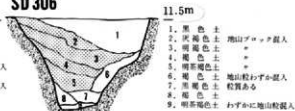
SK302



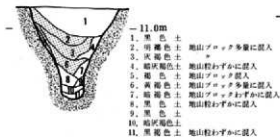
SD 305



SD 306



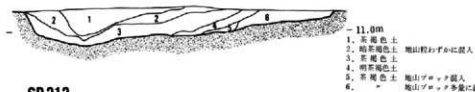
SD 307



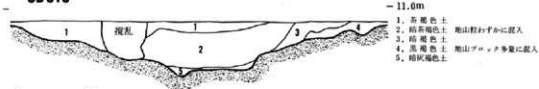
SD 310



SD 311



SD 313



0 1m

5. IV期の遺構

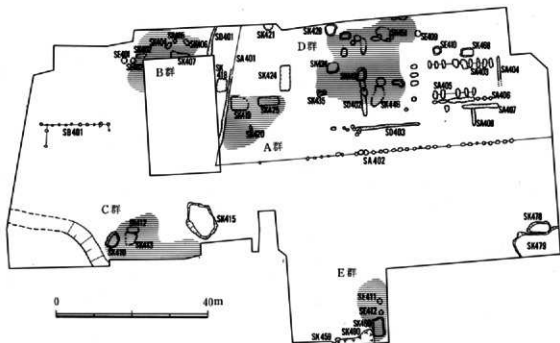
概要

遺構はおおよそ西の土居に沿った地区、調査区北側の中央から東にかけての地区、調査区南側の中央の地区の三か所に集中して見られる。各地区とも上層に明治7年(1874)の陸軍鎮台の三の丸駐屯に際しての整地層が見られる他は大規模な整地を受けた痕跡はない。

調査区北側の中央から東にかけて集中する遺構群は西を布掘の溝に、南をビット列に区画される。また布掘の溝に平行してさらに、西にもう一本の溝が断続的に見られ、この溝は西の土居沿いに集中する遺構群を区画している。溝、ビット列には上部構築物として塀が考えられ、屋敷地と考えられる遺構が集中する地区を区画し、区画外は道または広場に想定できる。

屋敷地に該当する地区は土坑等の遺構が集中するものの、明確な建物配置は確認できなかった。『名古屋市史』収録の名古屋城三の丸内の野崎一學邸を見るとかなりの密度で建物が存在する。道に面した側には「物置」「馬屋」等、屋敷地中央には「茶ノ間」「厨房」等の生活の場があり、これら以外の場は庭となっており、庭の隅には土蔵が見られる。この資料は、おおよそ三の丸内の屋敷地における建物配置を示していると考えられる。また三の丸内の屋敷地^四は藩からの拝領地であることを考えると、建物の建替え、移築等による建物配置の変更は制限されていると思われ、土坑等の遺構が集中している箇所は、建物が存在しない庭等の空間地、それ以外の遺構の密度が低い箇所は建物等の構築物が存在した可能性が高い。

調査区南側の中央の地区では井戸、土坑が集中し何らかの生活空間を想定できる。建物跡は検出し得ていないが、御園門の付近であること、絵図の中に当所に当たる箇所に番屋の記述があるものがあ



第25図 主要遺構の配置 (IV期)

ることから番屋に伴う遺構である可能性が高い。

調査区南西隅では土居が北側にテラス状をなして突出しており、セクションからIV期に伴うものであることが判明した。テラス上からは構築物の痕跡は検出されていない。

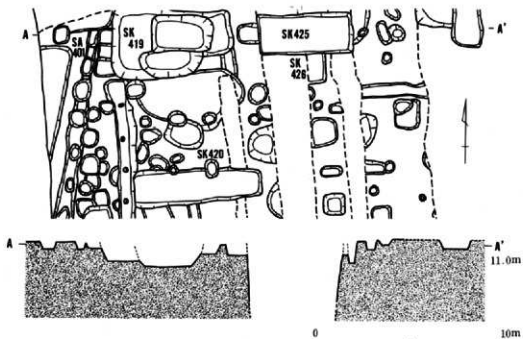
(1) 廃棄土坑

集中している遺構のほとんどは土坑であり、土坑からは多量の陶磁器に混じり炭化物、焼土、貝殻、骨等も見られることが多く、廃棄用の土坑として機能していたと考えられる。それらは純然に廃棄を目的として開削されたものと、井戸、地下室等として機能していたものが使用されなくなり廃棄用に転用されたものとの二つに区分される。前者はやや形の崩れた方形または不定形をなし規模は長辺が2~3m、短辺が2mほどで深さは0.8~1mのものが多い。後者の中で地下室は方形を呈し規模は長辺が3~6.5m、短辺が1~3m、深さは2~3mを測るものも多く、前者に比べ大きくかつ深い。本稿では前者を廃棄土坑、後者を本来の機能目的、井戸・地下室等の名称で呼称する。

廃棄土坑はセクションから二つに分かれる。一つは上層に少量の遺物しかみられず、地山ブロックが多量に混入する黒色土が堆積し、下層に遺物、炭化物等を多量に含む土層が堆積するセクションを呈する。もう一つは瓦等の遺物で全層が占められるものである。前者は一般の廃棄行為の結果を表すものであり、廃棄土坑のほとんどがこれである。また、後者は建て替え、取り壊し、瓦の葺き替えによる廃棄行為の結果、掘削されたと考えることができる。(図版17-3・4)

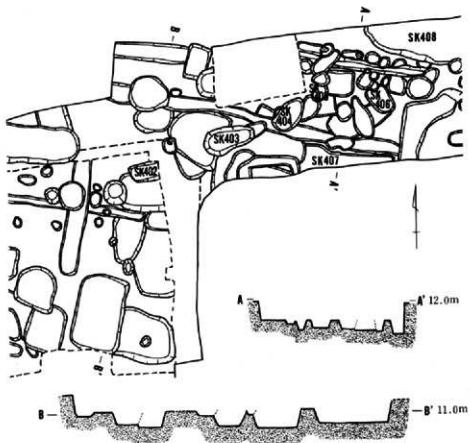
廃棄土坑が調査区内で集中する箇所はA~Eの五カ所見られる。

廃棄土坑A群 調査区中央のSA401の周辺に見られる。ほとんどが方形である。SA401の西の道にあたる箇所にある土坑SK418等はその長軸がSA401と平行し、東の屋敷地内にある土坑SK419・496等は短軸が真北を指す。出土遺物から見ると、SA401の西にある土坑は全

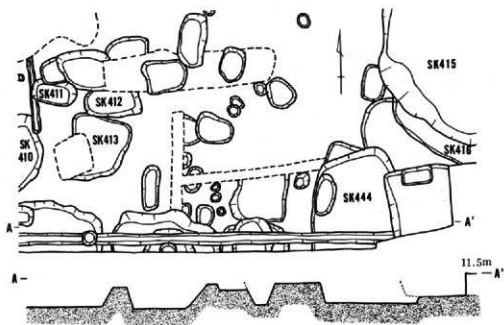


第26図 IV期の遺構(1)

廃棄土坑A群

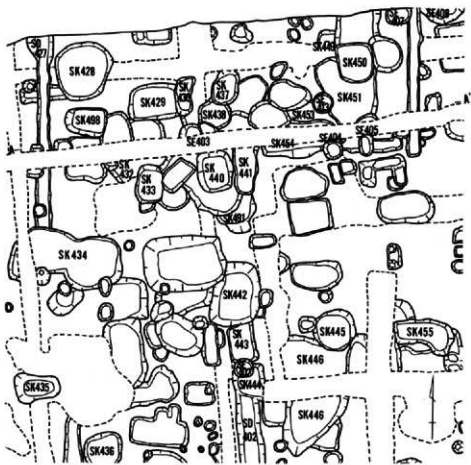


廃棄土坑B群

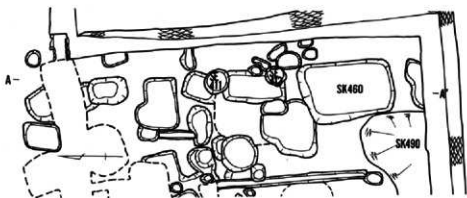


廃棄土坑C群





鹿棄土坑D群



鹿棄土坑E群

0 10m

第28図 IV期の遺構(3)

鹿棄土坑D・E群

て19世紀中葉の時期のものであり、東にある土坑は17世紀中葉～19世紀中葉までの各時期のものが見られる。このことからSA401の西にある土坑は三の丸廃絶に伴うもの、東にあるものは屋敷内の廃業に伴うものと考えられる。(第26図)

廃業土坑B群 調査区北端の西に集中する。土坑群の中で北にあるものはSK403～406等の様に長辺1～2m短辺1mと規模が小さく、不定形のものが多い。それに対し南にあるものは長辺2～4m、短辺2mと規模が大きく、方形を呈し、長軸の方向もSA401、SD401に平行する。出土遺物から17世紀中葉～19世紀中葉までの時期が考えられる。(第27図)

廃業土坑C群 調査区南端の西に集中する。SK410等の様に不定形のもの、SK412等の様に方形を呈するものがある。前者は長軸の方向は一定しないが、後者はSA401、SD401と同一方向を示す。規模は長辺2～3m、短辺1～2mを測るものが多い。中には土居の下に潜り込むものも見られ、現存の土居の年代を知る手掛りとなる。出土遺物から17世紀前葉～19世紀中葉までの時期が考えられる。(第27図)

廃業土坑D群 調査区北側の中央に集中し、その広がりはおおよそ方形にまどまり、土坑同士の切り合いが著しい。形状はSK446・451等の様な不定形、またはSK426・433等の様な方形を呈するものが多い。土坑の長軸の方向は、方形のものは南北または東西を向くが、不定形のものには規則性は見受けられない。規模は長辺2～4m短辺1～3mを測る。SK498は瓦のみを包含しており、葺き替え、建て替え等による廃業用の土坑と思われる。出土遺物から17世紀中葉～19世紀中葉までの時期のものが多い。(第28図)

廃業土坑E群 調査区南側の中央に集中する。南の土居の西の石垣跡に広がる。形状はSK460等の様に方形を呈するものが多く、方向は南北を指すものが多い。規模は長辺2～5m、短辺1.5～3mを測る。出土遺物から18世紀～19世紀中葉の時期のものが多い。(第28図)

(2) 地下室

地下室と考えられる土坑は3基確認できた。方形のものも多く規模は長辺3～6.5m、短辺1～3m、深さ2～3mを測る。壁に板材をはめ込んだ痕跡、天井が崩落した痕跡はみられない。SK468の様に床面に柱穴を持つものもみられることから、天井として板材等を用いた地下室が想定される。江戸でみられる様な地山を掘り残して、天井・階段・スロープを作る地下室はみられない³⁾。

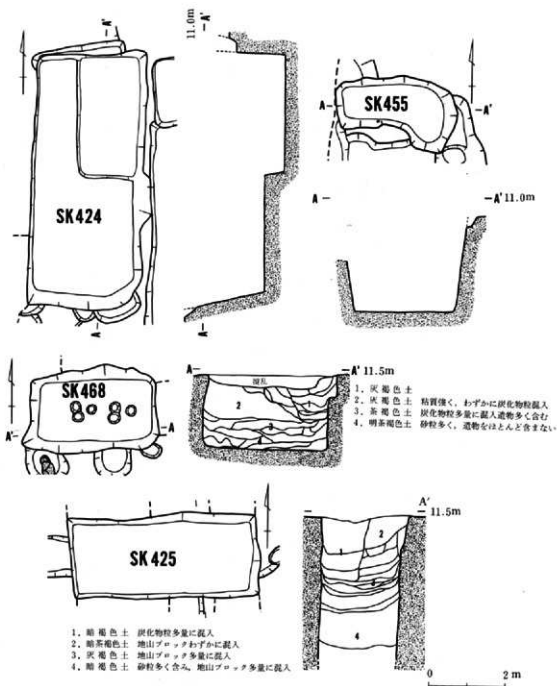
SK424 長辺6.7m、短辺2.9m、深さ2mを測り、方形をなす。長軸の方向は南北をさし、壁面はほぼ垂直。北東隅に長辺3m、短辺1.5m、深さ0.3mを測る方形の落ち込みがあり、この中からは瓦片が少量に出土した。時期は出土遺物から19世紀中葉である。(第29図)

SK455 長辺3.2m、短辺1.4m、深さ2.5mを測り、鉤の手状をなす。長軸は東西方向である。時期は出土遺物から17世紀後葉である。(第29図)

SK468 長辺3.3m、短辺2.3m、深さ2.3mを測り、方形をなす。長軸は東西方向を指す。一部覆乱を受ける。床面には径0.3mの三箇一組の柱穴がある。この柱穴の中には丸太材が残存していた。時期は出土遺物から17世紀中葉である。(第29図)

(3) 性格不明の土坑

SK 425 廃棄土坑A群の中にあり、規模は長辺5m、短辺2.2mを測り、深さは4mまで確認し得た。形状は方形であり、長軸は東西方向を指す。一部19世紀中葉の土坑による削平を受ける。壁面はほぼ垂直で埋土は地山ブロックを多量に混入する斑土が主であり、一挙に埋められたと考えられる。下層の土は粘土質であり帯水状態を呈する。平面形、規模は後記する井戸の様相とはかなり異なる。(第29図)



第29図 IV期の遺構(4)

SK424・425・455・468

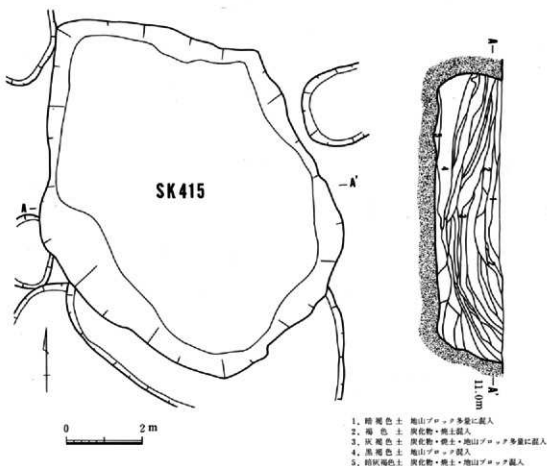
(4) 大型土坑

ここで大型土坑としたものは廃棄土坑、地下室と比べ規模が大きく、埋土のほとんどが地山ブロックの斑土からなり、形状は不定形になるものである。これらの土坑は名古屋城三の丸内の道及び広場と考えられる場所に掘削され、出土遺物から時期は17世紀前葉と考えられる。土坑の位置、時期から名古屋城の造営に伴い掘られたと想定されるが、性格は不明である。

SK 415 南の土居際に位置し、長辺9m、短辺7.5m、深さ2mを測る。埋土中からは地山ブロックの斑土に混ざり多量の陶器片と共に瓦片もかなり出土している。また瓦片の中には金箔瓦も見受けられた。(第30図)

SK 478 調査区の南東隅の南の土居際に位置する。長辺6.5m、短辺3m、深さ1mを測る。SK 479に切られるが、セクションから見ると時間差はほとんどない。出土遺物はごく少量である。(第31図)

SK 479 調査区の南東隅の土居際に位置する。土坑の南と東は調査区外に延びるため、全貌は不明であるが調査区内の規模で長辺12.3m、短辺7.1m、深さ2.2mを測る。床面はかなり起伏が激しく土坑の南東隅には調査区内で長辺4.2m、短辺2m、深さ0.8mを測る方形の落ち込みがみられる。遺物は多量に出土した。(第31図)



第30図 IV期の遺構(5)

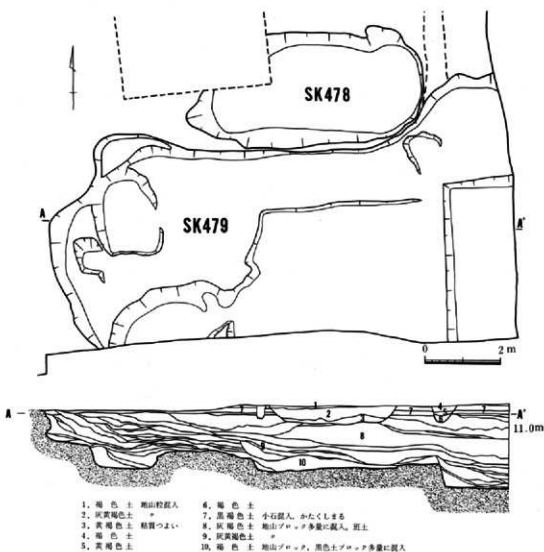
SK415

(5) 井戸

当調査区で検出した井戸は18基である。井戸は調査区の北側西寄り、北側中央、南側中央に集中する傾向があり、廃棄土坑群とはほぼ位置を同じくする。形状は円形をなし規模は径1~1.5mを測るものが多い。内部構造物は井戸の残つかを遺構検出面から5m(T.P 6m)まで深掘りを行ったが、確認できていない⁽⁴⁾。屋敷内における井戸の位置であるが、前記の野崎一學邸の場合には建物の内庭と厨房近くの庭に井戸があり、いずれも屋外に設けられている。廃棄土坑群とはほぼ同じ位置に集中することを考えると庭等の空間に所在していたことを示している。

SE 404 廃棄土坑D群の中のはほぼ中央に位置する。円形をなし、径1mを測る。時期は出土遺物から17世紀後葉が考えられる。(第28図)

SE 406 廃棄土坑D群の中のやや南に位置する。円形をなし、径1mを測る。壁面は上層はほぼ垂直であるが下層は崩落が著しく埋土に壁面の地山の土が混入する。時期は出土遺物から



第31図 IV期の遺構(6)

SK479・478

19世紀中葉が考えられる。(第32図)

SE 410 廃棄土坑D群からやや東に離れて位置する。やや形の崩れた方形をなし、長辺2.3m、短辺2.1mを測り、他の井戸に比べ大きい。SE 406同様下層の壁面の崩落が著しい。出土遺物から時期は17世紀中葉と考えられる。(第28図)

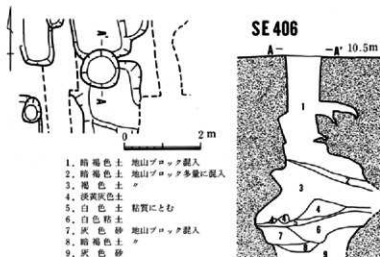
(6) 掘立柱建物

前記したように三の丸内の屋敷内にはかなりの密度で建物が建っていることが絵図から想定できるが、調査区内で検出できた掘立柱建物は1棟(SB01)のみである。このことから三の丸の建物は基本的に礎石建物であり、礎石は三の丸廃絶に伴う整地により排除されたと想定される。

SB 401 西の土居際に位置する。建物の南は攪乱を受ける。方向はこの地区の他の遺構が西の土居に平行する方向をとるのに対し、この建物は主軸が東西方向を指す。確認できたものでおよそ1.8m間隔で東西方向に10間、南北方向に3間である。東西方向の柱列は西の一間分が庇状に飛び出るが、それに対応する南北方向の柱列はない。柱穴は一辺0.5mの方形で深さ0.5mを測る。中には根石を伴うものもある。周辺に柱穴は存在するが、建て替えは認められない。時期は柱穴に伴う遺物が少なく特定できない。(第33図)

(7) 塀・柵列

上部構造物として塀・柵列が考えられるものには、柱穴が並ぶものと溝の中に柱穴が並ぶ布掘とがある。柱列としてはSA 402・403・405・406があり、布掘としてはSA 401・404・406～408がある。前記したようにSA 401・402は柱穴一つ一つの規模が大きいことをから、柱列の北または東に展開する遺構群を区画する塀の基礎になると考えられる。SA 404・406～408はSA 401・402と比較すると柱穴の規模が小さく柱列としての長さも短い。前記した野崎一學邸を見ると庭の各所に「カコイ」と記した仕切りが見られる。このことから、これらの遺構は野崎一學邸にある「カコイ」に相当すると思われ、板塀の様な上部構造物が考えられる⁶⁾。他の柵列と異なりSA 403・405は長辺2m、短辺1mの方形の土坑が長軸方向を南北に向け東西方向に並び、塀・柵とは異なる上部構造物が考えられる。SA 403～408は



第32図 IV期の遺構(7)

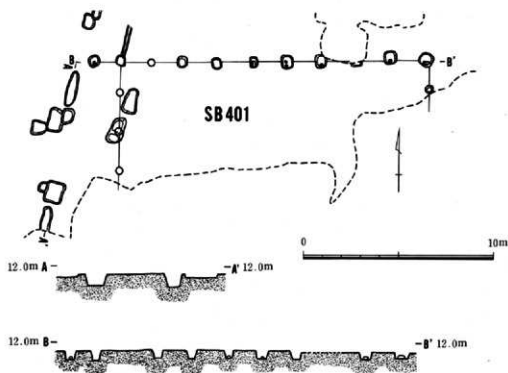
SE406

調査区北西に集中し、周囲には廃棄土坑が少なく建物周囲に展開する可能性が高い。いずれの柱穴・土坑も出土遺物が少なく時期は特定できない。

- SA401 調査区北側の中央をN-26°-Eの方向に走る。布掘で幅1m、深さ0.5mの溝に一边1m、深さ0.3mの方形の柱穴を伴う。柱穴は9カ所確認でき、うち2カ所では礎石が残存している。(第26図)
- SA402 調査区中央を東西方向に走る。柱穴は29カ所確認でき、一边1mの方形で深さ0.8~1mを測る。柱穴間は1.8~2.0mを測る。
- SA403・SA405 調査区北西に位置する。南北方向に長い方形で長辺2m、短辺1m、深さ0.6~0.8mを測る。東西方向へSA402は9カ所、SA405は6カ所確認でき、土坑間の距離は1.8~2mを測る。SA402とSA405の土坑は互いに千鳥に位置する。(第34図)
- SA404・406~408 調査区北西に位置し、南北または東西方向に走る。布掘または部分的に布掘になっており、溝の幅は0.7~1m、深さ0.9~1mを測る。礎石を伴うものが多く礎石間の距離は2mを測るものがほとんどである。(第34図)

(8) 甕を伴う土坑

調査区内で甕を伴う土坑は11カ所確認できた。これらの土坑でSK480~483・481~489は調査区のほぼ中央に位置し、SA401の北側に集中する。土坑内の甕の在り方とその数は口縁を上に向けた状態で体部下部と底部のみが残存しているものが9カ所、口縁を下に向けた状態で口縁から体部の上部のみが残存しているものが2カ所ある。前者の甕の内面には白黄色の付着物が厚くこびりつくものが多く、便所の糞便を溜める甕と推えられる。後者の甕は前者と近接しており、内面には前記した付着物はみ



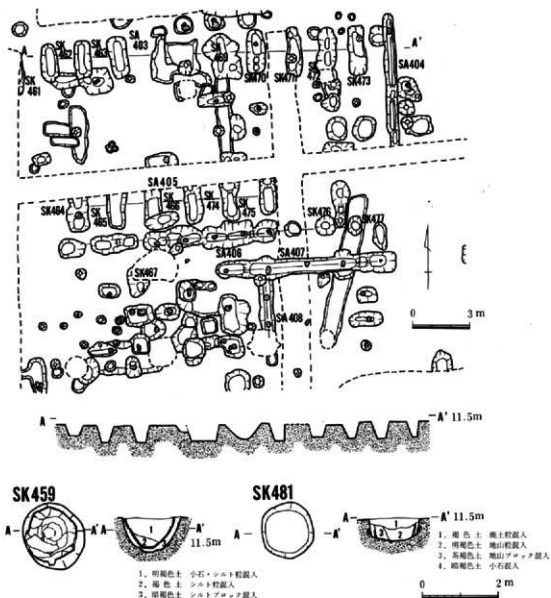
第33図 IV期の遺構(8)

SB401

られなく、汚水等を一時蓄え、地面に吸収させるための汚水処理用の施設の一部であると考えられる⁷⁾。

SK 459 調査区南側の中央に位置し、SK 490を切る。形状は楕円形をなし、長径1.8m、短径1.6m、深さ0.9mを測る。土坑の中には体部下位を残した常滑の甕が口縁部を上にして置かれる。(第34図)

SK 481 調査区中央の甕を伴う土坑が集中する箇所に位置する。やや形の崩れた五角形をなし、長軸1.5m、短軸1.3m、深さ0.6mを測る。土坑内に底部が欠損した常滑の甕が口縁部を下にして置かれる。(第34図)



第34図 IV期の遺構(9)

SA403~408・SK459・481

(9) 溝

SA401を境にして西と東では溝の方向が異なる。西側の溝はSA401に平行しやや北より東に傾くN-26°-Eの方向またはそれに直交する方向に走り、東側の溝は南北または東西方向に走る。その中でSD401はSA401と平行し、この間の検出面はかなり固くしまっており、SA401と同方向の道が想定できる。また南東の土居の裾には明治以降の陸軍が駐屯していた時期の、東西に走る石組の側溝が確認され、さらにその下には幅1m、深さ2mで側溝と同方向に走る断面V字型の溝を確認したが時期は出土遺物が少なく特定できない。(第25図)

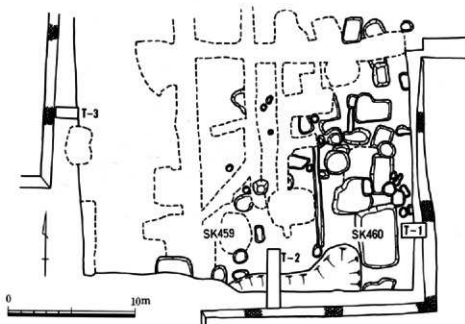
(10) 石垣

調査区内に石垣は調査区南端の中央に3カ所見られるが東側にあるものと南・西側にあるものでは石組が異なる。東側のものは石と石との間に小詰め石がほとんどみられず、整然と積まれている。それに対し南・西側の石垣は上部は東側のものと石組が同じであるが、下部は小詰め石が顕著に見られ石組は大小の石が入り乱れ、雑然と積まれている。さらにセクションを見ると東側のものは旧表土の上に基礎として直に角礫を敷き石垣を組みはじめているのに対し、南・西側のものはSK490の様な土坑を掘り、地山ブロックと黒色土の混ざった土をその中に敷き、版築状に叩きしめ、その上に角礫を敷き、石を組んでいる。南側・西側の石垣は東側に比べ、石垣の基底が深く、基底の石の中には升印の刻印のあるものが見られる。以上のことから東側にある石垣と南・西側の石垣の上部は三の丸廃絶以降構築または組み替えられた可能性が高い。

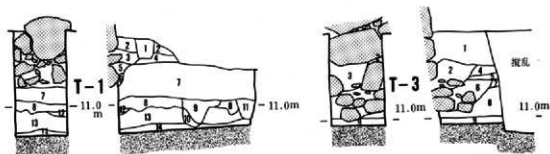
また石垣の基礎材としての胴木は確認できなかった。(第35・36図)

(11) 土居

調査区南西隅では土居が北東方向に張り出す状態を呈する。土居の上面は後世の土盛りを受け、土塁上には建物跡等の遺構は確認できなかった。セクションは地山と旧表上である黒色土の互層になっ

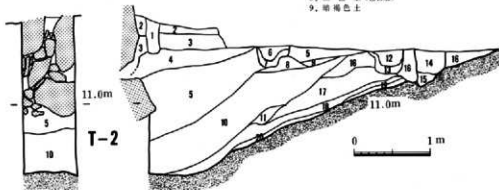


第35図 IV期の遺構00



- 1. 灰褐色土 小石多量に含む
- 2. 明茶褐色土 小石含む
- 3. 暗灰褐色土 小石・地山ブロックを含む
- 4. 黄灰色土 地山ブロック含む
- 5. 灰褐色土 小石含む
- 6. 明茶褐色土
- 7. 黒色土 包合層
- 8. 暗褐色土
- 9. 黒色土
- 10. 暗褐色土
- 11. 黒色土
- 12. 暗黒褐色土
- 13. 褐色土
- 14. 地山

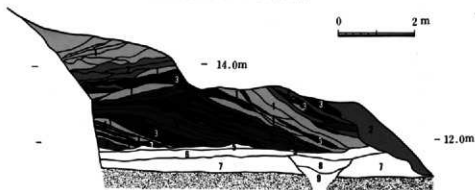
- 1. 明茶褐色土 小石混入
- 2. 黄褐色土 地山ブロック混入、固く締る
- 3. " 地山ブロック多量に混入、固く締る
- 4. 灰褐色土 地山ブロック混入
- 5. 茶褐色土 地山ブロック少量混入
- 6. 褐色土 " 固く締る
- 7. " " " 固く締る
- 8. 黒色土 (包合層)
- 9. 暗褐色土



- 1. 茶褐色土
- 2. 明茶褐色土 小石混入
- 3. " 地山ブロック、小石混入
- 4. 黄褐色土 地山ブロック、小石多量に混入
- 5. 明茶褐色土 地山ブロック多量に混入固く締る
- 6. 黄褐色土
- 7. 明茶褐色土
- 8. 灰褐色土 地山ブロック含む、固く締る

- 9. 黄褐色土 地山ブロック含む、固く締る
- 10. 灰白土 地山ブロック多量に含む、固く締る
- 11. 暗褐色土 小石含む
- 12. 茶灰色土 砂粒含む
- 13. 明茶灰色土
- 14. 黄灰色土
- 15. 明茶灰色土
- 16. 茶褐色土 地山ブロック含む、固く締る

- 17. 灰白土 地山ブロック含む固く締る
- 18. 灰白土 "
- 19. 暗茶褐色土 "
- 20. 茶褐色土 "



- 1. 黄褐色土 地山ブロック多量に含む
- 2. 灰褐色土 砂質である
- 3. 黄褐色土 地山ブロックごくわずかに含む
- 4. 暗褐色土 地山ブロック含む
- 5. 灰白土 シルト質、固く締る
- 6. 茶褐色土 地山砂含む、固く締る
- 7. 褐色土 包合層
- 8. 黒色土 地山ブロック含む
- 9. 暗褐色土 地山ブロック多量に含む

第36図 IV期の遺構①

土層

ている。またセクションからその構築法を見ると次の手順で行われている。

①：旧表の上に灰白色土、茶褐色土を敷き、叩き固め、基礎とする。→②：地山と黒色土を互層に盛り小山にする。→③：同様のことを繰り返した後小山と小山の間を地山と黒色土とを交互につめ平らにする。→④：その上に地山と黒色土を交互に盛る。

盛土からは遺物がほとんど出土していないが、土居と連なっていることから三の丸造営に伴うものと考えられる。(第36図) (佐藤公保)

註

- (1) 『金城温古録』中「那古屋古城」の項によると、「今市場」「那古屋因幡守屋敷跡」「山之殿古屋敷」等の記載が見られ、文献からも那古野城の周辺に市・居館等が散在していたことが読み取られる。
- (2) 他に絵画資料として「名古屋城郭図屏風」(名古屋城管理事務所蔵)があり、これに当調査区の該当地は土塙に囲まれた屋敷地と西と南の土居に平行する道が描かれている。
- (3) 地山である黄色シルトが乾燥すると脆くなり崩壊しやすく江戸の様に地山を掘り残して天井・階段を作ることが難しかったためと考えられる。
- (4) 井戸とは考えづらく、むしろ下層が帯水していることから、汚水を溜めることによりそれを処理する施設が想定される。
- (5) 名古屋城下町内で江戸時代と考えられる井戸の下層から井桶を検出している。このことから当調査区の井戸の内部構造も同様に桶と考えられる。
- (6) 『白金館址遺跡III -研究編-』(白金館址遺跡調査会 1989)によると同様な遺構を「長円形遺構」とし垣根を想定している。
- (7) 本センターが調査を行った三の丸遺跡名古屋第1地方合同庁舎地点では、穿孔された鉢の上に、液状で固めた水留めが検出されており、この礎の上にも同様な施設があったと考えられる。

III 遺物

1. I期の遺物

概要

I期の遺物は、弥生時代中期前半を中心とする時期（I-1期）と、弥生時代後期前半から、古墳時代前期を中心とする時期（I-2～6期）に分けられる。

弥生時代中期の出土遺物は、太頸壺、細頸壺、無頸壺、鉢、条痕系深鉢、甕、台状土製品、石製品などである。これらの出土遺物は、住居跡等の遺構ごとに比較のまとまった状態で出土している。

この資料の時期については、SB128のように従来いわれている貝田町古段階の特徴を示す資料と、それ以外の遺構とがみられる。時間的特徴を捉えやすい壺型土器では、貝田町期にみられる横帯区画による施文の多段化が大いに認められるが、第40図(34)のように、朝日期にみられる長胴で腹部の張りが発達しておらず、頸部と腹部に集中して施文しているものもみられる。従来、朝日期の特徴といわれている2枚貝調整の壺はほとんどみられず、岩滑式(型)も伴わないが、貝田町古段階の細頸壺、無頸壺にみられる櫛溝施文帯よりも幅広で、段数も少ない。以上の理由によりこの出土資料は、SB128を除いて貝田町古段階の内でも、先行する朝日期により近い一群として捉えたい。(松田 調)

この弥生時代中期の出土資料は、現在まで不明確な点が多かった朝日期から貝田町期への移行を考える上で重要であり、畿内第Ⅲ様式に併行する貝田町期の中で新たに一段階を設定できる可能性を有している。しかし、そうした時間的位置づけだけでなく、名古屋台地北西端という空間的位置づけからも、比較材料として重要なものと思われる。

弥生時代後期から古墳時代前期の遺物はその器種組成により5時期に区分できる。

I-2期 甕B、高杯Aを主要器種とする。壺は同一遺構からの出土例がないが、壺C・Dが存在したのではないかと推定。弥生時代後期前半、山中期に比定。

I-3期 甕C、高杯B、壺Dを主要器種とする。その他SB126からは鉢B・Cも出土している。弥生時代後期後半、欠山期に比定。

I-4期 甕C、高杯C、壺Eを主要器種とする。古墳時代前期前半、元屋敷期前半に比定。

I-5期 甕C、高杯Eを主要器種とする。壺は出土しておらず不明。古墳時代前期中葉、元屋敷期後半に比定。

I-6期 甕C、高杯F、壺Fを主要器種とする。古墳時代前期後半、加納編年¹⁾による松河戸期に比定。

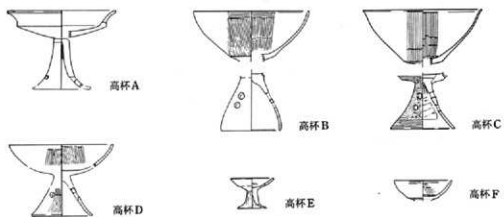
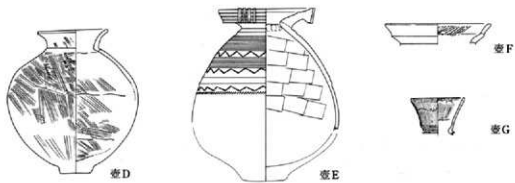
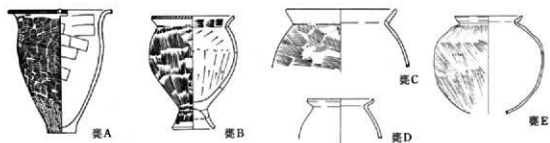
なおI-3～6期については尾張平野部で多く出土している甕Eはほとんど出土しておらず、甕Cが主要形態であるため、これらの時期については高杯の形態変化により区分している。

以上の5期区分であるが、I-2～5期の竪穴住居跡出土遺物については、若干の混入があるもののほぼまとまった形で出土している。しかし、I-5～6期の古墳については遺物の混入が著しく、時期ごとの状況を明瞭な形でつかみきれず残念である。(加藤とよ江)

主要器種

記述の複雑さを防ぐために、主要器種について以下の通り分類する。その他の器種についてはそのつど記述する。

- 甕
- A 最大径が口縁部に位置する。口唇部はきざみを有し、外面には条痕を施す。無台。底部に穿孔するものもある。
 - B 口縁部が「く」の字状に外反し、体部は球状になる。口唇部には刺突を有する。体部外面はハケを施し、内面はケズリ。台付甕。台部は外反する。
 - C 口縁部は「く」の字状に外反する。口唇部には刺突はない。体部外面にはハケを施す。内面はナデ。全容をうかがい知る資料はないが、台付甕と推定。おそらく台部は内湾するものと思われる。
 - D 口縁部は受口状に屈曲する。台付甕と推定。
 - E いわゆるS字状口縁の台付甕。その中での細分は可能であるが、出土量が少ないので一括して分類する。
- 壺
- A 細頸壺。口縁部は受口状を呈す。横方向をヘラミガキにより文様帯を区分している。体部はソロバン玉状を呈する。
 - B 太頸壺。口縁部は外反し、頸部と胴部の境が不明瞭。
 - C 広口壺。口縁部は内湾する。体部は球状を呈する。
 - D 広口壺。口縁部は外反する。口唇部はヨコナデ。体部は球状を呈する。
 - E 広口壺。口縁端部が垂下し、外面には凹線文を施し、棒状浮文ないしは円形浮文を貼り付ける。口縁内面には稜をもつ。体部は無花果形を呈す。無文部分は丹彩するものが多い。
 - F 二重口縁壺。体部は球状を呈する。
 - G 長頸壺。外面にはヘラミガキを施す。
- 高杯
- A 杯部は浅く稜を有し、上半は外反する。脚部は外反する。器厚は厚い。
 - B 杯部は深く内湾する。表面はヘラミガキを施す。脚部は内湾する。
 - C 杯部は深く内湾するが、端部が外反する。脚部は直線状に開き、端部のみ内湾する。
 - D 杯部は浅く直線状に立ち上がる。脚部は直線状に開く。
 - E 杯部は稜を有し、上半は外反する。脚部は直線状で稜をもち端部を開く。
 - F 杯部は半球状を呈する。脚部形状は不明。
- 鉢
- A 頸部をもたない。体部は浅い。
 - B 口縁部と体部との区別が不明瞭なもの。
 - C 口縁部と体部との区別が明瞭なもの。



第37图 主要器種模式图(Ⅰ期) 1:8

(1) 弥生時代中期の遺物

- SB101 (第38図-1~11) (1)は石磨丁で、形態的には半月型直線刃に属するものと思われる。細孔は刃部を研ぎ出した後に2カ所に穿孔されており、刃部を上にした面(A面)よりも、裏側(B面)の方が穿孔径がやや大きい。図の左側肩部から刃部にかけて欠損し、B面の半分以上が剝離している。全体的によく研磨されており、材質は頁岩である。(2~5)は壺である。(2)は無頸壺で、口縁部脇に2孔1対の細孔を外側から穿っている。器面は全体的に粗製で無文であり内側には接合痕を残す。(3)は器面に細かい櫛描直線で横区画文を描いた後、ヘラ描きの平行沈線によって横帯構成を成し、この櫛描文帯間はヘラミガキ部分が分割している。器形は胴部下位に最大径があるものである。(4)は頸部にわずかに第一次調整として縦位の刷毛目調整を残し、頸胴部界にはヘラ描沈線帯が施されている。この沈線帯はヘラミガキが施され、頸部及び胴部の櫛描直線文を分割している。胴部の櫛描直線文にはこれを施文した後、縦位に半截管状工具を3本用いて弧文を描き、この間に波状文を縦位に施している。口縁端部には刻目を持つ。(5)は外側頸部以下に横方向に貝殻腹縁による条痕を施した後、半截管状工具により連弧文を施したものである。(6・7・9・10)は条痕調整による壺である。型態的に、(7)は器高が口径を上回り(9)は両者がほぼ等しく(11)は口径が器高を上回るという特徴が認められる。(11)を除いては下部から上部に単斜方向に条痕が施されている。(6)の口縁部内側には貝殻腹縁による刺突文がめぐらされている。(7・9)の口縁部は、刻目を有する。(7・9・10)の口縁部には、指つまみによる突起が4カ所配されている。(8)は第一次調整後、器面を外側から口縁部内側にかけて丁寧にナゲつけられた壺である。(11)は条痕系の深鉢で横位羽状条痕が施され、口縁部内側には貝殻による押しが行われている。
- SB110 (第39図-12~15) 無頸壺(12・13)は外側下部に、わずかに第一次調整の細かいハケメが認められる。器面は、細かい櫛描波状文・櫛描直線文を平行沈線が区画し、櫛描以外の部分は丁寧にヘラミガキされている。(12)には弧文、(13)には直線文がそれぞれ櫛描直線文帯に縦位に施されている。(13)の口縁部には、2孔1対の細孔が穿たれている。(14)は底部から浅く開き、口縁部がわずかに内湾する条痕調整の鉢である。条痕は単斜方向に施された後、横方向に口縁部脇まで施されている。(15)は胴部中央に最大径を持つ壺である。条痕は下部が横方向に、最大径付近と括れ部付近を交換点に横位羽状に施され、最大径部分に波状文が貝殻腹縁により描かれている。
- SK102 (第39図-16~19) いずれも条痕調整の壺である。(18)を除いては、単斜方向に条痕が施されている。(18)は下部から縦方向に条痕を施した後、胴部中央と口縁部外側に横方向に条痕を施す。(17・18)の口縁部内側には、貝殻腹縁による刺突が施されている。(17・18)は底部が穿孔されている。
- SB102 (第39図-21) 壺Aの胴部に当たるものと思われる。器面全体に左下がりの縄文を施し、ヘラ描きの平行沈線によって横帯構成を成した後、ヘラ磨きを施して分割している。
- SK101 (第39図-22) 頸部から口縁部にかけて粗い条痕を施した後、口頸部界にヘラ状工具に

よる平行沈線を描き、この沈線間をナデつけた壺である。口縁部外側には指つまみによる貼付突帯を有する。口縁部内側と端部にはそれぞれ貝殻腹縁により押引、刻目が施されている。

SB124 (第40図-25~31) (25・26)は無頸壺で、いずれも上部には細かい櫛描波状文、胴部中央に弧文をもつ櫛描直線文帯を平行沈線が区画し、ヘラミガキによって2分割している。

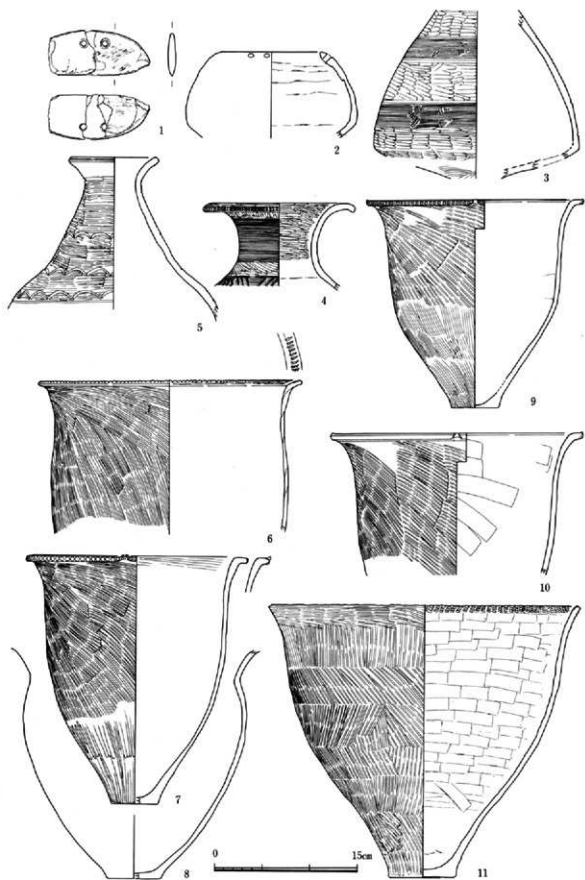
(27)の壺も、櫛描直線文帯を数帯横方向に施した後、この帯間をヘラ磨きして区画している。胴上半部に縦3点1単位の円形浮文が全体で5単位施されている。(28)~(31)は壺Aで、(28・30)は外側口縁部に刺突が施され、(30)は棒状浮文を縦に1単位1本、全体で4単位施している。(31)を除いて櫛描文帯上に縦列に弧文が施されている。(31)は櫛描の原体にて、縦列に直線文が施されている。

SB128 (第40図-32~35) (32・33)は壺Aである。(32)は口縁部外側に刺突が施されている。

(34)は広口壺で、頸部と腹部には細かい櫛描直線文が施されている。腹部文様帯上には縦に弧文が施されている。(25)は器壁が厚く、球状に近い胴部に特徴を持つ壺である。口縁端部には刻目が認められ、口縁部内側には押引が施されている。胴部は粗いハケメを施した後、ヘラミガキが行われているが完全ではない。

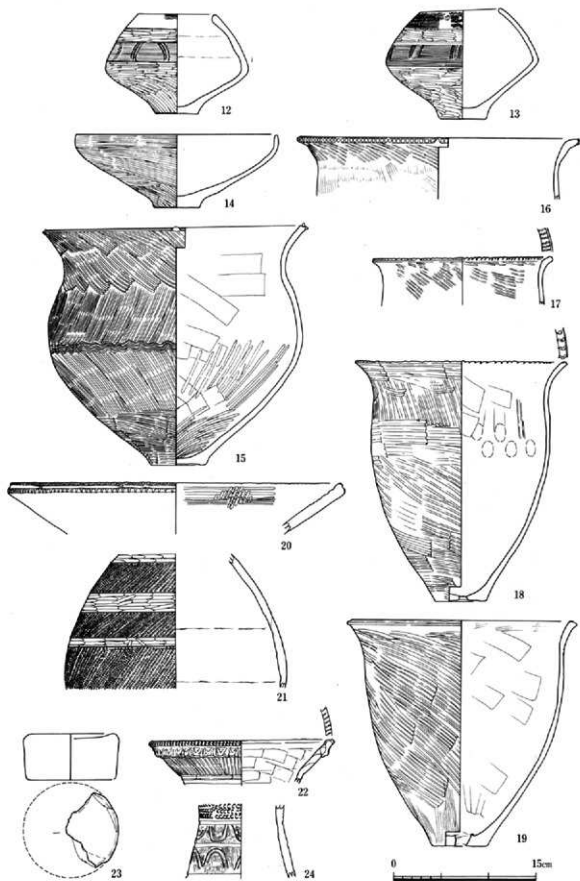
SB113 (第41図-40~46) (40)は無頸壺で、器面は下部から単斜方向にヘラミガキが施された後、上部のみ横方向に磨かれている。(41)は台状土製品で、下面はヘラによって磨かれている。

(42)は広口壺で、口縁部内面に瘤状突起が、2点1単位で全体に4単位貼りつけられている。(43)は鉢形土器かと思われるが、器種は不明である。口縁端部には刻目が施され、指つまみによる突起を持つ。上部の斜格文は、沈線によって区画している。この区画帯以下にはヘラミガキが施され、貝殻腹縁による刻目を有する貼付凸帯が3条施されている。(44)は受口状口縁の壺で、口縁端面には貝殻腹縁による押引が施されている。器面は条痕が施され、受口状口縁外面は縦に刻線文が施されている。(46)は壺Aで、頸部櫛描文帯上と外側口縁下部には貝殻腹縁による刺突が施され、口縁部外側は櫛描波状文が施されている。(45)は条痕調整の壺で、横方向に近い条痕が施された後、下部のみヘラミガキが施されている。口縁端部は刻目を有し、指つまみによる突起が4カ所施されている。(47)は器面が丁寧なヘラミガキされた壺である。(48)は大型の壺と思われ、棒状工具による平行沈線の区画間に斜格文、斜行文が施され、肩部には連弧文が施されている。(松田 訓)



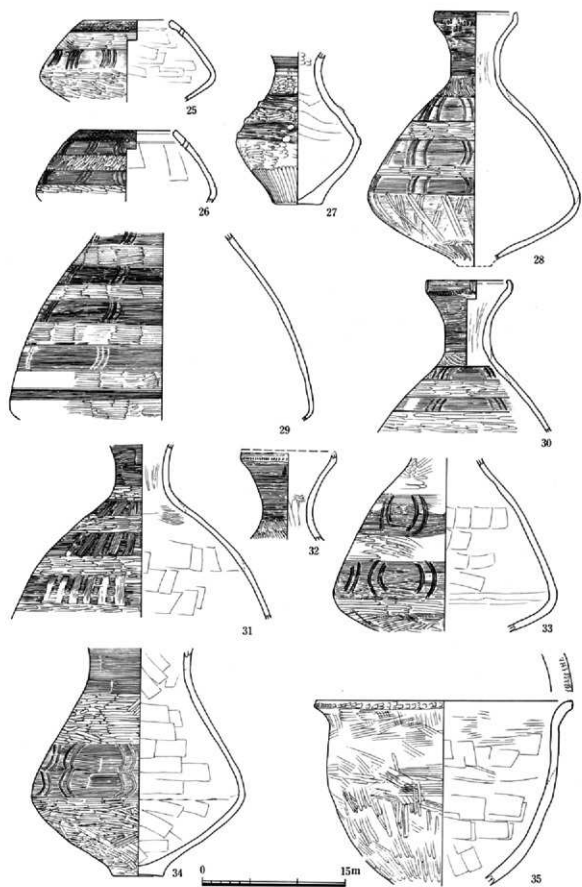
第38図 I期の遺物(1)

SB101



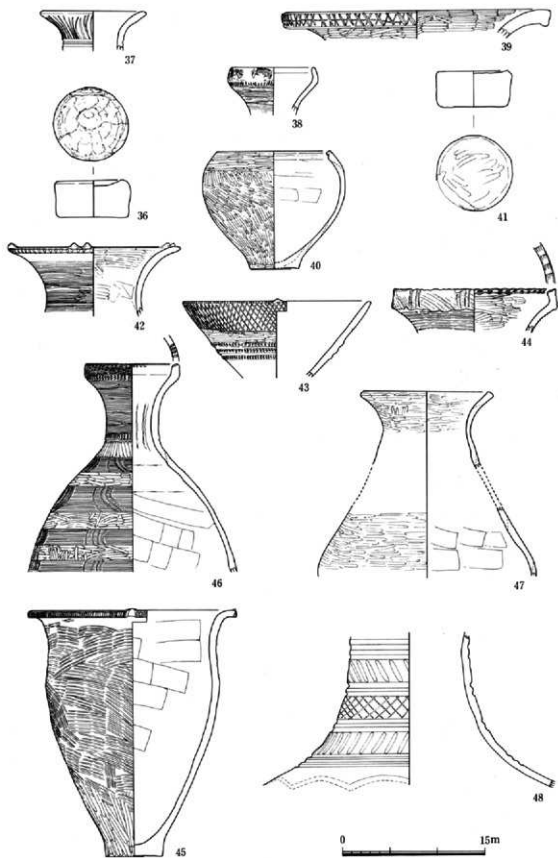
第39図 I期の遺物(2)

SB110-104-128・SK04



第40図 I期の遺物(3)

SB124-128



第41図 I期の遺物(4)

第三層・SB113-108

(2) 弥生時代後期～古墳時代前期の遺物

- S B 130 (第42図-49) 壺Aが出土。体部下半は欠損。外面はハケを施す。I-2期に比定。
- S B 108 (第42図-50～52) (50)は鉢と考えられる。外面はヘラミガキ。(51)は壺底部。外面ハケ、内面指ナデあげ。(52)は甕B。甕の中では全容を知る唯一の資料である。外面は下から上への細かいハケ。内面はケズリ。I-2期に比定。
- S B 109 (第42図-53～56) (53)は甕B。やや大型。体部上半まで残存。(54)は高杯B。杯部上半が残存。ヨコ方向ヘラミガキのちタテ方向ヘラミガキ。(55)は高杯B脚部下半。表面は磨減する。(56)は壺底部。I-3期に比定。
- S B 102 (第42図-57) (57)は高杯C。杯部のみ残存。I-4期に比定。
- S B 127 (第42図-58～62) (58・59)は甕C。(58)は甕の口縁部。(59)は台部。(60)は壺。体部のみ残存。長頸壺の類と推察できる。球状の体部。外面ヘラミガキ。(61・62)は高杯B。(61)は杯部、(62)は脚部下半。I-3期に比定。
- S B 126 (第43図-63～78) (63)は甕C。口縁部が残存。(64～66)は鉢。(64)は鉢C。口唇部はていねいにナデている。表面は磨減する。(65・66)は鉢B。ともに体部を欠損する。(66)は外面にタテ方向のハケを施す。(67～70)は台付甕の台部。甕Cの台部か。(71・72)はミニチュア土器。手捏ねで作る。(73・74)は壺。(73)は体部中位以下残存。(74)は底部外面がドーナツ状を呈する。(75・77・78)は高杯B脚部。3点ともに焼成前に3カ所穿孔する。(76)は台付壺の台部と推定。外面にはヘラミガキを施す。(63～78)まで全てI-3期に比定。
- S B 116 (第43図-79～89) (79・80)は壺Eの類と推定。(79)は口縁部は櫛による刺突のち竹管状工具により刺突を施す。口縁内面にも櫛による刺突を施す。(80)は口縁部に円形浮文がつく。口縁内面は櫛による刺突を施す。(81～84)は高杯。(81)は高杯B杯部。(82)は高杯D杯部。(83)は高杯B。(84)は高杯D脚部。ともに焼成前に3カ所穿孔する。(85)は台付壺の台部。(86～89)は甕。(87)は甕D。体部中位まで残存。(86・88・89)は台付甕台部。(86)は台部のみ。(88・89)は体部下半以下が残存。この住居跡の出土遺物は、他の遺構の出土品と異なり胎土は小石を多く含み粗く、また表面の磨減が著しく調整不明のものが多い。I-4期に比定。
- S B 118 (第44図-90～100) (90～93)は甕。(90・92)は甕C。(92)は小型品である。(91)は甕D。口縁部外面には櫛による刺突を施す。(93)は台付甕の台部。(94・95)は壺。(94)は口縁部は垂下していないが壺Dの類と推定。口縁部のみ残存。丹彩を施す。(95)は壺体部。体部中央部が甕。口縁部は欠損するが長頸壺の類と推定。(96～100)は高杯。(96・99・100)は高杯B。(96)は高杯Bの杯部。(99・100)は高杯Bの脚部。接地部分は強くナデている。ともに焼成前に3カ所穿孔する。(98)は高杯Dの脚部。焼成前に3カ所穿孔する。(99)はI-4期に比定できるがその他はI-3期に比定。
- S B 114 (第44図-101～109) (101)は壺Cの口縁部。(102・103)は壺Dの口縁部。どちらも内面にハケを施す。(104)は壺E。体部下半を欠損する。口縁部外面には櫛状浮文を3カ所

に貼り付ける。内面は稜を有し、上半部には羽状文を施す。体部には凹線文と山形文を交互に施し、その下に列点文を施す。無文部分には丹彩を施す。(105・106)は台付甕の台部。(107～109)は高杯の脚部。(107・108)は脚部上半。ともに焼成前に3カ所穿孔する。(109)は脚部下半。高杯Cと推定。I-4期に比定。

S B 117 (第45図-110・111) (110・111)ともに壺。(110)は体部下半を欠損。内面にハケを施す。(111)は小型品、粗雑なつくりである。I-3期に比定。

S B 248 (第45図-112) 遺構それ自体はII期のものであるが、甕Bが出土。体部中位以下欠損。口唇部には刺突を施す。

S B 115 (第45図-113) (113)は台付甕の台部。内湾しており、接地部分は強くナデて面を形成している。I-3期。

S B 125 (第45図-114～117) (114・115)は壺Eの口縁部。(114)は口縁外面に凹線文を施し、棒状浮文を貼り付ける。内面は稜を有し、上半部には羽状文と竹管文を施す。(115)は口縁外面に凹線文を施し、その上に円形浮文を貼り付ける。内面には稜を有し、上半には羽状文とその下に竹管文を施す。口縁端部は未垂下。(116)はピット内より出土。高杯Bの脚部。焼成前に2個×3カ所の計6個を穿孔する。表面は磨滅。(117)は台付甕の台部。表面は磨滅。

S B 129 (第45図-118) (118)は高杯Cの脚部。焼成前に2個×3カ所を穿孔する。外面には丁寧なヘラミガキを施す。杯部もおそらく丁寧なヘラミガキを施すものと推定。I-3期に比定。

S B 121 (第45図-119・120) (119)は甕Cの口縁部。口唇部内面を強くナデて面を作っている。(120)は高杯脚部上半。焼成前に3カ所穿孔。I-4期。

S B 106 (第45図-121) (121)は器台の脚部。焼成前に3カ所穿孔。I-4期。

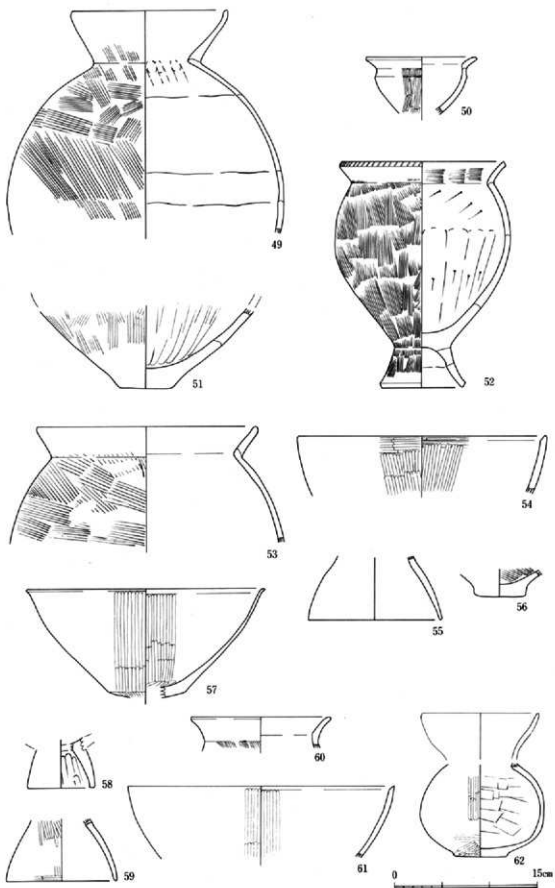
S B 112 (第45図-122・123) (122)は壺の底部。外面、内面ともにハケを施す。(123)は器台脚部。丁寧なヘラミガキを施す。I-3期。

S B 103 (第45図-124～126) (124)は甕C。体部下半以下を欠損。口縁部はナデ、体部外面にはハケを施す。(125)は高杯Dの脚部。焼成前に3カ所穿孔。表面は磨滅。(126)は高杯D。杯部と脚部は接する部分はないが、胎土の状況から同一個体と推定。杯部、脚部ともにタテ方向のヘラミガキを施す。接地部分はナデている。焼成前に3カ所穿孔。I-5期に比定。

(3) 墳丘墓出土の遺物

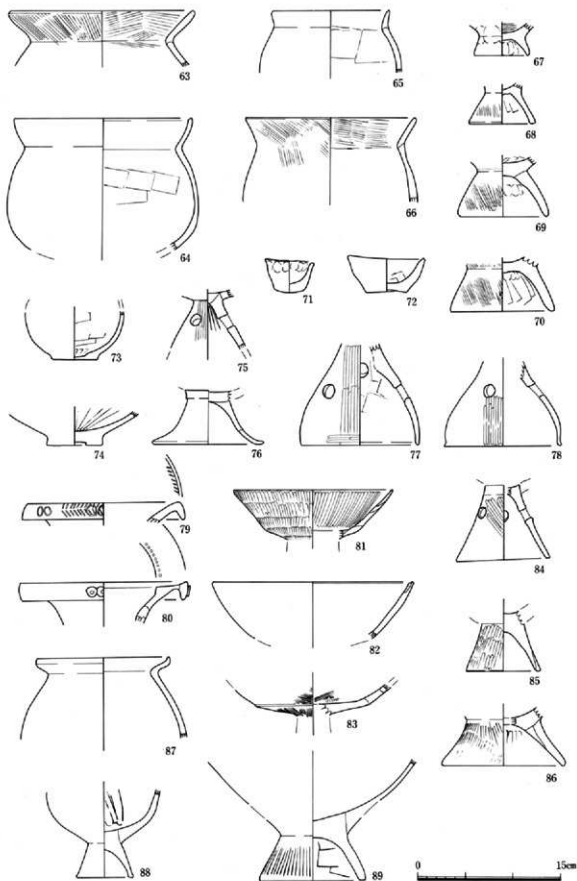
S Z 103 (第46図-128～134) (128～130)は甕Bの口縁部～体部上半である。(128・130)は口唇部に刺突を有する。(128)は内面のケズリも残存する。(131～133)は高杯A。(131)は高杯Aの杯部。外面には櫛描波状文を施す。(132・133)は胎土の状況により同一個体と推定。(132)は杯部。表面は磨滅。(133)は脚部、接地部分を欠損。焼成前に3カ所穿孔する。(134)は壺の底部。底は厚くかなり大型品であったと推定。I-2期に比定。

S Z 101 (第46図-135～149) (135・136)は甕C。(135)は外面にタタキを施す。(137)は甕E。台部欠損。赤塚分類²⁾のC類。しかし体部上位のヨコハケはなく、D類移行直前のものであ



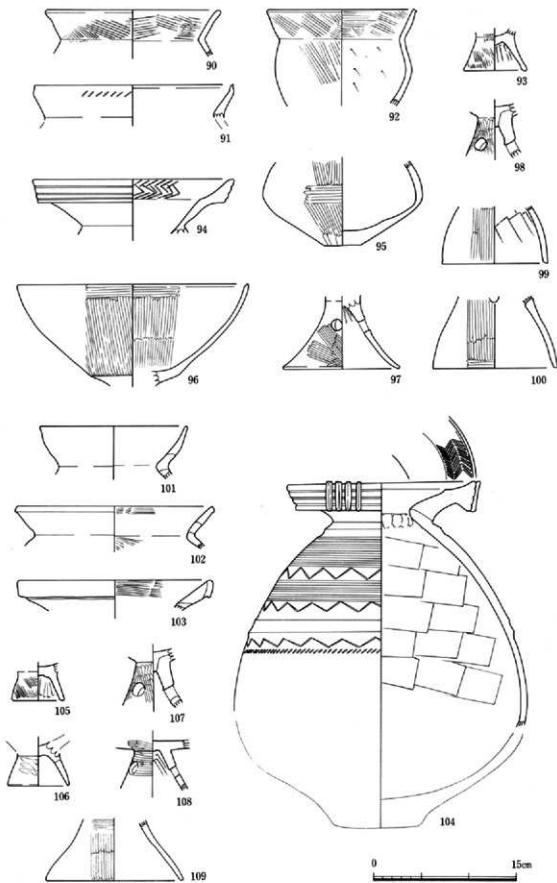
第42図 I期の遺物(5)

SB108・130・109・102・128



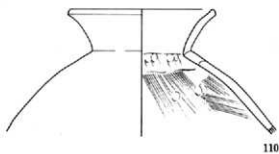
第43図 I期の遺物(6)

SB126-116

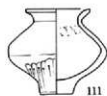


第44図 I期の遺物(7)

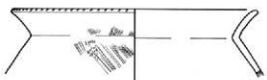
SB118-114



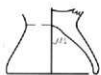
110



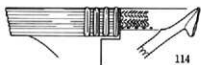
111



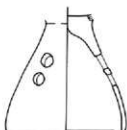
112



113



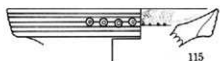
114



116



117



115



118



119



120



121



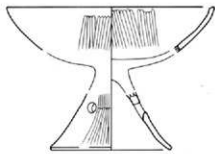
122



123



124

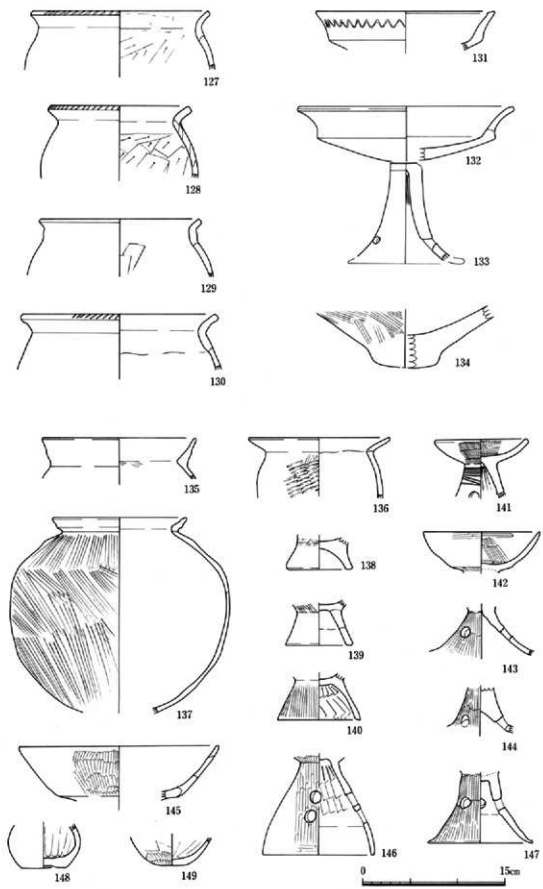


0

126

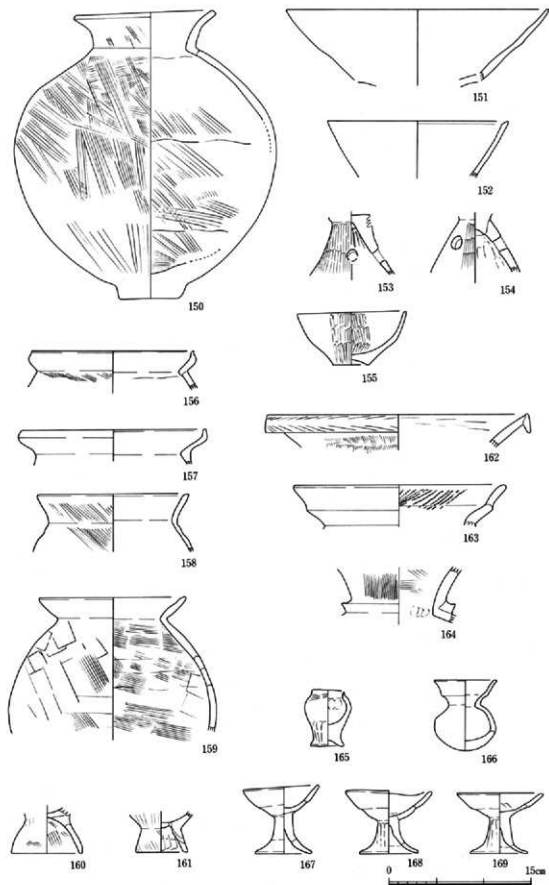
15cm

第45図 I期の遺物(8) SB117・248・115・125・129・121・109・106・112・103



第46図 1期の遺物(9)

SD101・SZ103-101

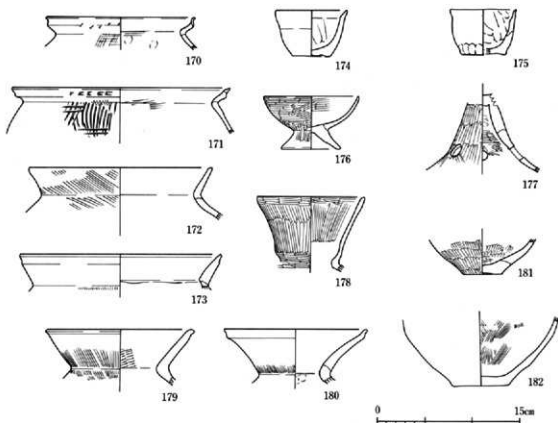


第47図 I期の遺物⑧

SZ102

ろう。又、ハケは粗い。内面はナデている。(138~140)は甕の台部。3点とも甕Cの台部と推定。(141)は器台。脚部下半を欠損。脚部上半に横線文を施す。甕成前3カ所穿孔。やや厚手の製品である。(142~147)は高杯。(142)は高杯Fの杯部。(143)は脚部上半。高杯Fの脚部か。(144・147)は高杯Dの脚部。(144)は脚部上半である。(145)は高杯Bの杯部。(146)は高杯Bの脚部。(148・149)は小型甕。ともに口縁部欠損。遺物は、I-3~5期の各時期のものを含んでいる。

S Z 102 (第47図-150~169) (150)は壺D。全体を窺い知る唯一の資料である。(151~154)は高杯。(151・152)は高杯Bの杯部。表面は磨滅する。(153・154)は脚部上半。(153)は高杯D。(154)は高杯Bと推定。(155)は鉢A。小型品。全体にミガキを施す。(156~161)は甕。(156・157)は甕Dの口縁部。(156)は甕Eの初現段階のものとして推定。(158)は甕Cの口縁部。(159)も甕C。体部上半以上が残存する。口縁部はかなり外に開く形状を示す。体部外面は板状工具によりナデておりところどころハケメが残るが、それはかなり細かく単位はつかみえない。内面は同様の工具で横方向にナデている。(160・161)は甕の台部。ともに甕Cの台部か。(162)は壺形埴輪。外面はタテハケ。屈曲部分に凸帯を貼り付ける。(163・164)は壺。(163)は口縁端部を貼り付け垂下させている。垂下部分には羽状文を施す。(164)は壺Fの口縁部。内面にのみハケ状工具により刺突を施している。(165~169)はミニチュア土器。おそらく供献用に用いられたのであろう。(165)は甕。手握れ品であ



第48図 I期の遺物(1)

第田層

る。(166)は壺F。全体を丁寧にナデている。(167~169)は高杯E。3点ともに杯部は屈曲部で粘土を貼りつけ、そのちにナデにより仕上げている。脚部は上半は板状工具により縦方向にナデている。遺物は、I-3~6期の各時期のものを含んでいる。

(4) 遺構外出土の遺物 (第48図-170~182)

(170~171)は壺Eの口縁部。ともに赤塚分類のA類。口縁部中位には刺突を施す。体部上位はタテハケのちヨコハケを施す。(172~173)は壺C。(173)は口縁端部を強くナデて凹みを有する。(174~175)はともに壺のミニチュア品。(176)は小型高杯。杯部は高杯Fに類似する。内外とも丁寧なヘラミガキを施す。(177)は高杯Cの脚部上半。(178~182)は壺。(178)は壺G。体部欠損。頸部のところがやや凹んでおり、その形状は北陸系の土器に類似する。(179~180)は壺D。ともに体部は欠損。(180)は口唇部を強くナデている。(181~182)は壺の体部下半。(182)は表面がかなり磨滅している。

(5) 埴輪 (第49図-183~185)

包含層中より3点出土した。いずれも土師質の円筒埴輪胴部の破片である。

(183)は外面はヨコハケのちタテハケを格子状に施す。内面はヨコハケ。焼成はやや甘い。(184~185)はタガを有する部位である。(184)は外面タテハケのちヨコハケ、(185)は外面ヨコハケである。ともにタガの先端は強くナデて、「M」字状を呈している。ともに焼成は良好である。3点ともに、5世紀中頃に比定できよう。(加藤とよ江)



第49図 I期の遺物

埴輪

2. II期の遺物

概要

三の丸遺跡のII期は飛鳥時代～平安時代にかけてである。当該期の主な遺構には掘立柱建物6棟、竪穴住居49軒などがある。調査区北部は大きな攪乱を受けていたが、南部は遺構・包含層の残りがよく、多数の遺物が出土した。特に竪穴住居跡や土坑からは、一括と思われる土器群もいくつか見つかり、今まではっきりとした尾張の集落遺跡の土器様相を知る上で良好な資料を提供したといえる。

II期の遺物には須恵器、土師器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦、鉄製品がある。須恵器は器種も豊富で量も全体の約80%をしめる。器種からみれば供膳形態が大半である。土師器は甕、甔のみであるが全体の約10%をしめる。灰釉陶器は碗・皿を中心に調査区東部から多く出土している。緑釉陶器は約70点余りが出土しているがほとんどが包含層中か上面遺構からである。また、緑釉陶器の素地と思われるものも見られる。瓦は調査区中央部から数点出土している。鉄製品は紡錘車、鎌、工具の刃先と思われるものが調査区南部より数点出土している。

II期は遺構のあり方から3時期に分かれる。II-1期は7世紀後半～8世紀前半である。この時期の遺構は少なく、遺物は、包含層から多く出土している。須恵器は古墳時代の蓋杯、高杯、甔などに加えて新しく登場したいわゆる「律令的土器様式」の土器群が混在する。中心となる供膳具は有台杯身で、法量にもバラエティーがある。II-2期は8世紀中葉～9世紀前半にかけてで遺構・遺物が最も多い時期である。II-1期の古い様相は一掃され、新しく碗・盤形態が出現して中心となり、灰釉陶器瓶類がかなりみられるようになる。II-3期は9世紀中葉～10世紀にかけてである。供膳形態は灰釉陶器碗・皿が中心となり須恵器は激減する。鉢や壺類もあまりみられなくなり器種は減少する。

以下、遺構毎に代表的なものを選んで説明し、それ以外のものは遺物観察表に記した。

主要器種

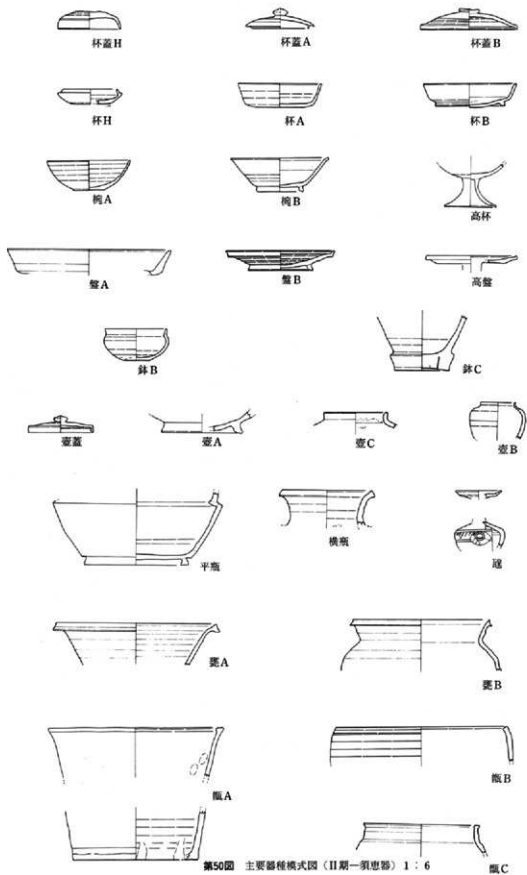
器種分類については第50・51図に示した。土師器、灰釉陶器については器種が少なく形態によって分類したが、須恵器については複雑なので区分の根拠等について述べる。須恵器は大きく区分すると杯類・鉢・壺・甔・甕に分けられる。杯類は供膳具、鉢は調理具（一部供膳具にも含まれる）、壺・甔・甕は貯蔵具である。甕は煮炊具にはいる。壺と甔の区分は頸部が小さく用途が液体容器のみと考えられるものを甔とし、それ以外のものも貯蔵できるような頸部の少し広いものを壺とする。また甕は大型のものである。杯類はさらに杯・碗・皿・盤・高杯に分類される。杯と碗の区分は全体的に深目のもので体部に丸みを持って立ち上がるものが碗と考えられるが、はっきりしないものもあるため、今回は金属碗写しと考えられるもの、および8世紀中葉の原始灰釉や糸切り技法などの新しい技術の導入によって生産された、底径が小さく体部が丸みを持つものを碗とした。皿と盤は浅身のものであるが、器壁が薄く口縁部がそのままのびるものを皿とし、体部が厚めで口縁部を折り返したり屈曲させたり、口縁部が面を造り出すものを盤とした。個々の細分については瓶類と灰釉陶器全体についてはほぼ全ての器種に従来より固有名詞が与えられており、今回の分類ではそれに従っておく。それ以外のものについてはアルファベットを付した。

須恵器

- 杯蓋 H 天井部が丸い古墳時代通有の蓋杯の蓋
A つまみを持つものでかえりを有するもの
B つまみを持つもので口縁端部を折り曲げるもの
- 杯 H 蓋受けのかえりを持つ古墳時代通有の蓋杯の身
A 無台杯身
B 杯Aに高台の付いたもの
- 椀 A 深みのある体部が丸みを持って立ち上がり、底部を回転糸切りするもの
B 椀Aに高台の付いたもの
- 高杯 深みのある体部に脚の付いたもの
- 盤 A 浅い体部に口縁部を折り曲げるもの
B 盤Aに高台の付いたもの
- 高盤 扁平な体部に細長い脚の付いたもの
- 鉢 A 尖底もしくは丸底のいわゆる鉄鉢
B 短い頸部を有するもの
C 体部がやや開きながら立ち上がるいわゆるすり鉢
- 壺 蓋 つまみを持つもので口縁端部を深く折り曲げるもの
- 壺 A 広口の短頸壺でいわゆる薬壺形のもの
B 短頸壺で体部が丸いもの
C 短頸壺で体部が長胴のもの
- 甕 体部に注口を持ついわゆる甕
- 平瓶 注口部が体部の中心いつかないいわゆる平瓶
- 横瓶 短い頸部に砲弾形の体部が付いたもの
- 甕 A 口縁部が開きながら立ち上がるもの
B 口縁部が短く直立するもの
- 甕 A 体部が直線的で牛角把手が付くもの
B 丸みのある体部に半環形の把手が付くもの
C 短い頸部に把手が付くもの

土師器

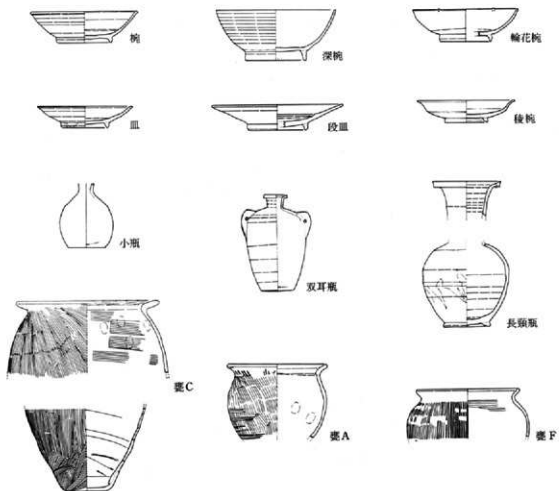
- 甕 A 体部が球形のもの
B 体部が長胴で口縁端部をつまみ上げるもの
C 体部が長胴で口縁端部がそのままのびるもの
F 丸みを持つ体部で口縁端部を内側におり曲げるもの
- 甕 体部が逆ハの字形をし把手が付いたもの



第50圖 主要器種模式圖（二期—銅器）1：6

灰釉陶器・緑釉陶器

- 碗 体部が丸みを持って立ち上がるもの
 深 碗 体部が深い碗
 輪 花 碗 輪花を付けた碗
 稜 碗 体部に稜をもつ碗
 皿 体部が浅くまっすぐのびるもの
 段 皿 体部に段が付く皿
 長 頸 瓶 口頸部が長く口縁部が開くもの
 双 耳 瓶 肩に2つの耳をもつ瓶
 小 瓶 体部が丸みを持ち口頸部が短いもの



第51図 主要器種模式図（II期—灰釉陶器・土器部）1：6

(1) 竪穴住居出土遺物

- S B 221 (第52図-1~2) 須恵器杯蓋A、杯A・B、土師器甕Cが出土している。(1)はかえりが口縁部より下に突出するもので、擬宝珠つまみがつく。天井部3分の1を回転ヘラ削り調整する。(2)は口縁部が「く」の字状に大きく折れ曲がるもので、体外面は荒いハケメ、体内面はヘラ削り調整する。口縁部内面は横のハケメ調整をする。II-1期に属する。
- S B 206 (第52図-8~24) S B 206はS B 204に切られS B 205・207を切る。出土遺物は須恵器杯蓋B、杯A・B、碗A・B、盤B、甕A、瓶A、円面硯、灰釉陶器長頸瓶、双耳瓶、土師器甕Cである。出土遺物のうち(8~10・14・15・18・24)は床面より少し上の覆土の黒色土中よりほぼ同一レベルで出土した。(8)はほぼ完形で出土した。天井部は笠形をするもので2分の1を回転ヘラ削りする。(9)は口縁端部が屈曲するものであるが、薄く白い自然釉がかかる。天井部は2分の1を回転ヘラ削りし、丁寧に調整しているが、体内面のミズビキ痕は強い。(10)は底部を回転ヘラ削りする。(17)は赤褐色の色調をした円面硯である。海の部分の周りの突帯は欠損しており、陸の部分は摩滅している。透かしは短冊形のものであると思われるが数は不明である。(18)はほぼ完形である。双耳瓶が住居跡から完形で出土することはほとんどなく稀な例である。口径は約5cm、器高は約15cmである。全体的に赤褐色を呈し、肩には光沢のある濃緑の灰釉が厚くかかる。耳にはヘラによる面取りが施され小さな円孔が開けられる。(24)は体外面を荒く長いハケメ調整するもので器壁は薄い。この住居出土遺物はII-2期に属するものと思われる。
- S B 209 (第53図-25~29) 出土遺物には須恵器杯蓋B、杯B、碗A、土師器甕Cがある。(25・26)は2点とも底部に回転糸切り痕跡を残し、口縁部は開きながら立ち上がる。土師器甕(28・29)は口縁部の屈曲が比較的小さい。ハケメ調整は(28)が少し細かく、(29)が荒い。II-2期に属するものと考えられる。
- S B 207 (第53図-33~39) S B 207はその大半をS B 206に切られている。遺物はほとんど柱穴等から出土したもので、細片が多い。遺物には須恵器杯蓋B、杯A・B、碗A、盤B、高盤、壺B、平瓶、横瓶、甕A、灰釉陶器長頸瓶、土師器甕Aがある。(33)は碗Aになると思われるが底部を欠く。(35)は高盤と思われる。II-2期に属するものと思われる。
- S B 217 (第53図-44~46) 上部が後世の攪乱で削平されていたので遺物の量は少ないが、カマドと思われる部分は残っており、そこから須恵器杯蓋B、杯A・B、碗A、壺B、平瓶、甕A、灰釉陶器長頸瓶、土師器甕が出土した。(46)は土師器甕の底部でカマドの台に転用されていたものである。底部・体部は輪積み痕が明瞭である。II-2期に属する。
- S B 223 (第54図-47~50) 須恵器杯H・A、甕A、土師器甕が出土している。(48)は底部回転ヘラ削りをするもので、体部は丸味を持つ。(47)は底部が稜を持つもので回転ヘラ削り調整する。(49・50)は土師器甕の底部である。体外面は斜めの荒いハケメ調整し、内面はナデと指押えて一部ヘラ削り調整する。
- S B 227 (第54図-61~69) 比較的残りのよい住居跡である。床面上には完形品を含む須恵器杯などが残されていた。器種は須恵器杯蓋B、杯A・B、碗A、平瓶、甕A、灰釉陶器長頸瓶、

土師器甕Cなどがある。(59)は天井部を2分の一回転へら削りし、口縁端部をおりかえす。

(60)は完形に近く、天井部が張る形態となる。(64)は底部を回転へら削りする。(63・65・66)は椀Aであるが、底部は回転へら削りをする。(63)はミズビキ痕が強い。土師器甕Cは口頸部を大きく「く」の字状に折り曲げるものである。(68)は口縁部内面を横ハケメで調整する。体外面のハケメは荒い。II-2期に属するものと思われる。

- S B 246 (第55図-80~83) 須恵器杯蓋B、杯A、椀B、壺B、甕A、灰釉陶器長頸瓶、土師器甕が出土している。(81)は完形に近いもので底部は回転へら削りする。高台は外端面接地である。(82)は平瓶の取っ手である。へらによる面取りがなされ、灰釉がきれいに掛かる。(83)は甕の底部で淡褐色を呈し、内面には穿孔の跡がある。II-2期に属する。

- S B 228 (第55図-92~93) 須恵器細頸瓶、甕A、土師器甕、灰釉陶器椀、皿、蓋、長頸瓶に加え鉄製品が出土している。(92)は蓋であるが内外面とも灰釉が掛かり、剝離して白色となる。成形・調整は丁寧で、天井部には薄い沈線が1条巡る。(93)は鉄製品で工具の先と思われるが、ほぼ完形で出土した。II-3期に属するものと思われる。

- S B 231 (第55図-88~90) 須恵器杯蓋B、杯B、椀A・B、平瓶、甕A、灰釉陶器椀、皿、長頸瓶、土師器甕が出土している。(88)はいわゆる三日月高台で灰釉はハケ塗りする。(89)は底部が失われているが、体部は斜め上に開きハケ塗りして灰釉を施軸する。II-3期に属するものと思われる。

- S B 220 (第56図-98~112) 出土した遺物は、須恵器杯蓋B、杯A、椀A、鉢C、壺B、甕A、甕、灰釉陶器椀、皿、長頸瓶、緑釉陶器(素地)椀、土師器甕Cである。(98)は完形の須恵器椀Aである。焼成はあまり良くなく内・外面に「火だすき」が見られる。(99~103)は灰釉陶器椀である。施軸方法はすべてハケ塗りによる。(99)は体部外面3分の1を回転へら削り調整する。(101)は体部外面下2分の1を回転へら削りする。灰釉は厚くかかり光沢がある。(104~106)は皿である。(104)は口縁部を上につまみ上げるもので高台は断面方形のいわゆる角高台である。(105・106)は口縁部が少し屈曲して伸びるものである。(107)は緑釉陶器の素地である。腹が張って口縁部が外に屈曲する形態で整形は丁寧である。体部は全面をへらミガキする。(108・109)は長頸瓶である。(108)は体部にはハケによる施軸痕が明瞭で灰釉は厚く光沢がある。(110~112)は土師器甕Cであるが、(110)は口縁部が少し肥厚する。体部外面は荒いハケメで調整し、内面は指押えとナデで調整する。(111)も口縁部が肥厚し短く折り返す。II-3期に属するものと思われる。

- S B 250 (第56図-113~116) 掘立柱建物S B 250は柱穴の掘り形も大きく、遺物もいくつか出土している。(113)と(115)は杯蓋Aでかえりは口縁部より下に突出しているが短い。(116)は須恵器甕Cである。II-1期に属するものと思われる。

(2) 土坑出土の遺物

- S K 206 (第57図-126~146) 完形のものを含む須恵器杯蓋B、杯A・B、椀A、壺B、高壺、壺B・C、平瓶、甕A、灰釉陶器長頸瓶、土師器甕が出土している。(126~130)は杯蓋Bであるが(126~128)はいずれも分量がほとんど同じで、笠形の体部を持ち口縁端部を屈

曲させるものである。(134)は杯Aである。底部は回転ヘラ削りする。(131-133・135・136・139・140)は椀Aであり、底部はすべて回転糸切り痕跡が残る。(132)は底部に墨書があるが底部は1/3しか遺存しないため全容はつかめない。(136・140)はミズビキ痕跡が明瞭である。(137・138)は杯Bであるが腰の立ち上がりは明瞭で、底部内面はコテできれいに撫でられている。(141)は口径のもっとも大きいもので、高台は外端面接地である。(142・143)は高台が少し高いもので、口縁端部は屈曲する。(144)は壺蓋であるが天井部には厚く自然釉が掛かっている。土師器甕は口縁部が少し肥厚し、短く折り返すものである。II-2期に属するものと思われる。

S K 203 (第58図-155-169) 須恵器杯B、杯A・B、盤B・C、壺C、横瓶、灰釉陶器椀、皿、緑釉陶器(素地)壺、土師器甕A・Bが出土している。(155-157)は椀、(158-163)は皿であるが全てハケ塗りにより施釉され、高台は三日月高台のものが多い。(163)は段皿であるが丁寧に施釉されている。土師器甕も多数出土しており、完形に復元できるものはないが、半分程度に復元されるものがいくつかあり、この時期の土師器のあり方の一端を知ることができた。(164-167)は小型のもので口縁部は緩やかに短く折り返し、ハケメはやや細かい。(168)は荒いハケメを持ち、口縁部が大きく開くものである。(169)も荒いハケメを持ち、大きな長胴になるものと思われる。II-3期に属する。

S K 205 (第58図-170-174) 掘立柱建物S B250の柱穴を切る土坑である。灰釉陶器や土師器が出土した。(171)は三日月高台である。(173)は体部が球形で口縁部が内湾し、端部が内側に折り返される。(174)は内外面ともハケメによる調整をする。口縁部は直線的に外へ開き端部を折り返す。II-3期に属するものと思われる。

(3) 包含層出土の遺物

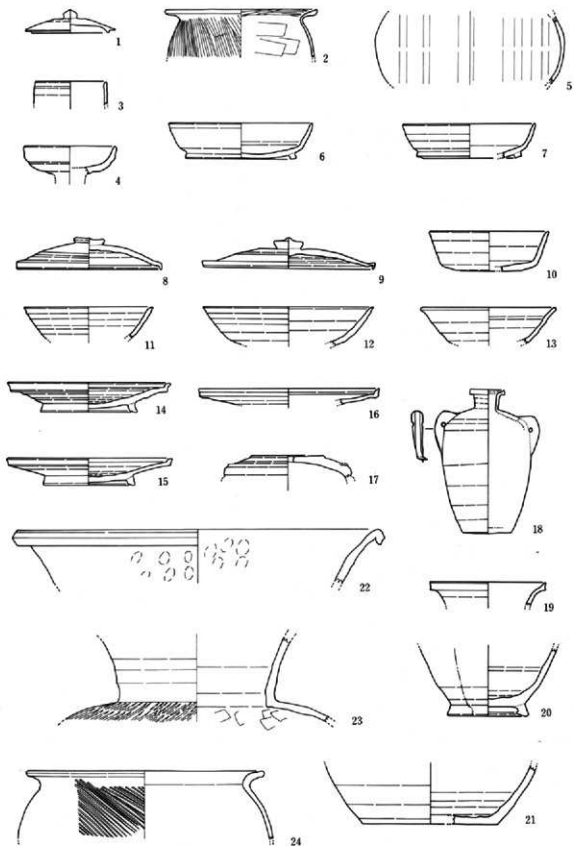
緑釉陶器 (第64図-313・325) 緑釉陶器は約70点が出土しているが、釉調は様々で複数の産地が想定できる。(313-316)は陰刻花文を持つ。(313)は椀で色調は淡緑色である。(314・315)は段皿である。釉調は淡緑色で光沢がある。(316)は皿で緑色で光沢がある。(319)は淡緑色で底部は黒色に近く、ヘラによる刻線がある。

緑釉陶器(素地) (第64図-326・327) 緑釉陶器(素地)と思われるもの。(326)は白色で体部は丁寧なヘラケズリとナゲで調整されている。施釉された痕跡はない。(327)は四足壺と思われる。胎土は白色で精良である。脚はヘラによる面取りがなされ、脚部外面及び体部は丁寧にヘラミガキされている。脚の付け根には陰刻花文が施されている。

鉄製品 (第65図-368-372) 数点が出土しているがほとんど調査区の南部である。(368-372)は工具の刃先であると思われる。(371)は一部残存するのみであるが、鉄鎌の可能性がある。(370)は紡錘車であると思われる。

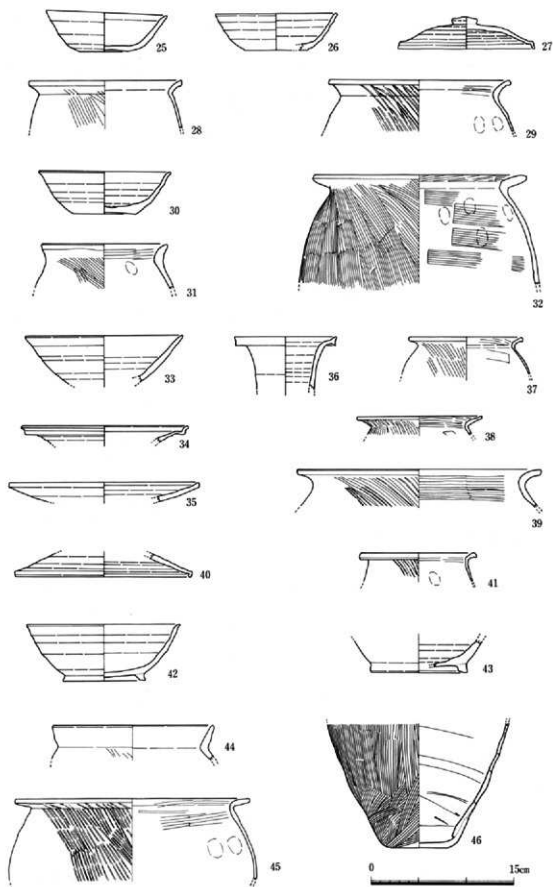
瓦 (第66図-373-375) 調査区の中央部から数点が出土しているが、転用の可能性もあり、その性格は不明である。全て丸瓦で内外面に布目を残す。(373-374)は内面に布の継目を残す。(374)は外面に荒い砂を付着させる。(375)は平瓦とも考えられ、端部にヘラによる削り痕がある。

(城ヶ谷和広)



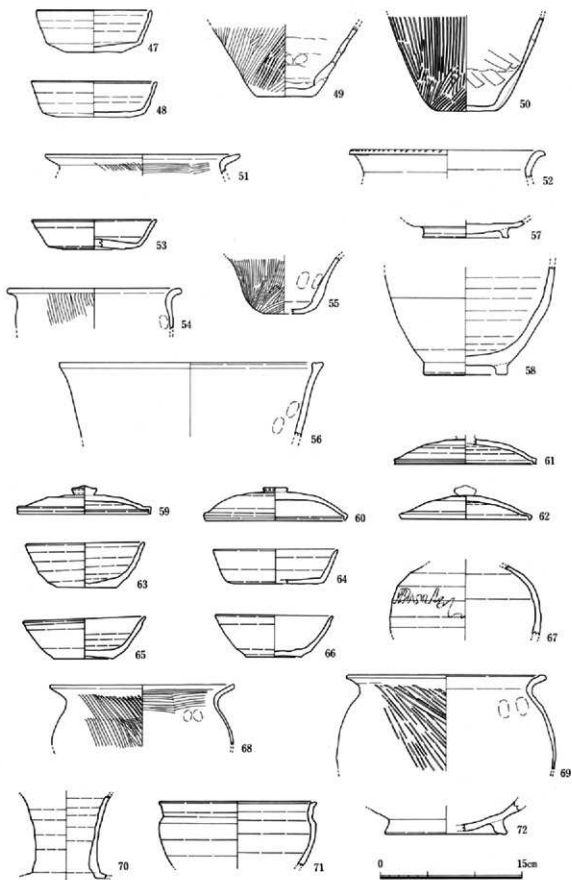
第52図 Ⅱ期の遺物(1)

SB221・226・239・249・238・206



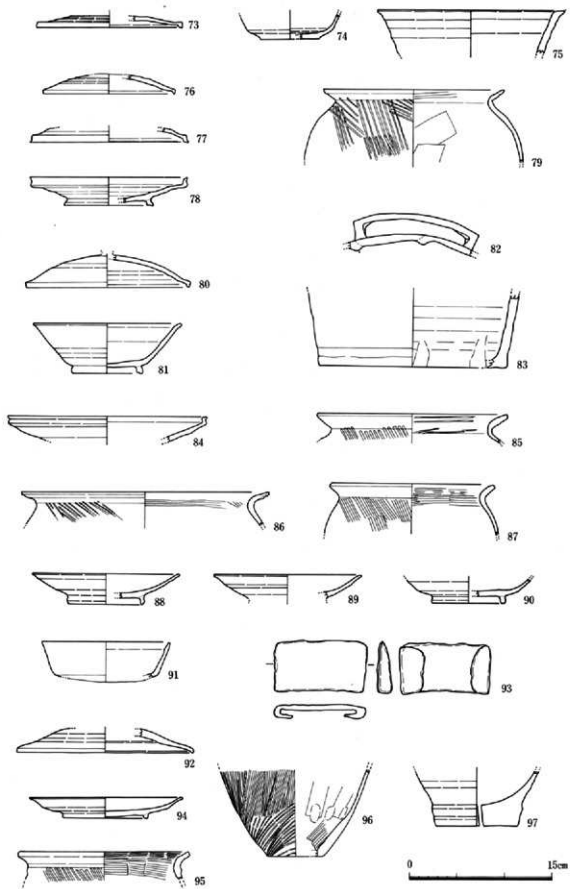
第53図 Ⅱ期の遺物(2)

SB209-201-207-203-217



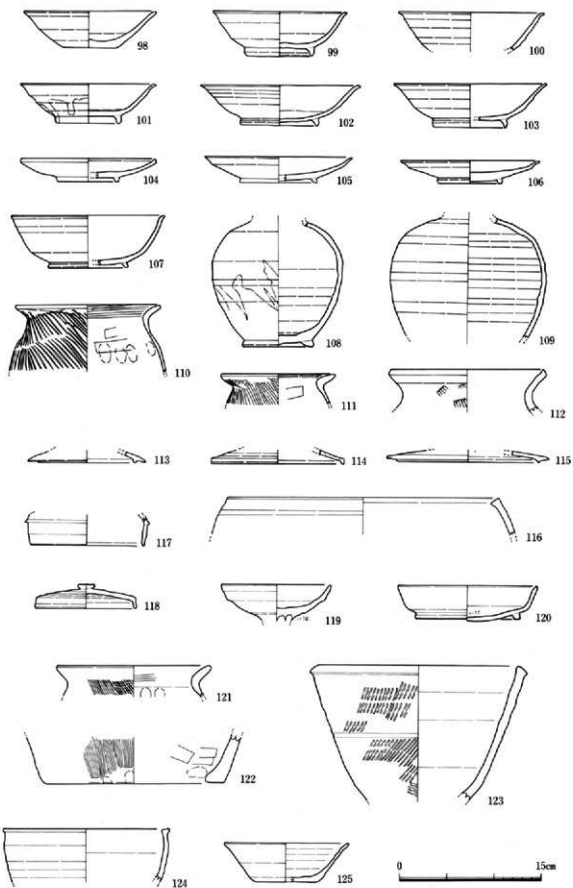
第54図 日期の遺物(3)

SB223・218・219・216・213・227・243



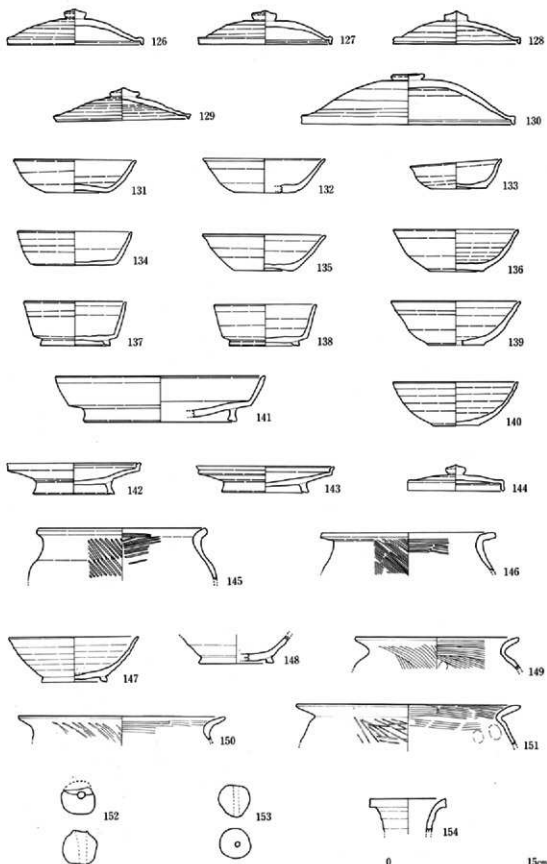
第55図 II期の遺物(4)

SB246-231-228・他



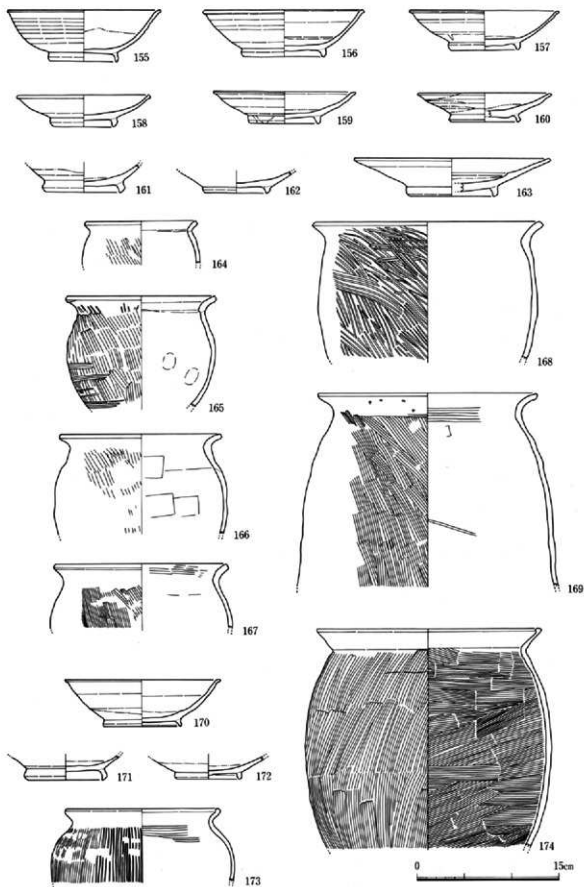
第56図 II期の遺物(5)

SB220-250・他



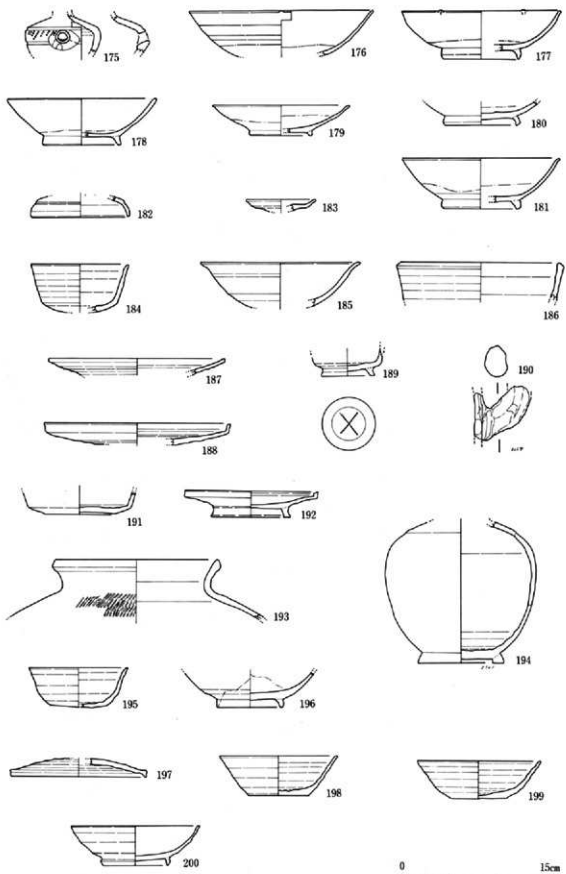
第57図 日期的遺物(6)

SK206・他



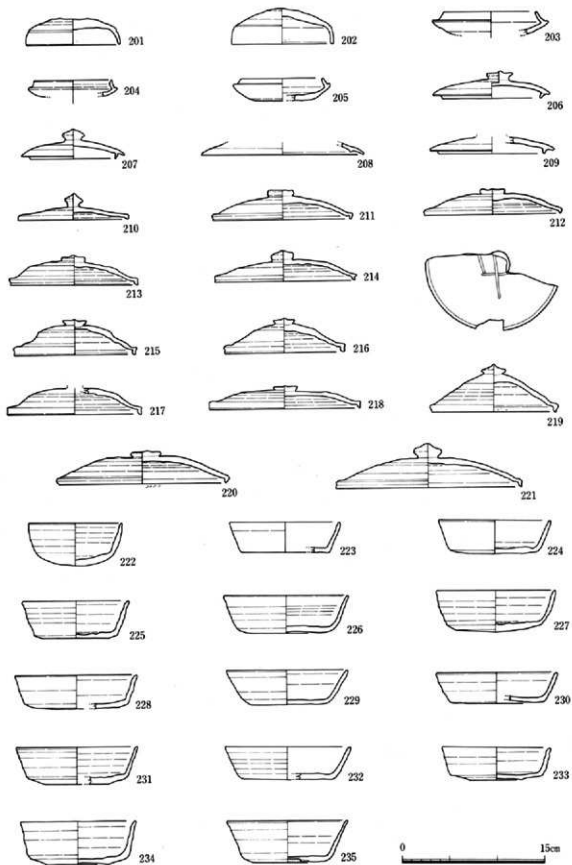
第58図 日期の遺物(7)

SK203-205



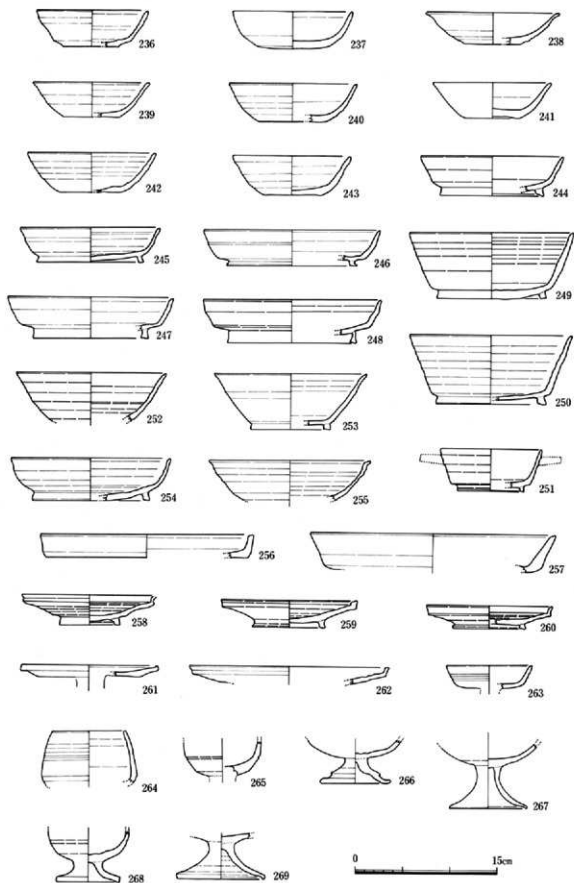
第59図 II期の遺物(8)

第III層・他



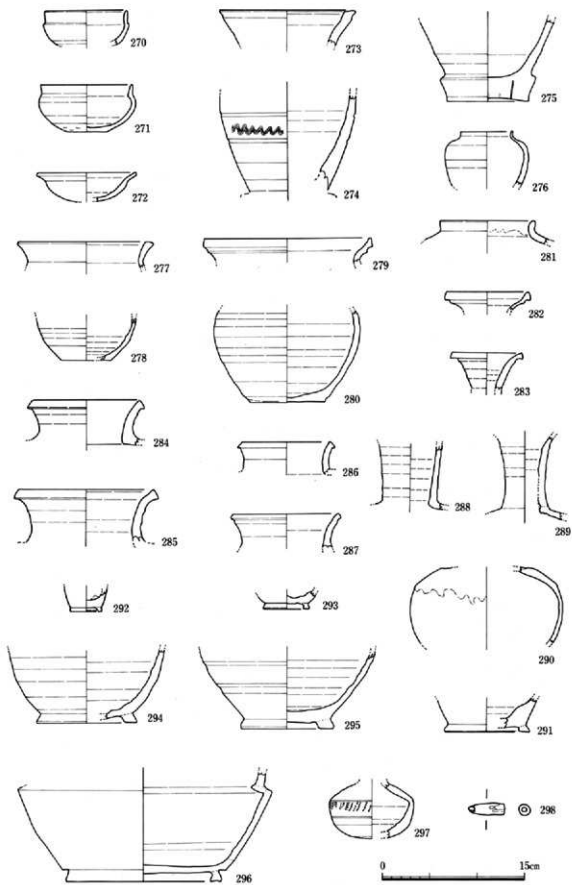
第60図 日期の遺物(9)

第III層・他



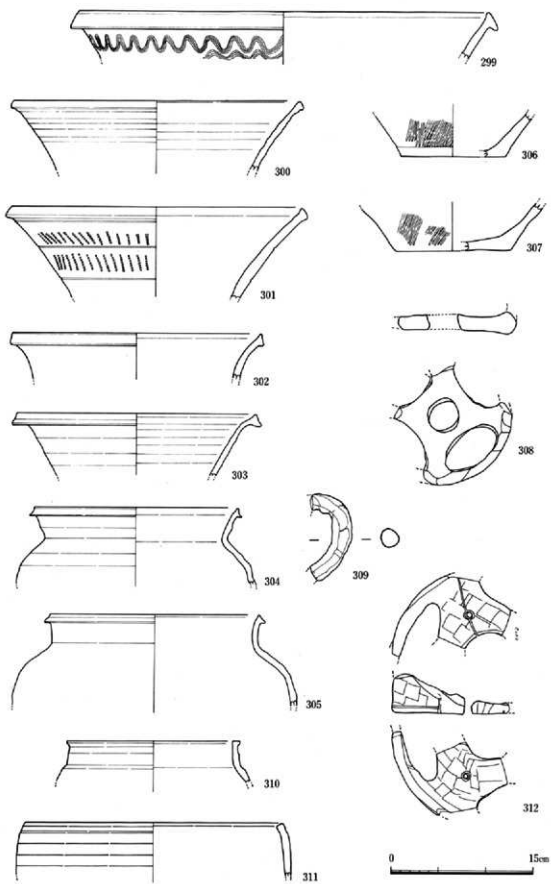
第61図 日期の遺物③

第田原・他



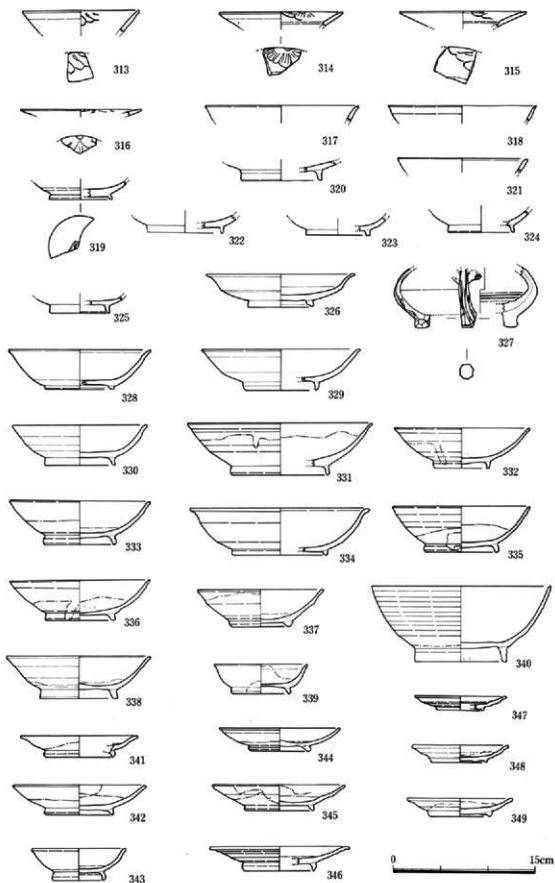
第62図 II期の遺物00

第I層・他



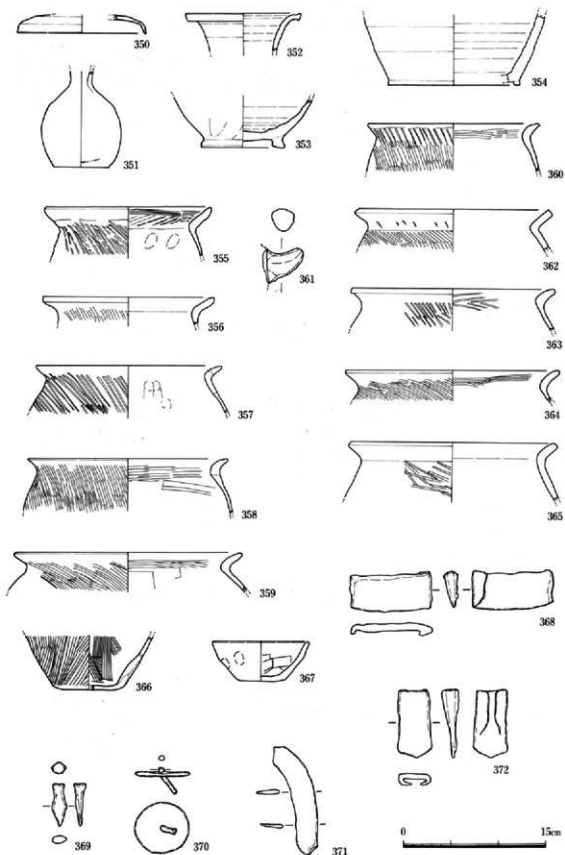
第63図 日川の遺物32

第3層・他



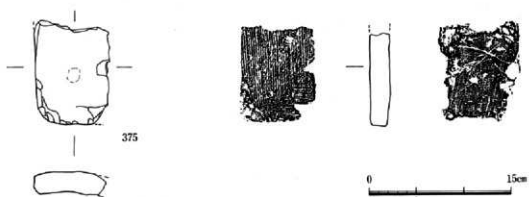
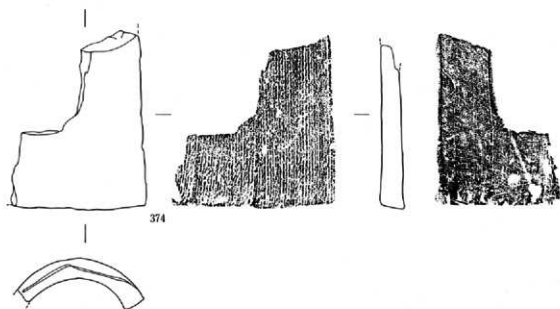
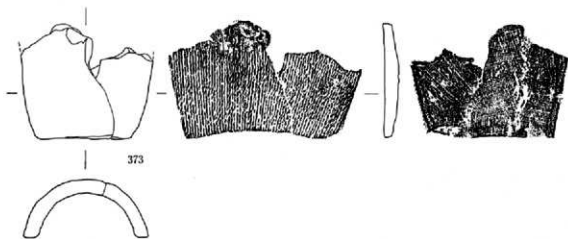
第64図 II期の遺物(3)

第三層・他



第65図 日期的遺物00

第III層・他



0 15cm

第66図 日期の遺物03

瓦

3. III期の遺物

概要

III期の遺物は「山茶碗」と呼ばれる無釉陶器⁴³⁾と、窖窯・大窯で焼成された施釉陶器と土器である。

I段階⁴⁴⁾の遺構に伴う遺物は、そのほとんどが無釉陶器の碗と皿⁴⁵⁾であり、すべて砂粒を多く含み粗い胎土を呈する。無釉陶器の碗は形態からさらに分類でき、遺構により形態が異なることから、段階を細分することが可能である。また「伊勢型鍋」と呼称される土鍋も無釉陶器と供伴している。

III期2段階の遺構に伴う遺物は、施釉陶器として碗・皿・鉢、土器として鍋・釜がある。施釉陶器の特徴から、窖窯～大窯II期にかけてのものである⁴⁶⁾。土器の鍋・釜は内耳鍋・羽釜である。

III期3段階の遺構に伴う遺物は、施釉陶器として碗・皿・鉢、土器として皿・鍋、瓦質製品として風炉がある。施釉陶器は特徴から大窯II～III期にかけてのものである。土器の皿は底部に回転糸切り痕を残す。鍋は内耳鍋である。

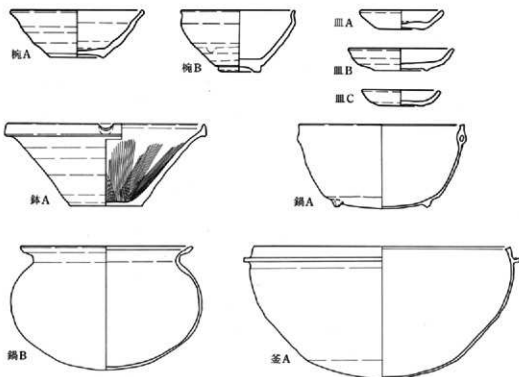
各段階の出土遺物の特徴からIII期1段階は13世紀中葉～後葉、III期2段階は15世紀末～16世紀前葉、III期3段階は16世紀中葉～後葉の年代が考えられる。

主要器種

III期の陶器、土器を以下のように分類する。

碗 A 体部が直線気味に閉ぎ、断面三角形の低い高台を持つ。無釉。山茶碗。

B 体部が直線気味に閉ぎ、口縁が外反気味に直立する。高台は厚く直立する。天目茶碗。



第67図 主要器種模式図 (III期)

- 皿 A 体部は外反気味に立ち上がる。高台はつかない。腕Aとセットとなる。無軸。
 B 体部は緩やかに湾曲しながら立ち上がる。高台は低く断面三角形。
 C 体部は緩やかに湾曲しながら立ち上がる。高台はつかない。轆轤成形。
 鉢 A 体部は直線的に立ち上がる。内面に摺目を持つ。全面施釉。摺鉢。
 鍋 A 球状の体部を持ち、口縁は大きく開き折り返される。伊勢型鍋。
 B ヘルメット状をなし体部はわずかに湾曲しながら立ち上がる。口縁内面に吊手を1対持つ。内耳鍋。
 釜 A ボール状をなし口縁は内湾する。口縁外面に鈎を有する。羽釜。

(1) III期1段階の遺物

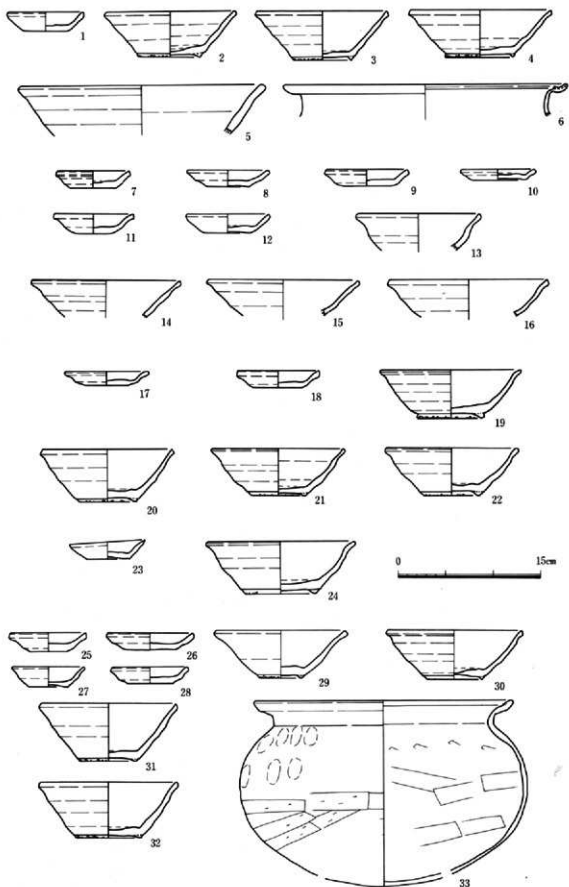
- S D 302 (第68図-1~6) 腕Aは口径に対し底径が大きいのみである。(51)は鉢で内面に摺目を持たない。所謂、捏鉢。(6)は鍋Aの口縁である。
 S D 301 (第68図-7~16) 腕Aには体部が直線的に立ち上がるもの(14・15)とわずかに湾曲して立ち上がるもの(13・16)がある。皿Aは(10)のみが器高が低い。
 S D 303 (第68図-17~19) 腕A、皿Aからなる。腕Aは体部が湾曲して立ち上がる。
 S D 308 (第68図-20~22) 腕Aのみからなる。腕Aは体部が直線的に立ち上がり、わずかに口縁が外反する。(21・22)に対し(20)はやや器高が高い。
 S K 301 (第68図-23~24) 皿Aは器高が高く、腕Aは口縁が強く外反し口径、底径ともに他の腕Aより大きい。
 包含層 (第68図-25~33) (25・27)は底部がわずかに突出し、高台の名残を止める。(29)は底径が小さく内底面と体部の境が明確である。鍋Aの(33)は(6)と比べ器壁が厚く頸部が短い。

(2) III期2段階の遺物

- S D 313 (第69図-34~39) (34)は体部下部が無軸の皿。(35)は皿B。(37)は摺目はないが銚軸がかり鉢Aになると思われる。(38)は吊手が欠如するが、鍋Bである。
 S D 311 (第69図-40~43) (40・41)は無軸陶器の皿で、(40)は薄手で緻密な胎土を持ち、(41)は皿Aである。共に混入である。(42)は筒状を呈する鉢である。(43)は摺目はないが全面に銚軸がかり鉢Aになると思われる。口縁内面に明確な突起が存在する。

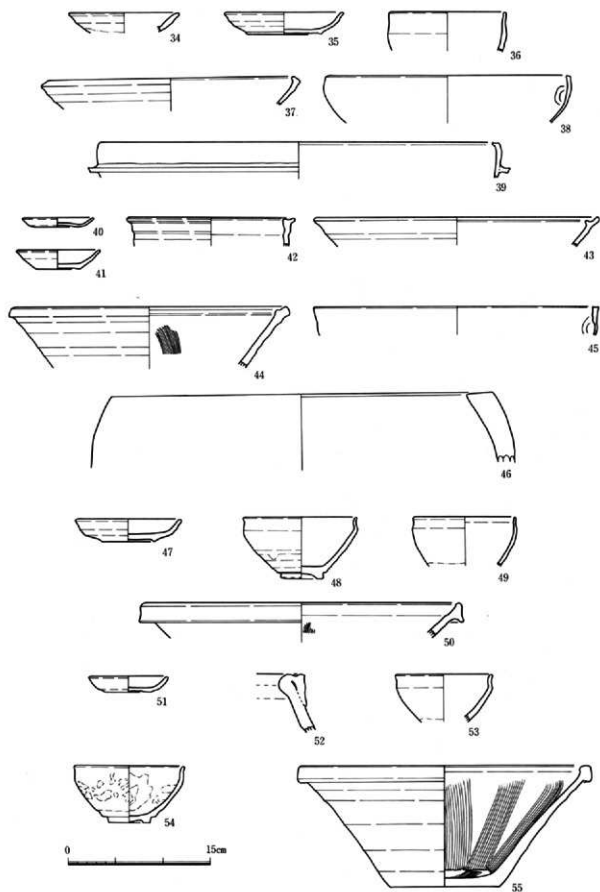
(3) III期3段階の遺物

- S D 307 (第69図-44~46) (44)は鉢Aであり、(43)に比べ口縁内面の突起が小さい。(45)は吊手が欠如するが鍋Bである。(46)は瓦質製品の風炉。焼成が悪く遺存状態は悪い。
 S D 310 (第69図-47~50) (47)は皿Bであり、(35)に比べ口縁の外反が弱い。(48・49)は腕Bであり、体部下部は共に銚軸がかかる。(50)は鉢Aであり口縁が垂下する。
 S E 301 (第69図-51~53) (51)は皿C。口縁にタール状の炭化物が付着する。(52)は常滑産の甕。(53)は腕Bで体部下部は無軸である。
 S K 302 (第69図-54~55) (54)は腕Bで鉄軸が斑状にかかり、全面に銚軸がかかる。(55)は鉢Aであり口縁が肥大しわずかに垂下する。



第68図 田期の遺物(1)

SD301~303・308 SK301・築山層



第69図 田期の遺物(2)

SD307・310・311・313

IV. 期の遺物

概要

IV期の遺物は、武家屋敷が存続した江戸時代を通じてのものである。出土遺物量はコンテナで約400箱を数え、当地区の他の時期の遺物量を差し置き群を抜いている。内容は陶磁器・土器を中心に人形等の土製品、瓦、煙管・銭等の金属製品、砥石等の石製品など多岐にわたる。時代相を考えるにおいて、これらの陶磁器・土器以外の遺物も無視できないが、本項ではまず多量に出土している陶磁器¹⁾・土器を中心に大略的にその変化を見ていきたい。

1. 陶磁器・土器

IV期は供膳具の主要器種である碗・皿の組成を中心に以下のように4期に大別できる。

IV-1期 碗では天目茶碗、陶器の皿では長石釉を施すもの、土器の皿では轆轤成形のもの、鍋では土製の内耳鍋と焙烙鍋が各器種の主体を占める。陶器と土器の占める割合がほぼ同じで、陶器・土器で全器種の中の大勢を占める。器種別に見ると碗に対し皿の占める比率が高い。

IV-2期 碗では天目茶碗が減少し、灰釉丸碗が、皿では菊皿が主体になる。瀬戸・美濃産以外の陶器や肥前磁器の碗・皿が目立つようになる。陶磁器・土器の比率は基本的に1期と変わらないがやや磁器の占める割合が高くなる。器種別組成は1期と変化はない。

IV-3期 碗は2期と同じ灰釉丸碗が主体である。皿は体部が湾曲して立ち上がるものがこの時期の途中から出現する。また陶器の灯明皿として、無高台で体部が湾曲して立ち上がるもの、またこの受皿として、内面に切れ込みを有する受部がある皿が出現する。鍋では土製の内耳鍋が消滅し、陶製の鍋が途中から出現する。陶磁器・土器の比率は土器の割合が激減し、陶器の占める比率が増加する。器種別組成では皿の占める割合が減り、碗の割合が高くなる。

IV-4期 碗は広東碗と端反形碗が、皿では3期と同じものが主体である。瀬戸産の磁器が出現し、陶磁器・土器の比率は陶器の占める比率が高いが、磁器の占める割合の増加が見られる。器種別組成は基本的には3期と変化しない。

各期の年代は、IV-1期が名古屋城造営(1610年)以降、IV-4期が陸軍鎮台三の丸駐屯(1874年)まで、とIV期の上限と下限が与えられる。またIV-2期は肥前系磁器が隆盛する時期にあたること、IV-4期は広東碗、端反形碗が碗の主体を占めることを考えると各期は次の年代が与えられる¹⁰⁾。

IV-1期：17世紀前葉～中葉 IV-2期：17世紀後葉以降 IV-3期：18世紀後葉まで

IV-4期：19世紀前葉～19世紀後葉

主要器種

IV期の主要な陶磁器・土器の器種を以下のように分類する。各器種のうち碗A～K、皿A～K、鉢A～L、鍋A～C、蓋A～E、瓶A～E、壺A、甕Aが陶器、碗L～R、皿L～O、鉢M～T、蓋Aが磁器、皿P～S、鍋D・Eが土器である。

碗 A 体部はわずかに湾曲しながら立ち上がり、口縁は外反しながら直立する。高台は断面四角形で直立する。天目茶碗。

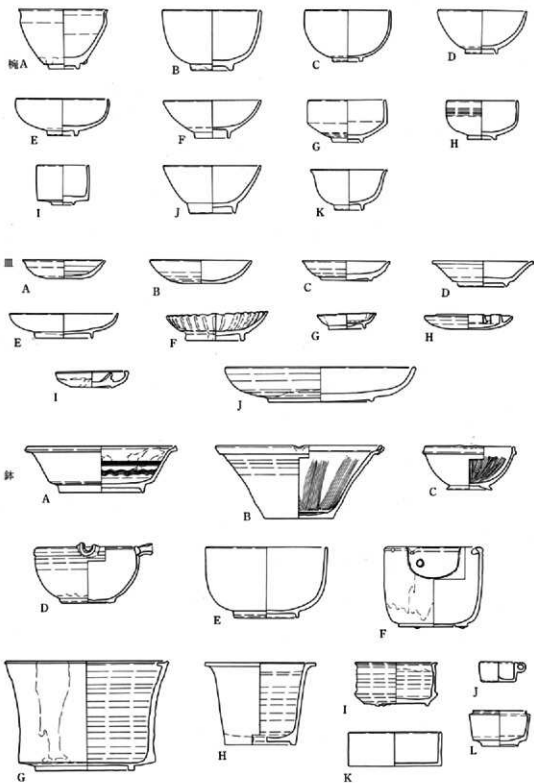
- B 体部は湾曲しながら立ち上がる。高台は断面四角形。全面施釉のものがある。丸碗。
- C 体部は湾曲しながら立ち上がり、口縁は内湾する。高台は断面四角形。体部下半は無釉。全体的に薄手。
- D 体部は湾曲しながら開く。高台は断面四角形。体部下半は無釉
- E 体部は湾曲しながら短く立ち上がり、口縁は内湾する。高台は断面四角形。体部下半は無釉。
- F 体部は湾曲しながら短く開く。高台は断面四角形で高い。底部の器壁は薄い。体部下半は無釉。
- G 体部中位に稜があり、口縁はわずかに内傾する。高台は断面四角形。煎じ茶碗。
- H 体部は湾曲しながら開き、口縁は直立気味である。高台は断面四角形。
- I 体部は直立する。高台は底部の割に小さく断面三角形。
- J 体部はわずかに湾曲しながら開く。高台は高く断面三角形。広東碗。陶器製。
- 碗 K 体部は湾曲しながら立ち上がり口縁は外反する。高台は断面四角形。底部の器厚は薄い。端反形碗。陶器製。
- L 体部は湾曲しながら立ち上がり口縁は外反り、外反の強いものと弱いものがある。高台は高く断面四角形。底部の器壁は薄い。端反形碗。磁器製。
- M 体部は湾曲しながら立ち上がり、口縁は端反る。高台は底部の割に大きく断面三角形。
- N 体部は湾曲しながら立ち上がる。高台は高く断面三角形。
- O 体部は湾曲しながら立ち上がり、口縁は直立気味である。高台は低く断面三角形。
- P 体部は湾曲しながら立ち上がり、口縁はわずかに内湾する。高台は低く断面三角形。
- Q 体部はわずかに湾曲しながら開く。高台は高く断面三角形。広東碗。
- R 体部は直立する。高台は断面四角形。磁器製。
- 皿 A 体部は湾曲し、口縁はわずかに外反する。内面には同心円状の突線が巡る。無高台。全面施釉。
- B 体部は湾曲しながら立ち上がる。無高台。全面施釉。
- C 体部は湾曲しながら立ち上がる。口縁はわずかに外反する。高台は低く断面三角形。全面に長石釉を施されることが多い。
- D 体部は外反しながら立ち上がる。高台は断面三角形。体部下半が無釉の場合が多い。
- E 体部は湾曲しながら立ち上がる。高台は断面四角形。体部下半は無釉の場合が多い。
- F 体部は湾曲しながら立ち上がる。菊花状の型押し。高台は高く断面四角形。体部下半無釉。
- G 体部は湾曲しながら立ち上がる。上面四角形。内面型押し。高台は高く断面四角形。体部下半無釉。陶器製。
- H 体部は湾曲しながら立ち上がる。内面に切れ込みが入り、直立する受部が付く。無高台。全面施釉。
- I 体部は湾曲しながら立ち上がる。口縁上端が面取られ肥大する。内面に板状の突起が付く。

底部は萼筒底。体部下半無軸。

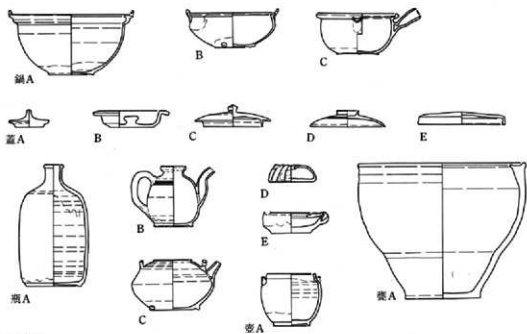
- J 大型の皿 体部は湾曲しながら立ち上がる。体部下半が無軸の場合が多い。
- K 体部は湾曲しながら立ち上がる。口縁は外反する。高台は低く断面四角形。
- L 体部は湾曲しながら立ち上がる。口縁は波状になる。高台は高く断面三角形。高台中央を円形に削り込み、その周囲は輪状に無軸。
- M 小型の皿 体部は湾曲しながら立ち上がる。口縁上端は面取られる。外面に細い溝が入る。高台は低く断面三角形。
- N 体部は湾曲しながら立ち上がる。高台は低く断面三角形。
- O 湾曲する体部に裾が広がる棒状の脚が付く。脚内は浅く削り込まれるか、または中空。
- P 体部は非常に低い。外面に指圧痕が残る。無高台。手握成形。
- Q 体部下端に稜を持ち上半は開く。無高台。轆轤成形。
- R 体部は外反する。轆轤成形。
- S 体部は直線的に開き口径の割に底径は小さい。無高台。轆轤成形。
- 鉢 A 体部下半に稜を持ち上半は開く。口縁は受口状になる。高台は高く断面四角形。
- B 体部は開く。口縁は受口状になり、注口が付くものが多い内面に摺目が付く。無高台。全面施釉。
- C 体部は湾曲して立ち上がる。口縁は折り返され肥大し、注口が付く。内面に摺目が付く。高台が付く。体部下半または壘付が無軸である。
- D 体部は湾曲して立ち上がる。口縁は折り返され、肥大し大きく突出する注口が付く。高台は非常に低く断面四角形。
- E 体部は湾曲して立ち上がる。口縁は直立する。高台は断面三角形。壘付のみ無軸。
- F 体部は下端が湾曲し、口縁は直立する。半円状の切れ込みがあり、複数の穿孔が体部上半にある。底は低く突出し、孔と団子状の脚が3つある。内面は上端以外が無軸である。
- G 体部下端に稜があり、上半は外反する。口縁は受口状になる。高台は断面四角形。体部下半は無軸。
- H 体部はほぼ直線的に立ち上がる。口縁はL字状に折れ曲がる。底部中央に穿孔が見られる。高台は高く断面四角形。体部下端と内面のほとんどが無軸である。
- I 体部下端に稜があり、上半はほぼ直線的に立ち上がる。底部には脚が3つ付く。無高台。
- J 体部はほぼ直線的に立ち上がる。体部上端に輪状または棒状の把手が1つ付く。無高台。体部下半無軸。
- K 体部はほぼ直線的に立ち上がる。上面形は楕円形。無高台。体部下端のみ無軸。鬘型
- L 体部は筒状になり高台は数形ある。口縁は内側に突出し、受口状。体部下半は無軸。
- M 大型である。体部下端に稜があり、上半は直立する。高台は断面三角形。口縁端、壘付は無軸。
- N 体部は直立する。高台は短く断面三角形。
- O 体部下端に稜があり、上半は直立する。口縁は内側に突出し、上端が面取られる。稜の部

- 分に脚状の突起が3つ付く。高台は断面四角形。内面下半、壺付は無軸。
- P 体部下端に稜があり、上半は直立する。口縁は内側に突出し、受け口状になる。無高台。口縁、底部は無軸。
- 鍋 A 体部は湾曲して立ち上がる。口縁は受口状になり、内外面に突出し、上端に2～3つの穿孔された板状の吊手が一对付く。体部下半、内面の一部無軸。
- B 体部は湾曲して立ち上がる。口縁は受口状になり、上端に輪状の吊手が一对付く。底部に豆状の脚が3つ付く。体部下半無軸。
- C 体部は湾曲して立ち上がる。口縁は受口状になる。体部上端に突出した注口と中空の把手が付く。底部に豆状の脚が3つ付く。体部下半無軸。
- D 体部は湾曲して立ち上がる。底部は丸底になり体部との境に稜ができる。口縁端は内外面に突出する。内面に縦方向の吊手が一对付く。内耳鍋。
- E 器高の割には口径が大きい。体部は湾曲して立ち上がる。底部は丸底である。口縁端は内外面に突出する。内面に縦方向の吊手が一对付く。焙烙鍋。
- 蓋 A 上面中央に乳頭状の摘みが付く。下面は突出し無軸。
- B 上面中央に鉤状の摘みが付き、外縁が輪状に突出する。下面は無軸。
- C 上面は湾曲し、中央に乳頭状の摘みが付く。下面にかえりが付き、無軸である。
- D 上面は湾曲し、中央に輪状の直立する摘みが付く。外縁のみ無軸である。
- E 上面はわずかに湾曲し、外縁が直立する。摘みはない。下面は無軸。
- F 上面は湾曲し、外縁は反り、中央に直立する摘みが付く。摘みの上端のみ無軸である。
- 瓶 A 体部は袋状になり細長い頸部が付く。高台は低く断面四角形。
- B 体部下端に緩い稜がある。上半は湾曲して立ち上がり肩を持つ。頸部は短く口縁は受口状になる。体部に吊手と注口が付く。高台は低く断面四角形。
- C 体部は湾曲して立ち上がり、体部中央に緩い稜がある。口縁は短く直立する。体部上半に穿孔された板状の吊手が一对と注口が付く。無高台。体部下半無軸。
- D 体部は様々の形に壺押しされる。穿孔が2カ所見られる。無高台。底部は無軸。水滴
- E 体部は湾曲して立ち上がる。体部上半に注口と板状の吊手が付く。無高台。体部下半、内面は無軸。
- 壺 A 体部は湾曲して立ち上がり、肩に一对の吊手が付く。器高の割に口径は大きく、口縁は短く直立する。高台は低く、断面四角形。体部下半、内面の大部分が無軸。
- 甕 A 体部は緩やかに湾曲し立ち上がり、口縁下が緩やかに湾曲する。口縁は肥大し、内外面に突出する。口縁形態は種類に富む。無高台。無軸。

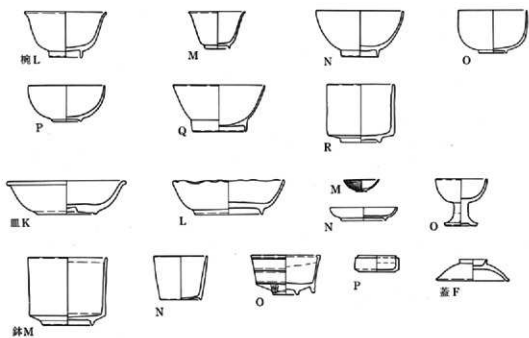
陶器



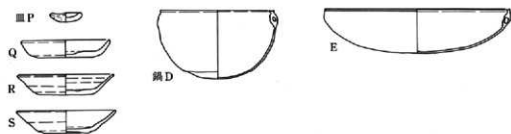
第70图 主要器種模式图 (IV期)



銅器 ▶



土器 ▶



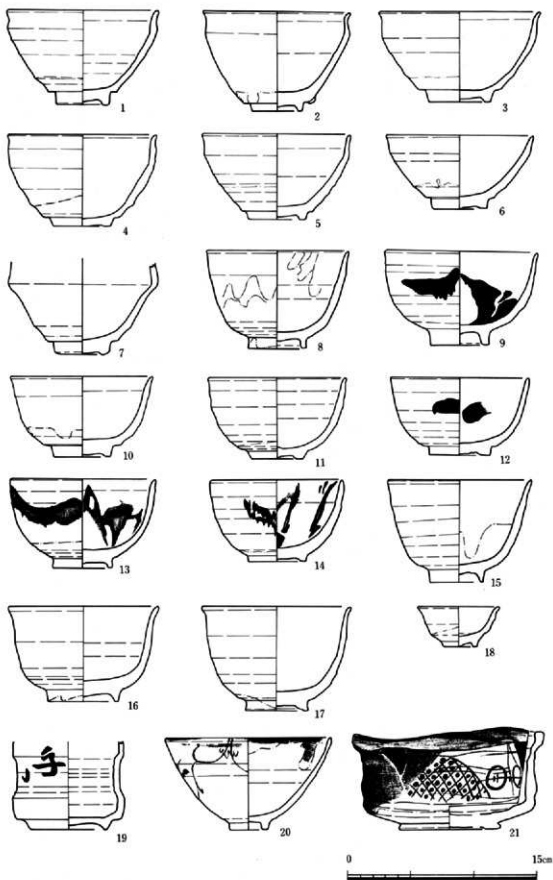
第71圖 主要器種模式圖 (IV期)

(1) IV-1期

この時期の遺構としてSK407・415・468・479・SE410がある。

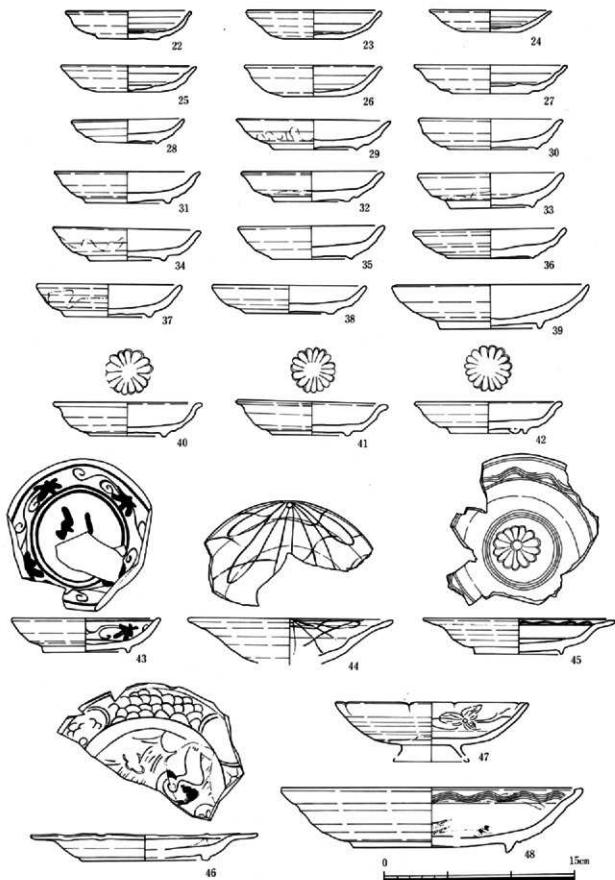
SK479 (第72~75図-1~86) (1~7)は椀A。全て体部下半は無釉である。口径の割に器高が高いものが多く高台は厚く削り出される。(7)は段付白天目と呼称されるもの。(8~17)は大まかに椀Bの範疇に入る。これらは口縁がわずかに外反し、高台を浅く削り出すもの(10・11・17)、口縁がわずかに外反し高台高が深いもの(8・9・15・16)、口縁が直立気味で高台を浅く削り出すもの(12~14)に区分できる。(18)は口縁が外反し内外面に銅緑釉がかかる。(19)は筒向と呼称される鉢である。(20)は外面に鉄絵が描かれる。高台は非常に低い。(21)は鉄絵の上に透明釉がかかる織部の茶碗である。(22~27)は皿A。(22・24)は内面の同心円状の突線が密であり、胎土は灰色で硬質である。(23・25~27)は同心円状の突線が粗であり、胎土は橙色で軟質である。(25~27)の口縁には油煙が付着する。(29~43)は皿C。全て高台内の一部を除いて長石釉がかかる。(29~32・35~38)は口縁に油煙が付着する。(39)大型になる。(40~42)は口縁が強く外反し、内底面に菊花の刻印がある。(43)は内面に鉄絵で唐草が描かれる。(44~46)は織部の皿。(44)は、鉄釉と灰釉で菊花が描かれる。(45)は総織部で内底面に菊花の陰刻。(46)は口縁が花卉状になり、内面に花鳥文が陰刻され、銅緑釉・鉄釉・透明釉がかけ分けられる。(47)は内面に草花文が陰刻される。(49~54)は皿P。(50)は中央に1カ所穿孔。(55~63・65・66・68・69)は皿R。(64・70~72)は皿Q。(67)は皿Sである。分量は大まかに大・中・小の3つに分れる。(55~57・60~64・68・70)には油煙が付着。(71)は織部の鉢。(76)は蓋C。香炉の蓋になると思われる。(77)は瓶。徳利。(78・79)は常滑産の鉢。(78)は焼き締まるが、(79)は焼きがあまり。(78~80)は鉢B。いずれも摺目が磨滅する。また(79)は口縁外縁端が、(80)は底面外縁が磨滅する。(81・82)は鉢B。(81)は垂下する口縁端、底面外縁が磨滅し、摺目が磨滅する。(82)は無釉で摺目が磨滅する。備前描鉢。(83~85)は鍋E。(86)は鍋D。脚が3つ付き外面は被熱により赤変しているが炭化物は付着していない。(83~86)の口縁は上端がわずかにへこみ、やや肥大にする。この遺構では図示しえなかったが信楽の甕、肥前陶器の鉢等が出土している。

SK415 (第76~79図-87~161) (87~92)は椀A。SK479出土品に比べ大型で、底部が大きい。口縁は幅広く外反して直立し、体部下半は全て無釉。(87・90)は所謂、段付白天目。(93~97・102・103)は椀B。(94)は口縁が直立し、高台端が無釉のもの。(96)は肥前の陶器である。(102・103)は分量が小さいもの。(100)は口縁の歪みが著しく、高台内が螺旋状に沈線が入る。全面施釉。(101)は鉄絵の上に長石釉がかかり、体部下半は無釉で高台は浅く削り込まれる。(104)は中国磁器。呉須で花鳥文が描かれる。全面施釉。(105~108・111~113)は皿C。全て高台内の一部を除いて長石釉がかかる。(111)は口縁が強く外反し、内底面に菊花の刻印。(112・113)は内面に鉄絵が描かれる。(105・107)は口縁に油煙が付着。(114~116)は皿D。(114)のみ鉢釉を全面に施釉し、内面に鉄釉を垂らす。(118)は皿A。鉢釉を全面に施釉す。内面の同心円状の突線は不明確。(120)は鉢で鉄絵の上に全面透明釉を施す。



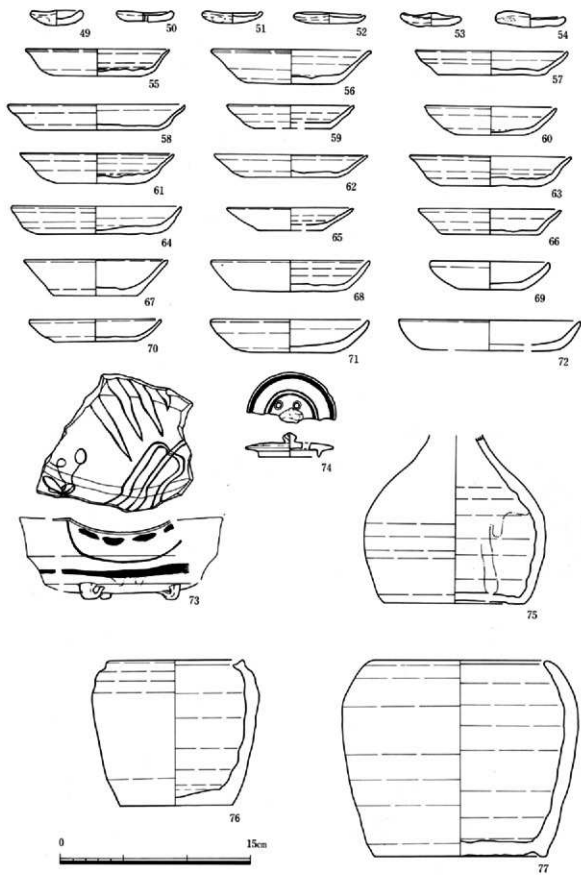
第72図 IV期の遺物(1)

SK479(1)



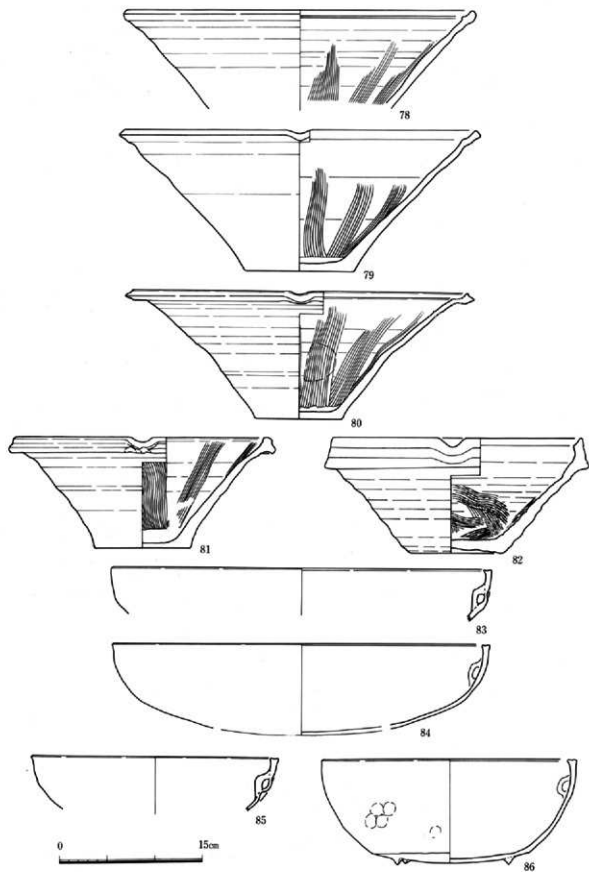
第73図 IV期の遺物(2)

SK479(2)



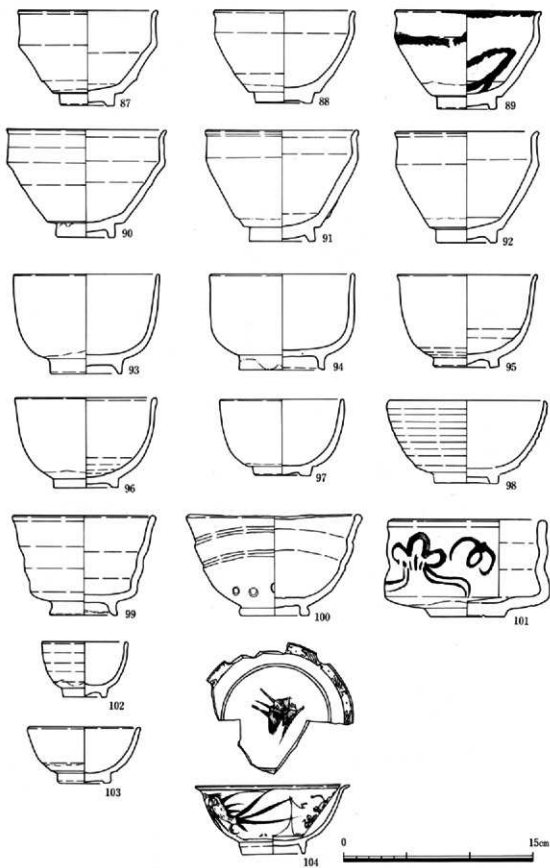
第74図 IV期の遺物(3)

SK479(3)



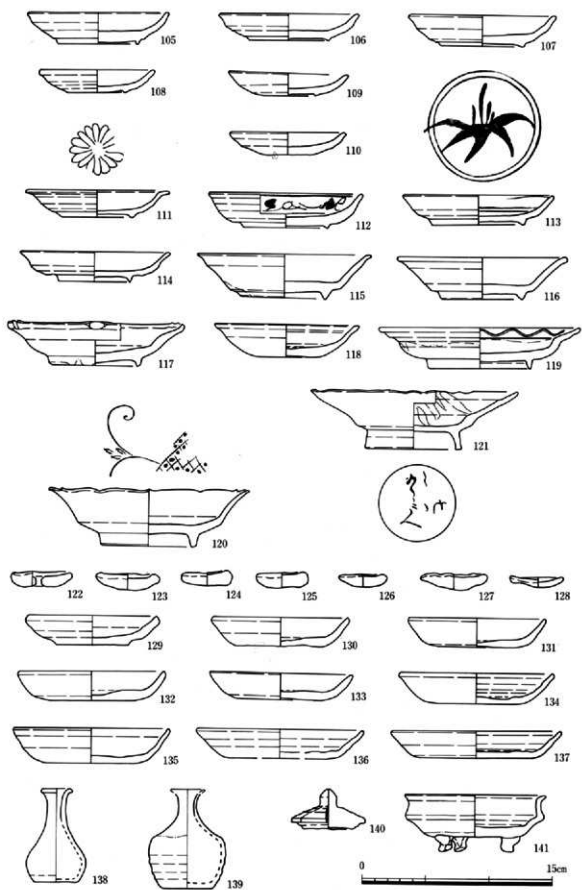
第75図 IV期の遺物(4)

SK479(4)



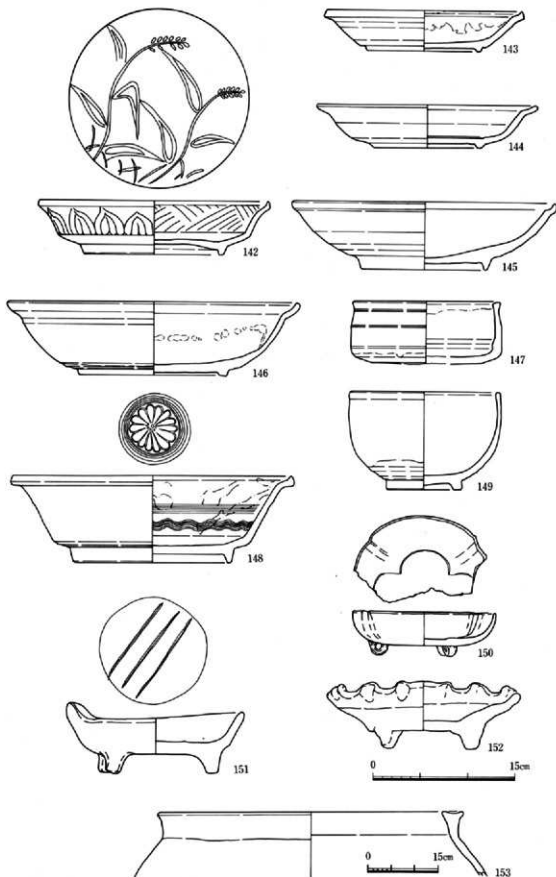
第76図 IV期の遺物(5)

SK415(1)



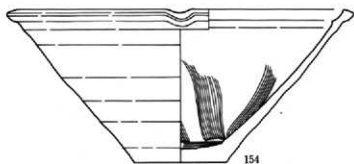
第77図 IV期の遺物(6)

SK415(2)

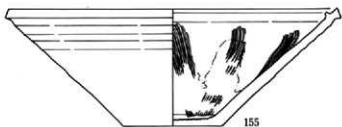


第78図 IV期の遺物(7)

SK415(3)



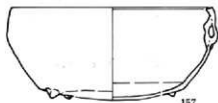
154



155



156



157



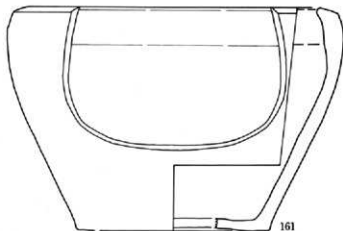
158



159



160



161



第79図 IV期の遺物(8)

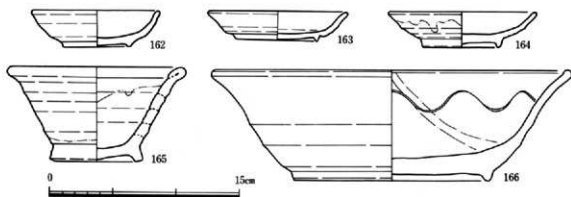
SK415(4)

(121)は鉢。軟質陶器で内面は緑・黄・赤色の釉の上に全面透明釉がかかる。高台内に墨書があるが、遺存状態が悪く判読不明⁹⁾。(122~129)は皿Pである。(122)は穿孔が見られる。(129~132)は皿Q。(133~135・137)は皿R。(131・133)以外には油煙が付着。(138~139)は瓶。(139)は緑釉と透明釉とを上下にかけ分ける。(140)は蓋A。肥前陶器である。(141)は鉢I。獸足状の三脚。(142~146・148)は鉢A。(142)は内面に草文、外面に蓮弁の陰刻。(144・145)は「笠原鉢」と呼称されるものである。(148)は内底面の中央に菊花の刻印。(147)は鉢。口縁内面が擦減する。(149)は鉢E。(150)は鉢。型押成形で全面に薄緑の透明感の強い釉がかかる。(151・152)は棒状の三足が付く無釉の鉢。(151)は内面に3本刻み目が入る。(152)は焼締まり、口縁がひだ状になる。(153)は壺A。(154~156)は鉢B。共に内面の摺目が磨減し、底面外縁が擦減し、(154)は口縁外端が、(155)は口縁内外端と内面の突帯端が、(156)は口縁外端が擦減する。(157)は鍋D。乳頭状の三足が付く。(158)は鍋E。外面の口縁近くに沈線が巡る。(159・160)は壺A。(161)は常滑の鉢。無釉で焼成が悪い。口縁の一部は大きく抉れ、内面の下端より上は煤が付着する。

S E 410 (第80図-162~166) (162・163)は皿C。(163)の口縁には油煙が付着。(164)は皿D。(165)は鉢。鉢硝摺で内面に炭化物が付着。(166)鉢A。内底面中央に菊花の刻印。

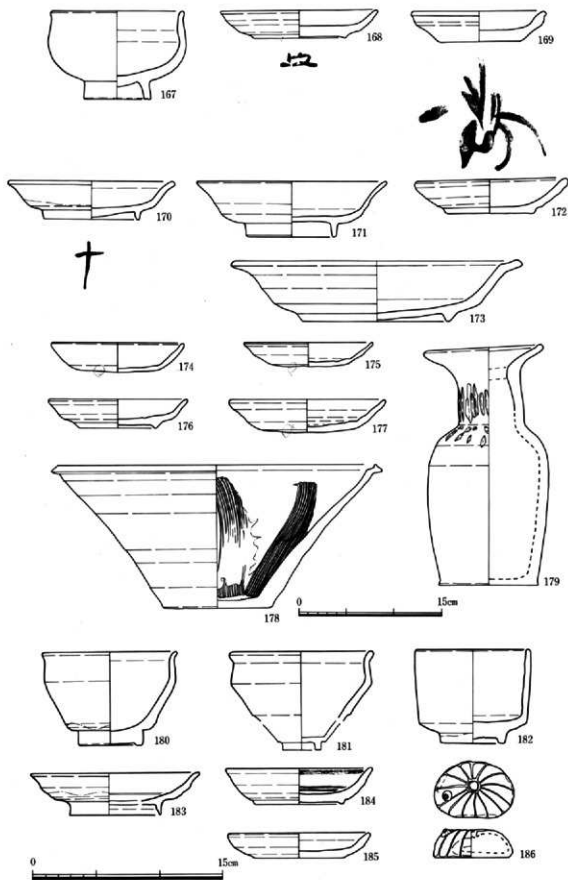
S K 468 (第81図-167~179) (167)は碗。全面に施釉される。(168・176)は皿C。口縁に油煙が付着する。(168)は底部に「皿」と墨書される。(170・171)は皿D。(170)は高台内に「十」と墨書される。(171)は全面施釉。(172)は皿。内面に鉄軸で蘭竹が描かれる。(173)は鉢A。内底面に菊花の刻印。(169)は土器の皿。鴨籠成形。全面に油煙が付く。(174)は土器の皿で手捏成形。口縁内外面を横ナゲする。底面無調製。口縁に油煙が付着する。(175~177)は皿R。全面に油煙が付着する。(178)は鉢B。摺目は磨減し口縁内端が擦減する。(179)は壺。頸部、肩部に線刻が入る。図示し得なかったが、この遺構からS K 415の(121)と同じ軟質陶器や中国製の陶器の青釉櫻花小皿が出土している¹⁰⁾。

S K 407 (第81図-180~186) (180・181)は碗A。共に体部下半は無釉。(180)は器高に比し口径、底径が大きい。(181)は段付天目。(182)は筒状の碗。全面施釉。(183)は皿D。(184)は皿C。内面に鉄線。(185)は土器の皿。(186)は瓶D。透明度の強い薄緑色の釉がかかる。



第80図 IV期の遺物(9)

SE410



第81図 IV期の遺物⑩

SK468・407

(2) IV-2期

この時期の遺構はSK410・442・443・445・455、SE404がある。

SE404 (第82図-187-207) (187・188)は碗B。(187)は疊付のみ無軸である。(188)は体部下半に鎚軸を施す。(189-192)は肥前の磁器である。(189)は内外の一部に網目文が須臾で描かれる。高台内は丸く削られる。疊付のみ無軸である。(190-192)は碗N。(190)は外面山水文、高台内に変形字文が描かれる。(191)は外面草木文、内面花卉文で高台内に「宣徳年製」銘がある。(192)は外面に蔓草文、内面に稲束文、図示していないが高台内に「宣明」銘がある。共に疊付のみ無軸である。(193)は皿F。(194)は上面形が隅丸四角形になる皿である。茶色の粗い胎土をしており、高台内の3カ所に目跡が残る。疊付のみ無軸である。生産地は不明である。(195-197・199-202)は土器である。(195・199・200)は焼成が良く硬質で白色の胎土。(196・197・201)は皿Qである。(196・197)は小型である。202)は皿Rである。(195・199・201)は油煙が付着する。(203)は鉢L。底部は碁筒底となり、内面も施軸。合子。(204)は皿O。裾部内面のみ無軸。(205・206)は鍋D。(205)は吊手が付く部分の口縁がわずかに迫り出す。(206)は底部に脚は付かず口縁端部が内面に突出する。(207)は瓶B。体部下半のみ無軸。

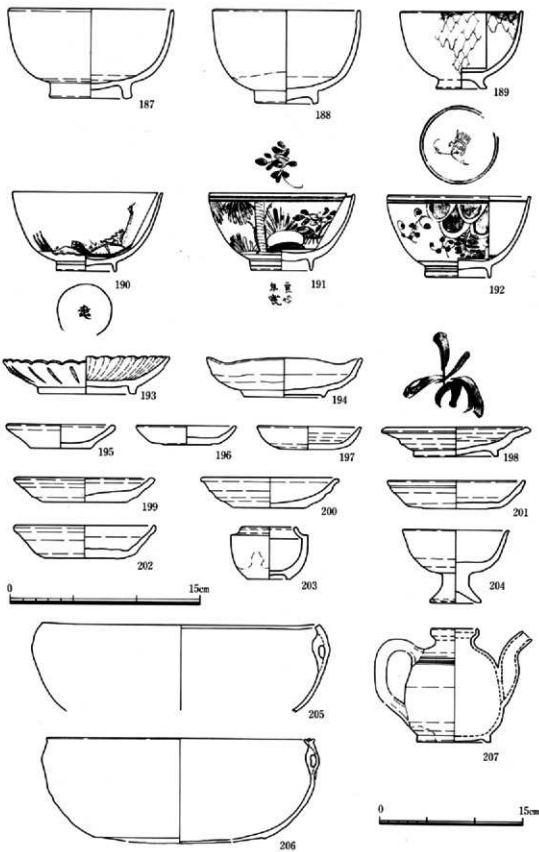
SK455 (第83・84図-208-233) (208)は上下掛分けの碗。疊付の部分のみ無軸。(209)は口縁が外反し体部下半は無軸。(210-214)は肥前磁器。(210・211)は碗N。共に器壁が厚い。(210)は外面に草木文で疊付のみ無軸。(211)は青磁。外面に花草文が陰刻される。高台端から疊付が無軸。(212)は碗。内面は体部上端とそれ以下で軸が掛分けられる。外面下端は無軸。(213・214)は碗R。(213)は外面に梅樹文、松樹文が描かれる。高台端から高台内は無軸。(214)は雷文と草文が外面に描かれる。疊付のみ無軸。(215)は中国産の磁器の小碗。外面に花文が描かれる。疊付は内側に削り取られる。疊付と高台内は無軸。(216-218)は皿C。共に油煙が付着する。(217)は小型の皿。碁筒底である。油煙が付く。(219)は皿A。内面の同心円状の突線は粗である。全体に鎚軸がかかり、胎土は明茶色で締まりに欠ける。(220)は皿F。(221)は内面に鉄軸で蘭竹が描かれる皿である。口縁は受口状になり油煙が付着。体部上端以下無軸。(222)は口縁は輪花になる。疊付の部分に砂粒が付着する。全面に長石軸が施軸される。(223・224)は皿Q。体部上端に稜があり、口縁が直立気味になる。共に油煙が付着。(225)は皿R。(226)は鉢A。内面に鉄軸・緑軸で文様が描かれる。「笠原鉢」と呼ばれるもの。(227)は肥前の磁器の蓋。上面に葛が描かれる。(228)は鉢B。内面の摺目が磨滅し、口縁上端が磨滅する。(229)は型押し成形の鉢。底部の一部が無軸。(230)は鍋D。口縁内外端が突出し上端がへこむ。(231)は体部中央に隅丸方形の穿孔が見られ、上面に細長の穿孔が6カ所見られる。体部下半と底部は磨かれる。内面には煤は付着しないが、手回りになると思われる。無軸である。(232)は甕A。体部下部に焼成の際に重ね焼きした際のへたりが見られる。常滑産(233)は甕。体部中央に穿孔。全面施軸。この遺構では図示し得なかったが、肥前陶器の三島手風の鉢・碗と緑軸皿、京・信楽陶器⁽¹⁾である京焼風の碗、備前の播鉢、SK415・468で見られた歌賀陶器の鉢等が見られる。

- S K 443 (第84図-234~245) (234~237)は碗Bである。(234)は体部下半は無釉。(235)は肥前陶器。灰色の目の細かく締まった胎土で、疊付のみ無釉。(236)は白色の細かい胎土をしており、肥前陶器の呉器手と呼ばれるものである。高台端のみ無釉。(237)は口縁にうのふ釉がかかる。体部下半は錆釉がかかる。所謂、尾呂茶碗。(238・239)は肥前磁器の碗。(238)は外面に紅葉文が描かれる。高台端のみ無釉。(239)は青磁。体部下半無釉。内面中央は蛇の目状に釉が剥ぎ取られる。(240)は口縁に油煙が付着する。(241)は肥前磁器の小鉢。外面に赤・青・緑・紫・金色で上絵付される。(242)は鉢K。上面長円形で外面は花文が型紙摺りて描かれる。髹洗。(243)は筒状の鉢。底部のほぼ中央に穿孔が見られる。体部下半無釉。(244)は鉢I。口縁は剝離が著しく、煤が付着する。体部下半は無釉。(245)は鉢O。肥前磁器で青磁である。外面に山水文が赤・青・緑色で上絵付される。内面、底面は無釉で底面は砂粒がわずかに付き、赤色を呈する。
- S K 410 (第85・86図-246~282) (246~248)は碗B。(246)は白黄色を呈し粗い胎土である。(247)は灰色を呈し緻密な胎土である。口縁の外反は弱い。(248)は外面に草文が呉須で型紙摺りによって描かれる。(249)は碗C。高台内中央がわずかに円形に削り込まれる。外面には錆釉と呉須の型紙摺りて描かれる。京・信楽陶器。(250)は体部下半無釉で口縁の一部が内側にへこむ。(251)は疊付以外の全面に灰釉が施釉され、体部下半には透明釉がかかり口縁に鉄釉が垂れる。(252)は疊付以外に錆釉がかかり、大部分が灰色に発色する。(253・254)は肥前の陶器で所謂、馴毛目唐津と呼称されるものである。疊付のみ無釉。(255)は法量は小さいが碗Cである。京・信楽の陶器。(256)は体部下半無釉の小碗。(257)は碗E。京・信楽陶器で内面に菊花と桐花が錆釉と灰釉で型紙摺りされる。(258・260・261)は肥前磁器。(258)は碗R。外面はルリ釉と錆釉が上下にかけ分けられる。(260)は碗N。大型である。外面に花草文、内底面に五弁花、高台内に「大明成化年製」銘がある。(261)は碗M。外面に草木文、高台内に「太明年製」銘がある。疊付に砂粒が付く。(259・262)は中国製。共に口縁の釉が部分的に剥ぎ取られる。(259)は碗Lで内外面に捻花文。(262)は碗L。内面に網目文、高台内に「太明年製」銘がある。(263)は皿H。内面の受部は直立し、口縁より高い。全面に油煙が付着する。(264・265)は皿D。(265)は内底が円形にへこみ、その周囲が蛇の目状に釉が剥ぎ取られる。全面に油煙が付着する。(226)は皿E。内底面に菊花が錆釉で型紙摺りされる。高台内無釉。(267)は上面形四角形。内底面に紅葉が錆釉で型紙摺りされる。高台内無釉。(268・269)は肥前系磁器の皿。(268)は外面に唐草文、内側面に松竹梅文、底面に竹文、高台内に「太明年製」銘(「明・製」は欠)がある。(269)は皿N。内底面に手書きの丸文。(270)は鉢L。基筒底になっている。(271)は小型の鉢。全面に錆釉が施される。残存部から口縁に吊手があったと考えられる。(272)は青磁の鉢。底面と内面上端以下が無釉。肥前系磁器。(273)は肥前磁器の鉢。外面は青釉がかかる。高台内に呉須で圈線が描かれる。高台端のみ無釉。(274)は筒状の鉢。外面の上下を灰釉と鉄釉とでかけ分ける。灰落しと呼ばれるもの。(275)は内面、体部下半は無釉の鉢。(276)は鉢I。体部下半は無釉、内面は口縁端以下錆釉である。(277)は壺A。(278)は肥前磁器の白磁。高台内の

中央が以外は全面施釉である。また高台内には焼成前に釉を剥ぎ取り書かれたと思われる「右」の字がある。(279)は鍋D。吊手の上部にあたる口縁が突出する。口縁上端が強くへこむ。脚は付かない。(220)は鍋E。口縁上端がへこみ、口縁端部が内側に突出する。(281)は内底面に呉須で花文が描かれる鉢である。壘付のみ無釉。(282)は鉢G。体部には鉄釉で「×」が描かれ、列点が陰刻される。体部下端以下無釉。図示し得なかったが、この遺構からは肥前陶器の三島手風の鉢と緑釉の鉢が出土している。

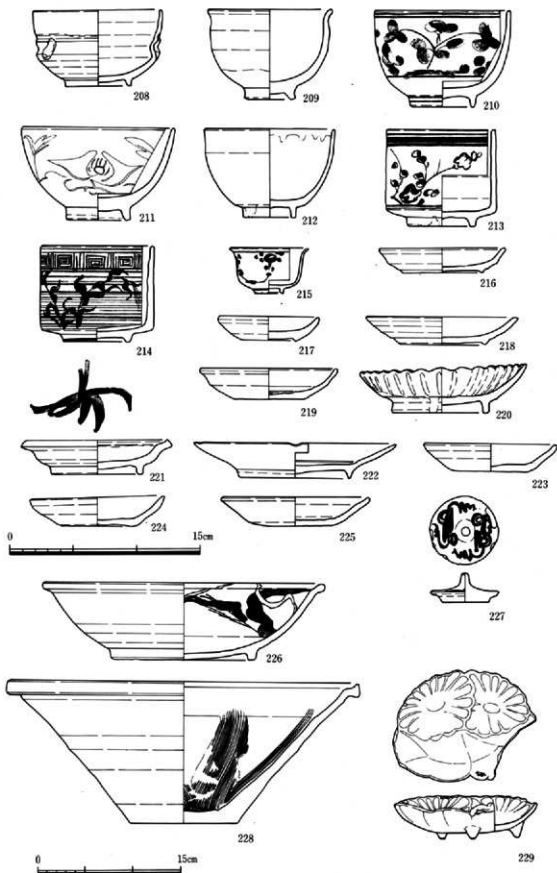
S K 442 (第87・88図-283~315) (283)は碗B。外面に部分的に銅緑釉がかかる。(284)は肥前陶器で京流風の碗である。高台中央が円形に削り込まれ、草書体の「清水」の刻印がある。(285)は京・信楽陶器で外面に草花文が青・緑で上絵付される。壘付と高台内は無釉で、高台内には長円の中に草書体で「清水」の刻印がある。(286)は外面は灰釉が施され部分的に銅緑釉と錆釉がかかる碗である。(287)は肥前陶器の碗で内外面に白泥が塗られる。壘付に砂目が残る。(289)は碗A。高台は付高台。全体的に小型である。(290~292)は肥前磁器。(290)は草花文が描かれ高台内には圈線が描かれる。(291)は外面に鳥木文が描かれる。(292)は外面に花唐草文、内底面に五弁花。高台内に「大明成化年製」銘がある。口縁端部に錆釉が施される。(290・292)は碗Nである。(293・294)は肥前磁器。(294)は内底面に紅葉文が描かれる。(295・296)は皿F。(295)は口縁内面の一部に鉄釉がかかる。(297)は京・信楽の陶器の皿。口縁に吊手が付く。(298・300・302・303)は皿S。(298・300)には油煙が付着する。(301)は京・信楽陶器の皿。上面形は四角形。内面に青・赤・紫・金色で水仙の花が上絵付される。高台内に長円の中に草書体で「清水」と刻印される。(304)は鉢I。無釉。(305)は鉢L。壘付、高台内、受部は無釉。(306)は肥前磁器の皿O。鶴文がコンニャク判で押される。呉須は非常に濁っている。高台内も施釉される。(307)は瓶B。(308)は肥前磁器の蓋。(309)は鉢D。(310)は肥前系の白磁の鉢。壘付のみ無釉である。(311)は鉢O。肥前の青磁である。(312)は鉢B。摺目はわずかに磨滅し底部外縁が擦滅する。(313)は鍋D。口縁端部の内面への突出が著しい。(314・315)は土器の鍋、釜である。この遺構では図示し得なかったが肥前陶器の三島手風の鉢、緑釉の皿が出土している。

S K 445 (第89図-316~338) (316・317)は碗B。(316)は全面施釉。(317)は灰釉の下に呉須で文様が描かれる。(319)は肥前磁器の碗N。外面に青・赤・黄色で草花文が上絵付される。内底面には花文が呉須で描かれ、高台内に「宣明年製」銘。(320)は皿C。器高、高台共に低くなる。(321)は皿I。口縁、外面に油煙が付着。(322~324)は皿D。(323・324)は口縁に油煙が付着。(325)は皿F。(326)は京・信楽陶器の皿。口縁は開き水平に面取られ、4カ所突出する。突出部にはハート型の透かしが設けられる。(327)は中国製の白磁で、内面に菊花が陰刻される。(328)は肥前磁器の皿。高台内には圈線が描かれる。(329)は土器の皿であるが、胎土は白色でやや硬質に焼成される。(330・332)は皿S。(331)は皿R。口縁に油煙が付着。(333)は肥前磁器の瓶。(334)は鉢B。(335)は鉢I。内面にも釉がかかる。(336)は型押し成形の鉢。底部の一部は無釉。脚の端は磨滅する。(337)は無釉の鉢。口縁内面、内底面、脚端部が擦滅し、口縁に煤が付着する。(338)は鍋D。口縁上部がへこむ。



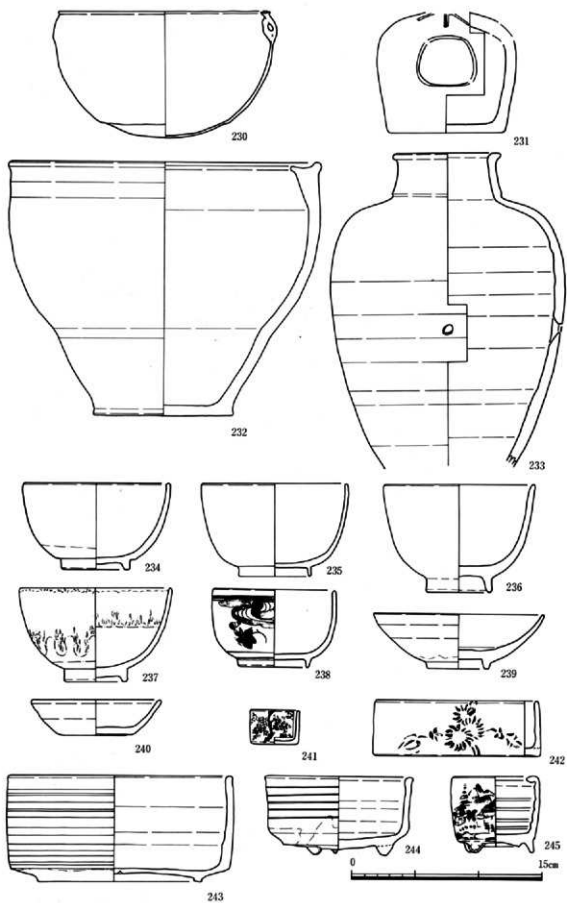
第82図 IV期の遺物印

SE404



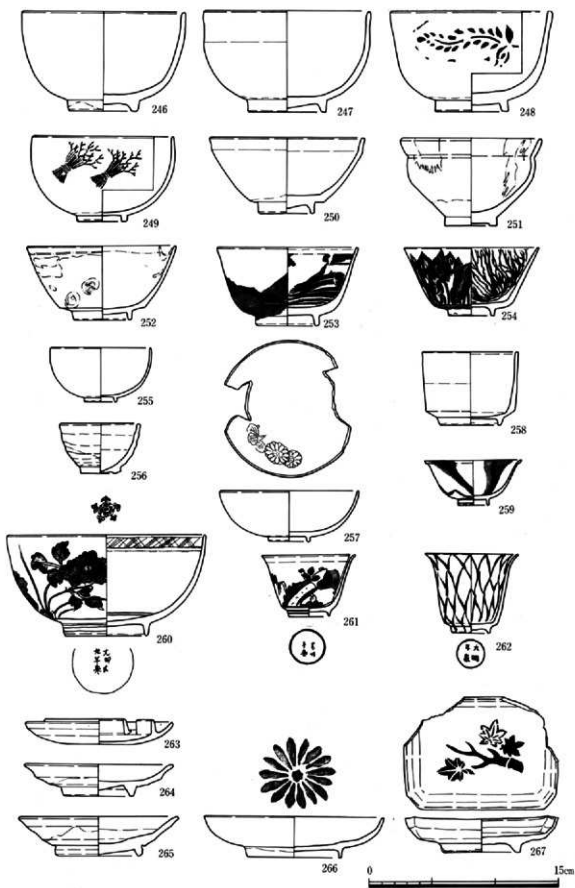
第83図 IV期の遺物(12)

SK455(1)



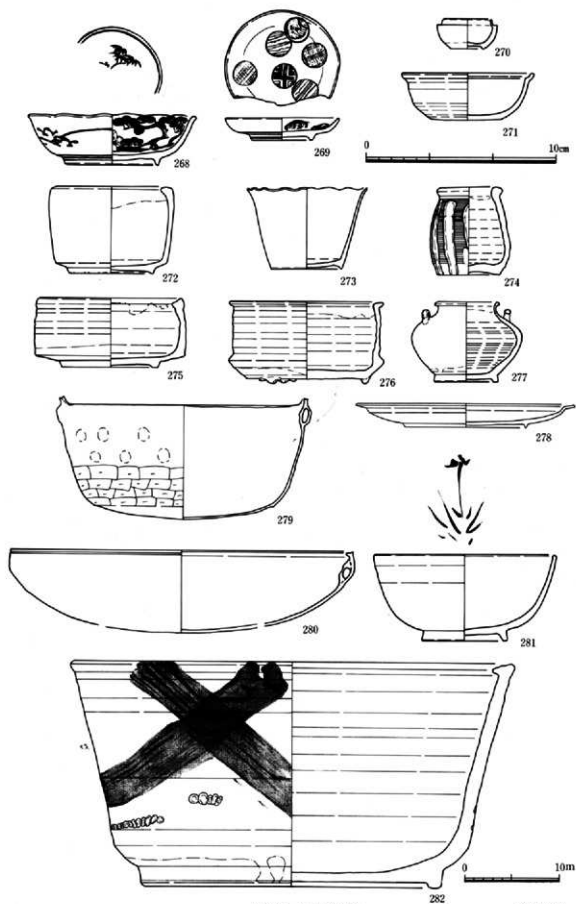
第84図 IV期の遺物03

SK455(2)・443



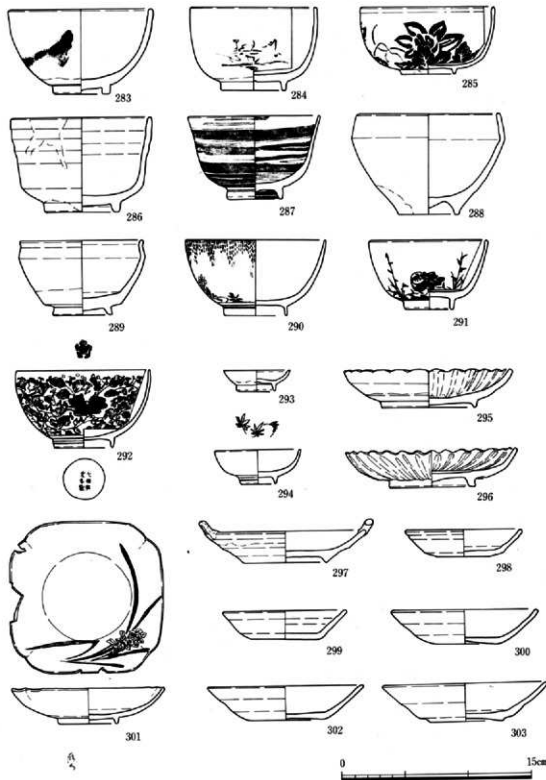
第85図 IV期の遺物00

SK410(1)



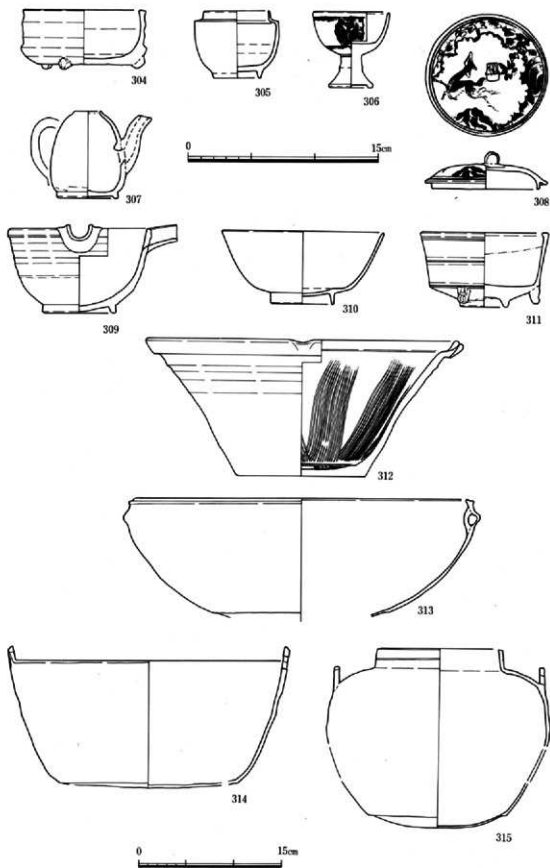
第86図 IV期の遺物(9)

SK410(2)



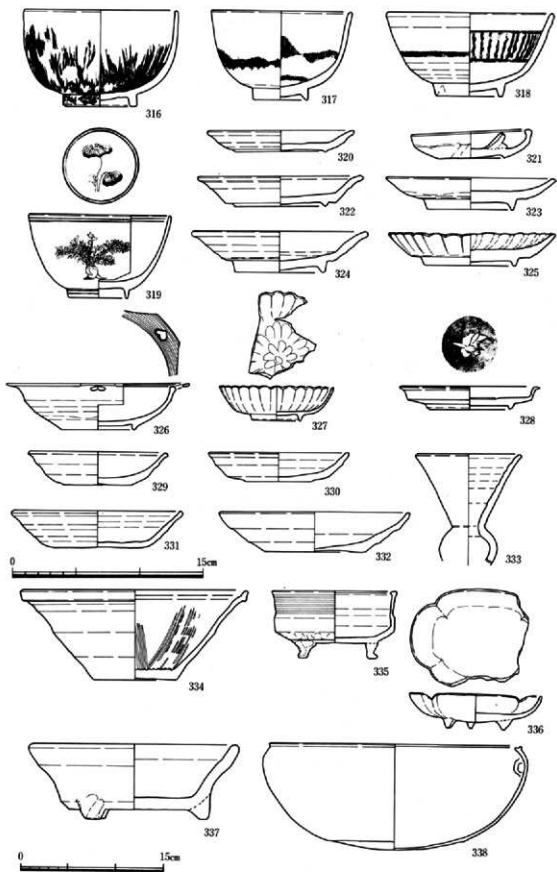
第87図 IV期の遺物06

SK442(1)



第88図 IV期の遺物(7)

SK442(2)



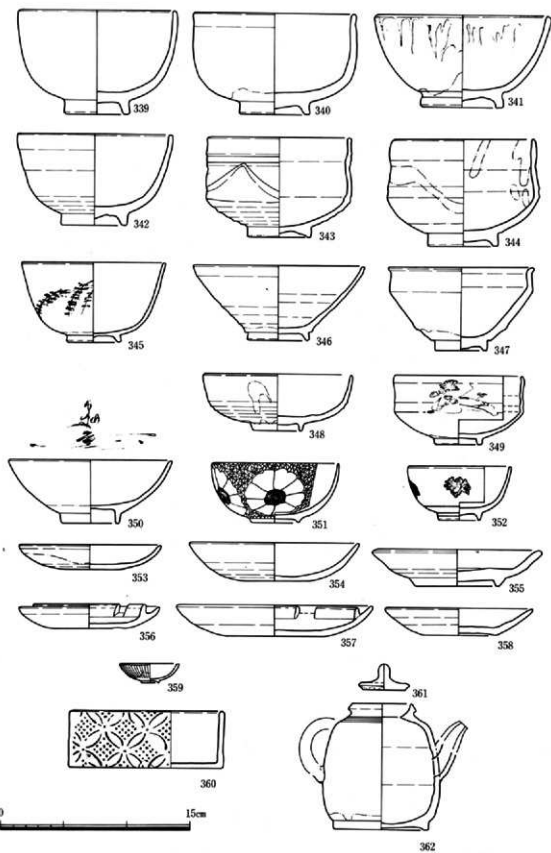
第89図 IV期の遺物⑩

SK445

(3) IV-3期

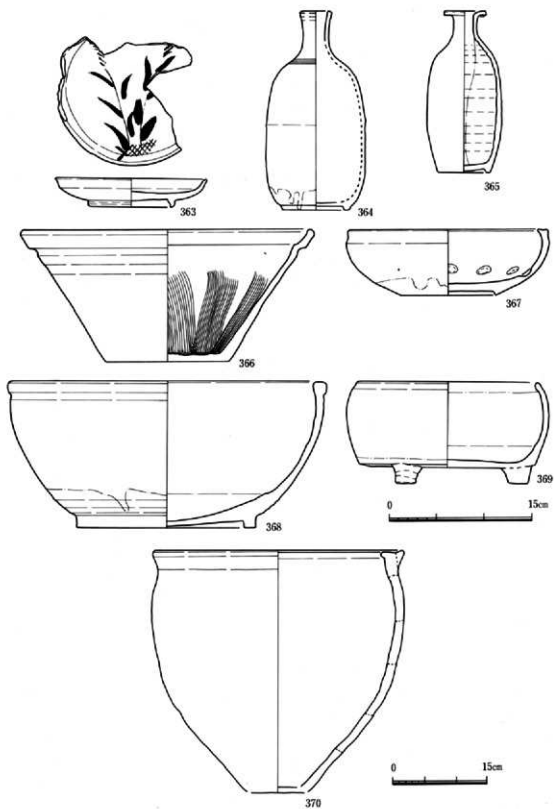
S K 434・444・460・467がこの時期の遺構である。

- S K 460 (第90・91図-339~370) (339~342)は碗B。(340)は体部下半の全面に錆釉がかかる。(342)は畳付のみ無釉。(343)は畳付のみ無釉で、錆釉が施される碗である。畳付は磨滅する。(344)は灰釉に鉄釉をたらず碗である。高台内は頭巾状に削り残される。(345)は京・信楽陶器で碗外面に鉄釉で樹木が描かれる。(346)は灰釉がかけられ、体部下端と畳付のみ無釉。(347)は碗A。畳付が磨滅する。体部下半は無釉。(348)は碗E。畳付のみ無釉で、それ以外に錆釉が施される。畳付の磨滅が著しい。(349)は碗G。京・信楽陶器で外面に鉄釉で文様が描かれる。高台内の中央が円形にわずかに削られる。(350)は碗F。肥前陶器で内底面に鉄釉で山水文の崩れたものが描かれる。高台内は大きくへこむ。(351・352)は肥前磁器。(351)は碗P。外面に菊花が描かれる。(352)は碗N。小型である。外面に桐文がコンニャク判で押される。高台端に砂粒が付着する。(253・254)は皿B。共に外面下半は薄く釉が拭きとられる。(254)の口縁には油煙が見られる。(355)は皿D。(356・357)は皿H。共に受部は直立し口縁とはほぼ同じ高さとなり、受部端は擦滅する。また体部下半は釉が薄く拭き取られる。(358)は皿S。口縁に油煙が付着する。(359)は皿M。肥前磁器で「紅皿」と呼ばれるものである。(360)は鉢J。外面に花文が型紙摺りされる。饗置。(361)は蓋A。(362)とセットになる。(362)は瓶B。(363)は内面に草文を鉄釉で型紙摺りされる皿である。(364)は瓶A。体部下半は釉を拭き取られる。(365)は体部下半の釉を薄く拭き取る広口の瓶である。(366)は鉢B。内面底部近くの摺目が磨滅し、底部外辺が擦滅する。(368)は大型の鉢で口縁内面が煤け、口縁端部の剥落が目立つ。(369)は内面、体部下端、底面が無釉の鉢である。口縁内面には煤が付着する。(370)は甕A。体部下端、内面の器壁の剥落が著しく内面には白色の付着物が目に付く。常滑産
- S K 444 (第92図-371~374) (371)は鉢L。高台は高く付け高台である。(372)は外面に草文が鉄釉で型紙摺りされる鉢である。上面形は六角形。口縁の釉が部分的に剝離する。(373)は鉢L。底部と体部の境に明確な稜をもつ。高台内に「延享二年 親光 巳十月五日」と墨書される。(374)は蓋E。外面に呉須と鉄釉で花文が描かれる。
- S K 467 (第92図-375~383) (375)は内外面鉄釉で、外面に長石釉を垂らす碗。(376)は外面体部上半、内面は鉄釉、体部下半は錆釉。また口縁にはうのふ釉がかかる。「尾呂茶碗」と呼称されるもの。(377)は碗G。体部上半には呉須と鉄釉で文様が描かれる。(378)は皿B。内面に油煙が付着。(379)は型押し成形の鉢である。上面形四角形である。口縁端には鉄釉、内面には一部銅緑釉がかかる。(380)は肥前磁器の皿O。外面に唐草文、内側面に墨弾きで渦巻文と半花文、内底面にコンニャク判で五弁花が描かれる。(381)は皿S。底面に穿孔され、内面の体部と底面の境に窪みが見られる。(382)は鉢J。上面形は長円形である。外面には草花文が鉄釉で型紙摺りされる。所謂、饗置。(383)は瓶。体部が3ヶ所へこむ。
- S K 434 (第93図-384~407) (384)は肥前陶器で「呉器手」と呼ばれる碗。高台端と畳付のみ無釉。高台端の一部分に砂粒が付着する。(385)は碗D。外面に鉄釉で桐文が描かれる。所謂、柳



第90図 IV期の遺物(II)

SK460(1)



第91圖 IV期の遺物(2)

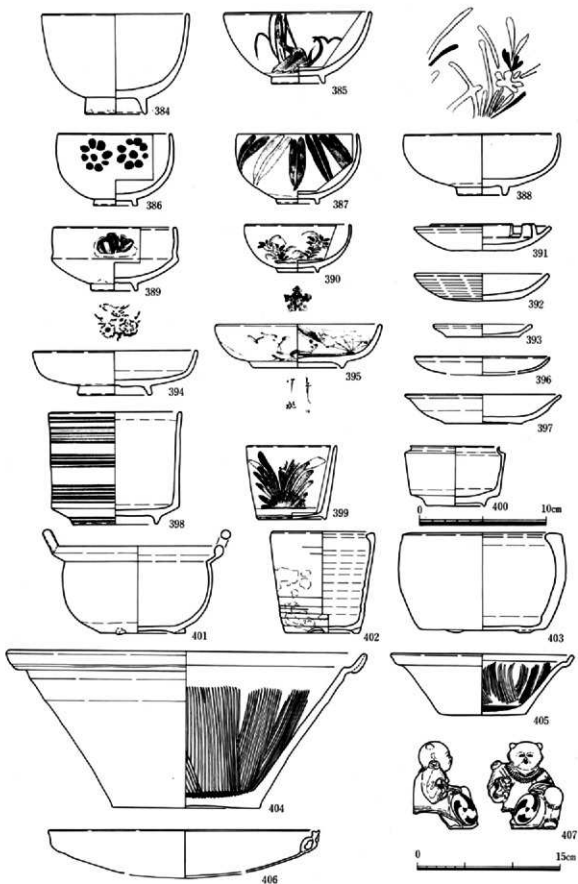
SK460(2)

茶碗。(386)は碗C。外面に呉須で梅花文が描かれる。(387)は碗Cで京・信楽陶器である。外面に赤・青・紫色で竹葉文が上絵付される。(388)は碗E。京・信楽陶器で内面に赤・金色で花文が上絵付される。(389)は碗G。外面に鉄釉で文様が描かれる。高台が焦げる。(390)は肥前磁器の碗P。外面に草花文が描かれる。(391)は皿H。(392)は皿B。口縁に油煙が付着する。(393・396)は土器の皿。共に焼成は非常によく、焼締る。(394)は皿E。疊付のみ無釉で内底面に梅に鶯が鉄釉で型紙摺りされる。(395)は皿O。肥前磁器で外面に唐草文、内側面に扇に梅樹文、内底面にコンニャク判で五弁花、高台内に「大明年製」銘が書かれる。(397)は皿S。(398)は鉢M。口縁が無釉。肥前磁器。(399)は鉢N。肥前磁器で外面に草文が描かれる。(400)は鉢L。底部は突出し高台は低く削り出される。(401)は鍋B。(402)は筒状の鉢。体外外面に鉄釉が斑状にかかる。口縁部は敲打による剝離が著しく、内外面に煤が付着する。(403)は土器の鉢。底部には団子状の低い脚が3カ所付く。外面に部分的に銀彩の痕跡がわずかに残る。江戸の在地の鉢に類する。(404)は鉢B。内面の摺目が磨滅した痕跡は見られない。(406)は鍋E。口縁上端はへこむ⁽¹²⁾。(407)は鉢D。唐子の水注である。この遺構からは、図示し得ないが、京・信楽陶器の瓶Cが出土している。



第92図 IV期の遺物印

SK467・444



第93図 IV期の遺物(四)

SK434

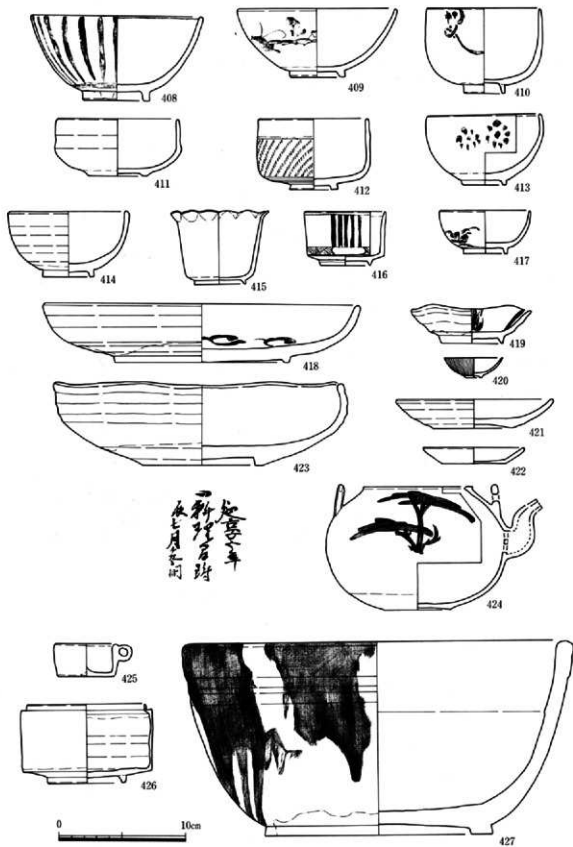
(4) IV-4期

この時期の遺構数はIV期の中で一番に多くまた遺物量も多い。SK418・424・425・428・429・446・453、SD402がこの時期の遺構である。

SK 428 (第94図-408~427) (408・409)は碗D。(408)は外面に鉄軸と呉須で縦線が描かれ口縁内面には鉄軸がかかる。「麦藁手」といわれるもの。(409)は外面に鉄軸で草木文が描かれる。(410)は京・信楽陶器の碗。外面に花文が紫色で上絵付される。(411)は碗G。(412)は碗H。鉄軸と銅軸を上下にかけ分けられる。体部下半には斜め方向に三角形の列点が付く「道茶碗」。(413)は碗C。外面に呉須で梅文が描かれる「梅文碗」。(414)は碗B。(415)は口縁が波状の鉢。(416)は碗R。肥前磁器。(417)は碗P。外面に草花文が描かれる。肥前磁器。(418)は皿J。内面に呉須で唐草文が描かれる。(419)は上面形が四角形の皿。内面に縦方向の文様が呉須で描かれる。(420)は皿M。肥前磁器の「紅皿」。(421)は皿S。(422)は土器の皿。焼成がよく、焼締まる。(423)は上面形が隅丸六角形の鉢。口縁内面、畳付の部分が著しく擦減。底部に「延享七年 御料理間附 辰七月十九日納」と墨書。(424)は京・信楽陶器の甌C。外面に鉄軸で松が描かれる。(425)は鉢K。(426)は鉢L。(427)は大型の鉢。底部の一部を除いて灰釉を施し、口縁から銅緑釉と鉄軸が垂らされる。

SK 418 (第95図-428~441) (428)は肥前陶器の碗。所謂、刷毛目唐津。(429)は碗C。京・信楽陶器で、外面に丸に沢瀉文が金色で上絵付されるが、遺存状態が悪い。高台内中央が丸く削り込まれる。(430)は碗H。外面に鉄軸で格子文が描かれる。(431)は碗B。(432)は碗C。全体的に厚ぼったい。(433)は肥前磁器の碗。外面に花と蝙蝠、内底面に花文が描かれる。(434)は碗L。肥前磁器で外面に草木文、内底面に十字字が描かれる。「広東碗」と呼称されるもの。(435)は皿D。(436)は皿S。口縁に油煙が付着する。(437)は鉢H。(438)は筒状の鉢。外面の一部に上野釉と呼ばれる緑色の釉がかかる。(439)は小型の鉢。(440)は肥前磁器の小型の鉢。外面に葛文が描かれる。底面と口縁内面は無釉。(441)は鉢A。釉の剥落が著しい。図示し得なかったが、他に京・信楽陶器の甌Cが出土している。

SK 425 (第96図-442~462) この土坑は遺構の項でふれた様に、時期の異なる2基の土坑が切り合い、遺物も時期の異なるものが混在する。(442)は碗A。(443)は内外面に白泥で文様が描かれる肥前陶器の碗。高台端に砂粒が付着する。(444)は碗R。肥前磁器である。(445)は碗Q。口縁は外反する。外面に樹木文、内底面には鷲文が描かれる。肥前磁器で「広東碗」。(446)は碗L。外面に花唐草文、内底に「寿」字が描かれる。瀬戸産の磁器。(447)は小型の碗。(448)は外面に鍋が入る小型の碗で肥前磁器。(449)は皿D。(450~452)は皿C。底部の一部を除いて全面に長石釉がかかる。(452)は内側面に鉄軸で草花文が描かれる。(453)は皿H。内面の受部は低い。(454)は皿B。(455)は皿L。外面に唐草文、内側面には花文が描かれる。漆塗した痕跡がある。(456)は皿Q。底部外辺に穿孔がある。(457)は蓋B。口縁端が擦減する。(458)は蓋F。内面に二重の圓線が描かれる。瀬戸産の磁器。(459)は甌E。体部に板状の吊手が付くと思われる。(460)は鉢A。高台内に墨書がある。所謂、笠原鉢。(461)は鉢F。内底面は無釉、体部下端と内面下半には銅軸、それ以外には灰釉の



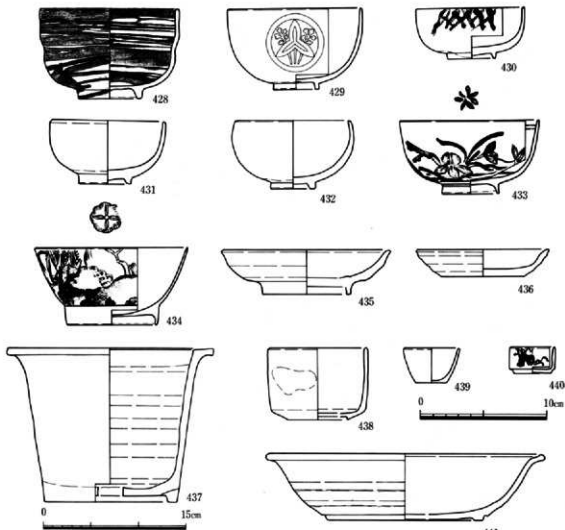
第94図 IV期の遺物03

SK428

上にうのふ釉を垂らす。焼成前の穿孔が2カ所見られる。口縁の断面は炭素を吸って黒く変色している。(462)は鉢で外面に黒色の鉄釉を垂らす。

- S D 402** (第97図-463~474) (463)は碗J。外面に松文が呉須と鉄釉で内底面に梅文が描かれる。釉が全体的に白っぽく発色する。(464)は碗L。外面に花文が描かれる。肥前磁器。(465)は肥前磁器の皿。外面に松文と松皮菱文、内底面に松葉文、高台内に松皮菱文が描かれる。(466)は皿E。大部分は欠如するが、内面に鉄釉で削れた山水文らしきものが描かれる。(467)は皿B。口縁に油煙が付着。(468)は土器の皿。全面に油煙が付着。(469)は大型の皿。口縁内端と内底面中央が擦減する。(470)は蓋F。外面には花唐草文、口縁内面には花菱文、内面中央には花文が描かれる。摘み内にも角銘があるが、大部分が欠如しているため不明。瀬戸産の磁器。(471)は筒状の鉢。口縁内面、底面は無釉。(472)は瓶A。肩部に花文が陰刻され、その上に呉須が垂らされる。(473)は鍋C。体部に筒状の把手が付くと思われる。体部下半の断面は炭素を吸い黒く変色する。(474)は甕A。口縁がY字になる。

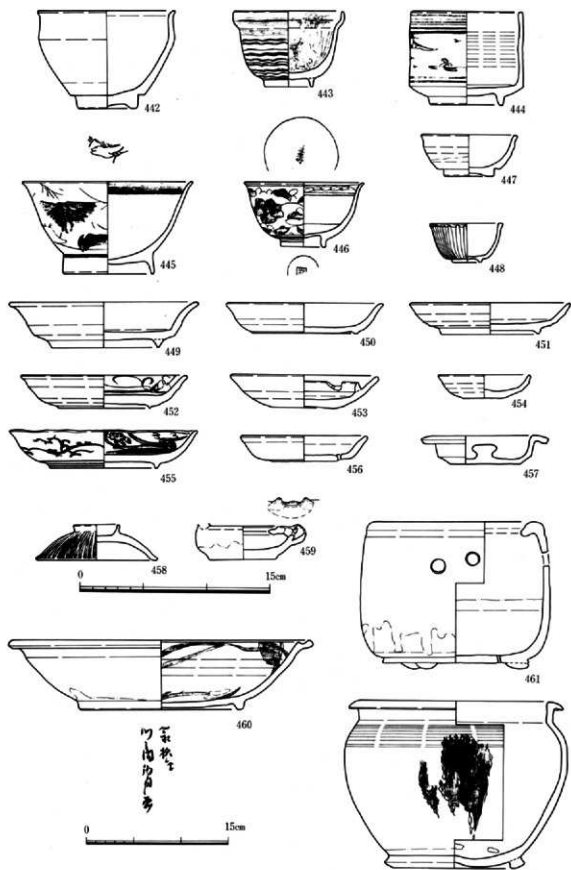
- S K 429** (第98・99図-475~493) (475)は碗J。高台端が擦減する。(476)外面に呉須で葛文が描



第95図 IV期の遺物⑨

441

SK418



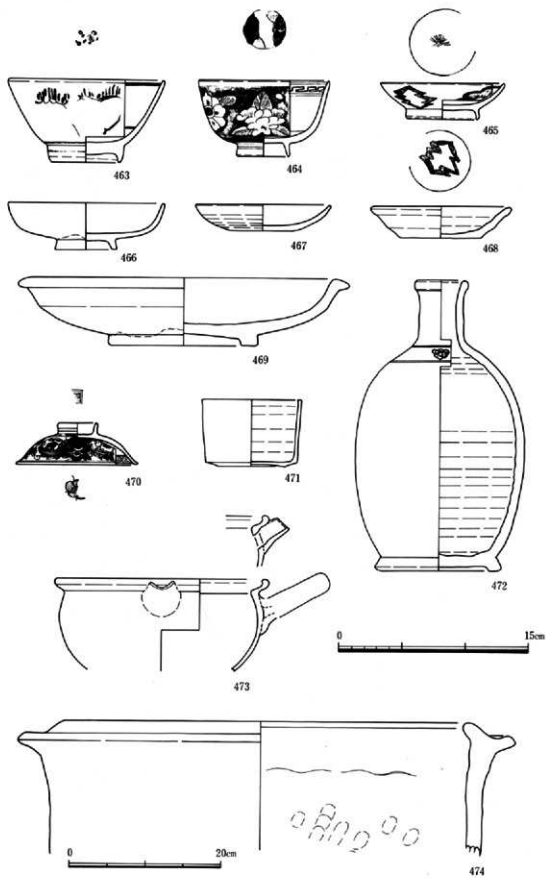
第96図 IV期の遺物③

462
SK425

かれる碗である。(477)は碗I。高台端のみ無釉で、体部外面上半は灰釉の上に長石釉と鉄釉で梅文が描かれ、下端は錆釉、内面は灰釉が施される。(478~480)は肥前磁器の碗である。(478)は外面に唐子と牛が描かれる。(479)は碗O。(480)は碗Q。内外面に捻花文、内底面に蝶文が描かれる。高台の片端は磨減が著しく砥石の代用として使用したと考えられる。(481)は瀬戸産の磁器。内底面に唐子が描かれる。(482)は内底面に花文が型紙摺りされるが釉の発色が悪い。(483)は皿H。受部の切れ込みが狭い。(485)は蓋E。(486)は鉢L。(485)とセットになる。(487)は灰釉とろうのふ釉を上下かけ分ける鉢。口縁は敲打により割離が著しい。内面に煤が付着。(488)は鍋A。板状の吊手に穿孔が1つと2つのものが対になる。内底面は蛇の目状に釉が剥ぎ取られ、炭化物が付着。(489)は土器の鍋で、焼成は非常によく、焼締まる。底部と内底面に炭化物が付着。(490)は土器の鍋で全体に炭化物が付着。(491)は鍋E。口縁上端はへこみ、口縁は両側に突出する。(492)は焼締めの常滑産の鉢。上面形は楕円形である。(493)は瓦質の甕で、掛口の内面に丸に「一」の刻印がある⁽¹⁹⁾。

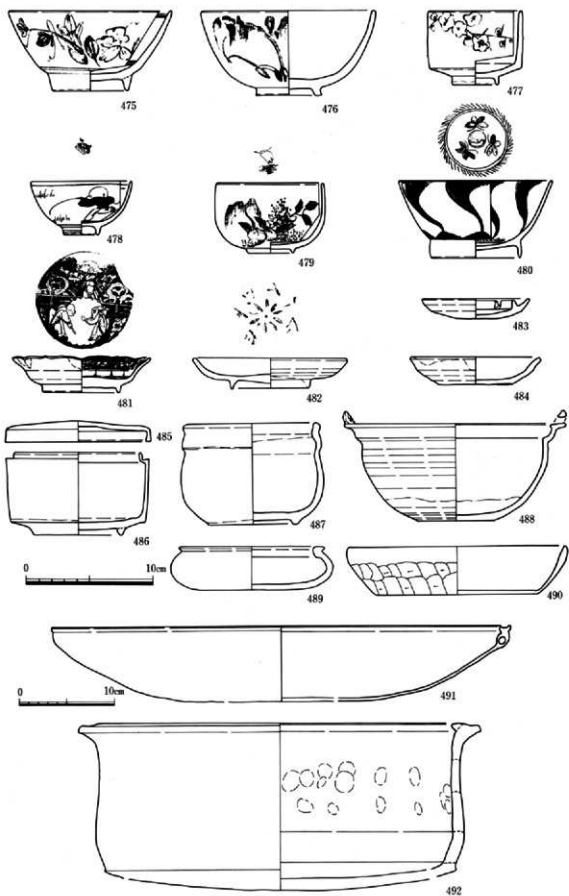
S K 453

(第100~102図-506~547) (494)は鉄釉に長石釉が直にかかる碗。体部下端は錆釉がかかる。体部は数ヶ所へこむ。拳骨茶碗。(497・98)は鉢J。「広東碗」といわれるもの。(498)は高台端が磨減。外面の文様は型紙摺り。(499)は内外面型押し成形の碗。外面には花唐草文が型押しされる。内外面に部分的に白泥が塗られる。生産地は不明。(500)は碗L。内底面に花文が描かれる。焼継が見られ高台内に朱で「二六二」と書かれる。瀬戸産の磁器。(501・502)は肥前磁器の碗。(502)は碗P。外面に二重網手文、内面に菊花文が描かれ、内面に「山花洛□」、外面に「□やたんせん□」と文字が上絵付される。(503)は碗L。内外面に花文が型紙摺りされる。瀬戸産の磁器。(504)は碗O。外面はルリ釉が施され、内面は口縁に花菱文、内底面に松竹梅文が描かれる。肥前磁器。(505)は碗P。内外面に菊花文が描かれる。焼継がみられる。高台内に朱書きの痕跡。肥前磁器。(506・507)は碗Q。「広東碗」と呼称されるもの。(506)は肥前系磁器。(507)は瀬戸産の磁器。(508)は碗N。大型の碗で外面に牡丹文、内面の口縁に花菱文、内底面に十丁字が描かれる。肥前磁器。(509)は碗E。内底面に鉄釉で松が描かれる。(510)は内側面に半菊文が呉須、内底面に梅文が鉄釉が描かれる皿。(511)は土器の皿。焼成が良く、焼締まる。(513)は皿B。口縁に油煙が付着。(514)は皿G。上面形は四角で菊花が型押しされる。口縁と内面の一部に鉄釉を垂らす。(516)は卸皿で全面に錆釉。(517~520)は肥前磁器。(517)は皿O。外面に唐草文、内底面に松竹梅文、内底面にコンニャク判の五弁花が描かれる。(518)は内面に干網文が描かれ、口縁端部に錆釉がかかる。(520)は外面に花唐草文、内面に花文、高台内には二重方形枠に変形字が描かれる。(506)とセットになると思われる。(521)は浅い鉢である。左右に灰釉とろうのふ釉をかけ分けられ、内面に鉄釉で干網文が描かれる。脚端は磨減する。(523)は小型の鉢。鍋Bが小型になったものであるが、火を受けた跡はない。(524)は筒状の鉢。口縁は敲打のため割離が著しい。(525)は鉢H。(526)は鉢E。外面に呉須で花唐草文が描かれる。(527)は鉢N。外面には楼閣山水文、口縁内面に花菱文、内底面に楼閣文が描かれる。底面は蛇の目状に釉が剥ぎ取られる。肥前磁器。(528)は鉢P。瀬戸産の磁器。底面に「文



第97図 IV期の遺物⑥

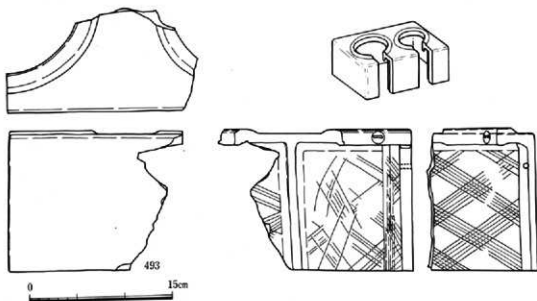
SD402



第96図 IV期の遺物類

化八年 十二月 八日出来」と墨書。(529)は土器の鍋。内面に吊手の痕跡はみられない。内底面と口縁外面に炭化物が付着。(530)は蓋F。内外面に梅花が型紙摺り。瀬戸産の磁器。(531)は束燗。(533・534)は皿Oでともに肥前磁器。仏飯器。(535)は鉢B。口縁外端に擦滅痕が見られる。(536)は鉢C。高台内が無釉である。(537)は浅めの鉢。無釉で内面に炭化物が付着。(538)は大型の皿で、内面に具須と鉄釉で笹が描かれる。(539)は蓋D。端部が磨滅。(540)は鍋C。(539)とセットになる。(541)は鍋E。吊手が退化している。(542)は蓋。(543)とセットになる。(543)は体部に鉄釉で笹文が型紙摺りされる。(544)は鉢G。外面は灰釉に鉄釉が垂らされ、文様が陰刻。(545)は瓶C。口縁端部が擦滅する。(546)は無釉の常滑産の鉢。(547)は瓶A。体部が3カ所へこむ。

S K 446 (第103・104図-548~584) (548)は碗K。外面に鉄釉と灰釉で梅文が描かれる。(549)は碗H。外面は灰釉と鉄釉が上下にかけ分けられる。(550)は碗H。灰釉に鉄釉の線が描かれる。(551)は碗J。外面に具須で松竹梅文が描かれる。内底面には崩れた梅文が描かれる。所謂、広東碗。(552~555)は瀬戸産の磁器。(553)は碗L。(554)は蓋F。外面に丸に揚羽蝶が描かれる。摘み内に朱で「末」と「五面五」と書かれ焼継が見られる。(555)は外面に丸に揚羽蝶が描かれる碗である。(554)とセットになる。(556・557)は肥前磁器の碗。(556)は外面に兔と紅葉が、内底面に十丁字文が描かれる。(557)は碗O。外面に唐子と山水、内底面に笠が描かれる。(558・561)は碗Lで瀬戸産の磁器である。(559)は肥前磁器で外面に山水文、内底面に荒織文が描かれる。(560)は陶器の碗で、外面は暗灰色ににごった具須で竹文が描かれる。(562)は皿D。体部下半の稜が不明瞭になる。(563)は陶器の皿で体部外面と内面に白泥が塗られる。(564)は皿H。内面の受部がかなり低くなる。(565)は皿M。肥前磁器で口縁端部が広く面取られる。(566)は肥前磁器の皿。外面に花文、口縁内面に雷文、内底面に花文、高台内に変形字が描かれる。焼継が見られる。(567)は上面四角形の型



第99図 IV期の遺物⑧

SK429

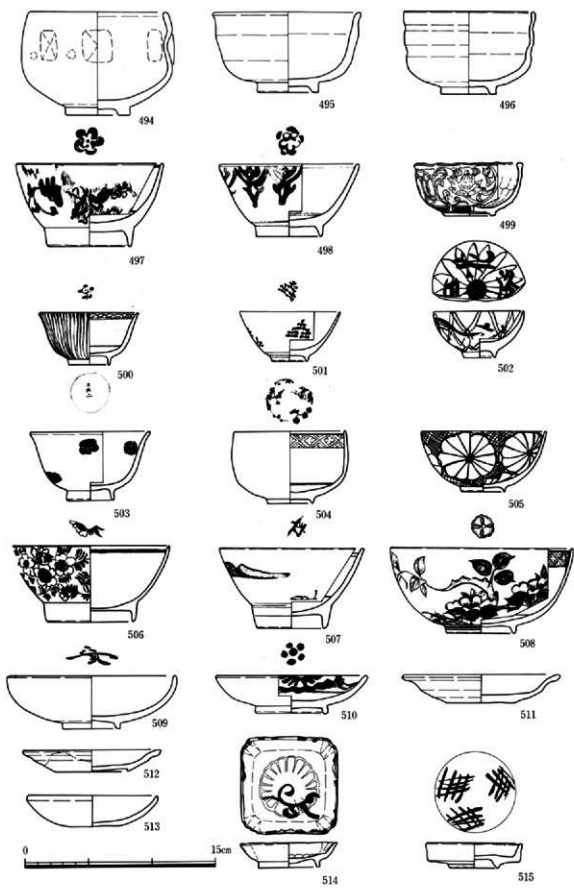
押し成形の青磁の皿である。生産地は不明。(568・569)は瀬戸産の磁器の蓋。共に葵が描かれる。(569)は蓋F。(570)は皿K。外面に唐草文、内側面に花唐草文、内底面に文花が描かれ、高台内に「大明年製」の銘があり、朱で「二而〇」と書かれる。焼継がみられる。肥前磁器。(571)は皿O。体部外面に胡唐草が描かれる。肥前磁器。(572)は陶器の鉢で内外面に灰釉に緑釉を垂らし、鉄釉で外面で矢・笠・格子・菱繋ぎが、内面に瓢箪と水車が描かれる。(573・575)は鉢B。(573)は使用の痕跡はみられず、内面に団子状の目痕が残る。底部は円形に穿孔される。(575)は内底面の摺目が磨滅する。(574)は鉢C。(576)は鉢D。(577)は鍋A。内底面は蛇の目状に釉が剥ぎ取られ、炭化物が付着。(578)は鍋B。内面は全面に鉄釉がかかり三足が付く。(579)は大型の鉢。体部に円形の穿孔が施される。(580)は壺A。(581)は瓶で体部が3カ所へこむ。(582)は瓶で、上下を灰釉と鉄釉でかけ分ける。(583)は壺で肩部に吊手が3カ所付く。(584)は瓶C。注口先端は一度割れたものを擦って再び面取られる。図面右側の吊手は欠損しており、代用としてその上に穿孔される。また左側の吊手には輪状の銅製の針金が装着されている。体部下半に炭化物が付着。

S K 424

(第105-111図-585-717) (585)は碗B。釉は黄色味をおびる。(586-589)は碗H。(587)は呉須で山水文と思われるものが描かれる。(588)は鉄釉で山水文の略されたものが描かれる。(589)は灰釉と鉄釉が上下かけ分けられる。(590)は「拳骨茶碗」で、体部中央が数カ所へこむ。体部内外面に鉄釉がかかり、下半は無釉。高台内に鉄釉がかけられる。(591・592)は碗G。(592)は畳付以外全面に施釉され、左右を鉄釉と灰釉でかけ分けられる。(593・594)は碗K。(593)は畳付は非常に磨滅し、口縁も磨滅し剥離が著しい。(594)は灰釉に銅緑釉がかけられ、鉄釉で五徳・柄杓が描かれる。(595)は内外面に灰釉がかかり底部のみ無釉。(596)は畳付以外に灰釉がかかり、鉄釉で口縁が緑どられ、梅花が描かれる。(597)は畳付以外に灰釉がかかり、口縁に銅緑釉が垂らされる。鉄釉で口縁が緑どられ、菱繋ぎ・梅花・格子が描かれる。(598)は体部下端は無釉で、体部の大部分は灰釉の上に白泥が塗られる。(599)は、「小杉茶碗」で、外面に鉄釉で若松が描かれる。(600)は碗J。外面に梅文が呉須で型紙摺りされる。畳付の磨滅が著しい。所謂、広東碗。(601-603)は小型の碗。(601)は砂粒が多い胎土である。生産地不明。(602)は高台に三角形の切れ込みが1カ所みられる。生産地不明。(603)は碗B。釉が全体的に白っぽく発色する。(604)は安南写しの碗。内外面は呉須で文様が描かれ内底面には「正」と書かれる。内底面は輪状に釉がはぎとられ、高台内は鎊釉を施す。(605-612)は碗L。(605)は肥前磁器で外面に雲龍文が描かれる。(606-612)は瀬戸産の磁器。(606)は外面に花唐草文、口縁内面に花菱文が描かれ、内底面に「萬曆年製」、高台内に二重方形枠に変形字が書かれる。(607)は外面に花唐草が描かれ、焼継がみられる。(608)は釉が白色に発色し、呉須の発色状態も悪い。(612)は外面に半菊文と福寿文が描かれる。呉須は鮮やかな青色に発色。(613)は肥前磁器。全面に釉がかかる。外面に丸文、三ツ若葉文が描かれる。焼継がみられる。(614・616・617・620)は碗Lで全て瀬戸産の磁器である。(616)は内外面に赤・緑色で上絵付される。(617)は外面に觀世水文が描かれる。釉は白色に発色し呉須も濁る。(615)は外面に割絵花唐草が描かれ、内底面

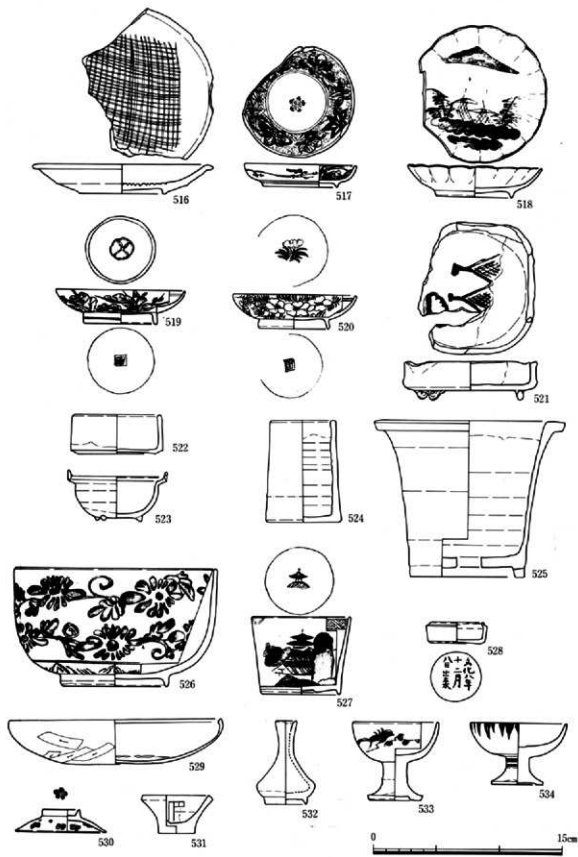
に「開運」と書かれる。高台内は無釉。胎土は灰白色を呈し、生産地は不明。(618)は口縁が波状をなすやや深い碗。瀬戸産の磁器。(619)は碗Qで瀬戸産の磁器である。外面に山水文が描かれる。所謂、広東碗。(621)は碗L。(622)は碗I。外面に菊花が呉須で描かれる。(623)は碗M。口縁が波状になる。内底面に松に鳥が描かれ高台内に二重方形枠で「貴」と書かれる。瀬戸産の磁器。(624・625)は碗Lで共に瀬戸産の磁器。(626)は瀬戸産の小型の碗。(627・628)は共に瀬戸産の磁器。(628)の呉須は鮮やかな青色に発色する。(629)は皿M。肥前磁器。(630)は外面に鍋が入る小型の碗。肥前磁器。(631)は皿B。(632)は無釉の皿で、内底面に宝珠が墨書される。(633)は内面と口縁外面の一部に灰釉が施される。(634)は皿H。(635)は底面が基筒底になる陶器の皿。体部下半のみ無釉。(636)は皿B。口縁が外反する。(637)は皿B。口縁端に油煙が付着する。(638)は瀬戸産の磁器の皿。体部下半は無釉。(639)は陶器の皿で基筒底になる。体部下半無釉。(640)は陶器の皿で、高台を除く全面に白泥が塗られる。(641-643)は皿H。共に受部は低い。(642)は体部下半のみ無釉で他は灰釉がかかる。他の皿は全て鉄釉が施される。(643)の口縁の一部には油煙が付着。(644・645)は皿E。共に内底面に鉄釉で文様が描かれる。(644)の高台内には「大」、(645)の高台内には「成佛」と墨書される。(645)の口縁は剝離が目立ち高台端が磨滅する。(646)は陶器の皿で内底面に松竹梅文が鉄釉で型紙摺りされる。(647)は陶器の皿で外面に唐草文の省略されたもの。内側面に半菊と草花文、内底面に梅文の省略されたものが描かれる。畳付以外は全面施釉で高台内中央がわずかにへこむ。(648)は全面施釉の陶器の皿。内底面に鹿が陰刻される。(649)は陶器の皿で長石釉が畳付以外全体にかかり、鉄釉で内底面に五徳・火箸等が描かれ口縁は鉄釉で縁どられる。(650)は体部下半以外全面に銅緑釉がかかる皿。(651)は体部内側面に鉄釉で渦巻文が描かれる「馬目皿」。(652-658)は瀬戸産の磁器の皿。(653)は上面形が四角形の皿で型押成形。内側面に花と瓢箪、内底面に鳥が陽刻され、呉須がその上から垂らされる。(654)は上面形が梅花状になり内底面に海老が呉須で描かれる。(655)は皿L。外面と内側面に唐草、内底面に松竹梅文が描かれる。高台内には蛇の目状に釉が剥ぎ取られ、無釉の箇所は朱書きされるが、判読不明。焼成がみられる。(656)は皿K。(655)と同様に高台内中央が削り込まれ、その周囲が蛇の目状に無釉になる。無釉の箇所には4文字墨書されるが判読不明。(658)は陶器皿Hと同じ形の磁器皿である。(659-662)は土器の皿でいずれも焼成がよく焼締まる。(661)は皿S。(663)は皿L。内面に山水松蘭文が描かれる。高台内中央は丸く削り込まれ、その周囲は蛇の目の状に無釉。口縁端部には銅釉が塗られる。(664)は鉢K。(665)は体部上部に棒状の把手が付く鉢。(666)は筒状の鉢で内底面に黒色の付着物がみられる。(667)は小型の鉢D。高台内に「大□□」という墨書がみられる。(668)は全面に緑釉が施される鉢である。胎土は白褐色で軟質。(669)は陶器の鉢。内面は擦滅し緑色の付着物がみられる。(670)は陶器の鉢で内面は鉄釉が全面施釉され、擦滅した痕跡はみられない。(671)は瀬戸産の磁器の鉢。(672)は白色の粘土が練り込まれる鉢。体部下端以外に灰釉が全面にかかり口縁に鉄釉が垂れる。(674)は小型の鉢B。内底面の摺目が磨滅する。(675)は瀬戸産の磁器の鉢。底面は無釉で三足が付く。(676)は

陶器の小型の鉢。底面は無釉である。合子。(677)は鉢L。底面外縁に判読不明の文字、高台内に「力□」と墨書される。(678・679)は瀬戸産の磁器。(678)は上面形が六角形で型押成形される。内側面には寫文が陽刻される。(679)は鉢O。(680)は乗獨で底面に穿孔がみられる。(681)は瓶E。体部上端に緑釉が垂らされる。体部に欠損するが、板状の吊手が付く。注口端に油煙が付着。(682)は皿O。瀬戸産の磁器で体部に半菊が赤絵付される。(683)は壺A。(684)は小型の瓶。肩部に桜花が印刻され、その上に貝須が垂らされる。(685)は瓶D。菊花を型押成形する。水滴。(686)は蓋C。受部内に「大道寺 手□□附 己七月十九日」と墨書される。(687)は蓋D。上面四角形。外面に草文が陰刻され、その中に長石釉が刷り込まれる。(688)は陶器の蓋。棒状の握みが2つ付く。全体的に長石釉がかかり、部分的に銅緑釉が施される。受部端は鉄釉で緑どられ、外面には鉄釉で棒・菱雲・格子等が描かれる。(689)は蓋。焼成時に海藻を付けて焼く、所謂「藻掛け」をしており外面が一部赤く変色する。(690)とセットになる。(690)は急須。(689)と同様に「藻掛け」が体部に見られる。筒状の把手が付きその基部に楕円の枠に「長二」と印刻される⁽¹⁴⁾。(689・690)は共に常滑産。(691・692)は京・信楽陶器。(691)は蓋。外面に灰釉がかかり、鉄釉で幾何学文が描かれる。(692)とセットになる。(692)は体部下半は無釉で上半は鉄釉で亀甲文と鶴が描かれる。体部下半は炭化物が付着し剝離が著しい。(693)は卸皿。摺目は磨滅する。板状の把手が付くと思われる。(694)は大型の皿である。(695)は陶器の皿。外面は長石釉が全体的に施釉され、鉄釉で圏線が描かれる。内面は柿釉が全体的に施され、長石釉と鉄釉で花が描かれる。(696)は瓶A。体部下端は釉が軽く拭きとられる。(697)は瓶。「高田貧乏徳利」と呼称されるもの。(698)は瓶。「べこかん徳利」と呼称されるもの。(699)は瀬戸産の磁器の瓶である。底面は無釉である。(700)は肥前磁器。壺付のみ無釉で砂粒が付着する。外面には竹と笹が貝須で、笹と山形が赤色に上絵付される。底部に墨書があるが遺存状態が悪く判読不能。花瓶。(701)は陶器の鉢。口縁内面に鉄釉と柿釉で笹と雲が、内底面に花文が鉄釉で描かれる。(702)は蓋C。外面に貝須で草花文が描かれる。(703)とセットになる。(703)は筒状の鉢。体部に鉄釉で玉が描かれる、口縁端部は磨滅する。(704)は陶器の植木鉢である。底部に穿孔が見られ、脚には切れ込みが3カ所見られる。内外面は赤・黄・緑・桜色で上絵付される。堅く締まった灰色の胎土である。万古焼と思われる⁽¹⁵⁾。(705)は無釉の描鉢で注口の内面に山形枠に「さ」の刻印が見られる。摺目は内底面外縁までかかる。昇指針である。⁽¹⁶⁾(706)は針B。内面に山形に「た」の刻印が見られる。摺目は内底面のものが磨滅する。(707)は鍋B。体部下半は無釉で、その他の内外面には長石釉がかかり口縁には銅緑釉がかかる。口縁は鉄釉で緑どられ外面には鉄釉で波状文と烈点文が描かれる。(708)は蓋D。受部端が磨滅する。(709)とセットになる。(709)は鍋B。注口が付く。(710)は鉢F。体部外面のほとんど内面上半に灰釉がかかり、口縁からうのふ釉と上野釉が垂らされ、底部に銅釉が施される。口縁からの「U」字の切れ込みは端部の剝落が著しく、内面の無釉の部分に炭化物が付着する。脚に対応して底部に孔が3つある。(711)は陶器の鉢。外面は灰釉を体部下端まで施し、口縁からうのふ釉と上野釉が垂らされる。



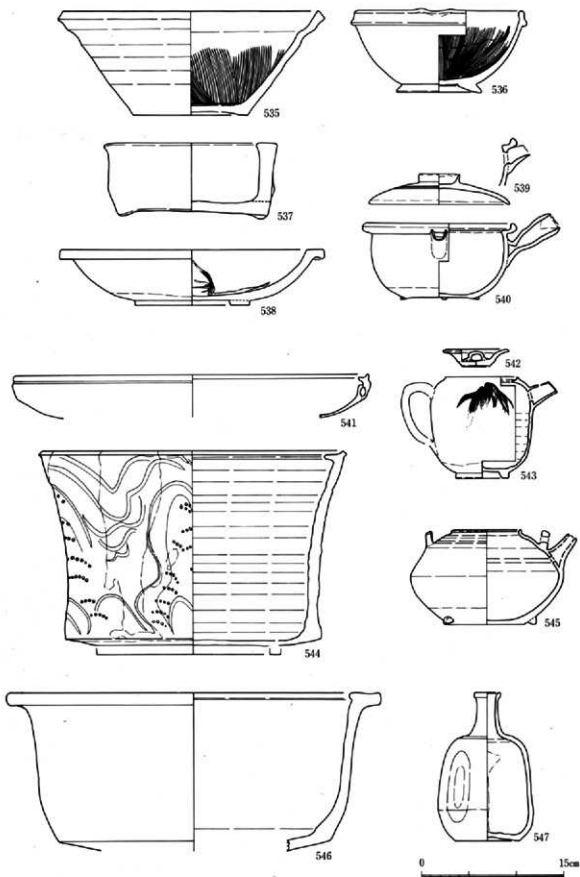
第100図 IV期の遺物(1)

SK453 (1)



第101図 IV期の遺物⑧

SK453 (2)



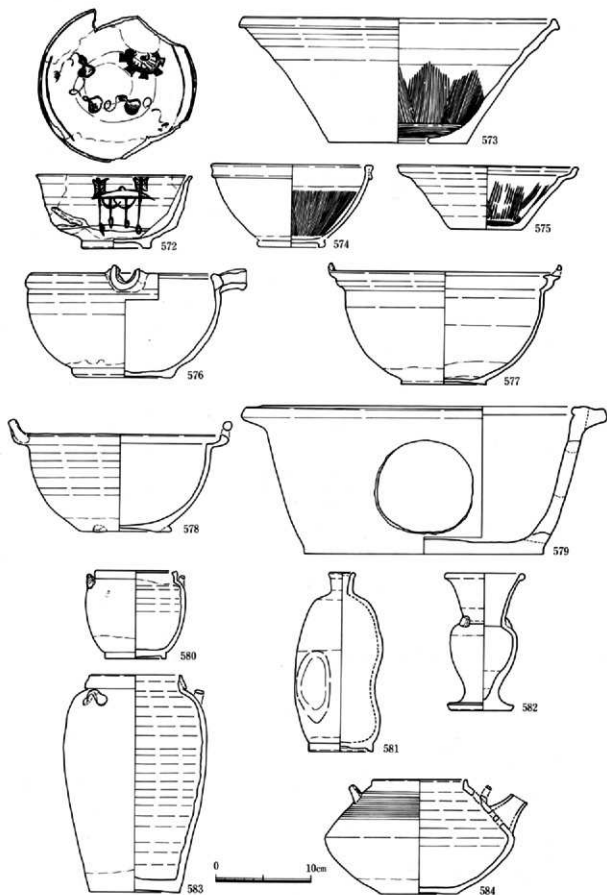
第102図 IV期の遺物③

SK453(3)



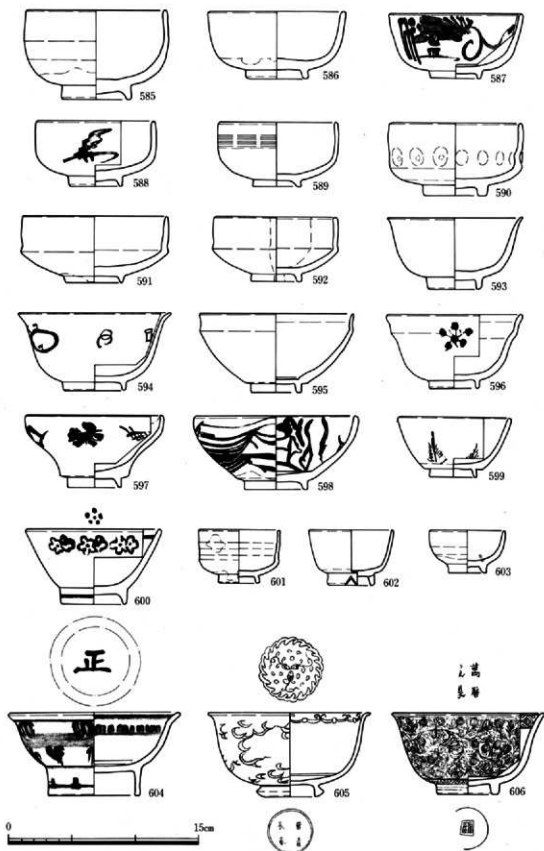
第103図 IV期の遺物②

SK446 (1)



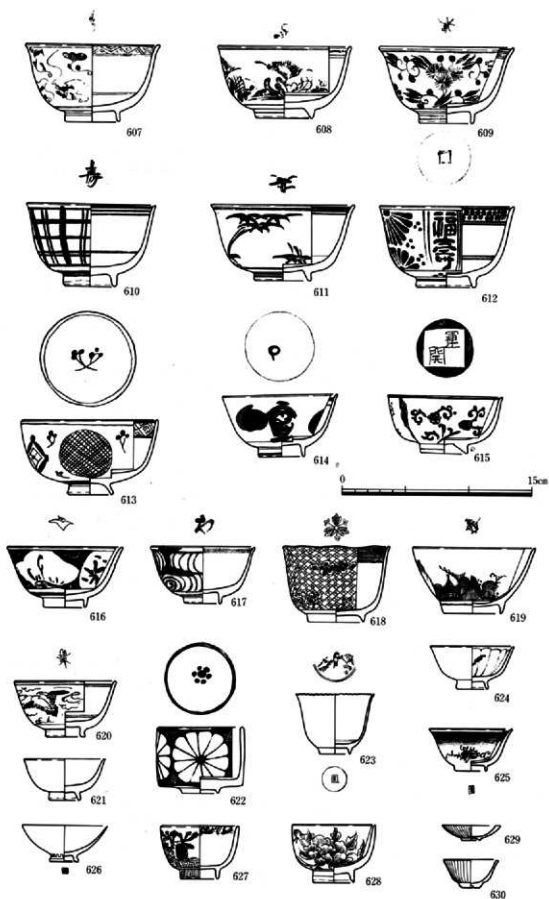
第104図 IV期の遺物(2)

SK446 (2)



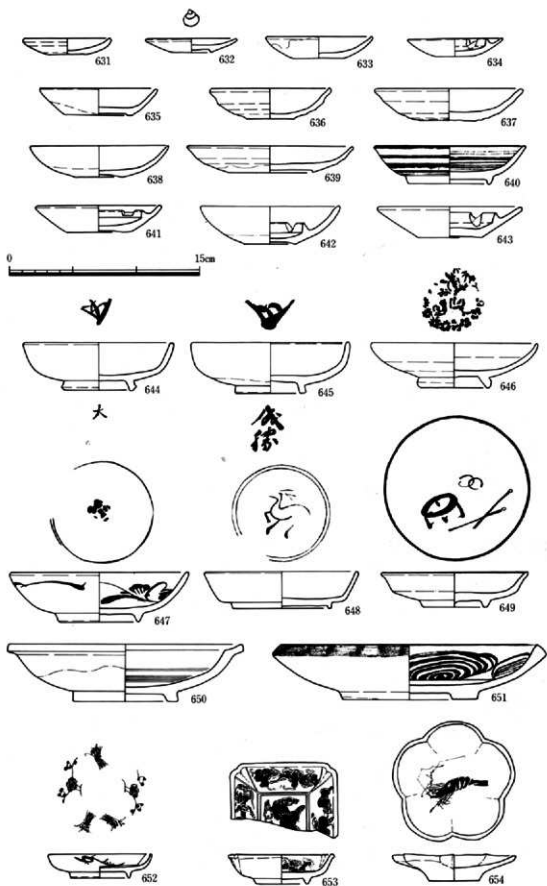
第105図 IV期の遺物90

SK424 (1)



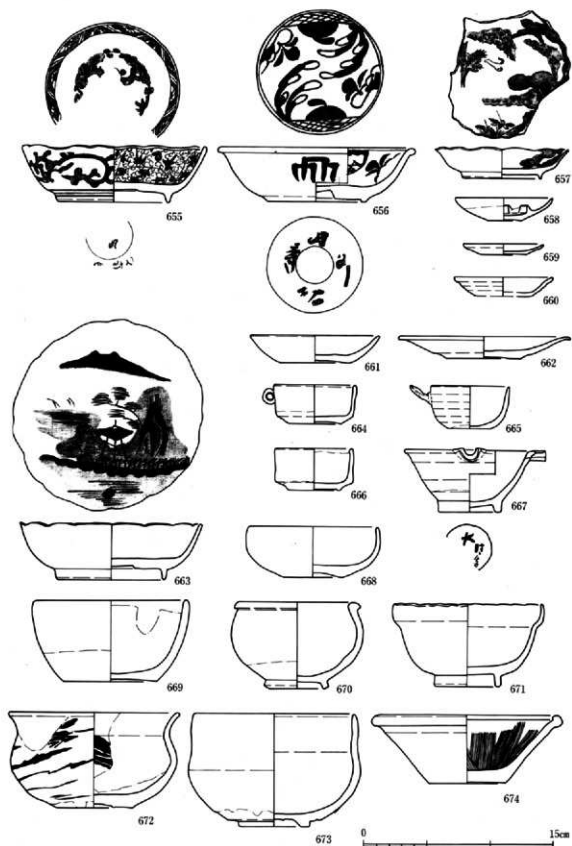
第106図 IV期の遺物⑨

SK424(2)



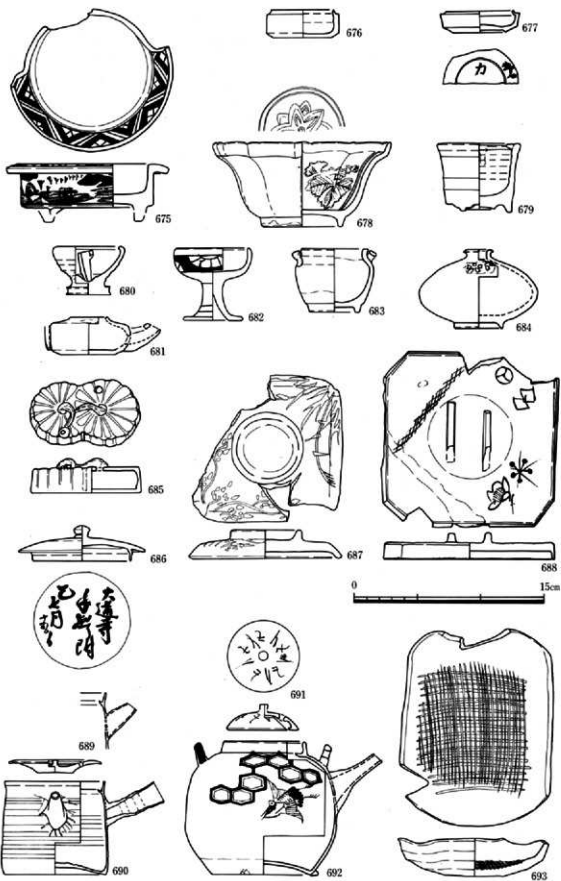
第107図 IV期の遺物06

SK424(3)



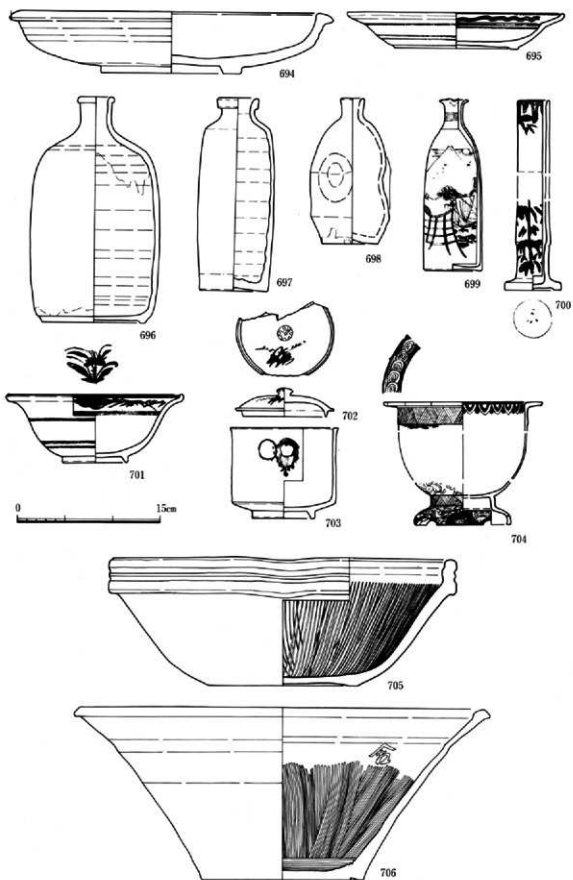
第108図 IV期の遺物07

SK425(4)



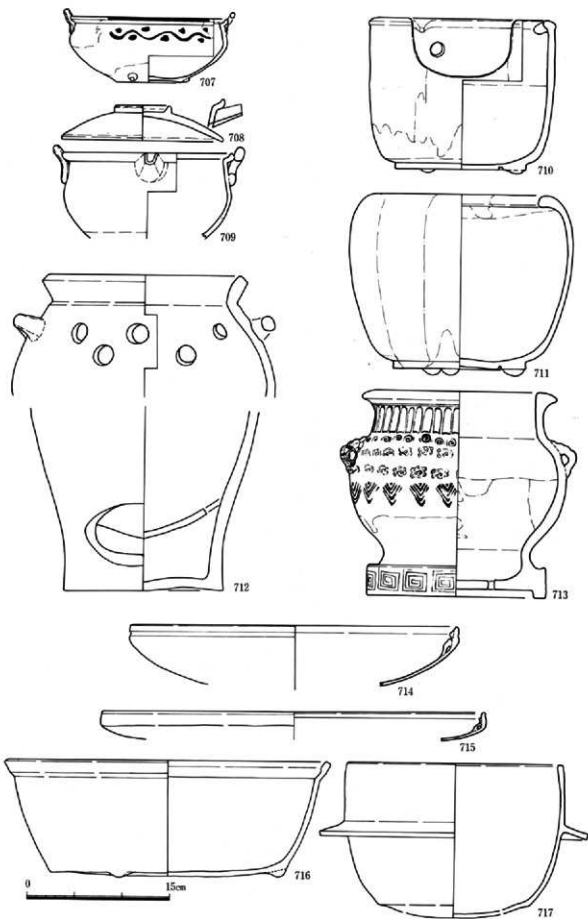
第109図 IV期の遺物(5)

SK424(5)



第110図 IV期の遺物(3)

SK424(6)



第111図 IV期の遺物⑧

SK424(7)

内面と底面には錆軸がかかる。脚に対応して底部に孔が3つ見られる。(712)は蚊煙。内面上半はタール状の炭化物が付着する。無軸で常滑産。(713)は陶器の鉢。体部に渦巻・山形の印刻が見られ獅子面の吊手が付く。体部上半内外面に緑釉、下半内外面に錆軸がかかる。底部には3カ所穿孔。(714・715)は鍋E。共に吊手は潰れている。内面に受口状の突起が付く。(714)の内面には米粒状の炭化物が付着する。また内面に布目が残り内型を使用した痕跡を残す。(716・717)は瓦質である。(716)は団子状の脚が3つ付く。

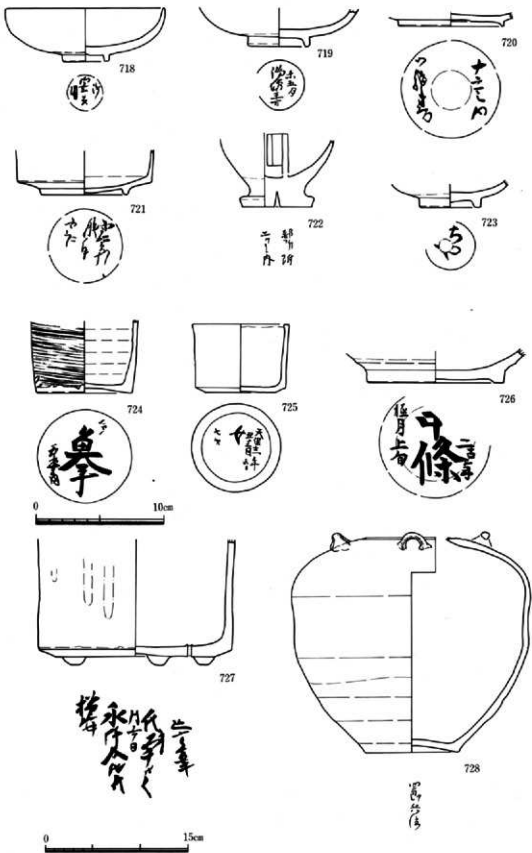
2. 墨書・刻書・刻印のある陶磁器、その他の陶磁器・土器 (第112・1113図)

墨書の内容は屋敷内の部屋名を記していると考えられるものが目につき、その中で厨房に関するものが多い。また墨書される器種は様々であるが、前項の遺構出土遺物を含めると、碗Eに墨書することが多い。(718)は碗Eで高台内に縦方向に「御支先」、横方向に「御用」と書かれる。(719)は碗E。高台内に「未五月 御坊主方」と書かれる。(720)は陶器の皿で高台内中央が円形にへこみ、その周囲が蛇の目状に軸が割ぎ取られ、そこに「十六之内 御勝手方」と書かれる。(721)は鉢L。墨書の遺存状態は悪い。高台内に「□□□□ 勝手 □□」と書かれる。(722)は乗燭。墨書の遺存状態は悪い。底部に「部屋附 ニヤ之内」と書かれる。(723)は碗の底部と考えられる。高台内に「ちや」と書かれる。(724)は瓶・徳利の底部。墨書の一部の遺存状態が悪い。底部に「□□ 魚平 五本之内」と書かれる。(725)は筒状の鉢。口縁端部が擦滅する。墨書の遺存状態は悪い。底部に「天保十二年 丑十二月六日女 七才」と書かれる。(726)は鉢Dと思われる。底部は一部が欠損する。「□□二百年 中條 極月上旬」と書かれる。(727)は大型の筒状になる鉢。内面に炭化物が付着し火鉢になる。墨書の遺存状態は非常に悪い。「□□□□ □□□□ □月六日 永□□□□ □□」と書かれる。

刻印または線刻がある陶磁器は京焼風の肥前陶器または関西系陶器の碗であることが多い。(728)は肩部に吊手を持つ、四耳壺である。体部には黄色の釉がかかる。胎土は暗灰色の鉄分の多く砂粒が混入するものである。底部に「四郎兵衛」と線刻される。生産地は不明である。(729-732)は京焼風の碗である。(729)は内面に具須で花文らしきものが描かれる。高台内は大きく円形に削り込まれその中に「清水」と草書体で刻印される。(730)は高台内中央がわずかに削り込まれその中に「吉小松」と刻印される。(731)は高台内中央がわずかに削り込まれる。そのへこみの脇に篆書体で「雲」と刻印される。(732)は外面に鉄軸で山水文らしきものが描かれる。高台内中央がわずかに蛇の目状に削り込まれる。その脇に「山原伴」と刻印される。(733・734)は「犬山」の刻印を持つ陶磁器であり、共に犬山周辺で操業された所謂、犬山焼のものである。(733)は瓶・徳利の底部である。方形枠内に「犬山」と刻印される。犬山周辺にある今井焼のもと考えられる。(734)は磁器の碗で外面は赤・白色で上絵付される。高台内に涙形の枠に「犬山」と刻印される。

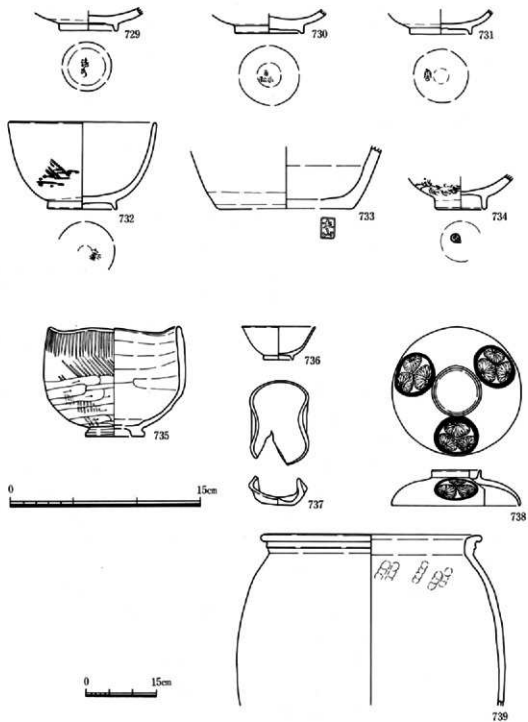
(735-739)は前項で記述し得なかつた遺構や包含層中から出土した遺物で特出するものである。(735)は手捏成形の楽焼系の碗である。体部に赤漆を使用している漆跡の痕跡がある。(736)は肥前の磁器の碗Lである。内面に金箔が貼られる。(737)は土器耳皿である。内外面に金泥が塗られる。(738)は瀬戸産の磁器で蓋である。外面に具須で葵の紋が描かれる。(739)は常滑産の甕である。無軸で焼締っている。内面には白色の付着物が見られる。

(佐藤公保)



第112図 IV期の遺物940

墨書・刻書



第113図 IV期の遺物(4)

刻印・他

3. 焼塩壺 (第114～116図)

出土した焼塩壺は、総個体数身78点、蓋81点である。身・蓋の分類については渡辺誠氏により詳細に行われているもの¹⁷⁾に依拠し、これに従うこととする。

身は成形技法等により、4種に大別することができる。粘土紐を積み上げて成形してあるもの(輪積み成形)を身A類、棒状の芯を布で覆い、この型に板状粘土を巻いてから底部に粘土塊を充填してあるもの(板づくり成形)を身B・C類、底部と胴部を型に当てて同時に仕上げているものを身E類とする。

身A類は33点出土している。(772～774・783～786・791～797)がこれに当たる。円盤状粘土による底部から、粘土紐を輪積みにして成形している。成形時の影響によるものか、ほとんどのものが胴部は六角柱形を呈しており、内・外面ともにわずかに稜線が認められる。口縁部は、内・外両側に成形時の指頭頂が認められる。外側底部から胴部にかけては、最終調整として、丁寧なナデを施しており、口縁部内側から外側にかけてはこれが特に顕著である。胴部内側には粘土紐による継ぎ目の痕跡が認められる。また、指頭圧により口縁部を成形した後、さらに内側に粘土紐を帯状に薄く足しているものも認められる。尚、接合痕は内傾であり、胎土は密で直径1～3mmの粗粒砂及び極粗粒砂を含む。半数以上のものに塩焼けによる二次焼成痕が認められる。この輪積み成形のタイプには、時期及び生産地を決定する上で重要な判断材料となる刻印が押されているものが多い。しかしこの身A類の中で刻印が認められるものは1個体のみである。(772)には胴部に一重杵の刻印が認められる。印全体の2分の1弱を欠くが他遺跡の類例からみて、「ミなと 藤左衛門」と2行に分けて書かれたものであろう。この刻印は泉州淡村の焼塩メーカーが、承応三(1654)に女院御所より天下第一の美号を拝名する以前に使用されていたものである。17C中頃のものであろう。その他の無印タイプのものは有印のものに先行するものと考えられるが、各遺構内出土のものを共伴遺物と比較してみると、併行してつくられていたのではないかと思われるものも存在するため、併存の可能性も否定しきれない。その中でB区出土の8点(783～785)の内、(785)を除いた7点はSK479出土のもので、共伴遺物が16C末から17C初頭に限られるため、この時期のものと考えて良いと思われる。ここでは身A類の時期について、刻印で推察できる(772)や、SK479出土のものを除いて、16C末から17C代のものとしておく。

身B類は1点出土し、(800)がこれに当たる。所謂「印籠型」と呼ばれるもので、棒状の芯を布で覆い、板状粘土による継ぎ目の痕跡が残る、芯を覆った粗い平織りの織目が認められる。口縁部の外側はヘラで段状に削り出された後、丁寧なナデ調整を行い蓋受け部を作っている。外側の胴部には、方重に「泉州麻生」の刻印が押されている。この刻印から、17C後半から18C前半のものと思われる。

身C類は37点出土している。(743～748・801～815)がこれにあたる。成形技法は身B類と同じであるが、口縁部はB類のようにはっきり削り出しておらず、痕跡的な程度蓋受け部を残すものである。身B類と比べ器壁は薄く、底部の成形も雑である。内側の胴部にはB類と同様に縦に板状粘土による継ぎ目の痕跡が残る、B類よりもさらに粗目の平織りによる織目が認められる。外側下部は指頭圧、ヘラ削りなどの調整でくびれた形にしているものにもみられる。また、(814・815)のように外面を横ハケによって調整した後、部分的に下から上方向に指でナデ上げているものもみられる。いずれも無印であるが、蓋受け部の退化した形態であることから、18C後半以降のものと思われる。

身E類は8点出土している。(741・742・775・776・798・799)がこれに当たる。底部と胴部は分けず一体化しており、内側胴部には型を抜く時、わずかに回転させながら引いた痕跡がみられる。器壁はかなり厚く、容量は極端に少ない。いずれも無印であり、形態も特異なため不明な点が多い。

蓋は形態上3種に大別することができる。上面がやや曲面的で、側面がゆるやかに外側へ開くものを蓋A類、上面が平坦で側面への交換点のはっきりして、真下がやや内側に向くものを蓋B類とし、円盤型に近く内側断面が平坦もしくはわずかに窪むものは渡辺分類では蓋C類に当たるが、B、C類に比べて厚手で、小径であるため、ここでは区別し仮に蓋X類としておく。

蓋A類は17点出土している。(749・779・780・787・790・816・819)がこれに当たる。内、外面ともに丁寧にナデ調整されているものが多い。側面が特に顕著であるのは、整形に伴うものかと思われる。内側には、わずかに布目痕が残っているものもみられる。上面とその裏側が完全な平面を呈するものは少なく、指頭圧等により凹凸な面になっている。この蓋A類と対応するものである。

蓋B類は57点出土している。(755~771・781・782・821~847)がこれに当たる。内側には型づくりを示す布目痕が認められる。内側胴部から外側全体にはこの布目痕は認められず、丁寧なナデ調整が施されているものが多いが、整形に伴うものかと思われる。内、外面ともに平坦な仕上がりである。この蓋B類は、身B、C類と対応するものである。

蓋Xは7点出土している。(750~754・820)がこれに当たる。全体的に厚手で、下面のわずかな窪みには平織りによる布目痕が認められる。上面は丁寧なナデ調整が施されている。この蓋C類は小径で厚手であることから、身E類に対応する可能性が考えられる。

焼塩壺は近世の諸遺跡による出土例をみると、刻印を持つものが多く含まれ、容器自体の形態変化や、この刻印の変化によって現在では、どの時期に作られたものかある程度推察できるまでに至っている。さらにこの容器は通常焼塩を消費すれば廃棄されたものと思われるため、記年銘資料に近い資料として扱われている。ただ、三の丸遺跡の場合、圧倒的に無印のものが多く、時期を判断するには形態的特徴に頼らざるを得ない。そして同一の遺構から時期差のあるもの同士が出土する例も少ないため、時期決定有効資料が少なかったのが惜しまれる。したがって器形はさらに細分化できる可能性を有しているが、現資料において時期差に繋がる程の器形間の差異を追究することはできず、今後の課題としたい。

(松田 訓)

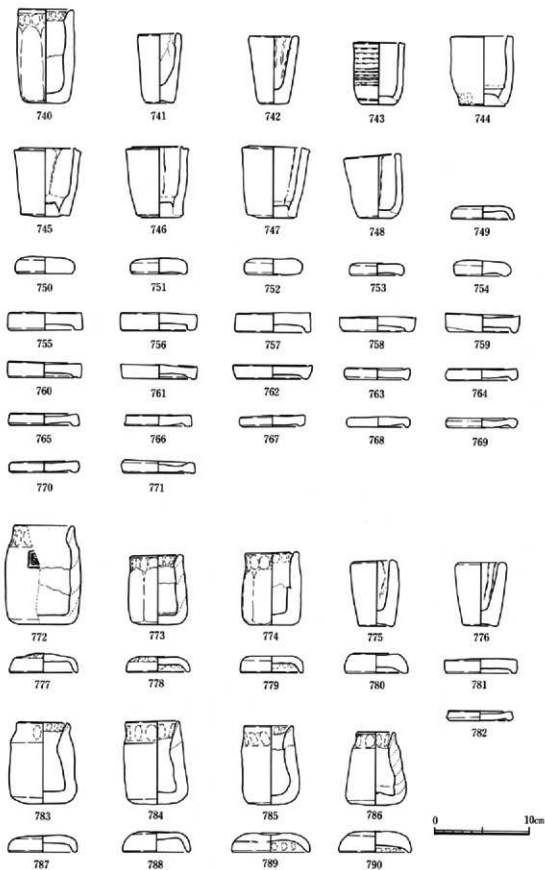


772



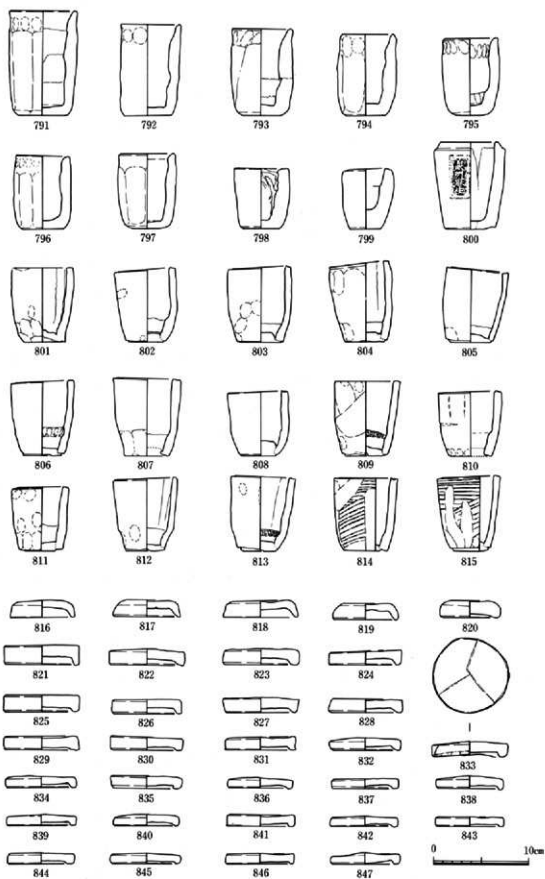
800

第114図 IV期の遺物④ 焼塩壺刻印(1/1)



第115図 IV期の遺物40

発掘地①



第116図 IV期の遺物(9)

焼埴壺(2)

4. 土製・陶磁製玩具、その他の陶製品(第117・118図)

当地区から出土した土製・陶磁製の玩具は遺構により出土量に多少差はあるが特定の遺構に集中する傾向はない。

土製の玩具の胎土は大まかに、橙色のもの(851・852・854・859・861)、白橙色のもの(848)、白黄色のもの(849・850)、赤橙色のもの(859)とに分れ、橙色のものが一番多い。成形法を見ると、そのほとんどが型を使用したもの(848・850・854・856・858・861・863)で、若干、手捏成形のもの(849・855)も見られる。型を使用したものは多くが中が中空になり、「型抜き」と呼ばれる成形法で制作されたと考えられる。中には(848)のように型を用いながら中空にならず底部に穿孔があり、所謂、「男入形」に見られる「鉄芯型づくり成形」のものもある。これら胎土、成形法の差は生産地の相違である可能性が高く、特に胎土、形成法が他のものと異なる(848)は他のものと違った産地⁽¹⁹⁾が考えうる。

陶磁製の玩具には(853・860・864・869・871)があり、(860・862・869・871)以外は軟質な胎土をする。また(871)は瀬戸産の磁器で、呉須で文字が書かれる。

以下に特出するものを列記する。(850・863)は笛になっており(851)は吹口が尾の方に、(863)は瓢箪の口の方にある。(853・864)は透明釉が全体にかかり、部分的に銅緑釉がかかる。(864)は箱庭の部品になると考えられる。図示し得なかったが、他にも橋や石灯籠が見られる⁽¹⁹⁾。(854)は外面に白色の顔料が残存する。(859)は布袋の顔が型取られるが、顔の輪郭が不鮮明で人形型とは考えづらい。他に鬼の顔を型押ししたものも見られた。(862)は中空になり無釉の陶製。(865)は蓋のミニチュア。緑釉がかかる。(866)と同タイプのものでセットになる。(866)は無釉。釜のミニチュア。これにセットになるものとして甕がある。

その他のものとして(872~879)がある。(872・873)は瓦の再加工品である。同様なものに陶磁器片を円形に擦ったものがある。(872)は穿孔が3カ所見られ、穿孔のある方に「金」と墨書される。(873)は周囲を擦って円形に加工している。(874~879)は陶鍾。いずれも常滑産の焼締陶製で外面にヘラ書または刻印が見られる。(847)は成形の際の指圧痕が残る。陶鍾は図示したもの以外にかなりの数出土しており、それらは廃棄土坑A・D群の廃棄土坑のみから出土する。

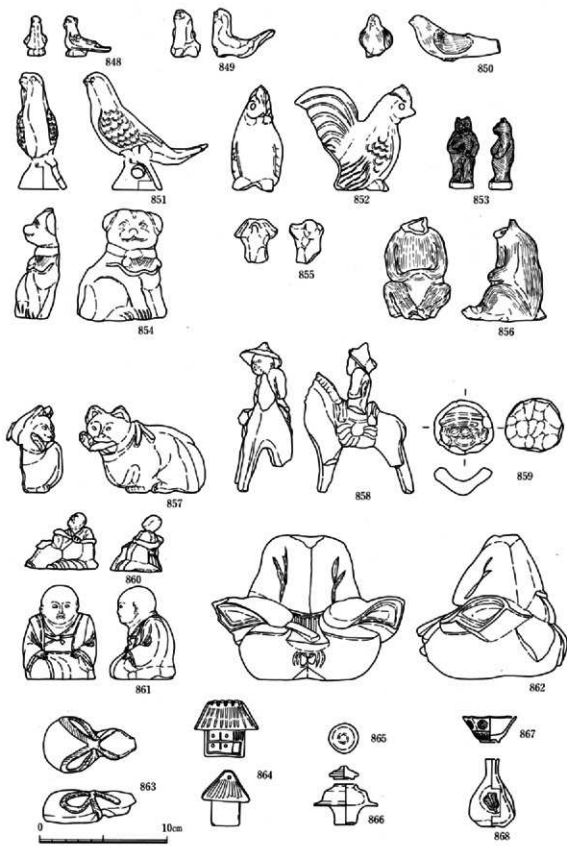
なお関東や関西の江戸時代の遺跡で一般的に見られる泥面子は一点もなく、清洲や勝川の宿場町、名古屋の城下町等の周辺の江戸時代の遺跡の調査でも泥面子はほとんど見られない⁽²⁰⁾。

5. 瓦(第119~122図)

瓦はほとんどの遺構で見られたが、SK460・424等からは特に多量に出土した。地区別に見ると廃棄土坑E群中の土坑は瓦の廃棄量が多い。また瓦を多量に出土した土坑は、供伴の陶磁器の時期からIV-4期のものが多く、明治初めの陸軍鎮台の三の丸駐屯に伴う屋敷取り壊しに際して、投棄された結果と考えられる。

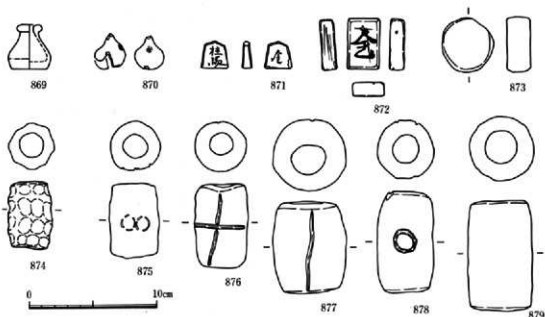
この項ではすでに取りあげた遺構の中で、瓦を多量に出土したものを中心にみていく。

軒丸瓦はほとんどが連珠三つ巴文の瓦である。(880・881)はSK479出土。(880)は左巻三つ巴で周囲に圏線が見られる。巴の尾部は圏線に接しなく、圏線と珠文の影りは浅い。周縁高は高い。焼成は



第117図 IV期の遺物⑨

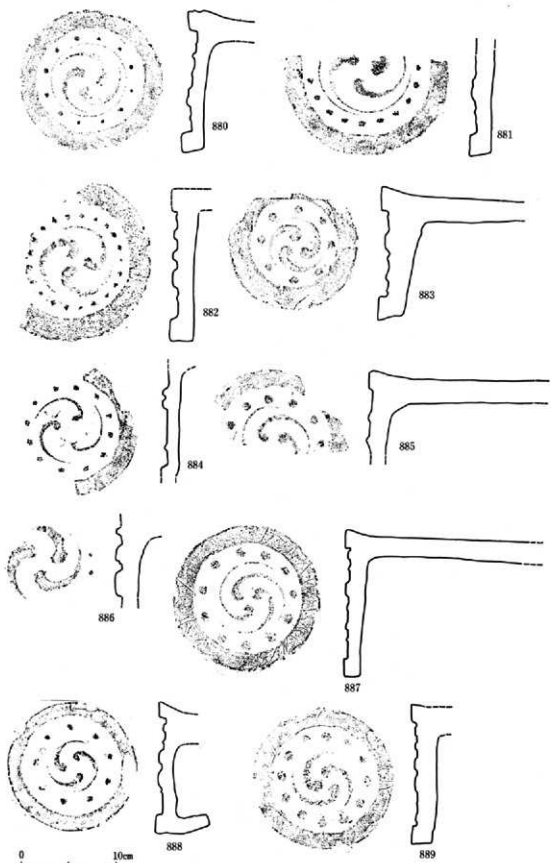
土製・陶磁製玩具・他(1)



第118図 IV期の遺物(甲)

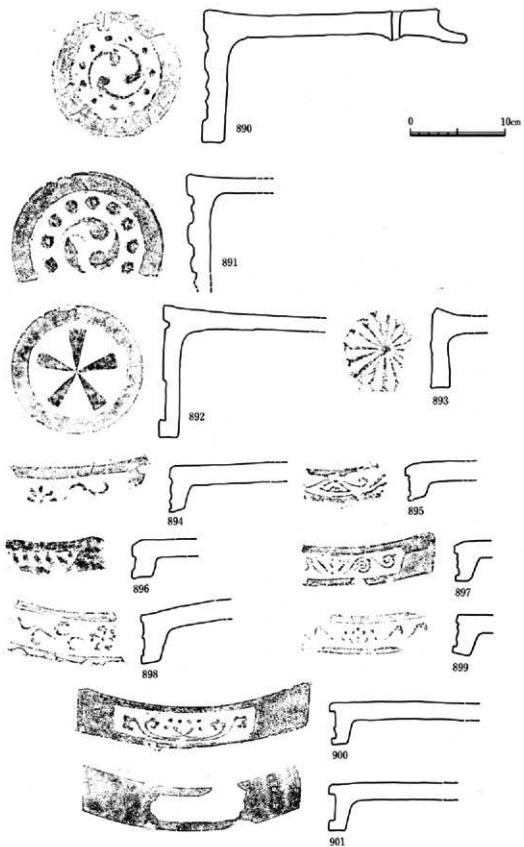
118 土製・陶磁製玩具・他(2)

悪く黒色と灰色の部分が斑に入る。(881)は左巻三つ巴。巴の尾部は長く頭部と珠文の影りは深い。焼成は悪く白色を呈する。(882~886)はS K415出土。(882~884・886)は左巻三つ巴。(882)は珠文の数が21と多く、巴と珠文の影りは深く、ことに巴の影りはシャープである。焼成は悪く黒色を呈する。(883)は巴が全体的に太く珠文の数は少ない。周縁高は高い。(884)は巴の頭部は大きく、巴と珠文の影りは深くシャープである。周縁高は低い。焼成は良く、銀化する。(885)は右巻三つ巴。巴の頭部は大きく尾部は長い。珠文は大きく影りは深い。周縁高は低い。焼成は良く灰色を呈する。(886)は巴が短く影りは深くシャープである。珠文は小さく低い。巴の上にはわずかに赤漆と金箔が残存する。(887~890)はS K460出土。(887~889)は右巻三つ巴。(887)は一本の巴の尾部のみが長い。珠文は大きい。周縁高は低い。(888)は拝み巴である。巴は尾部が短い。珠文の間に輪状の低い突線が見られる。周縁高は高い。焼成は良く灰色を呈する。(889)は巴の頭部がやや大きい、珠文は大きい。巴と珠文の影りは深低い。周縁高は低い。(890)は左巻三つ巴。巴の頭部は大きく尾部は短い。巴の影りは深いシャープさに欠ける。珠文の影り、周縁高は低い。焼成は良く、銀化している。(891~892)はS K424出土。(891)は左巻三つ巴。巴の頭部は大きく尾部は非常に短い。珠文は大きい。巴・珠文とも影りが深いシャープさに欠ける。焼成は良い。(892)は唯一、巴文ではない軒丸である。鱗形が5個、その頂点を揃える。影りは深くシャープである。焼成は良く、銀化している。(893~896)はS K479出土。(893)は椀入瓦。瓦当文様は菊状になる。影りは浅くシャープさに欠ける。焼成は悪い。(894~896)は軒平瓦と考えられるもの。(894)の中心飾りは先の丸い5葉と、珠文で巻き込みの弱い唐草が2反転する。中心飾りと唐草の影りは浅く、周縁高は低い。焼成は悪い。(895)の中心飾りは山形で巻き込みのやや強い唐草が1反転のみ確認される。焼成は良い。(896)の中心飾りは不明であり、縦方向の突線が見られる。(897)はS K415出土で軒平瓦と考えられる。中心飾りは先の尖った3葉と珠文で巻き込みの強い唐草が2反転する。中心飾りと唐草の影りは浅いがシャープである。焼成は良い。(898)はS K460出土で軒平瓦と考えられる。中心飾りは5弁の宝相華で巻き込みの弱い唐草が3反転し子葉は強く



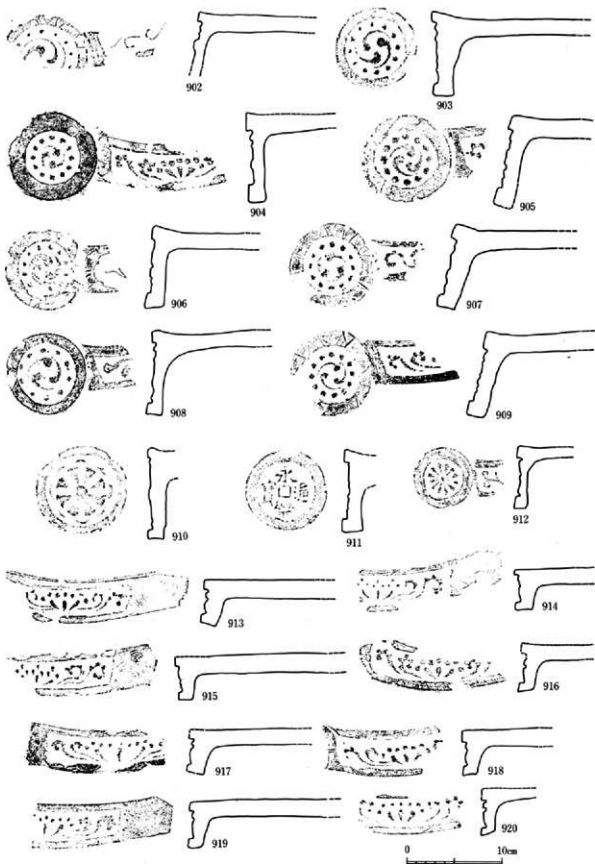
第119図 IV期の遺物(8)

瓦(1)



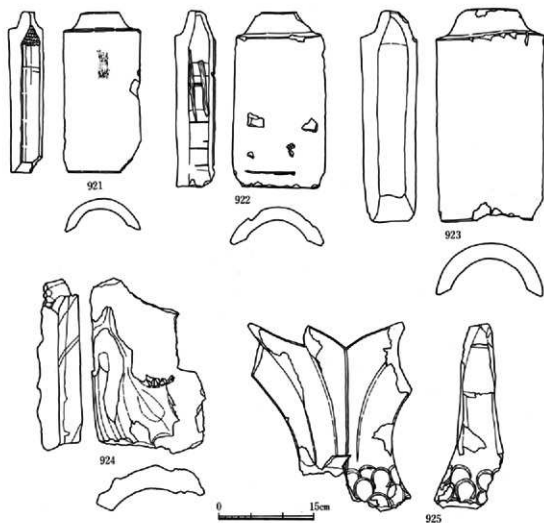
第120図 IV期の遺物(續)

瓦(2)



第121図 IV期の遺物50

瓦(3)



第122図 IV期の遺物50

五(4)

跳ねる。影りは低いがシャープである。焼成は良く黒色を呈する。(899~901)はS K 424出土。軒平瓦である。(899)の中心飾りは先の丸い3葉と7個の珠文で左右2単位まで残っている。影りは浅いがシャープである。周縁高は低い。焼成は非常に良い。(900)の中心飾りは交差する2葉と涙形の珠文が6個付く。左右2単位である。左周縁に丸に「一」の刻印が見られる。文様の影りは深く周縁高は高い。焼成は非常に良く、銀化する。(901)は文様はなく右周縁に方形枠に「三州 棚尾金三郎」の刻印が見られる。以下(920)まで軒棧瓦である。軒棧瓦の瓦当文様は基本的に中心飾りと左右2単位の唐草文からなる。(902)はS K 446出土。軒丸部は左巻三つ巴で巴と珠文の影りは深い。軒平部の中心飾りは欠落し、巻き込みが弱い唐草が2反転し子葉は弱く跳ねる。体部と瓦当の角度は鈍角になる。焼成は良く、銀化する。(930)はS K 460出土。軒平部は欠損する。軒丸部は右巻三つ巴で巴と珠文の影りは浅く周縁高は低い。軒丸部は右周縁に付く。焼成は良く、銀化する。(904~909)はS K 424出土。(904)の軒丸部は左巻三つ巴で珠文は影りが深くシャープである。軒平部の中心飾りは先の丸い3葉と7個の珠文である。焼成は良く、銀化している。(905)の軒平部は左巻三つ巴で、巴と珠文の影りは浅いがシャープである。軒平部はほとんど欠損する。焼成は良く銀化する。(906)の軒丸部は左巻三つ巴

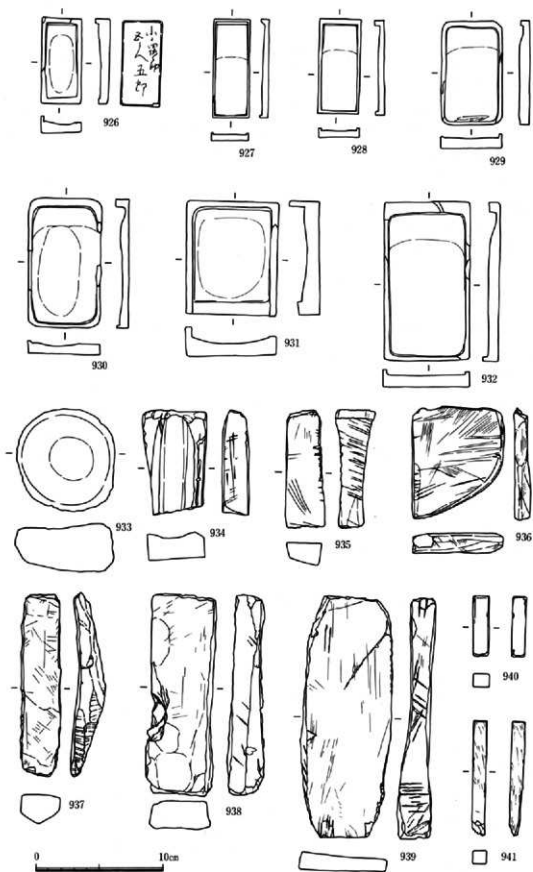
で巴と珠文の彫りは浅く、シャープさに欠ける。軒平部はほとんどが欠損し、子葉の一部が残る。体部と瓦当の角度は鈍角になる。焼成は良く銀化する。(907)の軒丸部は右巻三つ巴で巴の尾部はやや潰れ、珠文の彫りは深い。軒平部はほとんど欠損する。体部と瓦当の角度は鈍角になる。焼成は良く銀化する。(908)の軒丸部は左巻三つ巴で珠文は小さく彫りは浅い。体部と瓦当の角度はやや鈍角になる。焼成は良い。(910)の軒丸部は左巻三つ巴で巴の尾部は長く、巴・珠文ともに彫りが深くシャープである。軒平部は中心飾りの珠文の一部と唐草文の左2単位が残る。体部と瓦当の角度は際立った鈍角になる。焼成は良く銀化する。(910)はS K 460出土。軒丸部のみ残存する。彫りは深く焼成は悪い。(911~920)はS K 424出土。(911)は軒丸部のみ残存する。瓦当文様は永楽通宝である。周縁高は高い。焼成は良く銀化する。(912)の軒丸部の瓦当文様は菊花である。軒平部は唐草の一部のみ残る。(913~920)は軒平部のみ残る。(913)の中心飾りは先の丸い3葉と7個の珠文である。右周縁に彫りの浅い丸に「大」の刻印が見られる。(914)の中心飾りは先の丸い3葉と9個の小さい珠文である。(915)の中心飾りは先の丸い3葉と涙形の9個の珠文からなる。右周縁に山に「扶」の刻印が見られる。(916)の中心飾りは先の丸い3葉と7個の珠文からなる。(917)の中心飾りは先の丸い間隔の開いた3葉と9個の珠文からなる。(918)の中心飾りは3葉と7個の珠文からなる。(919)の中心飾りは2葉と涙形の6個の珠文が残存する。(920)の中心飾りは彫りの深い3葉と7個の珠文からなる。(921~923)は丸瓦である。(921)はS K 424出土。凸面に(901)と同様方形枠に「三州 棚尾金三郎」の刻印がみられる。凹面には目の細い小引の痕が残る。焼成は良く、銀化する。(922)はS K 429出土。凸面にへこみが2カ所見られる。凹面にはやや斜方向の彫りの深い小引の痕が残る。焼成は悪く部分的に白色になる。(923)はS K 415出土。凹面には彫りの浅い小引の痕が、一定しない方向に見られる。焼成は良い。(924~925)は装飾瓦。(924)はS K 460出土。凸面には粘土を張り付け装飾が見られる。凹面には布目が見られる。上端と左面は生きている。焼成は良い。(925)はS K 415出土。鯨の尾の部分である。ヘラ状の工具で鱗は一つ一つ削り込まれる。焼成は良く銀化する。

6. 石 製 品(第123・124回)

石製品としては硯・碇石の存在が目立つが、これらは時期、地区を問わず、多くの遺構から出土している。

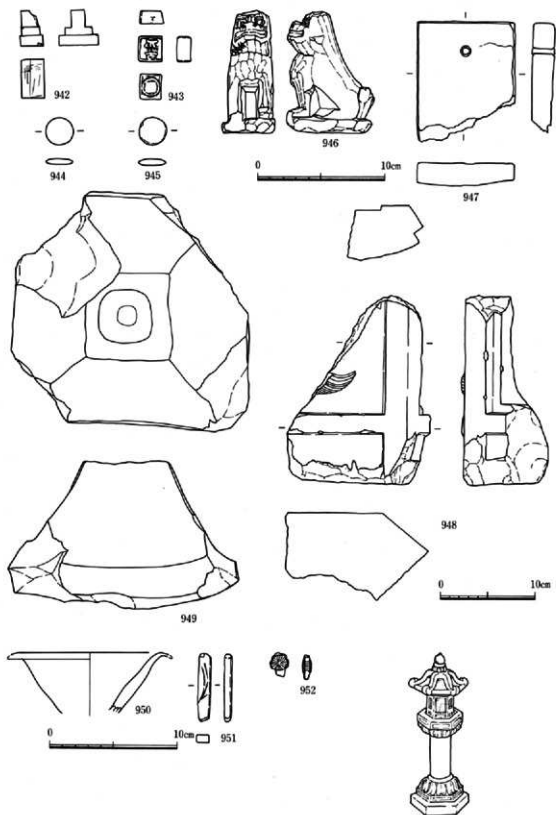
硯はほとんどが長方硯で、双履硯や硯背に覆手をもつものも見られなかった。また江戸の遺跡で見られる「高嶋石」、「號斑石」と線刻されたものも見られなかった。法量により大・中・小の3つに分れる。小短辺3cm、長辺7~8cm前後(926~928)、中短辺4~6cm、長辺8~10cm(929:928)、大は短辺7cm、長辺13cm前後(932)を測る。

(926)は薄緑色の軟質の石である。墨堂から硯海まで中央深く磨減する。硯背に各々異なった筆跡で「小々田橋之助」、「五人」、「五郎」と線刻される。(927)は灰緑色の硬質の石である。墨堂に擦痕がはいる。(928)は黒色の硬質の石である。墨堂の中央がごく浅くへこむ。(929)は黒色の硬質の石である。墨堂がわずかにへこみ、墨堂の端を強く横方向に削った跡がある。(930)は黒色の硬質の石である。墨堂の左側が大きくへこむ。(931)は薄緑色の軟質の石で正方形をなし彫りが深い。墨堂が大きくへこみ縦方向の擦痕が見られる。(932)は黒色の硬質の石で墨堂、硯海に墨痕が残る。



第123図 IV期の遺物52

石製品(1)



第124図 IV期の遺物③

石製品(2)・ガラス製品

砥石は粒子の粗いものと粒子の細いものとに大別できる。各々、荒砥用と中砥用または仕上げ用にあたると思われる。前者は(933~935)、後者は(936~939)である。

(933)は軽石である。砥面は1面でその中央はわずかにへこむ。(934)は灰色を呈する。表面の中央は2cm幅でへこむ。(935)は緑色を呈する。砥面は長軸上の4面で特に表裏面と左側面は使用のため大きくへこむ。右側面に残る斜方向の擦痕は、全て使用時の磨滅を受け浅くなっており、製作時のものと考えられる。(936)は黄褐色を呈する。砥面は3面で表・下・右側面である。ことに表面には横または斜方向の顕著な擦痕が見られる。(937)は灰色を呈する。砥面は長軸上の4面で表面以外は部分的にしか見られない。両側面に残る横方向の擦痕は製作の際のものと考えられる。(938)は紫色を呈する。非常に軟質で砥面は明確ではないが長軸上の表裏面と思われる。左側面は自然面を残す。(939)は灰色を呈する。長軸上の表裏面と左側面が砥面である。両側面と上下面には縦または斜方向の擦痕が残る。硯、砥石以外の石製品として印章：碁石状石製品：石人形：五輪塔等がある。

(940・941)は棒状石製品で片端が欠損する。共に表面に細い擦痕がある他は使用痕は見られない。石筆であろうか。(942)は印章状石製品である。材質は不詳で磁製である可能性もある。摘み部と考えられる箇所の一部が欠損する。印面には細い擦痕が見られ朱の痕跡が残る。(943)は印章である。表面には「元芳」とあり、裏面には丸に四角が掘り込まれる。上面に「上」と線刻される。(944・945)は碁石状石製品。共に黒色で粒子の細い硬質の石である。(945)は石製の犬人形である。緑色の粒子の粗い軟質の石である。(946)は板状の石製品で灰色の光沢のある石である。上端に1つ穿穴があり、上面・両側面は擦られ面取られる。(947)は五輪塔の火輪で笠の反りは弱く、火輪と接する面が円形に凹む。(948)は石灯笼の火舎の一部。復元すると六角形になり、第124図の模式図のような「春日燈籠」となると考えられる。外面の一面には動物の一部と思われる浮彫が見られる。下面と火舎の内部にあたる一部は製作時の面を残している。

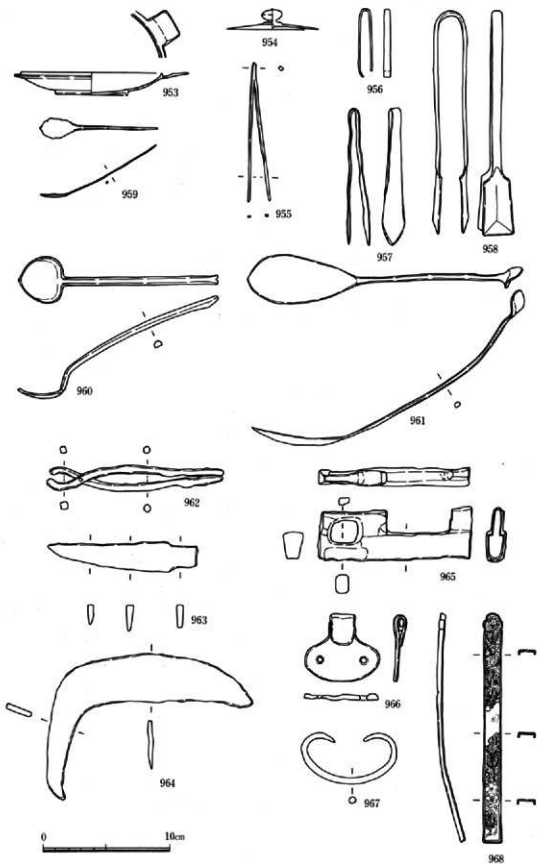
7. ガラス製品(第124図)

ガラス製品はIV-4期の遺構を中心に出土しているが数量的には少ない。図示したものの以外に板状のものも見られるが、全貌は不明である。ガラス製品のほとんどは表面が風化し、白色の付着物が表面に付く鉛ガラスである。(950)は暗緑色を呈し碗状の器形になると考えられる。白色の付着物はなく鉛ガラス以外のガラスである可能性が高い。(951)は棒状になる。表面に白色の付着物が付く。表面に沈線が見られる。(952)は半透明の黄色を呈しガラス以外の材質の可能性もある。桜花の線刻が見られる。弁等の装身具になると考えられる。

8. 金属製品(第125・126図)

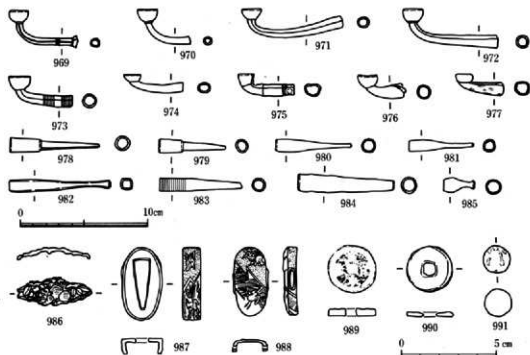
出土した金属製品の材質は大部分が銅製または鉄製で、わずかに鉛製のものが見られる。時期はIV期を通じて特定の時期の遺構に限らず出土している。

(935)は銅製である。皿状になり口縁に1か所、方形の突出部がある。口縁内面の受部に2か所の穿孔があり、天秤の受皿の可能性がある。(954)は銅製の蓋である。摘みは内面から飯留められる。(955)は先端が2つ分れる細い棒状の製品である。弁のような装身具になるとと思われる。銅製。(956~958)



第125図 IV期の遺物60

金属製品(1)



第126図 IV期の遺物60

金属製品(2)

はピンセット状の銅製品。(956)は先端が内側に屈曲する。毛抜。(957)は先端が三角になる。(958)は断面形が外湾し先端が四角形になる。(959~961)は銅製の匙。(959)は依存状態が悪く厚さは非常に薄い。(960)は遺存状態は非常に良い。柄の断面形は六角形で厚さは厚く造りは堅固である。(961)は双方に受部が付く。(962)は鉄製の鋏。錆により依存状態は悪い。鋏部の断面形は四角、握部の断面形は円形である。(963)は刀子。依存状態は悪い。鉄製。(964)は鉄製の鎌。(965)は薄い鉄板を組み合わせ作られる。鋏前と思われる。中は空洞でバネにあたる鉄板が見られる。(966)は鉄製。先端が折り曲げられ体部には2カ所穿孔が見られる。何等かの飾金具と思われる。(967)は箆筒などの調度品の引き具。鉄製。(968)は銅製。表面に松と梅が線刻され金が象眼されている。2カ所の釘孔が見られる。屏風などに使用される飾金具と思われる。(969~977)は煙管の雁首。全て銅製である。(969)は脂返しが高く立ち上がり、火皿の下と首部の中間に補強帯が見られる。火皿の内側中央に穿孔が1カ所ある。肩部は欠損し一部しか残存しない。(970)は脂返しが長く立ち上がり、火皿の下に補強帯がある。火皿の内側中央に穿孔が1カ所見られる。首部の左側は欠損する。(971)は脂返しの立ち上がりは短く、首部はやや迫り上がる。火皿下の補強帯は見られず、火皿の内側のやや上部に穿孔が1カ所ある。(972)は脂返しの立ち上がりは短い。火皿の下に補強帯がある。穿孔は見られない。(973)は脂返しはほとんど立ち上がりせず首部はやや太くなる。首部中央と基部に別素材による補強が見られる。火皿は大きく穿孔はない。(974)は首部は太く脂返しは立ち上がらない。穿孔、補強帯は見られない。(975)の首部はつぶれている。首部は太く脂返しは立ち上がらない。首部の基部は凹線が入りへこみを設けやや細くなり、ラオに嵌め込むような形態を取る。(976)の首部は短く太い。首部の基部は破損している。(977)は首部に円形の点刻が見られる。火皿は水平な首部に付く。(978~985)は煙管の吸口。(982)が銀製の



992



993



994



995



996



997



998



999



1000



1001



1002



1003



1004



1005



1006



1007



1008



1009



1010



1011



1012



1013



1014



1015



1016

他は同製である。(978)は型を持ち吸口は長い。(979)はやや短い型で吸口は短い。(980・981)は型をもたず吸口は急激に細くなる。(982)は吸口基部が断面四角形になる。(983)は吸口基部から端部へ直線的に細くなる。基部に沈線が見られる。(984)はラオ接合部の口径と吸口端の口径の差がほとんどなく、直線的に細くなる。(985)は全長が短く吸口基部から端部へ急激に短くなる。(986-988)は刀に伴う銅製品である。(986)は目貫で竹林に虎が描かれている。(987)は切羽、(988)は頭で共に水鳥と波と稲妻が浮彫りされている。(987・988)は同遺構から出土しており、同じ小刀に伴うものである。(989)の材質は鉛であり、表面に寛永通宝を型押ししている。(990)は鉄製で中央に方形の穿孔が見られる。表裏とも文字などは認められない。(989・990)ともに寛永通宝等の銭をかなり意識したものであるが、性格は不明である。(991)の材質は鉛で球状である。鉄砲の玉と考えられる。以上当地区出土の金属製品を見てきたが、この他にも釘などの数多くの製品が見られた。

9. 銭貨(第127回)

出土銭の総数は149枚である。その内訳は寛永通宝121枚、永久通宝1枚、洪武通宝1枚、半銭2枚、一銭1枚、渡来銭は13枚で元祐通宝4枚、元豊通宝3枚、元符通宝、淳化通宝、至道通宝、皇宋通宝、熙寧元宝、大観通宝が各々1枚であり、不明のものは10枚である。また寛永通宝の中で古寛永は28枚、新寛永は76枚、不明のものが17枚である。遺構出土の銭は116枚で、その内訳は寛永通宝93枚(古寛永21枚、新寛永57枚、不明15枚)、洪武通宝1枚、一銭1枚、渡来銭の13枚で、残り8枚は不明である。(955)の洪武通宝は裏面に不鮮明であるが「治」の字があり、明銭を模倣して大隅の加治木で鋳造された、所謂「本邦模倣銭」である。初鋳は天正年間頃とされている²¹⁾。

銭の出土した遺構を見ると、IV-1期の遺構からは渡来銭または寛永通宝の古寛永しか出土しておらず、IV-2期以降の遺構では新寛永を中心に渡来銭、古寛永が見られる。銭の出土総数がすくないこと、遺構中の出土の銭数も同様であることから、このことが直接、IV-1期の時期を決定する根拠にはなり得ないが、IV-1期と2期の時期差を傍証する材料になろう。(佐藤公保)

時 期	IV-1期			IV-2期		IV-3期	IV-4期		
遺 構	S K 415	S K 479	S E 410	S K 410	S K 455	S K 460	S K 424	S K 446	S K 453
渡 来 銭	3	2							
古 寛 永			1		1		2		
新 寛 永				1	1	1	1	1	3
洪 武 通 宝 (本邦模倣銭)									1

第3表 銭貨出土遺構表

註

- (1) 加納俊介「古墳時代の土器」(『断天山とその時代』東海埋蔵文化財研究会 1989)
- (2) 赤塚次郎「S字鬘笄書'85」(『年報昭和60年度』御愛知県埋蔵文化財センター 1986)
- (3) 「無軸陶器」は瀬戸では「山茶碗」、美濃では「灰軸系陶器」と呼称されているが、本稿では表面上の特長から、とりえずこの用語を用いる。
- (4) ここで用いる段階は遺構の切り合い関係を基に設定している。以下同じ。「III期の遺構」を参照。
- (5) 無軸陶器に関しては、藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅰ」(瀬戸市歴史民俗資料館「研究紀要」I 1982)及び「穴田南窯址群掘調査報告」(瀬戸市歴史民俗資料館「研究紀要」II 1983)を参照した。
- (6) 大窯製品に関しては、井上喜久男「美濃窯の研究(1)-15-16世紀の陶器生産-」(『東洋陶器』15・16号 1988)、藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」(瀬戸市歴史民俗資料館「研究紀要」V 1986)を参照した。
- (7) 陶器に関しては、瀬戸市歴史民俗資料館「研究紀要」VI-VIII 1987-1989、磁器に関しては、大橋康二「考古学ライブラリー-55 肥前陶磁」1989、有田町史編纂委員会「有田町史 古窯編」1989を参照させていただいた。
- (8) 広東碗、端反形碗の出現については、大橋康二「伊万里磁器研究の現状」(『考古学ジャーナル 特集・近世陶磁器』No.297 1988)では、前者を天明期(1781-88年)、後者を文化・文政期(1804-1829年)から肥前において主製品として焼成される、としている。
- (9) 脱稿後、赤外線カメラで撮影を行った。その結果「十カ国ノ内□□□や五郎兵へ」と書かれていることが判明した。
- (10) 類例として、一栗谷朝倉氏遺跡、堺環濠都市遺跡、山田城跡の例(愛知県陶磁資料館「近世城館跡出土の陶器」1984を参照)がある。いずれも15-16世紀のものとしてされていることから、伝世品であろう。このことに関しては、仲野泰裕氏の御教指をえた。
- (11) 従来、京焼または信楽焼としている陶器を明確に区別するのは、生産地の調査が十分でない現在では、困難であると考え。そこで本稿では、この2つを便宜的に京・信楽陶器と呼称する。
- (12) 東京大学遺跡調査室の鈴木裕子氏から御教指をえた。
- (13) 喜田川守貞「守貞漫稿」によると、この甕は江戸でよく使用されたものであるという。第99回の上図は「守貞漫稿」を基に復元したものである。
- (14) 江戸後期の常滑の陶工の印である。このことに関しては赤羽一郎氏の御教指をえた。
- (15) 江崎武、仲野泰裕両氏の御教指による。
- (16) 白神典之「第5章 堺環濠について」(『堺環濠都市遺跡発掘調査報告』第37集 1988)白神典之氏の御教指による。
- (17) 渡辺誠「埴壇」(『講座日本技術の社会史2・塩業・漁業』1985)
- (18) 嶋谷和彦「第4節 堺環濠都市遺跡-調御寺跡-出土の土人形について」(『堺市文化財調査報告』第二十集 1984)
- (19) 土人形を箱庭の部品として使用する例として、「歌月庵喜笑「名陽見聞図会」(美術文化史研究会 1987)第二編下」の天保4年「鉢山」の項に因りて解説されている。
- (20) このことに関しては、他地域との風習・風俗の相異が考えられるが、あるいは名古屋周辺の江戸時代の遺跡で数多くみられる、第118図(873)のような、瓦片や陶磁器片を丸く再加工したものが、泥面子の代用として使用されたかもしれない。このことに関しては、今後の課題であろう。
- (21) 小川浩編「増補改訂古貨幣価格図譜」1974。黒川古文化研究所の松田光広氏の御教指による。

IV 考 察

1. I期の遺構とその変遷

本稿では、I期の集落変遷と名古屋台地上での同時期の集落様相について概観し、三の丸遺跡の名古屋台地上での位置付けを行う。

(1) 三の丸遺跡の集落の変遷

遺物の時期区分上、I期は6時期に細分したが、遺構のあり方、連続性からとらえていくと遺構はA～Dの4群に区分できる。(図128)

A群 弥生時代中期前半の遺構群 (I-1期)

B群 弥生時代後期前半の遺構群 (I-2期)

C群 弥生時代後期後半から古墳時代前期前半の遺構群 (I-3・4期)

D群 古墳時代前期後半の遺構群 (I-5期)

以下、各群の様相について述べる。

A群 竪穴住居7軒、土坑3基を検出。竪穴住居はその分布状況から、東群と西群の2群に大別できよう。その中でも東群に含まれる調査区東南隅を中心的に存在しており、集落の中心はさらに調査区域外へ延びていくことが想定される。規模、長軸方向については特筆すべきことは見いだせない。また、竪穴住居跡間での時期差もほとんど見いだせない。

B群 竪穴住居2軒、墳丘墓1基を検出。竪穴住居は点在している。また、集落と墓域が同一区域内に混在しており、またそれぞれが中心地からはずれている。

C群 竪穴住居21軒を検出。今回の調査区内では集落としての最盛期に位置づけられよう。3群は遺物の時期区分としては2時期設定したが、遺構の性格が同一であること、2時期の間に空白期間をおかないと考えられることから¹⁾、同一群として認識できる。竪穴住居の分布状況により、特にその中に画一性を見いだしうるわけではないが、2時期の時期差をもった2～3軒を1グループとして存在している。また、この時期には、7m前後のやや大型のものが登場する。その他、規模、長軸方向に特筆すべきことは見いだせない。

D群 古墳2基を検出。この時期に併行する竪穴住居は未検出であり、集落は近接する可能性はあるがこの位置には存在しておらず、墓域として機能していた。

(2) 名古屋台地における集落の様相

次に当該期と併行する時期の名古屋台地上の集落様相²⁾について簡述する。

A群と同時期に比定しうる集落遺跡は本遺跡以外は存在しない。又、A群以前から存在する遺跡としては高蔵遺跡があげられるのみである。高蔵遺跡は弥生時代前期以降継続して存在する唯一の遺跡であり、名古屋台地上の拠点集落として位置づけられよう。

A群からB群にかけての時期(土器編年でいう貝田町新期～高蔵期)には空白期間があり、その時期の名古屋台地上の他遺跡はというと、高蔵遺跡の他は未発見である。近接する台地上に存在する瑞

穂遺跡で貝田町新时期に比定される堅穴住居を検出した他、遺物散布地も少なく（富士見町遺跡で土器片出土）、人の流れのとだえた状態が想定できる。

B群と併行する時期は、瑞穂遺跡、見晴台遺跡といった名古屋台地周辺の台地上で大規模な環濠集落が展開しはじめる時期である。名古屋台地上では高蔵遺跡で墳丘墓、堅穴住居を検出している程度で遺跡数はさほど多くない。

3群に併行する時期の堅穴住居は正木町遺跡で検出している。又、堅三蔵通遺跡、尾張元興寺遺跡で当該期の遺物が出土している⁽³⁾。名古屋台地上での調査は調査面積が狭く遺跡の全容を明らかにすることは困難であるが、集落の存在を想定するに足る資料数となろう。遺物の出土量はA・B群併行期に比べ多く、遺物散布地も名古屋台地西縁部に集中する。名古屋台地上、ことに台地西縁部での集落の盛期にあたと推定できよう。

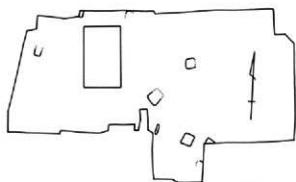
4群と併行する時期の堅穴住居は高蔵遺跡で検出されている⁽⁴⁾。しかし、この時期の遺物、遺構ともに名古屋台地上では希薄であり、名古屋台地上での集落、古墳の造営等の盛期は古墳時代中期以降となる。また、それは正木町遺跡、伊勢山中学校遺跡、東古渡町遺跡などで堅穴住居の検出例が急増することからも明らかであろう⁽⁵⁾。

(3) 小結

名古屋台地上でのI期併行期の集落遺跡の様相は前述の通りである。これまで弥生時代を通して高蔵遺跡が名古屋台地上の拠点集落として位置付けられていた。しかし、A群・C群の時期に限定すれば、三の丸遺跡は、高蔵遺跡と並ぶ、又はそれ以上の規模の集落として機能していたことが類推できよう。ことにA群の時期（I-1期）には唯一の集落であるといえる。名古屋台地上の調査は調査面積、調査地点も限られているため一概にはいえないが、本遺跡は、継続してというわけではないが、弥生時代～古墳時代前期の拠点集落の一つとして位置付けられよう。（加藤とよ江）

註

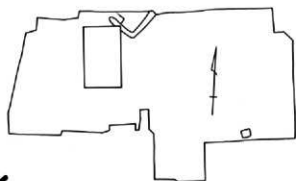
- (1) 宮腰健司「尾張における「欠山式土器」とその前後」（東海埋蔵文化財研究会「欠山式土器とその前後・研究報告編」1987）の編年試案における「4期・5期」に相当することから推定した。
- (2) 弥生時代～古墳時代の集落遺跡については、木村有作「名古屋台地上の集落遺跡について」（東海埋蔵文化財研究会「断夫山古墳とその時代」1989）において、詳細な論考がなされている。
- (3) 名古屋市教育委員会「正木町遺跡発掘調査概要報告書」1987
「尾張元興寺跡第1次発掘調査概要報告書」1985
「第III次堅三蔵通遺跡発掘調査概要報告書」1986
- (4) 高蔵遺跡（夜寒町地点）SH01が相当する（名古屋市教育委員会「高蔵遺跡発掘調査報告書」1987）
- (5) 名古屋市教育委員会「正木町遺跡第3次発掘調査報告書」1989
「伊勢山中学校遺跡第3次調査概要報告書」1987



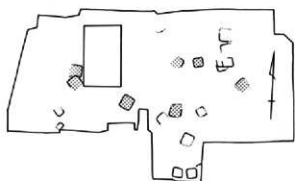
A群（I-1期）の遺構



B群（I-2期）の遺構



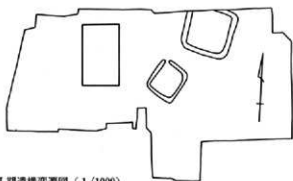
C群（I-3：4期）の遺構



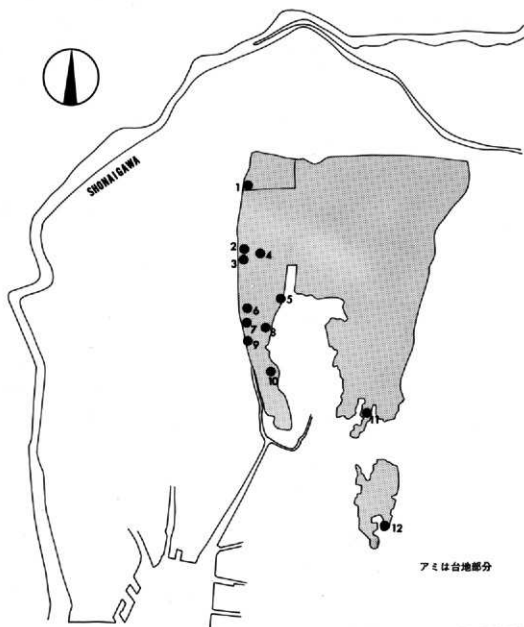
■ I-4期の竪穴住居



D群（I-5期）の遺構



第128図 I期遺構実測図（1/1000）



- | | |
|-------------|----------|
| 1 名古屋城三の丸遺跡 | 2 雙三藏通遺跡 |
| 3 旧常川遺跡 | 4 白川公園遺跡 |
| 5 富士見町遺跡 | 6 正木町遺跡 |
| 7 伊勢山中学校遺跡 | 8 東古渡町遺跡 |
| 9 尾張元興寺遺跡 | 10 高麗遺跡 |
| 11 瑞穂遺跡 | 12 見晴台遺跡 |

第129図 名古屋台地上の主要遺跡（弥生時代～古墳時代前期：1/100,000）

2. 古代における集落の展開

名古屋台地上にはいくつか古代の集落が展開するが、都心ということでこれまでの発掘調査は断片的なものでしかなかった。三の丸遺跡は名古屋城三の丸郭内にあり、比較的保存の良かった地区で、調査面積も市街地としては広く、まとまった集落跡を検出することができた。今までこの地域の古代集落遺跡の実態は不明であったが、今回の調査で少し様相がわかってきた。古代(II期)の遺構・遺物については前述したので、この節では遺構・遺物の変遷を概観し、いくつかの問題点を取り上げて考えてみる。

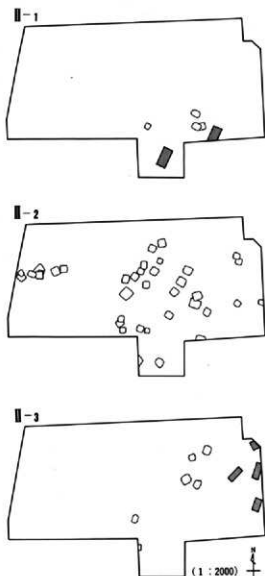
(1) 遺構の考察

遺構の変遷 II期の三の丸遺跡は遺物・遺構のあり方から3時期に区分された。

II-1期は調査区の南部が中心で大型の掘立柱建物2棟とそれを取りくような形で竪穴住居4軒が展開する。出土する遺物も南部に古いものが多い。掘立柱建物は1棟が調査区外に伸びている。もう1棟は5間×3間の建物で2棟とも奥行きが長さがほぼ同じである。主軸の方向も揃っておりともにN-24°-Eである。これに対し竪穴住居は主軸の方向がN-52°-72°-Wと掘立柱建物と直行に近い数字である。掘立柱建物と竪穴住居がある時期に同時に存在していた可能性は高い。

II-2期は調査区全体に竪穴住居が広がる。住居の数はこの時期が最も多く約40軒であるが掘立柱建物は存在しない。竪穴住居は特に規則性を持って構築されていないが調査区の中央部に東西にかたまっているようにも思える。主軸の方向はあまり統一されていないが大きく見ると5つぐらいに分かれ、1期と同様N-70°-W前後のものが最も多い。

II-3期は調査区中央部に竪穴住居、西部に掘立柱建物が分布し、前代に比べて全体的に西へ移動している。掘立柱建物は柱間が1間余りで大きなものではなく、主軸の方向が1期のものに近いN-20°-E前後のものが2棟、N-50°-E前後のものが2棟である。竪穴住居は北側の一边が突出する形態のもので、主軸



第130図 各時期の住居位置図(斜線は掘立柱建物)

の方向はN-10°-E前後である。

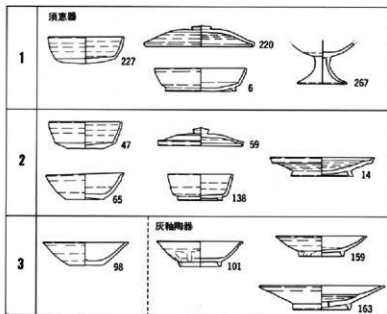
掘立柱建物と堅穴住居 三の丸遺跡においては、8世紀前後に主軸の方向を揃えた2棟の掘立柱建物が出現し、堅穴住居と同時に存在する。その後、掘立柱建物は2期には見られなくなってしまい、調査区全域に堅穴住居が展開する。3期になると再び掘立柱建物が現れ、堅穴住居と同時に存在するようになる。遺構の展開を見ていると掘立柱建物と堅穴住居はそれぞれ固まって存在し、両者が混在することはないことが看取される。限られた面積であるので断定的なことは言えないが、あたかも遺構が構築される区域が決められているかのような印象を受ける。このような推定のもとにたてば2期に掘立柱建物が消え、堅穴住居が全域に分布するの、住居の移動にともないこの地域が堅穴住居の分布域となったためと考えられる。

カマドの問題 この地域の当該期の堅穴住居を見ていると、7世紀後半以降カマドの構造がはっきりしなくなる。三の丸遺跡では堅穴住居は約50軒が存在するが、明確なカマドとしての構造物が存在するものはない。ただ2期以降の一部の堅穴住居では、1辺が円形に膨らんでそこに土器器臺を逆位置にするものがある。ちょうど平底の底部が床面より少し上に出る状態で、台としての使用が考えられる。その周辺には焼土、灰混じりの黒色土が堆積する。3期には角柱状の石をすえたものがあるが、これも同様な働きをしたものであろう。他の例で名古屋市正木町遺跡⁽⁴⁾では平安時代の堅穴住居の中央部、同市伊勢山中学校遺跡⁽⁵⁾では、平安時代の堅穴住居の北辺中央部に臺を伏せている。名古屋市内では、他に高蔵遺跡⁽⁶⁾、天白元屋敷遺跡⁽⁷⁾にも類似があり堅三蔵遺跡では鎌倉時代初頭の堅穴住居の例がある⁽⁸⁾ことから、この地域でかなり長い間用いられていた方法であろう。臺を抜き取るか、破損してしまえばカマドとしての真跡はあまり残らず、当該期のカマドが不明である1つの理由かも知れない。

(2) 遺物の考察

遺物の変遷 II期の主たる遺物には須恵器、土師器、灰釉陶器、緑釉陶器がある。最も多いのは須恵器であるが、時期ごとに様相が違ふ。以下、各時期ごとの変遷を見てみる。

1期の遺物は調査区の南部及び西部を中心に多く見られる。最も古いものは7世紀前半に遡るものもある。遺構から出土するものでは7世紀後半である。この時期の良好な資料はあまりなく、S B238等があるのみである。供膳具は歴史時代の形態である須恵器杯A・



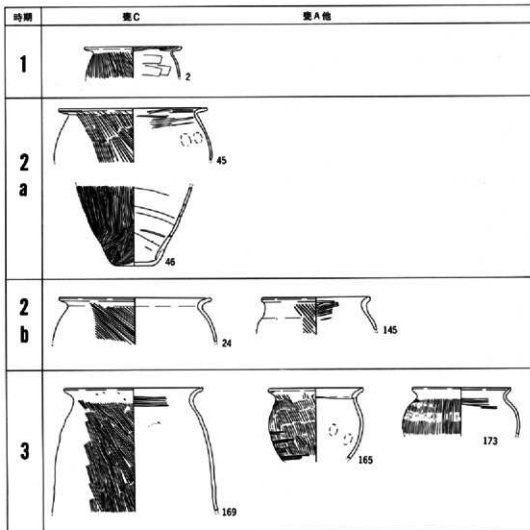
第131図 II期の供膳具の変遷(1:6)

B、杯蓋A・Bが中心でこれに前代からの高杯などが加わる。実年代を示す資料はないが出土した須恵器の年代観より7世紀後葉から8世紀中葉の年代を考えた⁽⁶⁾。

2期になると古い様相が消え、供膳具では定型化した須恵器杯Aと碗Aが中心となる。これに須恵器盤Bや杯B、杯蓋Bが加わる。代表的な遺物にはS B 206、S K 206出土遺物などが挙げられる。S B 206からはほぼ完形の灰釉陶器双耳瓶が出土したが、前述したように今まで双耳瓶が完形で住居内から出土した例はない⁽⁷⁾。この住居からは他に円面硯の破片も出土しており他の堅穴住居とやや様相を異にしている。S K 206からは墨書土器も出土している。実年代は8世紀後葉から9世紀前葉が想定される。

3期は供膳具はほとんど灰釉陶器で占められ、須恵器は補充的に碗A、盤Bなどがこれに加わるのみである。代表的な遺物にはS B 220、S K 203出土遺物が挙げられる。両者とも一括して投棄されたような状況で出土し、距離的にも近い。出土遺物の中では、緑釉陶器が目だつものである。時期的には9世紀中葉から10世紀にかけてである。

土師器の変遷 東海地方においては須恵器の研究は猿投窯などの生産地を中心として編年研究も進



第132図 II期の土師器（1：6）

み、ほぼ確立されたものとなっている⁹⁾。ところが土師器は集落遺跡の調査が少ないため、はっきりとわかっていなかった。今回の調査で土師器はかなりまとまって出土しているが、器種は甕と甔の煮炊具があるのみで供膳具は全くない。これは平城京をはじめとして東海地方以外の地域と比べると特異である。近年の調査で集落遺跡である清州城下町遺跡でも6世紀から11世紀までの土師器が出土しており、いままでも不明であった当該期の土師器の様相も少しつかめるようになってきた⁹⁾。これら尾張の古代土師器の様相についてはまた別稿で述べることにし、この項では遺構から出土する土師器甕を用いてその変遷を考えてみる。なお主たる器種には長胴タイプの甕Cと体部が球形の甕Aがある。

1期の資料は少ないが、甕Cの形態は口縁部を強く屈曲させ、端部が少し上になるものである。胴部は長胴で底部は小平底になるものと思われる。体外面は縦の荒いハケメ調整をする。口縁部内面は横ハケメ調整を施し、体内面はナデもしくはヘラケズリ調整をして体部を薄く仕上げている。

2期は土師器甕Cの口縁部の形状から2小期に細分が可能である。

2a期においては甕Cは口縁端部の屈曲が強く、器壁がさらに薄くなる。口縁部以外の形態、調整技法は1期と同様であり、底部は小平底である。

2b期になると口縁部の屈曲が少し弱くなり、外湾しながら伸びるようになる。調整技法に変化はない。口縁部が肥厚し端部が少し外反するものも見られる。

3期は口縁部の屈曲が弱くなり緩やかに外湾するようになる。この時期には口縁端部を内側に折り返すタイプのもの(甕F)も見られる。このタイプのものは体部が長胴のものと球形のものがある。

(3) まとめ

古代における三の丸遺跡は掘立柱建物と竪穴住居で構成される集落遺跡である。7世紀の後葉に掘立柱建物と竪穴住居がほぼ同時に出現し、8世紀中葉になると掘立柱建物が消えるが9世紀中葉になり再び現れる。両者はそれぞれ分かれて存在し、分布する地域が別であった可能性もある。出土遺物からみると2期には完形の灰釉双耳甕や円面甕、墨書土器が出土しており「字」を使う人の存在が考えられる。3期には緑釉陶器が多く存在し素地ではあるが四足壺¹⁰⁾が出土している。何等かの形で「公的」なものが存在したかも知れないが断定はできない。あるいは、この地域の中核的な集落として考えた方が妥当かもしれない。いずれにしても尾張における古代の集落遺跡の調査例は少なく様々な問題が残されているが、今回の調査によりその概要は明らかになったといえよう。(城ヶ谷和広)

註

- (1) 名古屋市教育委員会「正木町遺跡発掘調査概要報告書」1986
- (2) 名古屋市教育委員会「伊勢山中学校遺跡第3次発掘調査概要報告書」1987
- (3) 名古屋市教育委員会「高蔵遺跡発掘調査概要報告書」1982
- (4) 名古屋市教育委員会「天白、元屋敷遺跡発掘調査報告書」1985
- (5) 名古屋市教育委員会「堅三蔵遺跡発掘調査概要報告書」1984
- (6) 基本的な年代観等は植崎彰一・齊藤孝正「愛知県古窯跡群分布調査報告書」Ⅲ 1983に依った。
- (7) 灰釉双耳甕については名古屋学院大学植崎彰一教授より種々の御教示を得た。
- (8) 註(6)の文献など
- (9) 清州城下町遺跡で6世紀から9世紀の土師器の変遷について検討したことがある。(城ヶ谷和広「清州城下町遺跡下層出土土師器の検討」愛知県埋蔵文化財センター「清州城下町遺跡発掘調査報告書」1990
- (10) 緑釉四足壺は全国でも数例しか知られておらず、素地とはいえ一般の集落では出土するものと思えない。

3. 中・近世における三の丸

名古屋城三の丸については、「金城温古録」^[1]等の詳細な記述に加え、蓬左文庫などに豊富な絵図類が残されている。本稿では、これらの文献史料と調査成果を基に、名古屋城三の丸の変遷について、若干の考察を加えてみたい。

(1) 絵図による三の丸の変遷

現在残されている三の丸関係の絵図では、大きく三段階の変遷がみとめられる。

A. 名古屋築城以前

築城以前の様相として、「金城温古録」所収の「御城取大体之図」^[2]に示された状況である。二の丸付近に「古城跡」があり、調査地点周辺には「琵琶島」「広井」方面への道が通り、「名古屋氏」の宅跡が示されている。

B. 築城直後

三の丸内の屋敷地割として、「金城温古録」所収の「三之丸内邸宅古図」^[3]あるいは、「蓬左遷府記稿」所収の「慶長年中三之丸図」^[4]に示される状況である。志水氏が西の丸、竹腰・成瀬両氏が二の丸に居を構え、三の丸内の東・南・西の各土塁際は、広く空けられ、戦闘用の空間として確保されている。

C. 安定期

三の丸の屋敷地割がほぼ安定した後、その廃絶に至るまでの時期である。志水・竹腰・成瀬の各氏の屋敷が三の丸に移され、東御門内に形成されていた武家屋敷が立退き、「御屋形」が設けられる。また、広場となっていた土塁際は、一部を除き、武家屋敷で満たされる。

これらのうち、A段階からB段階への変化は、劇的ともいえるが、しかし、「三の丸」に造成された後においても、台地西端部は、比較的旧状をとどめていた様であり、「金城温古録」には、次の様な記載がみられる。

三之丸坤隅に至て、雨壺張にて、夫より西境ながうねより、山下御門之取付く処迄の趣など、全く旧き山なり其儘に削りて、取入給ひし趣、今に能く明らかに見へたり^[5]。

また、名古屋氏宅についても、「名古屋三左衛門宅跡」として、

三之丸中小路西の方、武士屋敷の裏(今堀原氏屋敷裏より大道寺殿屋敷裏にかゝる-原註)に、から堀の残れるを、名古屋三左衛門が宅址也という^[6]。

との記事を載せ、さらに、「得義見聞」として、

大道寺文善歌書院の庭、長(ウシトラ-原註)の方に矢場あり。其後に一の陸山あり、山上に小祠、西向に鎮座、神前に石燈籠一対を立る。祭神は神明と云、古昔より在来る所となり。又、比家中、射的の歩付を神納あり。皆、彼矢場に於ての事と。其社後に、石五六立て、土を囲ふ処あり、此処より下、北東は深き堀にて、巾一間も有らんと見ゆ。今は大に埋りたり。是、古への名古屋藏人の後、孫の山左衛門などの居城の跡となり。

と記している。また、天保15年(1844)初版の「尾張名所図絵」においても、同様に、「名古屋山三宅跡」として、

名古屋藏人高信の屋敷跡、三の丸の内、西南の武士屋敷の内にありて、濶、土居などのあと今に残

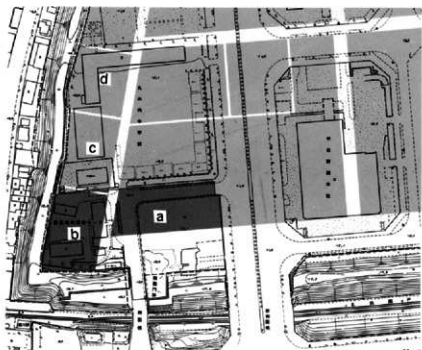
A. 名古屋築城以前
「御城取大休之図」

B. 築城直後
「三之丸内邸宅古図」

C. 安定期
「名古屋城主要部」

第133図 三の丸の変遷

第134図
屋敷地の復元



全長(1637)22'

第4表
居住者の家譜

1603

屋敷地 a	屋敷地 b	屋敷地 c	屋敷地 d
山下半三郎 市正	藤沢権左衛門 長治郎	大橋七平 勘太夫	大橋長右衛門 ○
志水監物 武部	山下八郎右衛門	山下市郎兵衛	(御側御用場)
大道寺玄蕃 河守 主 河守 玄蕃 玄蕃	横井孫右衛門 辰之丞 市郎平	福垣岡右衛門 楠大庵 道二	安達玄長 渡辺佐一郎 岩附惣左衛門
	中条金四郎 東西郎	並河白梅 山田類安 谷田茂庵 武半治 喜依治 喜依治	渡辺佐一郎 審 佐一郎
	多 ○ ○ ○ ○ ○	水野藤兵衛 ○ ○ ○ ○	

「金城盟古録」
「名古屋史」
による

れり¹⁷⁾。

とあり、人名に多少の混乱がみられるものの、少なくとも、江戸時代後期段階でも、三の丸内に築城以前の遺構が残されているとの伝承が存在したことは確認できる。

また、B段階からC段階への変化については、志水氏の三の丸の移転が寛永3年(1626)、「御屋形」の成立が慶安4年(1651)、竹腰氏・成瀬氏の三の丸移転が寛文3年(1663)であることが知られている。三の丸内の志水氏の屋敷地は、西土塁際を占有する形で設定されており、また、寛文8年(1668)～延宝3年(1675)頃の状況を示すとされている。「万治年間名古屋城下絵図」¹⁸⁾では、既に、東・南・西共、土塁際まで屋敷地が設定されている。法令的にも、寛文年間には、家作関係の条目が整備されており、志水氏の移転以降、この頃までかなり大規模な屋敷地割の変更が行われたものとみられる。

このC段階は、延宝年間以降、三の丸廃絶時までの様相であり、約200年間にわたり、若干の統廃合はみられるものの、ほとんどその地割は変化していない。

現在残されている絵図の大半は、この時期の作成であり、特に、「元禄拾年御城絵図」¹⁹⁾は図面全体に、京間10間毎に朱格子を入れる詳細なもので、現在の地形図との照合もある程度可能である。これによれば、調査区附近は、屋敷地(a)～(c)及び御園御門に伴う番所等の存在が推定し得る。

最後に、これらの諸施設の廃絶の時期は、明治4年(1871)の廃藩置県後のことと考えられる。この

年、城のシンボルともいえる「金鯱」が城から降ろされ、宮内庁へ献納され、二の丸は兵営となり、名目上は「知行取り」であった三の丸の居住者の多くは、旧領へと移り、三の丸内の屋敷は取り壊されていったようである。この後、明治7年には、三の丸全域が陸軍省に移管され、明治10年には、残されていた東照宮も現在地へと移され、郭内の兵営化が完了している。

(2)文献からみた諸施設

絵図等による記録から、調査地点を形成していたと思われる諸施設について、その概要を示したい。

A. 西土居筋・内片端広場

三の丸西土壘に平行する「西土居筋」及び南土壘の北側に設けられた「内片端」広場である。「元禄拾年御城絵図」から復元すれば、西土居筋の道幅は京間約5間(9.75m)、内片端広場の幅は、土壘端より約20間(39m)となる。

B. 御園御門・番所

門自体は発掘区に含まれないが『金城温古録』には以下の記載がある。

御園御門 三間梁、南北十一間、石垣高二間五尺。

御番所 式間梁、南北五間、御門番同心六人。

柵杉 東西十九間、南北十三間四尺。

橋台 巾四間¹¹⁰⁾。

このうち、御園御門は、明治6年3月撤去され、また枱形も、明治42年、堀中への軌道設置のため撤去されている。

C. 武家屋敷

調査区内には、屋敷地(a)～(c)の一部が含まれていると考えられる。

屋敷地(a) 御園御門内北側に位置し、『尾府名古屋図』によれば、玄関は南側。敷地は間口「六十八間」、奥行「三十八間半」となる。当初名古屋築城を提言した山下氏勝の屋敷地、その後、志水氏を経て、延宝3年(1675)以降、大道寺氏の屋敷地となる。築城時には、「本ノ所」として使用されたとの伝承がある。¹¹²⁾幕末時の石高1750石。

屋敷地(b) 南・西の土塁跡に位置し、西土居筋に面する屋敷地。藤沢氏、山下氏、横井氏を経て、中条氏の屋敷地となり、廃絶に至るまで7代相伝されている。幕末時の石高1200石。

屋敷地(c) 西土居筋に面し、屋敷地(b)の北隣。大橋氏、安達氏、渡辺氏等、居住者の移動が激しく、最後の水野氏が入居する時には、北隣の屋敷地(d)と合わせて、「二軒拝領、但、南界少々中条多へ入¹¹³⁾」とある。幕末時の石高450石

これらの武家屋敷地の内部が、どのような空間構成であったのかは、資料に乏しく、ほとんど明らかでなく、現在ある程度の様相を知ることができるのは、幕末時に1200石取であった野崎一学邸のみである¹¹⁴⁾。

野崎邸は、大名小路に面し、中小路との交点の東南側に位置し、以下の構成をとっている。

- (1) 両街路に沿って「長屋」をめぐらし、他家との境は「屏」とする。
- (2) 大名小路側が「長屋門」となり、門番所をつけ、他の部分は、「中間部屋」「作事部屋」「物置」「薪部屋」等とする。
- (3) 母屋は、正面に式台の付く「玄関」「使者ノ間」がある。
- (4) 玄関右手は表向で、「書院」「中ノ間」等があり、最も奥には「上段ノ間」がある。
- (5) 玄関奥は中央であり、「待詰所」「侍部屋」「広間」があり、「居間」がそれに続く。
- (6) 玄関左手は奥向であり、「台所板間」「茶ノ間」「女中部屋」などがある。
- (7) 長屋、母屋とは独立して、「土蔵」「穀蔵」が存在する。
- (8) 屋敷地の界だけでなく、「水落」「馬ツナギ」等を結ぶ形で溝があり、大名小路側へ排水される。
- (9) 井戸は屋外に存在する。
- (10) 「カコイ」が多用され、随所に「路次口」がみられる。

このような状況は、恐らく三の丸武家屋敷の多くに共通するものであり、当時の一般的な形態であったと考えられる。

次に、この屋敷に、どの程度の居住者があったかについては、明確にはし得ないが、寛政12年(1800)の「首藤氏覚書」の「屋敷家作間敷量割等」によれば、屋敷の付属施設として、「土蔵」「物置」などの他に「仲之部屋」「穩居部屋」等の記載があり、当主以外にもその家族、及び使用人が相当数居住していたと考えることができる。

一方、屋敷地内の建物の存続期間については、近世を通じて、三の丸が大火等の災害がなかったこともあり、相当長期にわたった様である。「旧邸礎石略」によれば、明治初年三の丸の屋敷を取り払った際には、慶長年間に建築して以来子孫が相伝し、続いて居住していた家が五軒ほどあったとされている⁽¹⁵⁾。

また、これらの屋敷は、基本的に「拝領屋敷」であり、多分に「役宅」としての性格を有するものであったため、居住者の交代と建物の建替は必ずしも一致しない。例えば、瀬吉左衛門邸は、初代の伊奈氏を含め、居住者の交代が9家に及んだものの、建物自体は、「屋敷向残らず伊奈氏建築のままにて、釘隠二ツ巴の紋なりき、明治まで存せり」⁽¹⁶⁾とされている。転居の場合は、前住者の家作をそのまま引き継ぐのが一般的であったようである。

(3) 遺構からみた調査地点の様相

調査により検出した遺構から、三の丸の様相について、若干の復元を試みたい。

A. 三の丸造成以前

調査地点では、西の土塁原まで、中世以前の包含層がほとんど傾斜のない状態で、よく残されており、築城に伴い、大規模な切土、盛土を行なった状況はみとめられない。これは、台地を掘り切る形で掘削された東・南の外堀に対し、三の丸西辺が、自然の段丘涯の比高差をそのまま利用する形で造成が成されたためと考えられ、『金城温古録』に示された、「旧き山なり其儘」⁽¹⁷⁾とよく一致するものと思われる。

また、調査区内では、中世末に形成された「土塁」を有する「堀」遺構を検出し得た。これは、「居館」に伴うものと考えられるが、その埋土は、熟田層のブロックを多量に含むもので、短期間に人為的に埋め戻された状況であり、『尾張名所図説』に、「堀、土層などのあと今に残れり」とある名古屋氏の居館との関係は明らかでない。

B. 西土居筋・内片端

道及び広場部分は、調査では、遺構の存在しない空地として確認することができた。道路相当部分には、一部小豆大の小礫が散布する地点もみられたが、その時期は特定し得なかった。西土居筋は、溝S D401及び溝列S A401を、それぞれ道に面した武家屋敷地(a)・(b)の境界施設とすれば、幅約7m(3間半)程となり、町屋部分の道路幅とされる3間よりは若干広かったものと考えられる⁽¹⁸⁾。また、内片端部分は、柱列S A402を屋敷地(a)の境界施設とすれば、土塁端より約30m(15間)の数値が得られる。

C. 御園御門

門に接続する石垣の基礎地帯を確認することができた。この結果、現在残されている西側の石垣は当時のままであるが、東側の石垣については、「御園橋」に通じる道路を確保する為、当時より15m以上取り壊されていることが明らかとなった。従って、絵図から想定された通り、今回の調査区内には、「御園御門」は存在しないといえる。

また「番所」は、それ自体の遺構は検出し得なかったものの、門の正面東側部分に、井戸2基と廃棄土坑E群があり、番所に伴って形成されたものと推定し得る。

D 屋敷地

部分的にはあるが、(a)～(c)の三軒分が検出された。

屋敷地(a) 西土居筋側をSA401、内片端側をSA402で画された屋敷地。敷地内には、廃棄土坑A・B群があり、この部分には少なくとも建物は存在しなかったとみなし得る。また、井戸は9基中7基がこの範囲に含まれ、屋外に配置される野崎邸のあり方とよく一致する。

これに対し、「地下室」あるいは「便所」と考えられる埋蔵遺構は、いずれも廃棄土坑群とは一線を画して存在しており、これらの施設が建物内部に含まれるものであったことを示している。

また、SA403・405等は、いずれも長径2mに近い大形の土坑が連続するものであり、かなり堅固な施設の基礎地帯と考えられる。一方、内片端沿いの柱穴列SA402の内側には、幅4m程の遺構の空白地帯があり、「長屋」の存在を考えることもできよう。

屋敷地(b) 南及び西を土塁で囲まれる屋敷地、西土居筋との境界は大規模な攪乱部のため不明。北側は、西土塁に直交する方向で何条かの溝があり、いずれかが、屋敷地(c)との境界施設と考えられる。

敷地やや西寄りには、桁行10間×梁行3間(+α)の建物SB401が存在する。

屋敷地(c) 調査区西北端の一部が該当するが、大半は丸の内中学敷地に含まれる。名古屋市教育委員会の調査時に、「地下室」等が確認されている。

E. 大型土坑

内片端部分に位置する大型の土坑SK415・478・479である。出土品が多いことから、一種の廃棄用土坑と考えられるが、(1)単独で存在し非常に大型であること、(2)内片端広場といった、公共的空間に位置すること、(3)埋土の大半が、熟田層の小ブロックを含む煎土で占められていること、などから、屋敷地内に「群」として存在する一般的な廃棄土坑とは、性格を異にすると思われる。

時期的には、17C前葉と考えられる陶磁器が多く出土しており、出土銭貨中に、「寛永通宝」が全く含まれないことから、築城以降、1630年代頃までの形成と思われる²²⁾。また、遺物中には、若干ながら瓦片を混じえ、特にSK415出土品には、金箔を施す瓦当もみられたことから、何らかの公的施設の整備、補修に伴って形成された廃棄土坑である可能性が高いといえる。

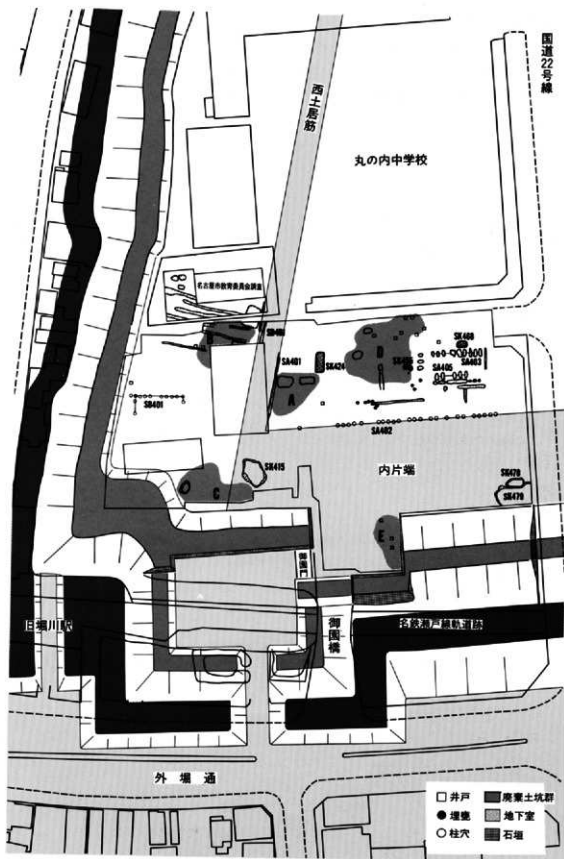
(4) 小結

1. 中世末に形成されたと考えられる土塁を伴う溝群と、「名古屋氏」居館との関係は不明であるが、当時、台地上に那古野城主であった今川氏、あるいは織田氏の家臣団の屋敷地が展開していたであろうことは、概ね首肯されるであろう。

2. 西側土塁際に位置する屋敷地群の形成は、文献等では、寛永3年(1626)～延宝3年(1675)頃までの間と推定し得るが、調査の結果もこれと矛盾せず、17C中頃に、大規模な三の丸再整備が行なわれたものと考えられる。

3. 屋敷地(a)においては、建物、井戸、廃棄土坑等、何度かの過り替えが行なわれたものとみられるが、いずれも、一定範囲内でのくり返しであり、屋敷地内における空間構成は、全時期を通して、基本的には変化していないと考えられる。

4. 屋敷地(b)(c)については、その境界付近に平行する何条かの溝が存在し、両者の間で、敷地



第137図 近世三の丸の復元（御園門周辺）

の変動があった可能性を示しているが、文献の上では、水野氏が入居するとき、(c)(b)の2軒分を拝領し、そのうち、(c)の一部を南隣の中条氏へ割譲したことが知られており、それを裏付けするものと考えられる。

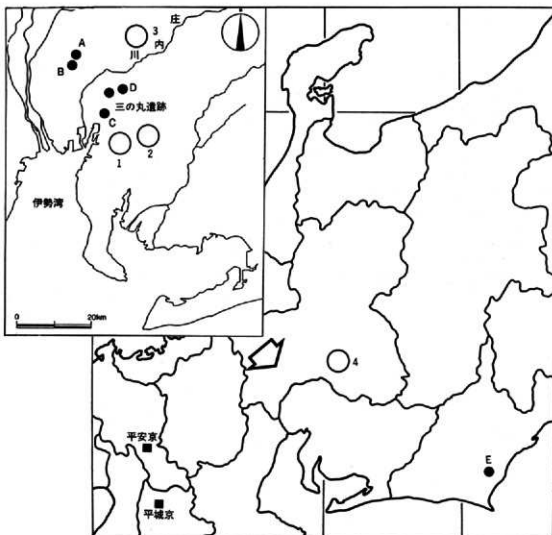
5. 大型土坑の形成については、築城以降、1630年代までの時期が考えられるが、具体的には、当時山下氏が居住していた屋敷地(a)が「本メ所」として使用された築城時か、あるいは、寛永11年(1634)の将軍家光上洛に備えた整備の際に設けられたものである可能性が高いといえる。(梅本博志)

註

- (1) 奥村得義『金城温古録』(名古屋市教育委員会『名古屋叢書続編』第13-16巻所収)
- (2) 第二之冊「御城地取」
- (3) 第六十一之冊「三之丸編之四」
- (4) 加藤品房『蓬左遷府記稿』
- (5) 註(2)に同じ
- (6) 第五十九之冊「三之丸宅部」
- (7) 巻之一所収
- (8) 名古屋城管理事務所蔵
- (9) 名古屋市蓬左文庫蔵
- (10) 第五拾八之冊「三之丸部」
- (11) 名古屋市蓬左文庫蔵
- (12) 名古屋市史編纂室『名古屋市史』地理編 442頁(1915)
- (13) 『金城温古録』第六十一之冊「三之丸編之四」三之丸内土第転換
- (14) 水野耕嗣『武家地とその建築』(『名古屋城』1985)
- (15) 前掲『名古屋市史』風俗編 523頁(1915)
- (16) 同上地理編 450頁(1915)
- (17) 註(5)に同じ
- (18) 註(7)に同じ
- (19) 名古屋市教育委員会による名古屋城三の丸遺跡第1次調査(1987)では、「東土居筋」に相当する幅8m(4間)程の街路を検出している。名古屋市教育委員会『名古屋城三の丸遺跡』(1989)
- (20) 阿部直輔『尾藩世記』(『名古屋叢書三編』第2巻 1987)によれば、寛永13年(1636)6月「寛永新銭発行の掲示を掲ぐ」とある。

4. 三の丸遺跡出土の緑釉陶器素地について

三の丸遺跡からは合わせて約70点の緑釉陶器と、その素地（必ずしも素地と断定できるものではないが、いま仮に緑釉陶器の器形で無釉のものを素地としておく。）が出土した。緑釉陶器については各地で見られ、どの遺跡を調査しても数点は出土するという状況である。しかし、出土量は少なく、たいていは遺物全体の1%にも満たない数であり、日常的な遺物とは思えない。従ってその出土状況を検討することにより遺跡の性格の一端を知る糸口にもなる。一方、緑釉陶器素地はほとんどの場合、生産地である窯跡から出土し、施釉前の「半製品」として捉えられていた。消費地である三の丸遺跡では四足壺などが明らかに「製品」として出土しており、「半製品」として解釈するのは難しく、その流通を考えるとたいへん興味深い。今まで素地が消費の場で捉えられたことはなかった。そこで、こ



第138図 遺跡位置図 (1:500000)

- | | |
|----------|-----------|
| A 尾張国府跡 | 1 讃投窯鳴海地区 |
| B 流遺跡 | 2 讃投窯黒笹地区 |
| C 尾張元興寺跡 | 3 尾北窯 |
| D 片山神社遺跡 | 4 美濃窯 |
| E 御子ヶ谷遺跡 | |

の節では三の丸遺跡出土の緑釉陶器素地について取り上げ若干の検討を加えてみることにする。

(1) 三の丸遺跡における出土状況の検討

(1) 緑釉陶器について

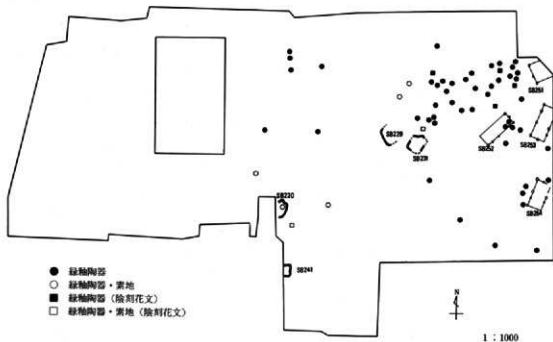
まず初めに比較の意味で緑釉陶器について見ておく。三の丸遺跡では60数点の緑釉陶器が出土した。器種は椀・皿が多いが、そのほかに椀・段皿・壺などがある。その出土状況についてみてみると次のような特徴がある。

- ① 胎土・釉調にはバラエティーがあり複数の産地が想定される。
- ② 緑釉陶器は当該期の遺構からの出土例は少なく、ほとんどは包含層(第III層)からの出土である。
- ③ 緑釉陶器は細片が多く完形に近く復元されることはない。
- ④ 緑釉陶器は調査区の北西部から多く出土する。

①について緑釉陶器はいずれも細片であり、はっきりしたことは言えないが釉調・胎土から、複数の産地に分けられる。最も多いのは濠投産であり全体の約2/3を占める。次に尾北産が25%、その他東濃産、畿内(近江)産、不明などが約10%である。

②については堅穴住居などの遺構から出土するものはほとんどなく、第III層からは約2/3が出土している。これは後にも述べるが緑釉陶器が掘立柱建物に伴う遺物であるからであろう。

③は②とも関連したもので、緑釉陶器の廃棄のされ方に関わる問題である。緑釉陶器は数は多くないがなかなか接合しない。しかも大きな破片はない。これは緑釉陶器が少し欠損しても廃棄されずに使用された結果であろうか。S B 220やS K 203から灰釉陶器が完形に近いものを含めてまとめて廃棄されたような形で出土しているが、これらのなかには緑釉陶器是一片も見られない。尾張は濠投窯を擁し、平安時代の供膳具はほとんど灰釉陶器で占めるのに対し、同じ生産品である緑釉陶器は量的



第139図 緑釉陶器(素地を含む)出土地点

にも少なく在地においても希少なものであったことがうかがえる。

④については遺構の性格ともかわる問題である。II-3期には調査区の北西部に掘立柱建物が展開し、緑釉陶器はそのまわりに集中して出土する。両者は密接に関係したものと考えるのが妥当であろう。それに対し、堅穴住居が分布する地域である調査区中央部にはあまり出土していない。

(2) 緑釉陶器素地について

三の丸遺跡からは7点の緑釉陶器素地（以下「素地」とする）が出土している。椀1点、陰刻花文碗が1点、輪花椀が1点、椀が1点、壺1点、陰刻花文四足壺1点である。

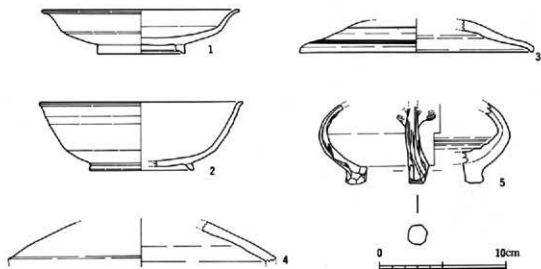
(1) は第III層から出土したもので3/4が残存している。胎土は白色であるが底部は焼成が不良で中心部が暗灰色を呈する。ヘラミガキの痕跡はみられない。

(2) はSB220から灰釉陶器に混じて出土したもので2/3が残存している。胎土は精良で灰白色を呈し、内外面とも細かいヘラミガキをする。高台は付け高台である。施釉の形跡は全く見られず、自然釉が掛かった痕跡もない。

(3) はSB228から出土したもので、外面全体に自然釉（灰釉）が掛かる。(3)は灰釉陶器とも考えられるが焼成後、釉を削り落とした跡があり、その後、鋭い刃先のもので肩と口縁部の近くに沈線を描いている。内面も掛かった灰釉を掻き落とそうとしている。釉は施釉されたものかどうか判断するのは難しいが、ここには何らかの形で釉を否定しようという意志がみられる。

(4) はSK203から出土したもので、細片であるが壺類になる可能性がある。色調は灰白色で硬質、外面はヘラミガキで調整する。

(5) は第III層から出土したもので胎土は精良で白色を呈する。体外面は細かいヘラミガキで調整し、足の付け根に陰刻花文を施す。足の内面はヘラによる面取りをし、外面をヘラミガキで調整する。施釉された痕跡はない。胴部にまだ突帯が巡っていない点などから、比較的古い形態を有するものである¹⁾。また四足壺は近年発見された高野山金剛峯寺真然堂から出土した真然(804-891)の蔵骨器と考えられる緑釉四足壺²⁾と比較的よく似た特徴を持つ。体部に突帯が巡っていない点、陰刻花文を施す



第140図 三の丸遺跡出土の緑釉陶器素地

点や4つの足の形状などである。真然は空海の甥に当たる人物で緑釉四足壺は使用痕跡があり朝廷から下賜されたものとも考えられている。産地は猿投窯と推定されており、両者は近い時期に猿投窯で生産されたものであろう。緑釉四足壺は全国的にも数例が知られているのみであり生産の限定された器種である。三の丸のものは素地ではあるが数少ないものの1つである。

その他、陰刻花文碗は第三層から出土したもので内面に陰刻花文を施すが細片で図示しえない。胎土は白色で体部は内外面ともヘラミガキをする。

輪花碗も第三層からの出土で外面をヘラで押し出した輪花がつく。細片で図示しえない。胎土は精良で白色を呈する。外面は丁寧なヘラミガキが施され光沢があるが、内面は自然釉が掛かり剥離している。

緑釉陶器と比較して出土状況についてみてみると下記ようになる。

- ① 胎土・花文などから猿投産と思われる。
- ② 素地は遺構から出るものと包含層から出るものがある。
- ③ 素地は半分以上に復元できるものがある。
- ④ 素地は調査区の中央部からほとんどが出土している。

①について素地は胎土が白色、精良で猿投窯産であると思われる。特に陰刻花文を施したものは胎土も良くヘラミガキも丁寧である。花文の描き方も猿投窯のK-90号窯期の頃の特徴を示している。猿投窯の鳴海地区、黒笹地区の窯跡では緑釉を施さない素地が出土する例がいくつかある。素地は近辺で施釉後専焼されたものと考えられている⁽⁹⁾。また、素地を単に素地としてでなく、そのまま製品とする考え方もある⁽¹⁰⁾がこの点については後で述べる。

②について緑釉陶器はほとんどすべて包含層から出土したが、素地は竪穴住居から出土するものが2点、土坑から出土するものが1点ある。SB220、SK203からは多くの灰釉陶器群に混じって出土している。この2つの遺構は3期に一括して投棄されたと考えられる遺物を出した代表的なものであり灰釉陶器とセットになり使用されていたものと考えられる。遺構から出土したものはいずれも陰刻花文を持たないものである。陰刻花文を施したものは包含層からのみ出土している。

③について半分近くに復元できるものは3点でいずれも陰刻花文を持たない。②と関連して陰刻花文を持つものと持たないものでは使われ方に何等かの差異があったかも知れない。同じ素地でも陰刻花文を持つものは緑釉陶器に近い出方をする。

④について緑釉陶器は掘立柱建物の分布する西部に多く出土するが素地はSB220、SB228からも出土しており、主として調査区中央部の竪穴住居の周辺から出土している。掘立柱建物の性格は不明であるがどちらかといえば竪穴住居は、より私的なものである。また、①とも関連したことであるがこの集落に住んでいた人々が生産になんらかの形で関わっていたからか、それとも生産地に近いということでも例外的に緑釉をかけないまま製品として流通したのであろうか。

緑釉陶器と比較してみると素地は使われ方に差があるような気がする。陰刻花文を施したものは緑釉陶器に近い出方をするが、花文のないものは掘立柱建物よりも竪穴住居、「公」よりも「私」という傾向にあるようである。そこで次に、他の遺跡の事例を見ながらこの問題を検討してみたい。

(2) 他の遺跡の出土例

三の丸遺跡出土の素地についてみてきたが管見に触れた他の遺跡の出土例を取り上げ、素地がどの

様に流通したのか考えてみたい。

A 愛知県稲沢市 尾張国府跡⁽⁸⁾

尾張国府跡は昭和52年度より発掘調査が行われているが、まだ政庁等の遺構は確認されていない。しかし、出土遺物等からみてほぼ国府跡であろうと推定されており、緑釉陶器なども多数出土している。素地は昭和56年度のA地区の包含層中から陰刻花文を施した輪花皿などが出土している。(1)は小片であるが体部をヘラミガキし、口縁部に「V」字状の切れ込みを持つ輪花皿である。形態は隅丸方形になる可能性がある。(2)は皿の体部のみであるがヘラミガキ調整し内面に陰刻花文を持つ。この地点は推定国府の中心に近く、緑釉陶器も多数出土した。器種としては碗・皿類が多いが、合子や塔なども見られる。素地は他にも国府内のいろいろな地域からかなりの量が出土している⁽⁹⁾。

B 愛知県稲沢市 流遺跡⁽⁷⁾

流遺跡は尾張国府の南約3kmに所在しており、国府との関連も考えられる遺跡である。昭和47年度に調査が行われ、遺構等ははっきりしないがB地点の黒褐色シルト層から緑釉陶器碗や素地陰刻花文皿が出土している。この皿(27)にはヘラミガキは加えられてないが胎土は精良で内面に陰刻花文を施している。緑釉陶器は2点が出土しているが2点とも碗である。

C 名古屋市長 尾張元興寺跡⁽⁹⁾

尾張元興寺は平安時代に尾張国分寺が焼亡したときに代行をつとめたとされる寺院で、創建年代は不明であるが、出土する瓦が山田寺と同型式の単弁蓮華文軒丸瓦を含み、7世紀後半に遡る尾張でも最古の寺院の一つである。昭和59年度に調査された地区の瓦溜りからは、創建期の瓦に混じって素地の陰刻花瓶、花瓶、灰釉陶器多口瓶が出土している。緑釉陶器は出土していない。(30)は体部のみであるが、胎土は白色、精良で陰刻花文を施す。焼成がやや不良で軟質でありヘラミガキ痕跡ははっきりしない。(31)も焼成がやや不良で軟質でありヘラミガキ痕跡等は不明である。(32)は胎土が灰白色で堅緻であり、口縁部から肩にかけて灰釉が掛かる。

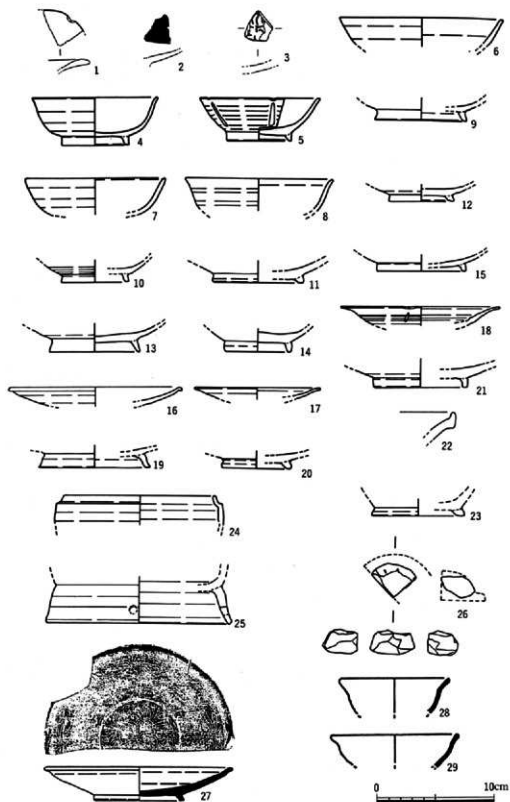
D 名古屋市長 片山神社遺跡⁽⁹⁾

片山神社は延喜式にみえる山田郡片山神社に比定されている。片山神社遺跡は片山神社のすぐ南西に位置する縄文時代から中世にかけての遺跡である。調査区南東のSX3より灰釉陶器、土師器に混じって素地皿が出土している。実測図は未報告であるが突見したところ、胎土は白色、精良でヘラミガキ痕跡はないが、内面に陰刻花文を施している。内面に釉が掛かるが施釉されたものではなく自然釉であると思われる。SX3は竈穴住居であると考えられているが⁽¹⁰⁾、片山神社との関連も想定され単に一般の住居とするのは早計であろう。

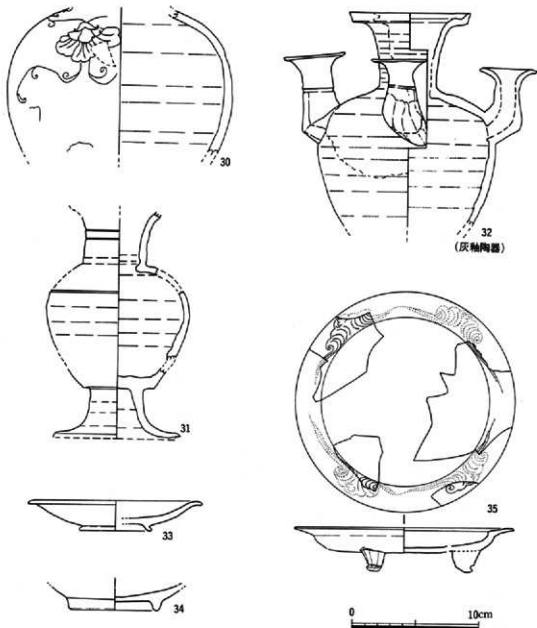
E 静岡県 御子ヶ谷遺跡⁽¹¹⁾

御子ヶ谷遺跡はその出土遺物・遺構からほぼ志太郡衙と推定されている遺跡である。遺構の配置等も把握され、郡衙として確実に捉えられる数少ない遺跡の一つである。その包含層から出土した遺物のなかに陰刻花文を施した三足盤(35)がある。(35)は報文によると、胎土が非常に緻密で丁寧な調整を施された生地のままで、施釉された痕跡は全く認めないという。緑釉陶器は皿が2点出土している(33・34)。これらの生産地として尾張が挙げられている。

出土遺物をながめてみると大きく2つのグループに分けられる。一つはA・B・Eで官衙及びその



第141図 各地出土の緑釉陶器及び素地(1) (1~26 尾張国府跡1・2が素地 註5文献より)
 (27~29 流遺跡27が素地 註7文献より)



第142図 各地出土の緑釉陶器及び素地(2) (30~32 尾張元興寺跡 30・31が素地 註8文献より)
 (33~35 獅子ヶ谷遺跡 35が素地 註11文献より)

関連が考えられる遺跡である。これらの遺跡から出土したものは陰刻花文を施した皿や三足盤である。Bについては尾張国府と直接関わりを示す資料はないが国府との距離が3kmと近く国府に関連のある遺跡とも考えられる。Eは尾張国外の例であるが志太郡は東海道に面した郡であり、灰釉陶器、緑釉陶器などが尾張から多く行っており尾張との関係も深い遺跡といえる。また、平城京でも出土している可能性がある⁽¹²⁾。県外の例はいずれも官衙遺跡である。もう一方はC・Dであり寺院及び神社などの宗教的な施設及びそれに関連した遺跡である。Cの例は瓦溜りからの出土であり寺院と直接関連したものである。出土する器種は瓶、花瓶である。これらは灰釉陶器多口瓶とともにセットで使用されていた可能性がある。Dについては出土したのは堅穴住居であり、必ずしも片山神社との関連を証

明できるとはいえないが、距離的にもすぐ近くであり神社と関連する遺跡の可能性がある。出土する器種は皿である。また、見方をかえればA・C・Eは官衙及び寺院と直接関わりのある遺跡となる。B・Dはその周辺の堅穴住居からの出土である。三の丸遺跡も後者の例の可能性もある。

(3) まとめ

以上、三の丸遺跡及びその他の遺跡出土の緑釉陶器素地についてみてきた。素地は管見に触れるだけでも三の丸の例を含めて6例が数えられた。量的には多いものではないが、製品として流通していた可能性は強い。いままでほとんど注目されたことがなく、まだ類例は少ないが今後増加する可能性は高い。生産地では緑釉陶器よりも素地の方が圧倒的に多く、黒笹地区の緑釉陶器焼成窯はすべて素地で占められる。これらの生産品は他の地点で施釉後専焼され緑釉陶器になると考えられているが、黒笹地区では専焼窯は発見されていない。素地が本来製品として大量に作られたとは考えにくい、一部に関しては製品として出されていたことになる。今後、緑釉陶器生産を考える上で留意する必要があるであろう。また、無釉でヘラ磨きが施されない胎土が白色の陶器の一群がある。例えば名古屋八事小堂址出土遺物のなかには無釉の火舎と花瓶が2彩や緑釉陶器に混じって出土している⁽¹³⁾。八事小堂址出土遺物は密教の祭壇にあった遺物が火災により一括廃棄されたものと考えられている。横崎彰一氏は祭式の性格の分類のなかで花瓶・火舎・香炉・手付瓶というセットを示されている⁽¹⁴⁾が、これら無釉の陶器は一定の役割を果たしていたと思われる。この節で述べてきた素地がこれらの陶器と同じように捉えることができるのかどうか不明である。ただ三の丸の例では四足壺や花文を持つものを別にして花文を持たないもの出方は灰釉陶器などと同じである。この問題は施釉されない一群の陶器として、呼称も含めて大きく捉えなければならないかも知れないが、まだ資料の数も少なく今回は類例を示すという段階にとどめ今後の出土例の増加を待ちたい。

(城ヶ谷和広)

註

- (1) 名古屋学院大学横崎彰一氏より種々の御教示をえた。
- (2) 菅原正明「金剛峯寺真然堂出土の緑釉四足壺」(『日本考古学協会第56回総会研究発表要旨』1990)
- (3) 名古屋大学斎藤孝正氏より御教示をえた。
- (4) たとえば小島一夫氏はこれ自身が製品で「灰白色軟陶」と呼んでいる。(小島一夫「小結」『NN-278号古窯跡発掘調査報告書』1981 名古屋教育委員会)また、浅田員由氏も陰刻花文陶器について完成品の存在を考えている。(浅田員由「陰刻花文陶器について」『愛知県陶磁資料館研究紀要』7 1988)
- (5) 北条敏示・日野幸治「尾張国府跡発掘調査報告書」(IV) 1982 稲沢市教育委員会
- (6) 稲沢市教育委員会 北条敏示氏より御教示をえた。
- (7) 稲沢市教育委員会「流遺跡発掘調査報告」1975
- (8) 名古屋教育委員会「尾張元興寺跡第II次発掘調査概要報告書」1985
- (9) 名古屋教育委員会「井山神社跡発掘調査概要報告書」1987
- (10) 名古屋見晴台考古資料館 木村有作氏、伊藤正人氏より御教示をえた。
- (11) 藤枝市教育委員会「日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書」III 1981
- (12) 平城宮の東三坊大路東側溝S D650Aより多数の灰釉陶器と共に唾壺が出土している。体部は丁寧にヘラミガキされ、陰刻花文が施されている。報文によると緑釉が全面剥落したとされているが、初めから施釉されていなかった可能性もある。(奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告」VI 1974)
- (13) 横崎彰一「愛知県知多古窯址群」1961 愛知県教育委員会
- (14) 横崎彰一「三彩・緑釉・灰釉」1973

5. 近世の陶磁器・土器

(1) 分類の方法

前章ではIV期を主要供膳具の組成変化に基づき、大まかに4期に区分した。この項ではさらに主要器種の形状を分類し、先に設定した時期を明確にするとともに、その細分を試みる。

分類の対象としたのは碗A・B・J・L・Q、皿C・D・H、鉢B、鍋D・Eである。中でも鉢B及び鍋D・Eはほとんどの遺構から出土し量も多く、口縁の形状も変化に富み、その変移の中に時期差が窺え、分類の基軸となり得る。分類の方法としてまず全体の形状、胎土（アルファベットの小文字で表記）で行い、次に口縁・底部等の細部の形状の変化、成形・調整法（アラビア数字で表記）で区分した。

(2) 鉢Bの分類

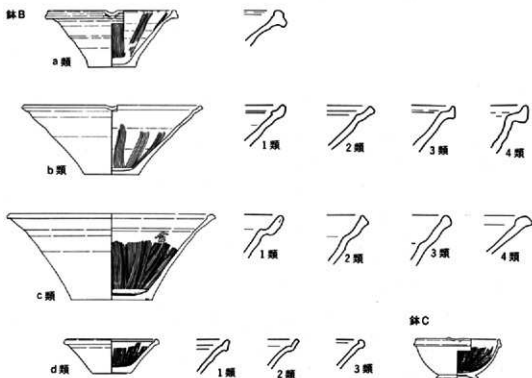
鉢Bはほとんどが瀬戸美濃産である。瀬戸産の摺鉢については窯跡出土のものを使って藤澤氏が分類、編年作業を行っている⁽¹⁾。ここでは氏の成果を踏まえ、最も顕著に見られる瀬戸美濃産の鉢Bの分類中心に行う。

全体の形状からa・b・c類等に分れ、細部の形状でさらに分類できる。

a類：体部は直線的に開き口径の割りに底径が小さく、口縁に短い内傾する縁帯が付く。藤澤分類のI類第9型式⁽²⁾。

b類：体部は直線的に開き口径に対し底径が小さい。

1類 口縁は内側に折り返され端部は丸く内面に低い突帯がある。藤澤分類のI類のA類。



第143図 鉢Bの分類

2類 口縁端部は内傾し面取られる。口縁はやや開き、内面に低い突帯がある。藤澤分類のI類のB類1類。

3類 口縁は受口状になり端部が低く立ち上がる。藤澤分類のI類のB類1類。

4類 口縁は受口状になり端部は低く立ち上がると共にわずかに垂下する。藤澤分類のI類のC類1類。

c類：体部は直線的に開き底径が大きい。

1類 口縁は受口状になり外側に折り返され縁帯になる。藤澤分類のI類のC類3類。

2類 口縁端部は内傾し面取られ肥大する。内面に低い稜がある。藤澤分類のI類のE類。

3類 口縁端部は内傾し丸く肥大する。内面に低い稜があり対応する外面がわずかにへこむ。藤澤分類のI類のF類2類。

4類 口縁端部は内傾し内面端のみ肥大する。内面に低い稜があり対応する外面がわずかにへこむ。藤澤分類のI類のF類3類。

小型のものも見られそれらは次の2つに分けられる。

d類：小型で体部は直線的に開く。

1類 口縁外面に垂下する縁帯が付き、内面がわずかにへこみ、受口状になる。

2類 口縁は受口状になる。

3類 口縁端部は丸く肥大し内側に突出する。

また鉢Cとした高台を持ち、湾曲した体部に縁帯の付く口縁を持つ甗鉢は藤澤分類のIII類にあたり、甗鉢の全体の形状の変様は下記のようになる。

鉢B：a類→b類→c類→鉢C

口縁の形状の変様は、内傾する短い縁帯(a類)・内面に突帯(b1・2類)→受口状化(b3・4、c1類)→受口の消失とそれに代わる稜の出現と肥大化(c2～4類)となる。大塚期の甗鉢には、口縁端部に縁帯をもつタイプと、口縁が内面に折り返され内面に突帯をもつタイプがあり、前者がa類にあたりIV期の初めにしか見られず、しかも数量的にきわめて少ない。後者がIV期を通じて存在する鉢Bの系列にあたり、基本的には口縁内面の突帯から受口の形成、受口の退化とそれに伴う稜の形成という変化が追える。

(3) 鍋D・Eの分類

次に鍋D・Eについてみていく。

鍋Dは「内耳鍋」と呼ばれ、尾垂では15世紀中頃から見られるものである¹⁰⁾。その形状から、物を煮たり炊たりする用途が考えられる。一方、鍋Eは「焙烙鍋」と呼ばれ大塚の製品の出現とほぼ同時期から見られごく近年まで製作が続けられていた¹¹⁾。用途は形状から専ら、炒ったり焼いたりするものと考えられる。15世紀から16世紀のものを見る限り、鍋Dから鍋Eへ型的に変化したとは考えられない。

鍋Dの調整については、基本的には口縁の外面が横ナデで、体部上部には指圧痕が残る。体部下は横方向のケズリ、底部には木目状の圧痕が残る。内面は、刷毛状工具による横方向のナデがまれにみられるが、ほとんどの場合ナデのみである。底部外面に残る木目状圧痕は、16世紀の轆轤成形の土

器皿の底部に見られる板状圧痕とは異質のもので、丸底の底部全面に残ることを考えると、型押し成形の痕跡の可能性もある。その場合、体部は内湾することから型押し成形とは考えにくく、部分的に底部のみ型押し成形し、体部に接合したと考えられる。

鍋Dは形状からa、b類に分れる。

a類：体部は湾曲して立ち上がり口縁は内湾する。体部と底部との境に稜がある。底は丸底である。

b類：体部はわずかに湾曲して開き、口縁の吊手部分が上に盛り上がる。底は丸底。

a類はさらに口縁の形状と外面のケズリの位置で細分できる。

1類 口縁端部は上面が面取られ、わずかにへこむ。端部は内側にわずかに突出する。ケズリは体部下端から底部の一部に施される。脚が3本付く。

2類 口縁端部は上面が面取られ、わずかにへこむ。端部は内面にわずかに突出すると共に外側にも短く突出する。体部下半を伴うものが出土していないため、ケズリの位置については不明。

3類 口縁端部は上面が面取られへこむ。端部は内側へ鋭く突出し、外側にも短く突出する。ケズリは体部下半から底部の一部に施される。

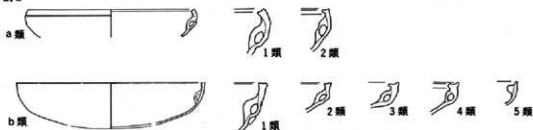
4類 口縁の形状は3類と同様である。ケズリは体部下半のみ施される。

鍋Eは全体を知り得る例が少なく、調整を不明の点が多いが、断片から判断すると基本的には鍋Dと調整法及び調整部位は変わらないと考えられる。外底部には部分的に木目状の圧痕が残り、その上からケズリを受けるものもあり、底部は鍋Dと同様に型押し成形である可能性がある。ただ以下にみるb類の6類の中には1点のみではあるが、外面は口縁のみ横ナデである他は無調整で、内面に布目を残した内型使用の型押しして成形のものがある。⁽⁶⁾

鍋D



鍋E



第144図 鍋D・Eの分類

形状は口径の割に器高が低い皿状である。形状から次の a、b 類に分類できる。

a 類：口縁が内湾するもの。

b 類：口縁が直立気味またはやや外に開くもの。

a、b 類は口縁の形状で次の様に細分できる。

a 類 1 類 口縁端部は内傾して面取られ、わずかにへこむ。端部は内側にやや肥大。

2 類 口縁端部はやや内傾して面取られ、わずかにへこむ。端部は内側に丸く突出する。

b 類 1 類 口縁端部は上面が面取られ、わずかにへこむ。

2 類 口縁端部の内側は丸く突出し、外端は上方へ短く突出する。

3 類 口縁端部の両側は細く著しく突出する。

4 類 口縁端部の両側は太く著しく突出する。

5 類 口縁内面に受部状の突帯が付く。口縁端部はほぼ直立する。

b 類の 3～5 類は口縁と体部または底部の境が明確であり、吊手は潰れる。

清洲城下町遺跡の16世紀の遺構から出土する内耳鍋、焙烙鍋の口縁端部は上面が面取られわずかにへこむ¹⁷⁾。また勝川遺跡の19世紀後半の遺構からは内耳鍋は見られず、焙烙鍋の口縁は短く内傾して内面に受部状の突帯が付き、吊手にあたる部分にはへら状の工具で2本の沈線が引かれるのみである¹⁸⁾。また近年まで高浜で製作されていた焙烙鍋は口縁は短く直立して内面に低い突帯が付き、吊手はない。以上の2遺跡と高浜の例から内耳鍋、焙烙鍋は口縁端部の長伸化から受部の成立へという動きと吊手の退化が変化の流れの中核であると言える。

以上の点と供件関係から鍋 D・E を変換順に並べると次の様な変化が考えられる。

鍋 D：a 類 1 → a 類 2 → a 類 3 → a 類 4

b 類

鍋 E：a 1 類 → a 2 類

b 1 類 → b 2 類 → b 3 類 → b 4 類 → b 5 類

		鉢 B	鍋 D	鍋 E
IV-1 期	1 段階	内傾する短い縁帯 (a 類) 内面に突帯 (b 1, 2 類)	a ₁ 類	a ₁ 類, b ₁ 類
	2 段階	受口状化 (b 1・4, c 類)	a ₂ 類	
IV-2 期	1 段階		a ₃ 類	
	2 段階		a ₄ 類, b 類	a ₂ 類
IV-3 期	1 段階			b ₂ 類
	2 段階	受口の消失と稜の出現 口縁の肥大化 (c 2～4 類)		
IV-4 期	1 段階			b ₃ 類
	2 段階	(鉢 C の出現)		b 4・5 類

鍋 5 表 段階 設定

(4) 段階設定

次に鍋D・E、鉢Bの変化と鉢Cの出現を伴関係に基づき組合わせ、第5表のようにIV期の4期を8段階に区分する。

各段階に該当する遺構は下記ようになる。

IV-1期1段階→SK415・479

2段階→SK407・468、SE410

IV-2期1段階→SK455、SE404

2段階→SK410・442・443・445

IV-3期1段階→SK460

2段階→SK467

IV-4期1段階→SK418・428

2段階→SK424・429・446・453、SD402

(5) 椀・皿の分類

次に椀・皿類の分類をしていく。

椀Aはa・b類に分類でき、さらにa類は底部の形状と成形法で3つに分れる。

a類：体部は開き口縁は直立し端部が外反。高台は直立。鉄軸を施す。

		鉢 B								鉢 C	鍋 D					鍋 E							
		a1	b1	b2	b3	b4	c1	c2	c3		c4	a1	a2	a3	a4	b	a1	a2	b1	b2	b3	b4	b5
IV-1 1段階	SK479	○	○	○							○						○						
	SK415			○	○												○						
IV-1 2段階	SE410				○							○											
	SK468				○							○	○										
	SK407												○										
IV-2 1段階	SE404					○								○									
	SK455					○								○									
IV-2 2段階	SK443						○																
	SK410						○								○			○					
	SK442						○								○				○				
	SK445														○								
IV-3 1段階	SK460						○												○				
IV-3 2段階	SK434					○		○										○					
IV-4 1段階	SK428								○												○		
	SK418								○												○		
IV-4 2段階	SD402								○														
	SK429								○													○	
	SK453							○		○												○	○
	SK446								○	○													○
	SK424									○	○												○

第6表 遺構別鉢B・C、鍋D・E出土表

1類 高台内が深く削り出される。

2類 高台内が浅く削り出される。

3類 高台は貼り付け。

b類：体部下部に稜があり口縁は「く」の字状に外反。長石釉が施されるものもある。

碗Bは体部の立ち上がり方でa・b・c類に分類できる。

a類：体部は湾曲して立ち上がり、口縁がわずかに外反。高台は外に開く。高台内の中央が突出。

胎土は灰色で緻密。灰釉がかかり曇付、高台内は無釉。口縁の変化で3つに分れる。

1類 口縁の外反がわずかに強く、口径に比し器高が高い。

2類 口縁の外反は弱く、口径が大きい。体部下半無釉。

3類 口縁の外反がさらに弱くなり、高台径が小さくなる。体部下半無釉。

4類 体部はやや内湾する。口縁の外反は弱く全体的に小さい。体部下半無釉。

b類：体部は湾曲して立ち上がる。高台は高く直立。高台内は平である。胎土は白黄色で粗い。

灰釉がかかり曇付のみ無釉。口径、高台径の変化で3つに分れる。

1類 口径、高台径が大きく、体部下部の屈曲が著しい。

2類 口径、高台径がさらに大きくなる。体部は開き気味に立ち上がる。

3類 高台径が小さい。体部は開き気味に立ち上がる。

4類 高台径が小さく低い。器壁が薄い。

c類：体部は開き気味に湾曲して立ち上がる。高台は直立し、高台の削り込みは浅い。胎土は白黄色である。鉄釉が施釉され体部下部は無釉の場合が多い。

1類 高台内の削り込みが浅い。

2類 高台は台形に削り込まれ、高台内中央は盛り上がる。

碗Jは高台の大きさの変化で1、2類に分類できる。

a類：体部は開き高い高台をもつ。胎土は白色でやや緻密。

1類 高台径は大きい。

2類 高台径は小さい。

碗Lは胎土の相違でa、b類に分類できる。

a類：肥前産と考えられる照りのない胎土を持つ。

b類：瀬戸産と考えられる照りがある胎土を持つ。

a・b類は各々、次の2つに分れる。

1類 口縁が強く外反する。

2類 口縁の外反は弱い。

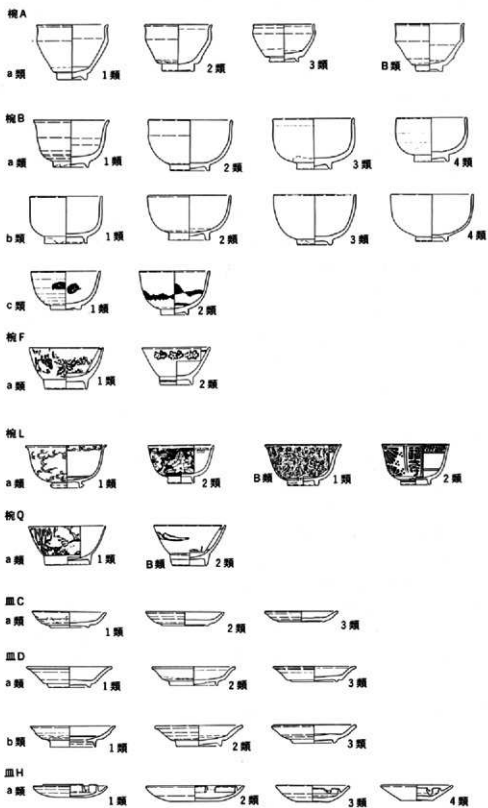
碗Qは碗Lと同様に胎土の違いでa・b類に分類できる。

a類：肥前産と考えられる照りのない胎土を持ち、高台径が大きい。

b類：瀬戸産と考えられる照りのある胎土を持ち、高台の大きさで1・2類に分類できる。

1類 高台径が大きい。

2類 高台径が小さい。



第145図 椀・皿の分類

皿Cは高台高と法量の変化で1・2・3類に分類できる。

- a類：1類 以下の物に比し器高、高台が高い。
- 2類 高台径が大きく、器高が低くなる。
- 3類 全体的に小型となり、高台の退化が著しい。

皿Dはa・b類に分類される。

- a類：体部は底部から強く外反する。
 - 1類 器高が高く、高台径が小さい。
 - 2類 器高が低く、高台径が大きい。
 - 3類 器高がさらに低くなる。
- b類：体部下半は湾曲して立ち上がり口縁は外反する。内底面の釉が輪状に剥がれる。
 - 1類 高台は細い逆三角形を呈し、高く外に開く。
 - 2類 高台は太い逆三角形を呈し低くなり、直立する。
 - 3類 高台は低く、口縁の外反が弱く小型化する。

皿Hは体部と受部の変化を中心に1～4類に分れる。

- a類：1類 受部は口縁より高く、体部は湾曲して立ち上がる。
- 2類 器高が高く、受部が口縁と同じ高さになる。
- 3類 受部が低く断面三角形。口縁はやや外反する。
- 4類 受部が低く断面三角形。体部は直線的に開く。

(6) 段階の検討

以上、分類した碗、皿を含めて設定した各期各段階に相当する遺構群の遺物を検討することで、各段階の特色を明確にしていく。

IV-1期1段階

瀬戸美濃の陶器は碗Aのa1・b類、碗Bのa1・b1・c1類、皿Cのa1類、皿Dのa1類からなり、鉢Bのa類、b1類、碗A、皿C等にあるように、その系統が大窯まで遡るものが中心である。織部と言われる銅緑釉を中心とした釉薬を施した製品が目立つ。他に肥前陶器や中国産の磁器が極く少量見られる。土器の皿は多量に出土し、その中でも粘土を平たく延ばしただけの手捏成形の皿P、轆轤成形の皿Qが多く見られ、これらは清洲城下町遺跡の後期に見られる土器皿の組成構成と変化がない。皿Pを除く土器の皿には皿Cとともに口縁に油煙が付着する例が多い。

IV-1期2段階

この段階は遺構・遺物が少なく、不明な点が多いが、瀬戸美濃の陶器は碗Aのa2、b類、皿Cのa2類、皿Dのb1類からなる。肥前陶器や中国産の陶磁器が極くわずかに入る。土器の皿は1段階と同じで皿Qが主流で、油煙の付くものが目立つ。

1段階と同様に陶磁器と土器の組成は基本的に16世紀と変化がない。

IV-2期1段階

瀬戸美濃の陶器は碗Bのb2、c2類、皿Cのa2類からなる。IV-1期から続く碗A、皿Cの法量が減るのに対し碗Bは法量を増し、碗Aは減り碗Bが主流となる。肥前陶磁器の京焼風の碗が見られ

るようになり、以降、肥前磁器は一定割合見られる。それに対し中国産の磁器は減る。土器の皿は皿Qが減って、皿Rが以後主流となる。手捏成形の皿P及び16世紀から見られた皿Aはこの段階以降、見られなくなる。

IV-2期2段階

瀬戸美濃の陶器は碗Bのa2・b3・c2類、皿Cのa3類、皿Dのa3・b2類からなる。碗Aは見られるが、a3類にあるように小型化し量的にも少ない。皿Cのa類、皿Dのa類はこの段階以降、見られなくなる。碗C・Eのような京・信楽焼の陶器が出現する。鉢BのC類が出現する。鍋Dが消滅する。土器の皿が量的に減少する傾向が見られる。

IV-3期1段階

この段階の遺構・遺物は少なく、不明なことが多い。瀬戸美濃の陶器は碗Bのa3・b4、皿Hのa1類からなる。灯明皿の受けにあたる皿Hが出現する。肥前陶器の京焼風の碗である碗F、京・信楽の陶器の碗Gが見られるようになる。土器の皿が激減し、数少なくみられる土器の皿でも口縁に油煙が付着するものが少なくなる。

IV-3期2段階

この段階の遺構・遺物も少ない。瀬戸美濃陶器には皿Hのa2類があり、碗Bが減り代りに碗C・D・Eが、皿では皿Eが、煮炊具では鍋Bが出現する。碗、皿とも種類に富み、主体になるものは限定できない。

IV-4期1段階

瀬戸美濃の陶器の碗には碗Bのc2類とC・D・E・Gが見られ、鉢Hが出現する。磁器では肥前磁器の碗Qのa類が見られる。碗Qのb1類の瀬戸産の磁器が少量出現する。IV-3期2段階と同様、主体となる碗、皿は限定できない。

IV-4期2段階

瀬戸美濃の陶器は碗Jのa1・a2類、碗K、皿Hのa3・a4類からなり、碗Bのa4が少量ながら見られ、陶器としては鉢C・F、鍋A・Cが出現する。主体となる碗は瀬戸産の磁器である碗Lのa1、a2類である。他に碗Qのb2類も見られる、瀬戸産の磁器が急増する。また京・信楽の陶器が減る。

これらの各段階の実年代を考えてみる¹⁰⁾。

IV-1期1段階は上限は名古屋城造営開始の慶長15(1610)年より遅りえない。また、元屋敷窯に見られる織部が見られること、赤津B窯等の大窯末期の出土品と類似することから17世紀前葉の年代が与えらる。またこの段階の遺構内からは寛永通宝は出土せず、渡来銭しかみられない。寛永通宝の初鋳が寛永年間初め(1626年)頃と言われ、全国各地で鋳造され始めたのが寛永13(1636)年以降であり全国に流通したのも、これ以降であることを考えると1段階の時期の傍証となろう¹⁰⁾。

IV-1期2段階は大川東窯、穴田1号窯等の出土遺物と、消費地遺跡では小田原城の第IV期の出土遺物¹¹⁾の一部と類似し、17世紀中葉の時期が考えられる。

IV-2期1段階は、この時期を境に肥前磁器が一定量見られるようになることから、肥前磁器の最盛期に一致すると考えられ、高台内の裏銘に「宣徳年製」がみられる点(第82図-191)、また肥前陶器の

京焼風の碗が出現し、山水文がまだはっきりしている点(第150図-2)等、肥前陶磁器自体の特徴から17世紀後葉の時期が考えられる。瀬戸美濃の陶器では、18世紀初頭に入る腰錆と言われる上下に軸をかけわける碗の古い型(第83図-208)が見られる。この碗に対しては生産地側では17世紀に遡りうる可能性を示唆している¹¹²⁾。また17世紀末に入るとされている摺鉢1類のC1¹¹³⁾の中でも古い型(第83図-228)が腰錆の碗と同一遺構から出土している。このように肥前陶磁器と瀬戸美濃の陶器の時期に、若干のずれがあるが、大きく17世紀後葉の時期が考えられる。

IV-2期2段階は肥前陶器では刷毛目の碗(第85図-253・254)が目につくようになり、肥前磁器にはコンニャク判があるもの(第88図-306)がみられる。瀬戸美濃の陶器では尾呂茶碗と呼ばれる口縁にうのふ軸をかける鉄軸の丸碗がみられる(第84図-237)他、型紙を使用した摺鉢が施されるもの(第85図-248等)が見られることから、18世紀前葉頃の時期が考えられる。

IV-3期2段階は、瀬戸美濃の陶器は、かみた第1号窯の中層、及びかみた第1号窯の上層の遺物群と類似することから18世紀後葉頃の時期が考えられる。

IV-4期1段階は瀬戸の磁器が少量ながら出現し、肥前及び瀬戸の磁器の広東碗がみられる。端反形碗はみられないが、瀬戸の磁器があることから、19世紀前葉の時期が考えられる¹¹⁴⁾。

IV-4期2段階は瀬戸の磁器が多量に入ること、肥前及び瀬戸の磁器の端反形碗が見られることから、19世紀中葉の時期が与えられ、陸軍鎮台が三の丸に駐屯した明治7(1874)年より下り得ない。この段階から、通常の飲食に使用したと考えられる磁器の碗、皿に模倣した例が目につく。江戸の遺跡の例によると、模倣は18世紀後半以降に出現し、19世紀中葉には顕著になると言う¹¹⁵⁾。江戸の例に比べるとやや出現は後出するが隆盛した時期を考えると、この段階の年代は妥当である。

なお、IV-3期1段階は前後の段階の時期から18世紀中葉の年代を与えたい。

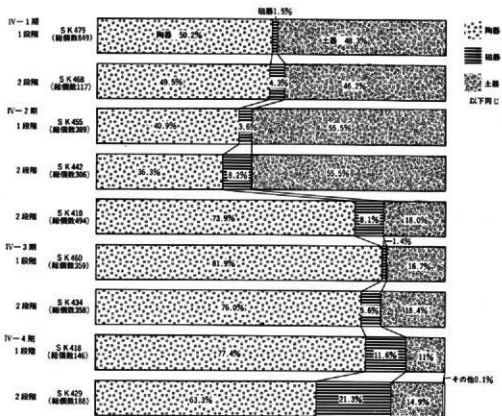
(7) 各段階の様相の変化

次に設定した各段階から遺構を抽出し、陶磁器・土器別の構成比率、器種別組成、陶磁器の生産地別比率の変化を見ていく。

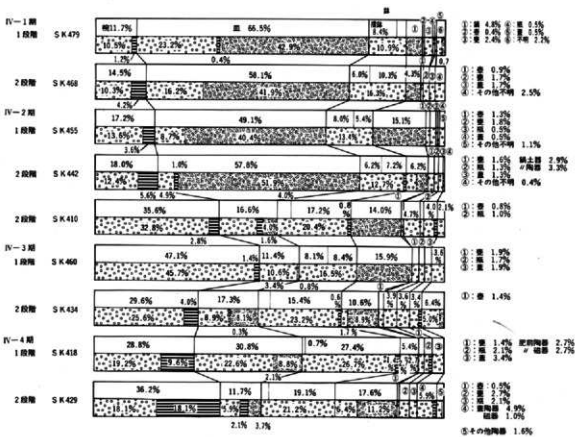
方法として各遺構の出土遺物を全て接合した後、口縁数を数えた。遺構は個体総数が最低でも100個を越えるものを対象とした。また器種は第70・71図を基にした。第146～148図がその結果である。

判明した点を箇条書に列記する。

- ①全段階を通じて瀬戸美濃の陶器が占める割合が7～9割と非常に高い。
- ②磁器はIV-2期2段階以降、IV-3期1段階の例を除いて約1割ほどを維持し、IV-4期1段階以降増加する。
- ③磁器の産地はIV-1期2段階までが中国で、IV-2期1段階以降、肥前が主体となり、IV-4期1段階から瀬戸のもの加わる。
- ④土器はIV-2期1段階までは全体の半数を占め、そのほとんどが皿であり、IV-3期1段階以降、土器のほとんどは鍋となる。
- ⑤陶磁器の碗と皿の比率はIV-1期1段階は1:2で、皿が優勢であるが、IV-1期2段階は1:1となり、IV-2期以降は碗が優勢になる。
- ⑥IV-4期2段階には瀬戸美濃、肥前等の大窯業地帯以外の地方窯の製品が少量であるが目につくよ



第146図 陶磁器・土器構成



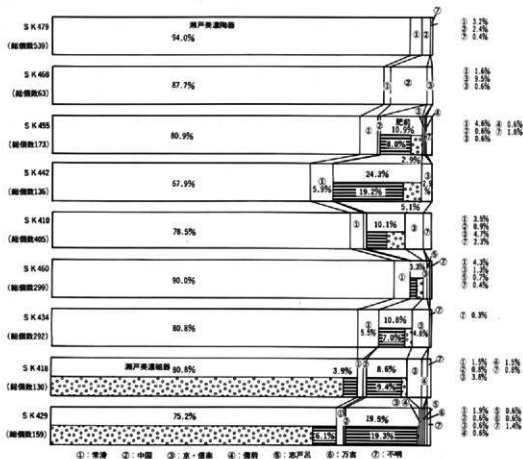
第147図 各遺構の器種構成

うになる。

第1点目については江戸の諸遺跡が肥前磁器が出現するとともに、瀬戸美濃の陶器が減少する傾向があるのに対し対照的であり⁽¹⁶⁾、同じ藩領内に大窯業地帯である瀬戸をひかえ、美濃にも近距離であるため、瀬戸美濃の陶器が経済的にも流入し易かったためと考えられる。

第2点目と第3点目については、17世紀後葉、国内最大の磁器の生産地である肥前が最盛期を迎え、それに伴い消費地でも、肥前磁器が瀬戸美濃の陶器を圧倒する傾向がある。第1点目で指摘したように当遺跡では磁器が陶器を越えることはないが、全陶磁器の約1割を占め、18世紀後葉までは国内磁器を独占する。19世紀前葉から瀬戸での磁器の生産に伴い、瀬戸の磁器が増加する傾向がある。IV-4期2段階として抽出した遺構では瀬戸の磁器の占める割合は低いが、同段階の他の遺構の中には、全磁器の中で瀬戸の磁器がほとんど占めるもの(S K 424等)もあり、どうやら遺構によりまちまちであるようである⁽¹⁷⁾。

第4点目については17世紀後葉までの江戸の遺跡でも同様なことが言えるようである⁽¹⁸⁾。当遺跡では18世紀前葉の遺構にも土器の皿が高い割合を占めるものがあり⁽¹⁹⁾、遺構の性格も考慮しなければならないが、この段階まで土器の皿の割合が全器種の中で高い値を示すようである。またこの時期までの土器の皿には口縁に油煙が付着する例がほとんどであり、灯明皿として主に使用されている。18世紀前葉から陶器の灯明皿が目につくようになり、この陶器の灯明皿の普及が土器の皿の減少を招いた



第148図 生産地別構成比率

一因と考えられる⁽²⁰⁾。第5点目については江戸の諸遺跡及び江戸近郊の農村部の遺跡でも、やや値が異なるが同様な傾向を示す⁽²¹⁾。ただ江戸の遺跡では碗、皿の比率の変化には、肥前磁器と京焼風の肥前陶器の増加が直接原因となっているが、当遺跡では、肥前陶磁器、京・信楽陶器は確かに増加はするが、むしろ瀬戸美濃の陶器の碗、皿の増加の方が著しい。瀬戸美濃の陶器の中には、「御室茶碗」と呼ばれる京焼風の陶器の碗や碗C、碗E、煎じ茶碗、広東碗、端反形碗のように肥前陶磁器、京・信楽陶器の器形を模倣したものや影響を受けたものがみられ、IV-3期2段階以降に特に増加する傾向がある。これら肥前陶磁器や京・信楽陶器の代用として使用されたと考えられる。




























第6点目については志戸呂、万古の尾張周辺の大窯の製品が見られる他、胎土、釉薬が瀬戸美濃、肥前等のどこの大窯集地帯にも入らない周辺の地方窯の製品が目付き、江戸後期の諸藩の地方窯の勃興がうかがわれる。

(8) 小 結

名古屋城三の丸遺跡の近世の陶磁器、土器群は4期8段階に区分できた。IV-1期は陶器、土器共に前時期である清洲城下町遺跡の様相を色濃く残し、器種別構成、組成ともに同様の傾向を示す。それが大きく変わるのは、17世紀後半から18世紀に入ってからIV-2期からである。それは天目茶碗に代って丸碗が主体となり、同心円皿、長石釉の皿等の大窯から続く器種の消滅、土器の皿の減少、肥前陶磁器、京・信楽陶器の増加が象徴的に見られ、器種別組成も皿中心から碗へという大きな変様が見られる。この時期から前時代の様相から離れ、江戸時代の様式が確立したと言える。IV-3期2段階になると丸碗が減少し、肥前、京・信楽の影響、模倣で瀬戸美濃の陶器の碗の器種が増すが、主要の碗形態が存在しなくなる。19世紀に入ってからIV-4期は、瀬戸の磁器が出現に伴い磁器の占める割合が増加する傾向が見られ、新しく広東碗、端反形碗の陶磁器が碗の主体となる。以上が、名古屋城三の丸遺跡における近世の陶磁器、土器の変化の概要である。

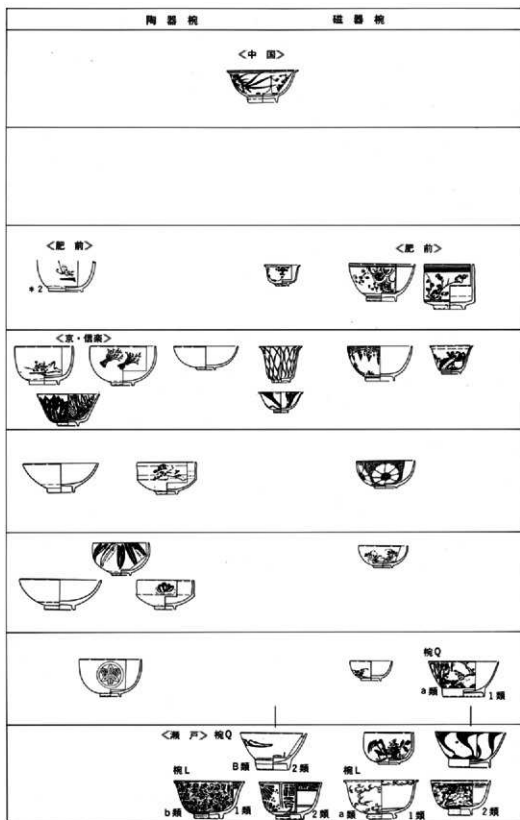
近年名古屋城下の発掘調査の他、名古屋城下の調査や名古屋近郊の勝川宿、清洲宿の調査が増加しており、今後、それらの調査をあわせて名古屋における近世の様式を見ていく必要がある。

(佐藤公保)

		陶 器 概			
IV	1	 a類 1類	 b類 1類	 c類 1類	 c類 1類
	1				
期	1				
	2	 2類			
IV	1	 2類			
	2	 3類	 2類	 3類	 2類
IV	1	 3類			
	3	 *1 4類			
期	2	 			
	2	 			
IV	1	   			
	4				
期	2	 a類 1類	 4類	  	
	2	 2類			

































第149回 隔年表 (1)

*1はSK460出土で群項では図示していない。



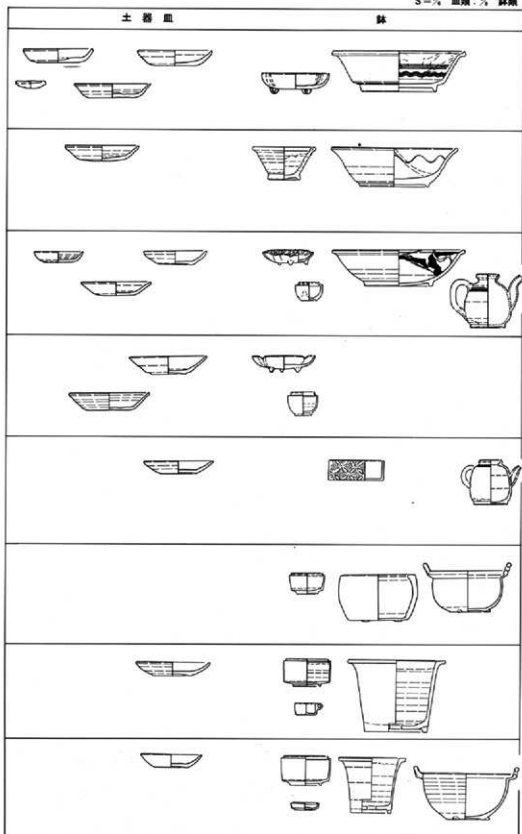
第150図 編年表(2)

*2はS K455出土で前項では図示していない。

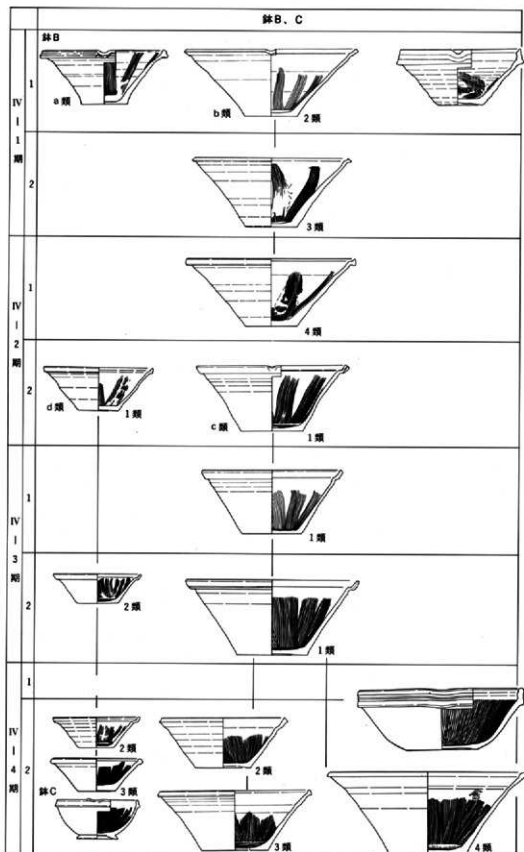
		陶器皿		磁器皿	
IV	1	 皿C A類 1類	 皿D A類 1類		
	1		 皿D B類 2類		
IV	1	 2類			
	2	 3類	 2類	 皿H A類 1類	 〔肥前〕  
IV	1	 3類		 1類	
	3			 2類	
IV	1				
	2				
IV	1				
	4		 3類		 〔瀬戸〕 
IV	2		 4類		

第150図 圖年表(3)

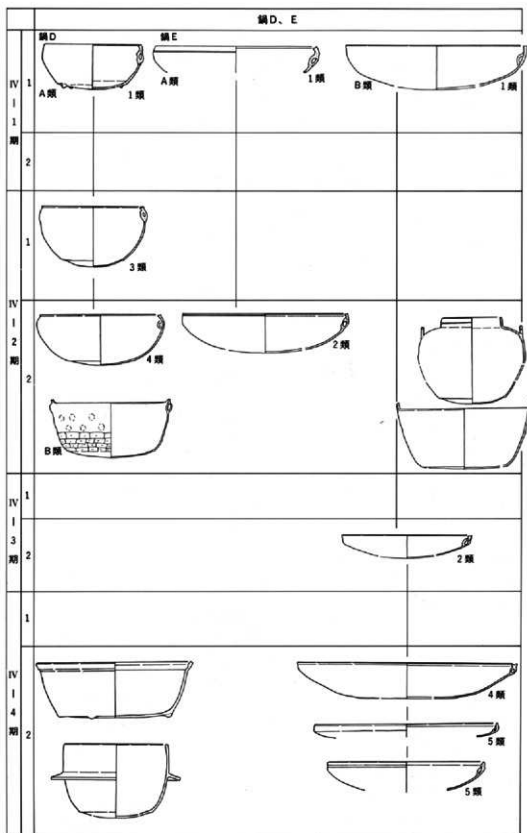
S=¼ 皿類:½ 鉢類



第152圖 編年表(4)



第153圖 編年表(5)



第154図 編年表(6)

註

- (1) 藤澤良祐「IV. 本業焼の変換(3) - 赤津村・窯跡の編年の研究 -」(瀬戸市歴史民俗資料館「研究紀要 VII」1988)
- (2) 藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」(瀬戸市歴史民俗資料館「研究紀要 V」1986)
- (3) 註(2)と同
- (4) これまで、尾張における内耳鍋の出現は、大窯の開始とはほぼ同時期と考えてきた。(佐藤公保「尾張の土師器煮沸具」『マージナル』NO. 9 1988)が、名古屋城三の丸合同庁舎建設に伴う発掘調査(愛知県埋蔵文化財センター「名古屋城三の丸II」1890)で15世紀中頃までさかのぼることが判明した。
- (5) 愛知県教育委員会「愛知の諸職一諸職関係民俗文化財調査報告書」1986によると、愛知県高浜市の杉浦芳市氏の手によりついで近年まで行われていた。氏の御厚意により製作場、製作手順を実見させていた。
- (6) 高浜市の焙烙鍋も内型を使用した型押し成形である。その製作手順と方法は、神崎宣武「日本人の生活と文化4 暮らしの中の焼きもの」1982にある御覧の焙烙づくりに類似する。
- (7) 愛知県教育サービスセンター「埋蔵文化財発掘調査 年報III」1985、清洲町教育委員会「清洲城下町遺跡 I」1987他
- (8) 愛知県埋蔵文化財センター「勝川遺跡」1988にある、明治期の遺構から出土したものにこのような特徴が見られた。
- (9) 陶器に関しては、瀬戸市歴史民俗資料館「研究紀要 VI-VIII 1987-1989」、磁器に関しては、有田町史編纂委員会「有田町史 古窯編」1988、大橋康二「考古学ライブラリー-55 肥前陶磁」1989を参照させていただいた。
- (10) 小川浩編「増補 改訂 古貨幣價格圖譜」1974 黒川古文化研究所の松田光弘氏の御教示による。
- (11) 塚田順正、諏訪開爾、大島慎一「小田原城及び城下における陶磁器群の変遷」(『貿易陶器研究』NO. 8 1988)
- (12) 瀬戸市歴史民俗資料館「研究紀要VII」1988
- (13) 註(1)と同じ
- (14) 大橋康二「伊万里磁器研究の現状」『考古学ジャーナル 特集近世陶磁器』NO. 297 1988では広東碗の出現を天明期(1781-88年)としているが、瀬戸産の磁器の出現が19世紀前半(神野泰裕「瀬戸の染付磁器」(愛知県陶磁資料館「瀬戸の染付磁器」1984)であることを考えると記述のような年代が妥当である。
- (15) 森本伊知郎「焼籠ぎに関する一考察」(『江戸の陶磁器』江戸遺跡研究会第3回大会発表要旨 1990)
- (16) 佐々木達夫「江戸へ流通した陶磁器とその背景」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第14集 1987) 鈴木裕子「東京大学御殿下記念館地点出土の陶磁器 その変遷と組成」(『江戸の陶磁器』江戸遺跡研究会第3回大会発表要旨 1990) 成瀬見可、堀内秀樹「東京大学構内遺跡病院地点出土の陶磁 其の変遷と組成」(『江戸の陶磁器』江戸遺跡研究会第3回大会発表要旨1990) 他
- (17) 詳しくデータをとったわけではなく、概算では、SK424の磁器の中で瀬戸産のものは9割近くを占めている。
- (18) 註(15)の鈴木氏及び成瀬・堀内両氏の論考参照
- (19) IV-2期2段階のSK442(第146図)。
- (20) 祭祀的に使用されたと考えられる土器の皿PがIV-2期2段階には消滅する点、土器の皿そのものも灯明具の他、祭祀に際して使用されることが多い点を考えると、この段階から、土器の皿が激減することは、様相の変化とともに、中世的な祭祀から、近世的なものの変化が想定されると考えられる。
- (21) 尾原勝・米川幸子「東京西部・多摩地方の食器と食生活-近世・近代を中心として-」(『民具研究』80 1989) 成瀬見可「大名屋敷における碗の変遷と需要-東京大学構内遺跡病院地区出土資料を中心に」(『江戸遺跡研究会会報』NO. 23 1990)